

国際医療福祉大学

福岡薬学部

令和4年度

自己点検・評価報告書



医療福祉の多彩なエキスパートを育てる。

国際医療福祉大学

INTERNATIONAL UNIVERSITY OF HEALTH AND WELFARE

福岡薬学部 令和4年度自己点検・評価報告書

目次

第一部 国際医療福祉大学福岡薬学部

1. 国際医療福祉大学の教育理念-----	1
(1) 国際医療福祉大学の基本理念と教育理念-----	1
2. 福岡薬学部の教育研究上の目的 / 3つのポリシー-----	2
(1) 福岡薬学部の教育研究上の目的-----	2
(2) 福岡薬学部薬学科の教育研究上の目的-----	2
(3) 福岡薬学部の3つのポリシー-----	2
3. 運営組織-----	3
(1) 福岡薬学部教員一覧-----	3
(2) チューター制-----	3
(3) 運営組織図-----	5
4. 学事報告-----	6
(1) 開講科目-----	6
(2) 卒業要件-----	9
(3) 進級条件-----	10
(4) 2021年度入学生の6年間のカリキュラム-----	13
(5) 在籍者数-----	15
(6) 学事日程-----	15
(7) 主な学事-----	17
1) 入学式-----	17
2) オープンキャンパス-----	17
3) 国際医療福祉大学学会 薬学分科会-----	19
4) 第18回月華祭-----	22
5) 保護者のつどい-----	23
6) ボランティア活動-----	23
7) ニュースレター(保護者通信)-----	24
8) 地域交流-----	25
9) 新型コロナワクチン職域接種-----	25
10) 学生—チューター面談-----	26
11) 動物実験・組換えDNA実験教育訓練-----	26

第二部 福岡薬学部会議および各委員会活動報告

1. 福岡薬学部会議	28
2. 福岡薬学部教務委員会	38
3. 福岡薬学部学生委員会	41
4. 福岡薬学部臨床教育・実務実習委員会	43
5. 福岡薬学部FD委員会	44
6. 福岡薬学部教育・研究支援委員会	45
7. 福岡薬学部広報・学生募集委員会	46
8. 福岡薬学部第三者評価・自己点検委員会	49
9. 福岡薬学部予算管理委員会	51
10. 福岡薬学部就職委員会	51

第三部 福岡薬学部教育活動報告

1. 令和4年度の教育活動振り返り	53
2. 令和5年度の教育活動目標	54
3. 2021年度開講 福岡薬学部必修科目	56
(1) 総合教育科目 人間系	56
(2) 総合教育科目 社会系	58
(3) 総合教育科目 自然・情報系	62
(4) 総合教育科目 総合系	67
(5) 専門教育科目 専門基礎/学部共通	68
(6) 専門教育科目 専門基礎	73
(7) 専門教育科目 専門	81

第四部 福岡薬学部研究活動報告

1. 2022年度研究活動	123
---------------	-----

第一部 国際医療福祉大学福岡薬学部

1. 国際医療福祉大学の教育理念

(1) 国際医療福祉大学の基本理念と教育理念

国際医療福祉大学（以下「本学」という。）は、「人間中心の大学」、「社会に開かれた大学」、「国際性を目指した大学」という3つの基本理念と、この理念を実現するための7つの教育理念（人格形成、専門性、学際性、情報科学技術、国際性、自由な発想、新しい大学運営）を掲げ、病める人も、障害を持つ人も、健常な人も、互いを認め合って暮らせる「共に生きる社会」の実現を目指した教育をおこなう。

3つの基本理念

(人間中心の大学)

プロフェッショナルとしての専門的な知識や技能の修得にとどまらず、幅広くバランスの取れた良識ある人間を育成すること。

(社会に開かれた大学)

学問を創造的に追究するとともに、地域社会と一体となり、地域の医療福祉のニーズに応え、地域社会や医療福祉に関わる各界の人々の生涯教育の拠点としても機能できる大学となること。

(国際性を目指した大学)

国際的センスを備え、いかなる国の人々とも伸び伸びと協働できる真の国際人を育成すること。

7つの教育理念

(人格形成) 知識・技術のみに偏しない知・情・意を兼ね備えた人材を育み、「共に生きる社会」を目指していく。自ら考え、自ら行動する幅広くバランスの取れた人格の形成を図る。

(専門性) 日進月歩する医療福祉の高度化・専門分化に対応した、学問の確立と研究の推進をおこなう。医療福祉のプロフェッショナルとしてふさわしい能力を学生生活で身につけていく。

(学際性) 医療福祉分野の大学の特性を生かして、他学科の専門科目も教養として修得し、授業外活動も重視する。総合的教養を併せ持つ医療福祉専門職を目指す。

(情報科学技術) 情報化社会の進展に対応できるよう、すべての学科において最新の知識・技術を修得させ、情報科学技術に強い医療・福祉専門職を育成する。

(国際性) 語学教育など一般教育だけでなく、専門教育や学生生活を通じて、人間（私人）としても専門家（公人）としても国際的視野を持った人材を育てる。

(自由な発想) 人間としての品位や、社会のルール・マナーの遵守を前提におきながら、学生個人の自由な発想や行動を歓迎し、特に宗教・思想・社会運動への関心や探究を尊重する。
(新しい大学運営) 時代の変化に即応して、大学の運営も年功序列を廃し、学生の立場から教員の評価もできるシステムを導入するなど、適時見直しを進め、自由闊達な校風の中で学生の自主性を育む努力をする。大学院教育については、特に生涯学習の視点に立って専門職育成のための教育、研究の充実を図る。

2. 福岡薬学部の教育研究上の目的 / 3つのポリシー

(1) 福岡薬学部の教育研究上の目的

福岡薬学部は、薬学の各分野について、理論及び応用の研究を行うとともに、それぞれ十分な知識と技能を有し、保健医療の実践を担うことのできる応用能力及び豊かな人間性を備えた人材を育成することを目的とする

(2) 福岡薬学部薬学科の教育研究上の目的

福岡薬学部の教育研究上の目的をふまえ、薬学科は、薬学の各分野について、理論及び応用の研究を行うとともに、「くすり」に対する専門的な知識と、臨床現場で発揮される高い能力、技術を備え、調剤した「くすり」の適切な説明や薬物療法について、的確なアドバイスができる薬剤師の育成を目的とする。

(3) 福岡薬学部の3つのポリシー

アドミッションポリシー

- ① 「共に生きる社会」の実現を理解し、イメージできる人
- ② 使命感・倫理観・責任感・思いやりの心など、豊かな人間性を養うために、努力し続けることができる人
- ③ 薬剤師に必要な知識・技能・態度のバランスを意識して、目標を設定し自ら向かって進める人

ディプロマポリシー

- ① 医療の領域にとどまらず、社会生活の基本である「ひと」としての基本姿勢(人間性)を養うために、他者を理解し、多方面に関心を持ち、実行し、自己分析・評価することができる。
- ② 科学的思考力を持ったくすりの専門職をめざして、基礎薬学・衛生薬学・医療薬学・社会薬学などの知識を身につけ、反復学修し、それを活用(応用)できる。
- ③ 講義を通して知識を、実習を通して技能を、薬剤師を意識し続けることで態度を修得し、知識・技能・態度のバランスを保ちながら、自己研鑽できる。

④ 医療全体(チーム医療、地域医療など)を理解することができ、他職種を理解することができ、あらゆる活動において積極的に協働できる。

カリキュラムポリシー

① 「くすり」の専門家としての専門的な知識や技能の修得にとどまらず、多様な学問領域に関心を持ち、使命感、倫理観、責任感、思いやりの心などの豊かな人間性を持つ人材を育成する。

② 真理や科学の本質を追究するものの考え方の基本を修得し、学問を創造的に追究するとともに、将来役立つ知識と技能と態度をバランスよく身につけ、自ら考えて判断できる問題解決能力を持った人材を育成する。

③ 現在または近い将来の地域医療の問題、地域社会のニーズを捉えることができ、さらに、視野を広げて国際的な医療問題についても考えることができ、様々な国の人々と連携、協働できる素地を持った人材を育成する。

3. 運営組織

(1) 福岡薬学部教員一覧

副学長 教授	外須美夫
学部長 学科長 教授	武田弘志
副学科長 教授	永倉透記
教授	阿部義人、石田卓巳、猪部学、太田昭一郎、緒方勝也、梶岡俊一、川端猛夫、岸拓弥、吉良潤一、西村信弘、長谷川雄、平木洋一、村田祐造、山口政俊
准教授	一木裕子、齊藤秀俊、多田納豊、塚本宏樹、成川佑次、宗像達夫、山本緑、吉武康之
講師	今井竜也、今村友裕、貝塚拓、中矢正、朴珍相、宗像千恵
助教	磯田紀之、坂井崇亮、澤井円香、柴田健太郎、福田光良

五十音順

(2) チューター制

本年度は、30名の薬学科教員がチューターを担った。チューターは学生の修学・生活における相談に随時応じ、問題を把握するとともに解決に向けて支援した。また、半期に一度の定期面談では、ポートフォリオを通じて学生の短期および中長期の目標に対する進捗状況を確認し、アドバイスを行った。3年生に関しては、チューター担当教員を入れ替え、複数教員で学生を支援できる体制を整えた。修学困難(休学または進路変更希望)な学生については、本人および保護者との面談を随時行い適切に対応した。さらに、留年に至った場合についても、学生または保護者も交えた面談を行い、留年期間の学習および生活の支援を行った。以下に、本年度のチューター担当教員と担当学生数を示す。

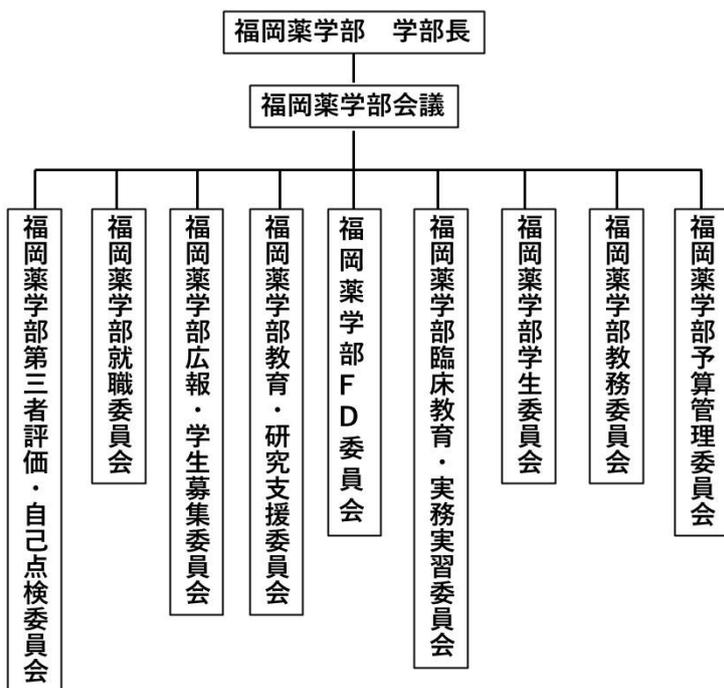
	チューター名	職位	学生数			
			総数	1年生	2年生	3年生
1	阿部 義人	教授	12	5	3	4
2	石田 卓巳	教授	13	4	5	4
3	猪部 学	教授	13	5	4	4
4	太田 昭一郎	教授	12	4	4	4
5	緒方 勝也	教授	12	4	4	4
6	梶岡 俊一	教授	12	5	3	4
7	川端 猛夫	教授	12	4	4	4
8	永倉 透記	教授	12	4	4	4
9	西村 信弘	教授	12	4	4	4
10	長谷川 雄	教授	12	7	1	4
11	平木 洋一	教授	8	4	0	4
12	村田 祐造	教授	13	4	5	4
13	一木 裕子	准教授	13	4	5	4
14	齊藤 秀俊	准教授	13	5	4	4
15	多田納 豊	准教授	13	6	3	4
16	塚本 宏樹	准教授	13	4	5	4
17	成川 佑次	准教授	11	6	2	3
18	宗像 達夫	准教授	13	4	6	3
19	山本 緑	准教授	13	5	5	3
20	吉武 康之	准教授	12	5	4	3
21	今井 竜也	講師	13	5	5	3
22	貝塚 拓	講師	13	5	5	3
23	中矢 正	講師	13	5	5	3
24	朴 珍相	講師	14	5	6	3
25	宗像 千恵	講師	13	6	4	3
26	磯田 紀之	助教	14	5	6	3
27	坂井 崇亮	助教	13	6	4	3
28	澤井 円香	助教	13	5	5	3
29	柴田 健太郎	助教	14	5	6	3
30	福田 光良	助教	8	5	0	3

(3) 運営組織図

大川キャンパス・福岡キャンパス委員会構成

会議	管理運営委員会	募集広報系	学生募集広報委員会
	運営会議		ニューズレター編集室
	学部長学科長会議		入試システム委員会
	専任教員代表者会議		図書委員会
	教員会議		FD委員会
教務系	教務委員会	教育研究 支援系	研究推進室
	カリキュラム小委員会		臨床教学共同研究会
	VOD委員会		産学連携推進室
	臨床実習委員会		倫理審査施設委員会
	国家試験対策委員会		動物実験委員会
	国際交流委員会		教育機器整備委員会
	学修支援センター ／学修支援委員会		全学系
生活 支援系	学生委員会	その他	国際医療福祉大学学会
	キャリア支援センター ／就職委員会		別科委員会
	ボランティアセンター ／ボランティア委員会		留学生サポートセンター
	安全衛生委員会		シミュレーションセンター
	防災対策委員会		大学院院生委員会
	地域交流委員会		オンライン教育 WG
	ハラスメント防止委員会		

福岡薬学部内委員会組織



4. 学事報告

(1) 開講科目

授業科目の 区分	科目名	配当 年次	単位数		時間数	備考	
			必修	選択			
総合 教育 科目	人間系	文学論	1 2 3 4 5 6		2	30	
	演劇論	1 2 3 4 5 6		1	15		
	心理学	1		2	30		
	哲学	1 2 3 4 5 6		2	30		
	コミュニケーション概論	1		2	30		
	雑談と傾聴～話す力と聴く力～	1 2 3 4 5 6		2	30		
	人間学	1 2 3 4 5 6		2	30		
	倫理学	1 2 3 4 5 6		2	30		
	宗教学	1 2 3 4 5 6		2	30		
	日本近現代史	1 2 3 4 5 6		2	30		
	文化人類学	1 2 3 4 5 6		2	30		
	教育学	1 2 3 4 5 6		2	30		
	死生学-死を通して生を考える-	1 2 3 4 5 6		2	30		
	社会学	法学	1		2	30	
	日本国憲法	1 2 3 4 5 6		2	30		
	社会学	1 2 3 4 5 6		2	30		
	国際関係論	1 2 3 4 5 6		2	30		
	国際医療福祉論	1 2 3 4 5 6		2	30		
	組織運営管理論	1 2 3 4 5 6		2	30		
	海外保健福祉事情Ⅰ(講義)	2		1	15		
	海外保健福祉事情Ⅱ(実習)	2		1	45		
	社会保障制度論	1 2 3 4 5 6		2	30		
	ボランティア論	1 2 3 4 5 6		2	30		
	経済の仕組み	1 2 3 4 5 6		2	30		
	自然・情報系	統計学	1		2	30	
	数学	1		2	30		
	物理学	1 2 3 4 5 6		2	30		
	化学	1		2	30		
	生物学	1		2	30		
	情報処理	1		1	30		
	生命倫理	1		2	30		
	医学/医療史	1 2 3 4 5 6		2	30		
	総合系	大学入門講座Ⅰ(基礎)	1		1	15	
	大学入門講座Ⅱ(展開)	1 2 3 4 5 6		1	15		
	郷土論～大川学～	1 2 3 4 5 6		1	15		
医療福祉教養講義	1 2 3 4 5 6		1	15			
メディカルマナー入門	1 2 3 4 5 6		2	30			
外国語系	英語講読1(Primary)	1		1	30		
英語講読2(Basic)	2		1	30			
英語CALL1(Primary)	1		1	30			
英語CALL2(Basic)	2		1	30			
英会話	1 2 3 4 5 6		1	30			
実用英会話	2 3 4 5 6		1	30			
医学英語Ⅰ(入門)	1 2 3 4 5 6		1	30			
医学英語Ⅱ(応用)	1 2 3 4 5 6		1	30			
資格英語1(Primary)	1 2 3 4 5 6		1	30			
資格英語2(Basic)	1 2 3 4 5 6		1	30			
中国語	1 2 3 4 5 6		2	60			
実用中国語会話	2 3 4 5 6		1	30			
韓国語	1 2 3 4 5 6		2	60			
実用韓国語会話	2 3 4 5 6		1	30			
保健体育系	健康科学理論	1 2 3 4 5 6		1	15		
健康科学実践	1 2 3 4 5 6		1	30			

授業科目の 区分	科目名	配当 年次	単位数		時間数	備考
			必修	選択		
専門基礎 ／ 学部共通	公衆衛生学	3	2		30	
	救急医学(救命救急を含む)	2 3		1	15	
	リハビリテーション概論	1 2 3 4 5 6		2	30	
	微生物と病気	1 2 3 4 5 6		2	30	
	関連職種連携論	2	2		30	
	ケアマネジメント論	2 3 4 5 6		1	15	
	保健医療福祉制度論	1 2 3 4 5 6		2	30	
	臨床心理学概論	1	2		30	
	関連職種連携ワーク	3	1		30	
	関連職種連携実習	5		1	45	
	リスクマネジメント論	3 4 5 6		2	30	
専門基礎	薬学演習Ⅰ(物理系等)	2	1		30	
	薬学演習Ⅱ(化学系等)	3	1		30	
	薬学演習Ⅲ(生物系等)	3	1		30	
	薬学計算	2	1		30	
	病原微生物学	3	2		30	
	コミュニケーション実習	2	1		45	
	基礎薬学実習Ⅰ(物理)	1	1		45	
	基礎薬学実習Ⅱ(生物)	1	1		45	
専門 教育 科目	薬学概論	1	2		30	
	有機化学Ⅰ(脂肪族化合物1)	1	2		30	
	有機化学Ⅱ(脂肪族化合物2)	2	2		30	
	有機化学Ⅲ(芳香族化合物)	2	2		30	
	生薬学	2	2		30	
	天然物化学	2	1		15	
	医薬品構造化学	3	1		15	
	分析化学Ⅰ(溶液中の化学平衡と滴定法)	1	2		30	
	分析化学Ⅱ(機器分析、分離分析および臨床分析)	2	2		30	
	医薬品構造解析	2	2		30	
	薬品物理化学Ⅰ(物性とエネルギー)	1	2		30	
	薬品物理化学Ⅱ(平衡と変化)	2	2		30	
	放射化学	2	1		15	
	生化学Ⅰ(生体分子)	1	2		30	
	生化学Ⅱ(生体エネルギー・代謝)	2	2		30	
	分子生物学Ⅰ(遺伝情報・細胞内情報伝達)	2	2		30	
	分子生物学Ⅱ(細胞間コミュニケーション・遺伝)	2	2		30	
	解剖生理学Ⅰ(外皮系、骨格系・筋肉系、循環器系)	1	2		30	
	解剖生理学Ⅱ(神経系、内分泌系)	2	2		30	
	解剖生理学Ⅲ(消化器系、呼吸器系、泌尿器系)	2	2		30	
	がん薬物療法学	3	2		30	
	ゲノム医療	3	1		15	
	化学療法学	3	2		30	
	免疫学	2	2		30	

授業科目の 区分	科目名	配当 年次	単位数		時間数	備考
			必修	選択		
専門 教育 科目	疾病と病態生理学Ⅰ(内分泌系、神経精神系疾患等)	2	2		30	
	疾病と病態生理学Ⅱ(循環器系疾患、消化器系疾患等)	3	2		30	
	疾病と病態生理学Ⅲ(呼吸器系疾患、代謝性疾患等)	3	2		30	
	薬理学Ⅰ(総論、末梢神経薬理等)	3	2		30	
	薬理学Ⅱ(中枢神経薬理、免疫・炎症薬理等)	3	2		30	
	薬理学Ⅲ(循環器薬理、消化器薬理等)	4	2		30	
	薬理学Ⅳ(呼吸器薬理、内分泌薬理等)	4	2		30	
	医薬品安全性学	4	2		30	
	臨床検査医学	3	2		30	
	薬物治療学Ⅰ(神経精神系疾患、内分泌系疾患等)	4	2		30	
	薬物治療学Ⅱ(循環器系疾患、呼吸器系疾患等)	4	2		30	
	薬物治療学Ⅲ(症例・病態解析)	6	2		30	
	物理薬剤学	2	2		30	
	製剤設計とDDS	4	2		30	
	臨床薬学Ⅰ(調剤の基礎)	3	2		30	
	臨床薬学Ⅱ(調剤の実践)	4	2		30	
	臨床薬学Ⅲ(薬物療法の実践)	4	2		30	
	臨床薬学Ⅳ(チーム医療・地域医療の実践その前に)	4 5	1		15	
	薬物動態学	3	2		30	
	臨床薬物動態学	4	2		30	
	医薬品情報学Ⅰ(医薬品情報の収集と活用)	3	2		30	
	医薬品情報学Ⅱ(EBMと臨床研究)	6	1		15	
	衛生化学Ⅰ(食品・栄養)	2	2		30	
	衛生化学Ⅱ(毒性・代謝)	3	2		30	
	環境衛生学	3	2		30	
	医療関係法規	4	2		30	
	日本薬局方	3	1		15	
	漢方医学Ⅰ(漢方の基礎)	3	2		30	
	漢方医学Ⅱ(漢方の応用)	4	1		15	
	OTC医薬品概論	3	2		30	
	化学系薬学実習Ⅰ(有機合成)	2	1		45	
	化学系薬学実習Ⅱ(天然資源)	2	1		45	
	物理系薬学実習	2	1		45	
	生物系薬学実習	4	1		45	
	分子生物学実習	3	1		45	
	臨床検査医学実習	3	1		45	
	衛生系薬学実習	3	1		45	
	早期体験実習	1	1		45	
	医療系薬学実習Ⅰ(調剤の基礎と情報収集)	3	1		45	
	医療系薬学実習Ⅱ(調剤の実践と服薬指導)	4	1		45	
	病院・薬局事前実習Ⅰ(実務実習に必要な基本的知識)	4	2		90	
	病院・薬局事前実習Ⅱ(実務実習に必要な基本的技能)	4	2		90	
	病院・薬局実務実習Ⅰ(主に病院での実習)	5 6	10		450	
	病院・薬局実務実習Ⅱ(主に薬局での実習)	5 6	10		450	
	総合薬学演習Ⅰ(主として物理・化学・生物・衛生)	6	1		15	
総合薬学演習Ⅱ(主として薬理・薬剤・病態・実務)	6	1		15		
卒業研究	5 6	4		60		

(2) 卒業要件

卒業要件（卒業に必要な単位数）

授業科目の区分		最低単位数	
		必修	選択
総合教育科目	人間系	4単位	総合教育科目 および 専門教育科目 の中から 10単位以上 (9単位以上 内5単位は日本語の 選択必修)※1
	社会系	4単位	
	自然・情報系	11単位	
	総合系	1単位	
	外国語系	4単位 (5単位)※1	
	保健体育系		
	小計	24単位 (25単位)※1	
専門教育科目	専門基礎科目	学部共通	7単位
		学科専門基礎	9単位
		小計	16単位
	専門科目	140単位	
	小計	156単位	10単位以上 (9単位以上)※1
合計		180単位 (181単位)※1	10単位以上 (9単位以上)※1
総計		190単位以上	

※1 () 内の単位は留学生の単位を表す。

履修すべきすべての必修科目（180単位）* を修得していること。必修科目と選択科目の総単位数が

190 単位以上である場合には卒業できる。

*留学生の必修科目は 181 単位

(3) 進級条件

進級条件（留学生以外）

【第2学年への進級条件】

①1 学年必修科目(37 単位)のうち、すべての実習科目(3 単位)を含む 31 単位以上修得していること。

【第3学年への進級条件】

①1 学年必修科目(37 単位)のすべてを修得していること。

②2 学年必修科目(44 単位)のうち、すべての実習科目(5 単位)を含む 38 単位以上修得していること。

③以上、①②の両方の条件を満たしていること。

【第4学年への進級条件】

①2 学年までの必修科目（81 単位）のすべてを修得していること。

②3 学年必修科目(42 単位)のうち、すべての実習科目(4 単位)を含む 36 単位以上修得していること。

③以上、①②の両方の条件を満たしていること。

【第5学年への進級条件】

①3 学年までの必修科目（123 単位）のすべてを修得していること。

②4 学年必修科目 28 単位のうち、臨床薬学Ⅳ（チーム医療・地域医療の実践その前に）を除く 27 単位のすべてを修得していること。

③以上、①②の両方の条件を満たしていること。

進級した場合：

前年次の不合格必修科目については、受講し、定期試験を受け、単位を修得すること。

留年した場合：

①合格した科目の単位は認められる。

②不合格の必修科目は再履修しなければならない。

③不合格になった選択科目は、新たに希望して選択するものとする。

④必修・選択科目とも前年度不合格であった科目の評点は取り消し、無効とする。

⑤在学年限について：同一学年における在学年数を 2 年以内とする（休学期間を除く）

但し、5、6 学年は通算で 4 年間在籍できる。

進級条件（留学生）

【第2学年への進級条件】

①1 学年で履修できる外国語系科目を除く必修科目 35 単位と日本語科目 2 単位（必修/選択を問わない）を

合わせた 37 単位のうち、すべての実習科目（3 単位）を含む 31 単位以上の必修科目を修得していること。

【第3学年への進級条件】

①1 学年で履修できる必修科目のうち 37 単位を修得していること。

※2 学年終了時までには日本語必修科目 2 単位の修得が必要である。

②2 学年で履修できる必修科目 44 単位（日本語必修科目 2 単位含む）のうち、すべての実習科目（5 単位）を

含む 38 単位以上修得していること。

③以上、①②の両方の条件を満たしていること。

【第4学年への進級条件】

①2 学年までに履修できる必修科目 81 単位を修得していること。

※3 学年終了時までには日本語必修科目 4 単位の修得が必要である。

②3 学年で履修できる必修科目 42 単位のうち、すべての実習科目（4 単位）を含む 36 単位以上修得していること。

③以上、①②の両方の条件を満たしていること。

【第5学年への進級条件】

①3 学年までに履修できる必修科目 123 単位を修得していること。

②4 学年必修科目 28 単位のうち、「臨床薬学Ⅳ（チーム医療・地域医療の実践その前に）を除く 27 単位のすべてを修得していること。

③4 学年終了時までには日本語必修科目 5 単位すべてを修得していること。

④以上、①②③のすべての条件を満たしていること。

進級した場合：

前年次の不合格必修科目については、受講し、定期試験を受け、単位を修得すること。

留年した場合：

①合格した科目の単位は認められる。

②不合格の必修科目は再履修しなければならない。

③不合格になった選択科目は、新たに希望して選択するものとする。

④必修・選択科目とも前年度不合格であった科目の評点は取り消し、無効とする。

⑤在学年限について：同一学年における在学年数を 2 年以内とする（休学期間を除く）

但し、5、6 学年は通算で 4 年間在籍できる。

科目履修条件

5、6 学年において実務実習を履修するための条件

- ① 共用試験（CBT、OSCE）に合格すること。
- ② 実務実習生にふさわしい知識・技能・態度のバランスがとれていること

日本語履修について（留学生）

(1) 開講科目一覧

科目名	配当年次	単位			時間数
		必修	選択	自由	
作文・読解Ⅰ（入門）	1 2 3 4 5 6		1		30
作文・読解Ⅱ（応用）	1	1			30
作文・読解Ⅲ（完成）	1 2 3 4 5 6		1		30
文法・語彙Ⅰ（入門）	1 2 3 4 5 6		1		30
文法・語彙Ⅱ（応用）	1	1			30
文法・語彙Ⅲ（完成）	1 2 3 4 5 6		1		30
発表・討論Ⅰ（応用）	1	1			30
発表・討論Ⅱ（完成）	1 2 3 4 5 6		1		30
医療福祉専門漢字	1	1			30
医療福祉専門語彙	1	1			30
日本語基礎Ⅰ（初級）	1 2 3 4 5 6			1	30
日本語基礎Ⅱ（初級）	1 2 3 4 5 6			1	30

(2) 日本語科目の区分

必修科目 = 必ず履修する科目（留学生全員、卒業要件に必要な単位）

選択科目 = 必要に応じて履修する科目

自由科目 = 必要に応じて履修する科目（単位の取得は可能だが、取得した単位は卒業要件に含まない）

(3) 履修条件

外国語の履修については、原則として日本語科目を 10 単位取得すること。

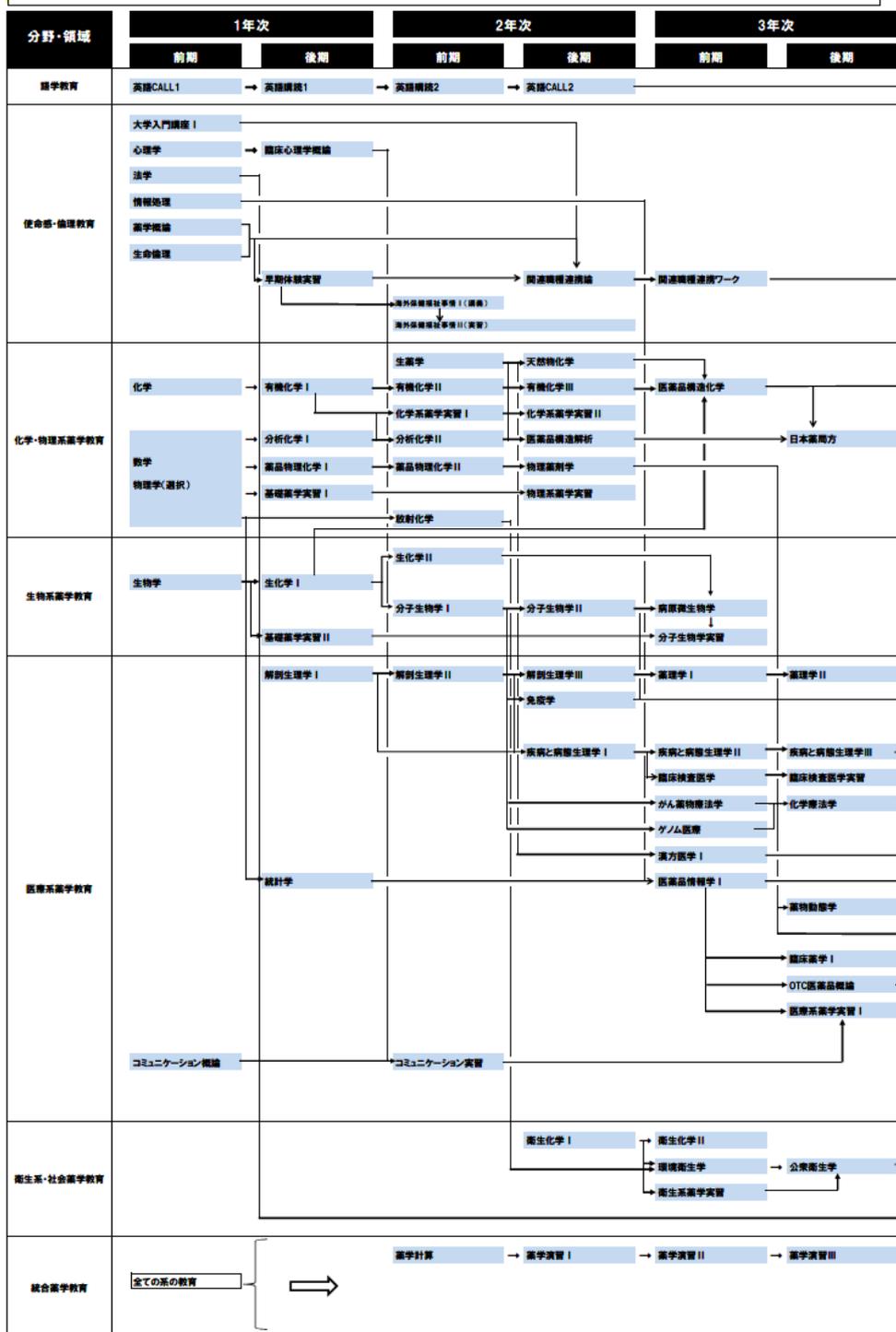
- ① 10 単位の内 2 単位までは日本語科目以外の 外国語科目（母国語としない外国語に限る）をもって代えることができる。
- ② 「外国人のための日本語能力テスト」の得点により、最大 3 単位まで認定することができる。

(4) 2021年度入学生の6年間のカリキュラム

福岡薬学部 薬学科 履修系統図

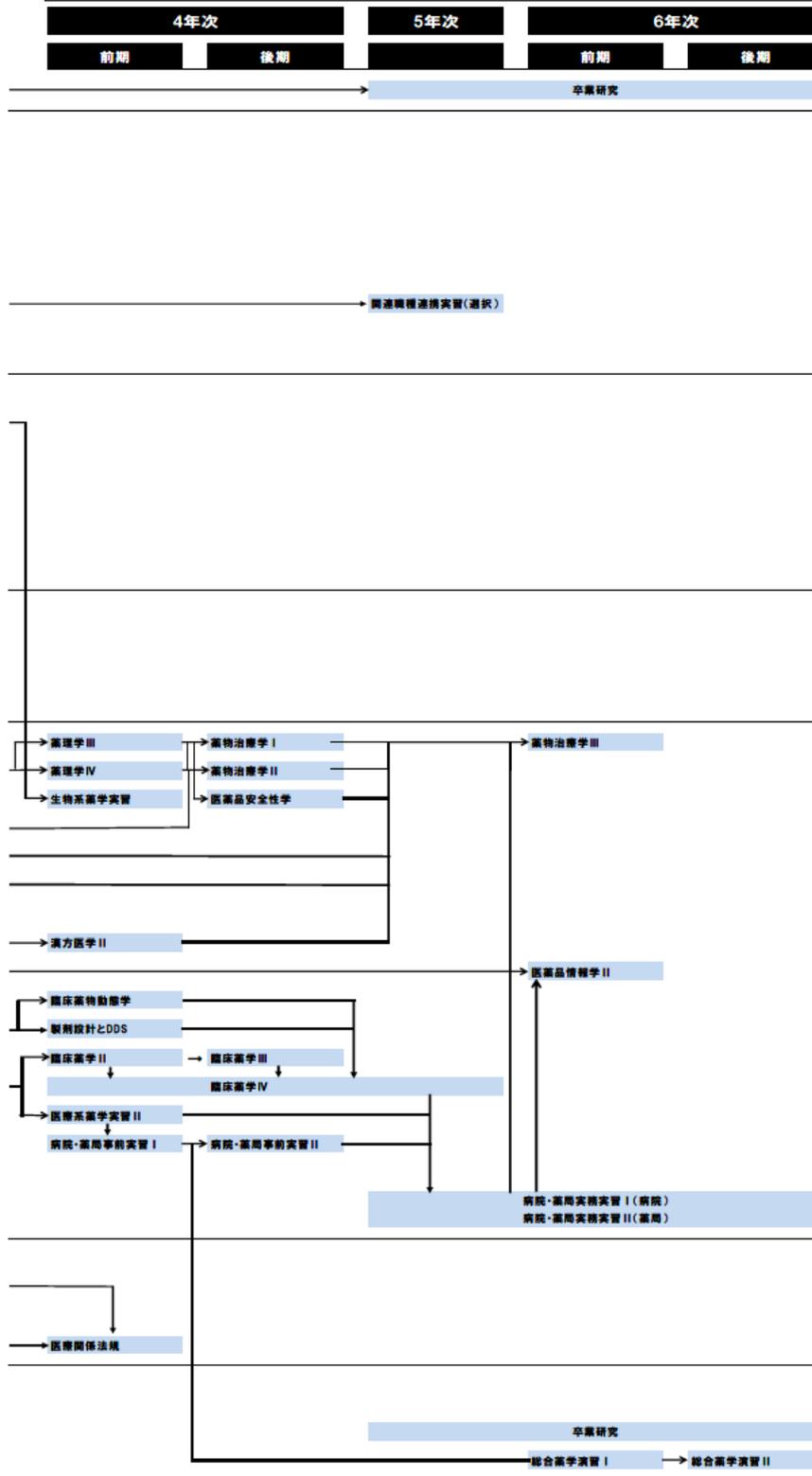
ディプロマポリシー

- ① 医療の領域にとどまらず、社会生活の基本である「ひと」としての基本姿勢(人間性)を養うために、他者を理解し、多方面に関心を持ち、実行し、自己分析・評価することができる。
- ② 科学的思考力を持ったくすりの専門職をめざして、基礎薬学・衛生薬学・医療薬学・社会薬学などの知識を身につけ、反復学習し、それを活用(応用)できる。
- ③ 講義を通して知識を、実習を通して技能を、薬剤師を志望し続けることで態度を修得し、知識・技能・態度のバランスを保ちながら、自己研鑽できる。
- ④ 医療全体(チーム医療、地域医療など)を理解することができ、他職種を理解することができ、あらゆる活動において積極的に協働できる。



カリキュラムポリシー

- ①「くすり」の専門家としての専門的な知識や技能の修得にとどまらず、多様な学問領域に関心を持ち、使命感、倫理観、責任感、思いやりの心などの豊かな人間性を持つ人材を育成する。
- ②真理や科学の本質を追究するものの考え方の基本を習得し、学問を創造的に追及するとともに将来役立つ知識と技能と態度を身につけ、自ら考えて判断できる問題解決能力を持った人材を育成する。
- ③現在または将来の地域医療の問題、地域社会のニーズを捉えることができ、さらに、視野を広げて国際的な医療問題についても考えることができ、様々な国の人々と連携、協働できる素地を持った人材を育成する。



(5) 在籍者数 (2022年5月1日現在)

学年	薬学科		
	男	女	合計
1年生	51	94	145
2年生	39	82	121
3年生	36	70	106
計	126	246	372

(6) 学事日程

4月4日(月)ー4月6日(水)	新入生オリエンテーション(4日) プレイスメントテスト(新入生)(6日) 在校生オリエンテーション(6日)
4月7日(木)	入学式
4月8日(金)	前期授業開始 プレイスメントテスト(新入生)
4月ー5月	チューター面談
5月1日(日)	大学創立記念日
6月23日(木)、24日(金)	科目別テスト(3年生)
7月22日(金)	前期授業終了
7月23日(土)	前期定期試験期間 VOD科目試験日 福岡薬学部説明会
8月2日(火)	前期定期試験終了
8月6日(土)	オープンキャンパス
8月21日(日)	オープンキャンパス
8月22日(月)ー8月26日(金)	前期追・再試験期間
9月22日(木)	プレイスメントテスト(1年生) 科目別テスト(3年生)
9月24日(土)	海外保健福祉事情研修 プログラム説明会(1年生)
9月26日(月)	後期授業開始
9月ー10月	チューター面談
10月8日(土)	大学祭
10月9日(日)	福岡薬学部説明会
10月15日(土)	総合型選抜入学試験

10月29日(土)	球技大会(運動会代替イベント)
11月10日(木)、17日(木)	解剖見学実習(2年生)
11月19日(土)	学校推薦型選抜入学試験
12月17日(土)	特待奨学生特別選抜入試
12月29日(木)	冬期休暇開始
1月4日(水)	冬期休暇終了
1月5日(木)	後期授業再開
1月14日(土)ー15日(日)	大学入学共通テスト
1月19日(木)	後期授業終了
1月20日(金)	後期定期試験開始
1月21日(土)	VOD試験日
1月27日(金)	後期定期試験終了
1月28日(土)ー1月30日(月)	一般選抜前期入学試験
2月14日(火)ー2月17日(金)	後期追・再試験期間
3月4日(土)	一般選抜後期入学試験

(7) 主な学事

1) 入学式（ようこそ国際医療福祉大学 福岡薬学部へ）

令和4年4月7日（木）、国際医療福祉大学大川キャンパス・図書館講堂棟3階講堂において令和4年度九州地区学部・大学院合同入学式が執り行われました。鈴木康裕学長および高木邦格理事長から式辞をいただき、福岡薬学部新入生129名は薬学の学びへの決意を新たにしました。新入生のみなさんはこれから6年間、同級生、先輩（薬学科の最高学年は3年生）、教職員、大川市の人々等と交流を深めながら大学生活を送ります。福岡薬学部は、薬剤師として社会で活躍するために求められる知識・技能・態度を6年間で修得出来るよう、新入生のみなさんを全力で教育・支援します。



2) オープンキャンパス

本年度のオープンキャンパスは、オープンキャンパス計4回、毎日キャンパス見学会計4回実施された。各オープンキャンパスの実施時期、並びに来場者、対応教員は以下の通りである。昨年度のオープンキャンパスが8回333名の参加に対し、本年度は4回666名の参加と大幅な増加となった。また、キャンパス見学会が昨年の8組18名から4組10名と減っているが、コロナ禍の落ち着きに起因する結果と考える。また昨年行われた薬学部フォーラム（51名参加）と同時期に行われた薬学部説明会（62名参加）は、ほぼ同様の人数規模であった。

本年度のオープンキャンパスも昨年同様、コロナ禍での実施で、参加者は完全予約制でソーシャルディスタンスを考慮する必要があったが、福岡薬学部では対面かつ体験型の実施であった。また来場者へは、ノベルティー並びに配付資料を、あらかじめソーシャルディスタンスを考慮した形で配布し、参加者は資料の準備のある席へ誘導する形式とした。学科説明後、体験型ブースへ分散し誘導を行った。他大学での体験型オープンキャンパスは徐々に

ではあるが増えてきているようだ。また7月23日のオープンキャンパスでは、保健医療学部とは別日で単独開催という形になった。体験型オープンキャンパスということもあり、来場者はいずれも楽しんでいる様子であった。毎日キャンパス見学会では、参加者が少ないため、パネルなどを用いた学科説明の後、学部内施設見学を行った。こちらは時間に余裕があるため、ゆっくりと進行することが可能であり、質問なども丁寧に対応することが出来た。

オープンキャンパスの学科企画に関する改善点および自己評価は以下の通りである。

- ・7月、8月のオープンキャンパスでは、午前中に学科紹介があり、その後来場者は食事をし、体験プログラムに参加する流れであった。
- ・最初に簡単なガイダンスを行い、入試対策などは最後に行う。
- ・4号館入口に教員を配置し誘導する形式をとった。
- ・昨年同様に医療系（2）、物理（1）、化学（1）、生物（1）のブースを設置し、さらに本年度は薬理系のブースを1つ設置した。なお医療系のブースでは、複数の体験ブースを設置する回もあった。整理券などを使って流れの制御を行ったが、整理券の入手がうまくいかないケースもあり、後半では整理券無しでの対応となった。
- ・ブースとは別に、廊下には学部紹介用のパネルを設置し、コミュニケーション実習のブースを設置し、学生と話せるスペースとした。
- ・2021年度は4号館2階のスペースを使用して学科体験プログラムを行ったが、本年度は4号館4階までの、各系の実習室を使用した。しかしながら、3月のオープンキャンパスでは、次年度の実習準備などの為、2階のみで実施した。
- ・学外からの来場者は4号館がどこかが解らないため、薬学部用のエアアーチの設置を行った。
- ・本年度は昨年行われた薬学部フォーラムの実施がなかったため、10月に薬学部説明会を行い、その午後にオープンキャンパス同様の学科体験プログラムを実施した。

来年度に向けた改善点として、オープンキャンパスのお祭り感が無いため、音楽などを流してはどうかや、コミュニケーション実習のブースが必要だろうかなどの案が出た。さらに、大学をよく知ってもらうためには、多くの学生に参加してもらう必要があるため、何かしらの方策を必要がある。

オープンキャンパス

日時	来場者	対応教員	対応学生
7月23日	232名	武田弘志、阿部義人、石田卓巳、猪部学、緒方勝也、梶岡俊一、川端猛夫、永倉透記、西村信弘、長谷川雄、平木洋一、村田祐造、一木裕子、齊藤秀俊、多田納豊、塚本宏樹、成川佑次、宗像達夫、山本緑、吉武康之、今井竜也、貝塚拓、中矢正、朴珍相、宗像千恵、磯田紀之、坂井崇亮、澤井円香、柴田健太郎、福田光良	1年生：4名 2年生：37名

8月6日	153名	阿部義人、石田卓巳、猪部学、太田昭一郎、川端猛夫、西村信弘、長谷川雄、平木洋一、永倉透記、村田祐造、一木裕子、齊藤秀俊、多田納豊、塚本宏樹、宗像達夫、山本緑、吉武康之、今井竜也、貝塚拓、朴珍相、中矢正、宗像千恵、磯田紀之、坂井崇亮、澤井円香、柴田健太郎、福田光良	1年生：4名 2年生：37名 3年生：1名
8月21日	166名	石田卓巳、猪部学、太田昭一郎、梶岡俊一、川端猛夫、永倉透記、西村信弘、長谷川雄、平木洋一、村田祐造、一木裕子、齊藤秀俊、多田納豊、塚本宏樹、成川佑次、宗像達夫、山本緑、吉武康之、今井竜也、貝塚拓、中矢正、朴珍相、宗像千恵、磯田紀之、坂井崇亮、澤井円香、柴田健太郎、福田光良	1年生：2名 2年生：38名 3年生：1名
3月19日	115名	阿部義人、猪部学、平木洋一、永倉透記、一木裕子、齊藤秀俊、多田納豊、塚本宏樹、成川佑次、宗像達夫、山本緑、吉武康之、今井竜也、貝塚拓、中矢正、磯田紀之、澤井円香、柴田健太郎、福田光良	1年生：2名 2年生：5名 3年生：4名

薬学部説明会（学科体験プログラム）

8月22日	62名	武田弘志、阿部義人、猪部学、平木洋一、永倉透記、西村信弘、一木裕子、齊藤秀俊、成川佑次、多田納豊、塚本宏樹、宗像達夫、山本緑、中矢正、貝塚拓、今井竜也、宗像千恵、坂井崇亮、磯田紀之、澤井円香、柴田健太郎、福田光良	1年生：4名 2年生：5名 3年生：3名
-------	-----	--	----------------------------

毎日キャンパス見学会

日時	来場者	対応教員
7月15日	1組2名	坂井崇亮
8月25日	1組3名	宗像達夫
8月31日	1組2名	宗像達夫
12月2日	1組3名	吉武康之

3) 国際医療福祉大学学会 薬学分科会

【実施概要】

第12回国際医療福祉大学学会学術大会が、国際医療福祉大学 大川キャンパスにて開催された。本年度は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大による状況を鑑み、現地開催とZoom配信を併用したハイブリット形式での開催であった。大会では、教育講演（2演題）、特別講演（2演題）、シンポジウムに加え、優秀演題口述発表（8演題）およびポスター発表（307演

題)が行われ、多数の参加者から活発な意見交換が行われた。

プログラム

第12回国際医療福祉大学学会学術大会

8月28日(日) 9:00～16:10

■開会式 大会長挨拶

第12回国際医療福祉大学学会学術大会 大会長 外 須美夫

■優秀演題口述発表 I

1. COVID-19 パンデミック下における看護師の蓄積疲労とストレス対処に関する研究

生駒 千恵 (福岡国際医療福祉大学 看護学部 看護学科)

2. 難治性自己免疫疾患に対する RP105 陰性形質芽 B 細胞を標的とした新規治療法の開発

小荒田 秀一 (国際医療福祉大学 福岡保健医療学部 医学検査学科)

3. 造血器腫瘍細胞による骨髄微小環境の破綻メカニズムの解明

澁田 樹 (国際医療福祉大学 福岡保健医療学部 医学検査学科)

4. PD-1, PD-L1 の可溶性画分と癌再発・ビタミン D の摂取との関連

鈴木 範彦 (国際医療福祉大学病院 消化器・乳腺外科)

座長：永沢 善三 (国際医療福祉大学 福岡保健医療学部 医学検査学科長)

■優秀演題口述発表 II

5. 胃 ESD 時における胃液 pH と潰瘍治療遅延における因子の検討

須藤 大輔 (国際医療福祉大学病院 消化器内科)

6. 先天性 QT 延長症候群 (LQT3) の分子基盤に関する研究

角南 明彦 (国際医療福祉大学 薬学部 薬学科)

7. 根治を目指す Toll 様受容体 4 刺激抗体による食物アレルギー予防・治療戦略

塚本 宏樹 (国際医療福祉大学 福岡薬学部 薬学科)

8. バイオ 3D プリンターを用いた、間葉系幹細胞からの骨様立体構造物作成への挑戦

梶尾 俊一 (国際医療福祉大学 福岡薬学部 薬学科)

座長：廣岡 良隆 (国際医療福祉大学 福岡保健医療学部長)

■教育公演 I

新型コロナウイルス感染症の行く末 ※リモート動画

演者：松本 哲哉 (国際医療福祉大学医学部 感染症学 主任教授、

国際医療福祉大学成田病院感染制御部 部長)

座長：矢永 勝彦 (国際医療福祉大学大学院 医学研究科 教授)

■教育公演Ⅱ

難病に挑む

演者：吉良 潤一（国際医療福祉大学大学院 医学研究科 トランスニューロサイエンスセンター長、国際医療福祉大学 福岡薬学部 教授、福岡中央病院 脳神経センター長）

座長：藤本 一真（国際医療福祉大学大学院 副大学院長）

■特別公演Ⅰ

創学 30 周年に向けた本学のこれから

演者：鈴木 康裕（国際医療福祉大学 学長）

座長：三浦 総一郎（国際医療福祉大学大学院長）

■特別公演Ⅱ

『ポスト・コロナ』時代と文明の行方

演者：木村 伊量（国際医療福祉大学大学院 特任教授）

座長：外 須美夫（国際医療福祉大学 副学長）

■シンポジウム

これからの教育はどう変わるか

座長：岸 拓弥（国際医療福祉大学大学院 医学研究科 循環器内科学 教授、国際医療福祉大学 福岡薬学部 教授、国際医療福祉大学 医学部 臨床実習ディレクター）

演者：

1. SNS と COVID-19 がもたらした平成世代若者の変化

～先生方の講義、学生は聞いていますか？～

岸 拓弥

2. 薬学教育

永倉 透記（国際医療福祉大学 福岡薬学部 薬学科 教授）

3. 保健医療学科の教育

西田 裕介（国際医療福祉大学 成田保健医療学部 副学部長・理学療法学科長、国際医療福祉大学成田病院 リハビリテーション技術部長）

4. 看護教育における臨地実習と教育方法

大池 美也子（福岡国際医療福祉大学 看護学部長）

5. 近未来の医学部教育

矢野 晴美（国際医療福祉大学 医学部 医学教育統括センター副センター長 教授、

感染症学 教授)

■ポスターセッション

学術大会特別サイトにて公開

【自己点検・評価】

対面と Zoom によるハイブリット開催であったため、リモート参加者への通信環境の維持や質疑応答における対話環境の確保が課題であった。大川キャンパスの大会事務局が中心となって準備を行なったが、各キャンパスに加え様々な場所からのアクセスに耐えうる通信環境が確保できたことは、来年度以降の会の開催に向け意義のある成果となった。

【次年度に向けての改善】

次年度以降も新型コロナウイルス感染症の感染状況を見ながらの開催となるため、対面、およびリモートのいずれか、もしくはハイブリッド型の開催を視野に入れた準備が必要である。早い段階での発表者や座長の選定、スケジュールの確認、通信環境の確保など、大会のスムーズな開催と進行に向けた準備・点検が望まれる。また、本年度の開催は見送られたが、大会後のキャンパス横断分科会（薬学分科会）の再開も研究活動の推進に向け再考される必要があると考えている。

4) 第 18 回月華祭

実施日（期間）：10 月 8 日

【実施概要】

コロナ禍の影響で、本大川キャンパス学園祭（月華祭）は 2 年間中止となっていたが、本年度は学生を中心にメインステージでの催し物、模擬店などが準備・運営され、第 18 回月華祭が 10 月 8 日に開催された。薬学部学生委員会は実行委員長、副実行委員長、薬学部実行委員の選出、運営のアドバイス等を行った。

【自己点検・評価】

2 年間実施されていなかった影響があり、準備・運営等が滞っていたが、当日は大きな問題はなく実施された。

【今後の対応】

次年度は薬学部学生委員会が運営担当となるので、本年度の経験を活かし、運営のアドバイスを行っていく。

5) 保護者のつどい

実施日（期間）：10月8日

【実施概要】

コロナ禍の影響で、保護者のつどいは二年間中止となっていたが、本年度は大川キャンパス教育講演会の後、学科別保護者懇談会を開催した。学科別保護者懇談会は主に薬学部学生委員会が運営を担当した。51組の保護者が参加し、武田学部長の挨拶の後、教務、学生生活関連の報告を行った。その後、チューター担当教員による対面での個別面談を実施し、16組の保護者が参加した。

【自己点検・評価】

コロナ禍で2年間実施されておらず、開校後初めての保護者懇談会であったため、時間配分や会場の設営などに不安があったが、当日は運営面においては大きな問題はなかった。懇談会では質問はなかったが、個別面談においては、成績面、生活面、メンタルケアなどにおける相談があり、チューターがそれぞれ対応し、面談記録を残している。これにより保護者との信頼関係の構築に繋がったと考えている。

【今後の対応】

今回は、参加者がそれほど多くなく運営もスムーズに行えた。今後学年進行に伴い、保護者懇談会、個別面談の人数が増えてくると思われる。その際の対応は今後の課題である。

6) ボランティア活動

福岡薬学部全学生の2022年4月から2023年3月におけるボランティア活動実績は、下記のとおりであった（報告協力：本学ボランティア委員会）。

・大川寺子屋（5月から3月）12名

：地域の中学生に対する学習支援活動

・道の駅おおき横 WAKKA デイキャンプ（5月15日）3名

：災害に備え、防災リュックの作り方や非常食の説明と体験、火起こしやバーベキューの方法などを学ぶ講習会

・SOMPO ボールゲームフェスタ in 大川（6月5日）10名

：イベントの参加者受付と来場者車両誘導、各種目の実施場所へ参加者を誘導
また、講師のアシスタントとして、参加することも達と一緒に活動

・筑後川昇開橋スタンプラリー（6月26日）4名

：イベントスタッフ

・道守大川ネットワーク共同清掃活動

（第46回：7月17日）4名（第47回：10月2日）1名（第48回：3月5日）1名

：大川市内及び大学周辺の清掃活動

大川市民と本学職員、学生の交流を兼ねた大川市恒例行事

・言葉の森くるめ（8月3日から9月22日）1名

：障がい児理解のための研修、夏祭りの対応、施設を利用する児童の対応

・ストリートチョークアート in OKAWA（11月3日）8名

：大川中央公園の通路を活用し、参加することも達と一緒にチョークで路上に自由に絵を描くイベント

・花宗川葦刈（12月3日）1名

：花宗川下流域にて草刈機による葦刈、刈り取った葦の結束、結束した葦の道路への引上げ、引き上げた葦のダンプへの積み込み作業

・てんとうむしフェスティバル（12月4日）1名

：障がいのある方の介助、各団体ブースでの手伝い、イベントの準備・撤収作業

・大川木の香マラソンボランティア（2月26日）2名

：健康を守る婦人の会の手伝い（ぜんざい、だご汁調理補助）

いわゆるコロナ禍にもかかわらず、のべ48名の学生がボランティア活動に参加した。将来医療人になる者にとって、奉仕の精神は大変重要である。互助精神、コミュニケーションの難しさなど、講義では学ぶことのできない貴重な体験の場となったことであろう。

来年度は、より多くの学生に経験してもらおうべく、学内委員会と協力し、ボランティア活動の啓発に努める。

7) ニュースレター（保護者通信）

【実施概要】

国際医療福祉大学 大川キャンパスでは、福岡薬学部と福岡保健医療学部合同で、年に3-4回ニュースレターを発行している。今年度は、6月、9月12月に保護者宛に郵送された。12月には、福岡薬学部独自の「たより」も同封し、学生の大学生生活の様子をお伝えしている。3月には、卒業特別号を制作し、卒業式に配布した。2020年度開校の福岡薬学部では、第1期生の卒業は2025年度末であり、それまで卒業生の輩出を待つ必要がある。

【自己点検・評価】

今年度も新型コロナウイルス感染症の流行が続き、大学での活動に制限を求められる場面があったが、本学は学生同士の協働を重視し、授業はZoom等を併用しながら基本的には対面で実施され、学園祭等のイベントについても規模を縮小しながら校内で開催した。コロナ禍で制限がある状況下においても安全に実施された大学生生活の一部をお伝えするものとして、例年より意義があったと思う。

【今後の対応】

次年度は、新型コロナウイルスの5類への変更が見込まれ、学生のより活発な活動が可能になると

思われるので、大学生生活の状況を引き続きお伝えし、本学の活動にご理解いただくように努めていく。

8) 地域交流

2022年度の地域交流委員会の大きな活動は、(1) 大川市民夏まつり、(2) 地域公開講座であった。

大川市夏祭りは、本学の1年生が中心となり、イベントを企画し、屋台の手伝いを行うなどして、地元の人たちとの交流を深めるものである。2020年、2021年と新型コロナウイルスにより、開催を中止してきたが、2022年は新型コロナウイルスの感染防止のため、開催規模を縮小し、花火や抽選会などは実施しないことで企画が進んでいた。学生の割り振りも決まり、開催される予定であったが、2022年夏のコロナ感染の大きな拡大により、直前で中止となった。

地域公開講座は、2022年12月10日に開催された。この講座は、本学の持つ教育・研究機能を広く地域社会へ還元するための取り組みの一環として、地域の皆さまを対象に開催しているものである。2020～2021年は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、開催を見合わせていたが、今年度より感染対策を行ったうえで、3年ぶりの開催となった。今回は、「生活習慣病や認知症の予防とつき合い方～人生100年時代をより良く生きるための健康管理について～」と題し、福岡薬学部の今村友裕講師が講演を行った。講演の前半は主に糖尿病についての講義が行われた。後半は認知症に関する講義であった。本学の所在地である大川市を中心に、周辺の柳川市、みやま市などから新型コロナ感染以前と同程度に参加申し込みがあり、詳細なデータを用いた講演は非常に好評であった。

9) 新型コロナワクチン職域接種

実施日：4/9、4/16、5/14、5/21、6/4、7/9、11/5、11/11、12/10

調製担当者：福岡薬学部教員、福岡保健医療学部検査学会教員

【自己点検・評価】

2021年度より、本学では新型コロナワクチン職域接種を実施している。2022年度前半は、本学学生、近隣の中高校生、大学、専門学校等の学生、大学教職員、地域住民等を対象に1-3回目接種を合計9回実施した。後半はオミクロン株対応ワクチンの接種(3-4回目)を行った。2022年度は合計9回の接種日を設けてワクチン接種を実施し、合計681名が接種を受けた。

福岡薬学教員はワクチンの保管管理(-20℃)を担当した。また、接種日には接種用注射筒に薬液を充填する役割を福岡薬学部教員および福岡保健医療学部検査学会教員が担当した。また、接種会場の誘導等も分担して行った。

【今後の対応】

2023年度の新型コロナワクチン接種は、政府の方針にしたがって実施される予定であ

る。大川市の住民接種（高齢者）、および医療従事者接種は高木病院で5月より行うことが決定しており、ワクチン調製は、高木病院薬剤部併任の福岡薬学部教員が担当に加わる予定である。

10) 学生—チューター—面談

実施期間 前期：5月 後期：10月

【実施概要】

福岡薬学部では、学生一人ひとりに対して大学生生活に係るきめ細やかな指導を実現するために、チューター制度を取り入れている。チューターは、前期・後期の開始時期（5月、10月）に担当学生の個人面談を実施した。面談を通して、現在の生活態度や就学状況を把握するとともに、ラーニングポートフォリオを利用して卒業までの中長期的な目標についても確認を行った。一年生においては入学時面談記録によって、大学生生活のスタートに配慮した指導を行った。さらに、各学生のチューター面談記録により、全ての学生にもれなくチューター面談を実施したことを確認した。

【自己点検・評価】

チューター面談の実施により、各学年の全ての学生の生活、学習のアドバイスをを行うことができた。面談以外でも、チューターによる担当学生の指導・相談等は適時行われており、学生の相談窓口として、活用されている。

【今後の対応】

コロナ禍による活動制限が緩和されれば、担当学生を集めての親睦会を企画するなどして、学生間のつながりを積極的にサポートしていく。また、面談を通して学生の薬剤師としての資質を評価する方法（ディプロマポリシー到達度評価）を運用し、さらにチューター面談の活用を広げていく。

10) 動物実験・組換えDNA実験教育訓練

大田原キャンパスと大川キャンパス合同で毎年1回、動物実験・組換えDNA実験教育訓練を実施している。2022年度動物実験・組換えDNA実験教育訓練は、以下のとおり実施した。

主催：動物実験委員会及び組換えDNA実験安全委員会

実施日時：2022年7月13日（水）17：00～18：30

実施方法：ZOOM配信

実施内容：

第一部（教員および学生対象）17：00～17：50

- 1) 動物実験に関する講話 (17:00~17:25)
- 2) 組換え DNA 実験に関する講話 (17:25~17:50)

第二部 (教員対象) 18:00~18:30

- 1) 動物実験申請等の手続きについて (18:00~18:15)
- 2) 組換え DNA 実験等の手続きについて (18:15~18:30)

第二部 福岡薬学部会議および各委員会活動報告

1. 福岡薬学部会議

委員	<p>教員：武田弘志（学部長）、外須美夫（副学長）、山口政俊（顧問、特任教授）、阿部義人（教授）、石田卓巳（教授）、猪部学（教授）、太田昭一郎（教授）、緒方勝也（教授）、梶岡俊一（教授）、川端猛夫（教授）、岸拓弥（教授）、吉良潤一（教授）、永倉透記（副学科長）、西村信弘（教授）、長谷川雄（教授）、平木洋一（教授）、村田祐造（教授）、一木裕子（准教授）、齊藤秀俊（准教授）、多田納豊（准教授）、塚本宏樹（准教授）、成川佑次（准教授）、宗像達夫（准教授）、山本緑（准教授）、吉武康之（准教授）、今井竜也（講師）、今村友裕（講師）、貝塚拓（講師）、中矢正（講師）、朴珍相（講師）、宗像千恵（講師）、磯田紀之（助教）、坂井崇亮（助教）、澤井円香（助教）、柴田健太郎（助教）、福田光良（助教）</p> <p>事務局：高田奈弥、北原希、東郷栄里</p>
会議開催と内容	<p>第1回 2022年4月25日（月）16：30～18：00</p> <p>議題：</p> <p>1) 前回議事録について 第11回福岡薬学部会議議事録</p> <p>審議事項： なし</p> <p>報告・連絡事項：</p> <p>1) 福岡薬学部教務委員会</p> <p>1. 議事録 2. 学生情報 3. 今年度の座席指定 4. コロナ理由による欠席学生への配慮 5. プレイスメントテスト結果 6. リメディアル教育 7. 時間割について</p> <p>2) 大川C教務委員会</p> <p>1. 教務委員会出席報告</p> <p>3) 福岡薬学部臨床教育・実務実習委員会</p> <p>1. 議事録</p> <p>4) 大川C臨床実習委員会</p> <p>1. 議事録</p> <p>5) 大川C国際交流委員会</p> <p>1. 議事録</p> <p>2. 2022年度「海外保健福祉事情Ⅱ（実習）」について</p>

<p>6)福岡薬学部学生委員会 1.学生への配慮について</p> <p>7)大川C学生委員会 1.議事録</p> <p>8)大川Cハラスメント防止委員会 1.議事録</p> <p>9)福岡薬学部広報学生募集委員会 1.委員会活動報告</p> <p>10)福岡薬学部FD委員会 1.議事録</p> <p>11)大川C安全衛生委員会 1.議事録</p> <p>12)大川C防災対策委員会 1.BLS講習・避難訓練実施報告</p> <p>第2回 2022年5月23日(月)16:30~18:30 議題： 1)教員紹介 2)前回議事録について 第1回福岡薬学部会議議事録 審議事項： なし 報告・連絡事項： 1)福岡薬学部教務委員会 1.議事録 2.学生情報 3.講義出欠状況 4.コロナ理由による欠席学生への配慮 5.進級見込判定スケジュール 6.時間割変更について 7.プレイスメントテストI結果の分析 8.大学入門講座の評価依頼</p> <p>2)大川C教務委員会 1.教務委員会出席報告 3)大川C国際交流委員会 1.議事録</p> <p>4)大川CFD委員会 1.報告事項</p> <p>5)福岡薬学部学生委員会 1.報告事項</p> <p>6)大川C学生委員会 1.議事録</p> <p>7)福岡薬学部広報学生募集委員会 1.活動報告</p>
--

<p>8)大川C安全衛生委員会 1.議事録</p> <p>9)福岡薬学部臨床実習委員会 1.薬学共用試験OSCEオンライン実施説明会</p> <p>10)大川C臨床実習委員会 1.議事録</p> <p>11)2022年度第1回福岡薬学部FD活動 「教授法」塚本宏樹 准教授</p> <p>第3回 2022年6月27日(月)16:30~18:00 議題： 1)前回議事録について 第2回福岡薬学部会議議事録 審議事項： 1)福岡薬学部第三者評価・自己点検委員会 1.福岡薬学部薬学科の教育研究上の目的変更 2)大川C地域交流委員会 1.2022年度地域公開講座実施について 報告・連絡事項： 1)福岡薬学部教務委員会 1.議事録 2.学生情報 3.講義出欠状況 4.時間割変更への大川キャンパスコメントまとめ 5.プレイスメントテストII 6.科目別テスト実施要項 7.大学院研究指導への参画のお願い</p> <p>2)大川C教務委員会 1.議事録 3)福岡薬学部第三者評価・自己点検委員会 1.2021年度後期科目点検結果 4)大川C国家試験対策委員会 1.報告事項 5)福岡薬学部広報学生募集委員会 1.報告事項 6)大川C学生募集広報委員会 1.議事録 7)大川C学生委員会 1.議事録 8)大川C地域交流委員会 1.議事録 9)大川Cボランティア委員会 1.議事録 10)福岡薬学部FD委員会</p>
--

<ul style="list-style-type: none"> 1.議事録 2.第1回福岡薬学部F D活動報告 11)大川C F D委員会 1.報告事項 12)大川C安全衛生委員会 1.議事録 13)大川C防災対策委員会 1.議事録 14)その他 1.2022年度薬学共用試験C B T実施説明会およびモニター説明会について 2.2022年度薬学共用試験O S C E実施説明について 3.早期体験実習について 第4回 2022年7月25日(月) 16:30~18:00 議題: 1)前回議事録について 第3回福岡薬学部会議議事録 審議事項: 1)福岡薬学部第三者評価・自己点検委員会 1.令和3年度自己点検・評価報告書 報告・連絡事項: 1)福岡薬学部教務委員会 1.議事録 2.学生情報 3.自習室・休憩室の変更(節電対策) 4.前期定期試験スケジュール 5.前期定期試験監督 6.リメディアル教育実施報告 7.科目別テスト結果 8.福岡薬学部2年生のキャリアビジョン 2)大川C教務委員会 1.議事録 2.教務統括委員会出席報告 3)福岡薬学部第三者評価・自己点検委員会 1.第三者評価自己点検委員会議事録 2.薬学教育評価機構 自己点検2023説明会 4)大川C学生委員会 1.議事録 5)大川Cハラスメント防止委員会 1.議事録 6)福岡薬学部広報学生募集委員会 1.報告事項 7)大川C学生募集広報委員会 1.議事録

<p>8)大川C安全衛生委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>臨時福岡薬学部会議 2022年9月1日(木) 13:00~13:30</p> <p>報告・連絡事項:</p> <p>1)前期定期試験成績確認</p> <p>第5回 2022年9月26日(月) 16:30~18:00</p> <p>議題:</p> <p>1)前回議事録について</p> <p>1.第4回福岡薬学部会議議事録</p> <p>2.臨時福岡薬学部会議議事録</p> <p>審議事項:</p> <p>なし</p> <p>報告・連絡事項:</p> <p>1)福岡薬学部教務委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>2.学生情報</p> <p>3.定期試験(本試験)の答案開示期間の変更</p> <p>4.後期教務ガイダンス</p> <p>5.プレイスメントテストII</p> <p>6.重要事項の文書による学生への連絡依頼</p> <p>7.後期実習スケジュール</p> <p>8.臨床検査医学実習に係る同意書</p> <p>9.自習室および休憩室</p> <p>2)大川C教務委員会</p> <p>1.委員会出席報告</p> <p>3)福岡薬学部第三者評価・自己点検委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>2.自己評価 2023 への対応</p> <p>3.DP到達度評価方法案</p> <p>4)大川C国際交流委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>5)福岡薬学部学生委員会</p> <p>1.保護者懇談会に関して</p> <p>2.後期面談に関して</p> <p>6)大川C学生委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>7)大川Cボランティア委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>8)福岡薬学部広報学生募集委員会</p> <p>1.報告事項</p> <p>9)大川C学生募集広報委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>10)大川Cニューズレター編集室</p>

	<p>1.ニューズレター（保護者通信）33号・34号の発行について</p> <p>11)大川CFD委員会</p> <p>1.報告事項</p> <p>12)大川C安全衛生委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>第6回 2022年10月24日（月）16:30~17:30</p> <p>議題：</p> <p>1)前回議事録について</p> <p>第5回福岡薬学部会議議事録</p> <p>審議事項：</p> <p>なし</p> <p>報告・連絡事項：</p> <p>1)福岡薬学部教務委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>2.学生情報</p> <p>3.福岡薬学部後期進級判定スケジュール</p> <p>4.VODの対面講義日程</p> <p>5.GPA順位の学生への開示</p> <p>6.早期体験実習における大田原薬学部実務実習生との交流機会</p> <p>7.プレイスメントテストII結果</p> <p>8.2023年度科目担当者案</p> <p>2)大川C教務委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>3)大川C臨床実習委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>4)福岡薬学部学生委員会</p> <p>1.学生の出欠管理に関して、後期面談に関して</p> <p>5)大川C学生委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>6)大川Cボランティア委員会</p> <p>1.ボランティア保険について</p> <p>7)福岡薬学部広報学生募集委員会</p> <p>1.報告事項</p> <p>8)大川CFD委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>9)大川C安全衛生委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>第7回 2022年11月21日（月）16:30~18:30</p> <p>議題：</p> <p>1)前回議事録について</p> <p>第6回福岡薬学部会議議事録</p> <p>審議事項：</p> <p>なし</p>
--	--

<p>報告・連絡事項：</p> <p>1)福岡薬学部教務委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>2.学生情報</p> <p>3.G P A 順位の学生への開示</p> <p>4.必修科目欠席状況一覧</p> <p>5.リメディアル教育</p> <p>6.プレイスメントテストII</p> <p>7.福岡薬学部 2 年生解剖見学実習報告</p> <p>2)大川C教務委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>3)大川C 地域交流委員会</p> <p>1.地域公開講座の開催について</p> <p>4)大川C 国際交流委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>5)福岡薬学部学生委員会</p> <p>1.学生の出欠管理に関して</p> <p>2.コロナワクチン 11/5 接種分の当日キャンセルについて</p> <p>6)大川C 学生委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>7)福岡薬学部広報学生募集委員会</p> <p>1.学生募集活動報告</p> <p>8)大川C F D 委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>9)大川C 安全衛生委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>10)その他</p> <p>1.学長主催勉強会について</p> <p>11)2022 年度福岡薬学部 F D 活動</p> <p>「共用試験について」宗像達夫 准教授</p> <p>第 8 回 2022 年 12 月 26 日 (月) 16 : 30~18 : 30</p> <p>議題：</p> <p>1)前回議事録について</p> <p>第 7 回福岡薬学部会議議事録</p> <p>審議事項：</p> <p>なし</p> <p>報告・連絡事項：</p> <p>1)福岡薬学部教務委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>2.学生情報</p> <p>3.福岡薬学部 2 年生解剖見学実習アンケート結果</p> <p>4.4 年生のスケジュール (実習、CBT、OSCE 等)</p> <p>5.病院・薬局事前実習 I、CBT 対策、スケジュール</p>

<p>6.後期定期試験の監督者</p> <p>7.定期試験ガイダンス内容</p> <p>8.授業欠席が多い学生への対応</p> <p>9.福岡薬学部入試</p> <p>2)大川C教務委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>3)第三者評価・自己点検委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>2.2022年度福岡薬学部自己点検・評価報告書作成案</p> <p>3.2022年度前期科目点検結果</p> <p>4.2022年度後期科目点検分担・スケジュール</p> <p>5.DP到達度評価方法案</p> <p>4)大川C学生委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>5)大川C防災対策委員会</p> <p>1.委員会資料</p> <p>6)大川C安全衛生委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>7)福岡薬学部広報学生募集委員会</p> <p>1.学生募集活動報告</p> <p>8) 福岡薬学部たより編集室</p> <p>1.福岡薬学部たより 2022年度12月号発行</p> <p>9) 大川Cニューズレター編集室</p> <p>1.ニューズレター（保護者通信）第35号の発行について</p> <p>10)大川C入試システム委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>11)福岡薬学部FD委員会</p> <p>1.令和4年度第2回福岡薬学部FD活動報告</p> <p>2.令和4年度第2回福岡薬学部FD委員会議事録</p> <p>第9回 2023年1月23日（月）16:30～18:00</p> <p>議題：</p> <p>1)前回議事録について</p> <p>第8回福岡薬学部会議議事録</p> <p>審議事項：</p> <p>なし</p> <p>報告・連絡事項：</p> <p>1)福岡薬学部教務委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>2.学生情報</p> <p>3.進級判定スケジュール（再掲）</p> <p>4.科目別テストの結果</p> <p>5.4年生時間割（病院薬局事前実習1等）</p> <p>6.4年生のCBT等関連費用</p>

<p>7.定期試験別室受験者対応</p> <p>2)大川C教務委員会</p> <p>1.12 月度大川C教務委員会議事録</p> <p>2.1 月度大川C教務委員会メモ</p> <p>3)福岡薬学部予算管理委員会</p> <p>1.福岡薬学部予算管理委員一覧</p> <p>4)福岡薬学部学生委員会</p> <p>1.報告事項</p> <p>2.2022 前期、留年生支援室アンケート結果</p> <p>5)大川C学生委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>6)大川Cボランティア委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>7)大川C安全衛生委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>2.ストレスチェック実施について</p> <p>8)福岡薬学部広報学生募集委員会</p> <p>1.活動報告</p> <p>9)大川C学生募集広報委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>10)大川CFD委員会</p> <p>1.報告事項</p> <p>11)その他</p> <p>1.OSCE 試験、実務実習について</p> <p>2.2 月福岡薬学部FD活動について</p> <p>臨時福岡薬学部会議 2023年2月22日(水) 13:00~13:30</p> <p>報告・連絡事項:</p> <p>1)後期定期試験成績確認</p> <p>第10回 2023年2月27日(月) 16:30~18:00</p> <p>議題:</p> <p>1)前回議事録について</p> <p>1.第9回福岡薬学部会議議事録</p> <p>2.臨時福岡薬学部会議議事録</p> <p>審議事項:</p> <p>1)大川C地域交流委員会</p> <p>1.講師派遣テーマ一覧の更新について</p> <p>報告・連絡事項</p> <p>1)福岡薬学部教務委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>2.学生情報</p> <p>3.試験の不正行為等に関する取扱い指針</p> <p>4.プレイスメントテストIの実施</p> <p>5.リメディアル教育の効果</p>
--

<p>6.2023 年度科目担当者について</p> <p>2)大川 C 教務委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>3)第三者評価・自己点検委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>2.ディプロマポリシー到達度評価の進め方</p> <p>3.自己点検用資料の第三者評価・自己点検委員会による保管期間</p> <p>4.2022 年度活動の振り返り、2023 年度の活動方針案</p> <p>4)大川 C 地域交流委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>5)福岡薬学部学生委員会</p> <p>1.福岡薬学部新入生学科別懇談会について</p> <p>2.チューター活動内容資料の変更について</p> <p>3.留年生支援室案内と指導簿について</p> <p>6)大川 C 学生委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>7)大川 C 安全衛生委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>8)大川 C 国際交流委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>9)大川 C ハラスメント防止委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>10)福岡薬学部広報学生募集委員会</p> <p>1.学生募集活動報告</p> <p>11)大川 C 学生募集広報委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>12)大川 C 臨床実習委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>13)福岡薬学部 F D 委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>14)大川 C F D 委員会</p> <p>1.報告事項</p> <p>15)令和 4 年度第 3 回福岡薬学部 FD 活動</p> <p>「福岡薬学部 2023 年度 OSCE の概要」宗像千恵 講師</p> <p>第 11 回 2023 年 3 月 27 日 (月) 16 : 30 ~ 18 : 00</p> <p>議題 :</p> <p>1)前回議事録について</p> <p>第 10 回福岡薬学部会議議事録</p> <p>審議事項 :</p> <p>なし</p> <p>報告・連絡事項 :</p> <p>1)福岡薬学部教務委員会</p> <p>1.議事録</p>

	<ul style="list-style-type: none"> 2.学生情報 3.2023 年度コアカリ SBOs-科目対応 4.新年度オリエンテーション内容 5.1 年生リメディアル教育 6.3 年生科目別テスト 7.4 年生スケジュール 8.薬学演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ 9.実習スケジュール 10.成績評価訂正届 2)大川C教務委員会 <ul style="list-style-type: none"> 1.議事録 3)第三者評価・自己点検委員会 <ul style="list-style-type: none"> 1.ディプロマポリシー到達度評価 4)福岡薬学部学生委員会 <ul style="list-style-type: none"> 1.福岡薬学部新入生学科別懇談会について 2.3 年次チューター編成について 3.留年生定期指導について 5)大川C 学生委員会 <ul style="list-style-type: none"> 1.議事録 6)大川C 安全衛生委員会 <ul style="list-style-type: none"> 1.議事録 7)大川C 防災対策委員会 <ul style="list-style-type: none"> 1.議事録 2.2023 年度 BLS 講習計画書 8)福岡薬学部広報学生募集委員会 <ul style="list-style-type: none"> 1.学生募集活動報告 9)大川C 学生募集広報委員会 <ul style="list-style-type: none"> 1.2023 年度イベント計画 10)福岡薬学部FD委員会 <ul style="list-style-type: none"> 1.令和4 年度第3 回 FD 活動報告 12)その他 <ul style="list-style-type: none"> 1.2023 年度福岡薬学部会議日程について 2.2023 年度福岡薬学部内委員について 3.福岡薬学部就職委員会について
--	---

2. 福岡薬学部教務委員会

委員	永倉透記（委員長、教授）、多田納豊（副委員長、准教授）、猪部学（教授）、西村信弘（教授）、長谷川雄（教授）、宗像達夫（准教授）、塚本宏樹（准教授）、吉武康之（准教授）、齊藤秀俊（准教授）、成川佑次（准教授）、宗像千恵（講師）、貝塚 拓（講師）、坂井崇亮（助教）、澤井円香（助教）、柴田 健太郎（助教）
----	--

<p>所管事項</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 薬学教育カリキュラムの点検および改善・改革 ・ 各学年の成績集計・分析および進級・卒業要件達成度の精査 ・ カリキュラムの運営実務（時間割作成、履修状況やシラバス作成の取り纏め等） ・ 各種試験（定期試験、模擬試験等）の調整・実施 ・ 卒業研究（卒研配属、卒研発表会運営、卒論取り纏め、成績評価等）の調整・実施 ・ 薬剤師国家試験対策の企画・運営 ・ 薬学共用試験(CBT・OSCE)対策の企画・運営 ・ 総合選抜型入試問題の作成、入試実施および成績評価 ・ 教務ガイダンスの調整・実施 ・ 学生への4月アンケートの実施 ・ 保護者への学習に関する報告 ・ 事務部教務係および福岡保健医療学部との連携 ・ 薬学部会議への報告・議案上程 ・ 当委員会活動の自己点検および報告書作成 ・ その他、福岡薬学部の教務に係る事項
<p>活動概要 (委員会開催と内容)</p>	<p>第1回 2022年4月19日(火) 14:00-15:15 議題：1.大川教務委員会(4/5)報告、2.学生情報、3.2022年度役割分担、4.2022年度委員会開催日程、5.福岡薬学部教育の特徴(独自性)(コアカリWT)、6.プレイスメントテスト結果、7.リメディアル教育、8.総合型選抜入試問題作問、9.その他</p> <p>第2回 2022年5月17日(火) 16:30-17:50 議題： 1. 大川教務委員会(5/3)報告、2. カリキュラム小委員会(5/12)報告 3. 学生情報、4. 2022年度役割分担修正案、5. 2022年度前期定期試験スケジュール案、6. 講義出欠状況、7. プレイスメントテストI解析結果、8. その他</p> <p>第3回 2022年6月21日(火) 16:30-17:30 議題：1.大川教務委員会(6/7)報告、2.教務統括委員会(6/15)報告、3.学生情報、4.福岡薬学部薬学科の教育研究上の目的変更、5.大学院研究指導教員の登録、6.2021年度後期科目点検結果、7.講義出欠状況、8.リメディアル教育対象者のプレイスメントテストII、9.3年生科目別テスト実施要領案、10.その他</p> <p>第4回 2022年7月19日(火) 16:30-17:30 議題：1. 大川教務委員会(7/5)報告、2. 学生情報、3. 自習室・休憩室の変更、4. 前期成績確認スケジュール、5. 定期試験監督、6. リメディアル教育実施報告、7. 科目別テスト結果、8. 郷土論のレポート評価分担</p> <p>臨時 2022年8月30日(火) 13:00-14:00 議題：1.前期成績確認、2.総合型選抜入試の採点者、3. その他</p> <p>第5回 2022年9月20日(火) 14:00-16:00 議題： 1. プレイスメントテストII、2. 臨床検査医学実習に係る同意書に</p>

<p>ついて、3. 照合事項への回答、4. 大川教務委員会(9/12)報告、5. 学生情報、6. 教務ガイダンス内容、7. 後期実習スケジュール、8. 自己評価 2023 への対応、9. 総合型選抜入試関連スケジュール、10. 定期試験（本試験）の答案開示期間、11. 前期科目の自己点検・評価（スケジュール・分担）、12. DP 達成度評価</p> <p>第 6 回 2022 年 10 月 20 日（火） 16:30- 17:20 議題：1.大川教務委員会(10/4)報告、2.学生情報、3.後期進級判定スケジュール、4.VOD の対面講義日程、5.GPA 順位、6.プレイスメントテスト II 結果、7.早期体験実習における大田原薬学部実務実習生との交流機会</p> <p>臨時 2022 年 10 月 18 日（火） 14:15- 14:45 議題：1. 総合型選抜入試の合格者候補の抽出</p> <p>第 7 回 2022 年 11 月 15 日（火） 16:30- 17:50 議題：1.大川教務委員会(11/1)報告、2.0 学生情報、3.GPA 順位の扱い、4.リメディアル教育およびプレイスメントテスト II について、5.出欠状況一覧、6.その他</p> <p>第 8 回 2022 年 12 月 20 日（火） 16:20- 17:50 議題：1.大川教務委員会(12/6)報告、2.学生情報、3.4 年生のスケジュール（実習、CBT、OSCE、病院・薬局事前実習 I・II、卒研配属等）案、4.病院・薬局事前実習 I の内容案、CBT 対策、5.後期定期試験の監督者等、6.解剖見学のアンケート結果、7.大学中期計画の進捗管理（点検・評価）への対応、8.定期試験ガイダンス内容、9.学生への掲示方法、10.前期科目の点検結果と後期科目の点検分担・スケジュール、11.その他</p> <p>第 9 回 2023 年 1 月 17 日（火） 16:30- 17:30 議題：1.大川教務委員会(1/6)報告、2.学生情報、3.進級判定スケジュール、4.科目別テスト結果、5.病院薬局事前実習 1 を含む 4 年生の時間割、6.CBT 体験受験・共用試験受験料等について、7.定期試験別室受験者対応</p> <p>第 10 回 2023 年 2 月 21 日（火） 14:30- 15:30 議題：大川教務委員会(1/6)議事録、(2/6)報告、2.学生情報、3.試験の不正行為等に関する取扱い指針（大田原キャンパス）、4.シラバスチェックスケジュール、5.CBT 対策の 4 年生への連絡内容、6.プレイスメントテスト I の実施、7.リメディアル教育の効果</p> <p>臨時 2023 年 2 月 21 日（火） 14:00- 14:30 議題：1.2022 年度成績確認（進級要件到達度確認）</p> <p>第 11 回 2021 年 3 月 15 日（火） 14:00-16:00 議題：1.大川教務委員会(3/3)報告、2.学生情報、3.2023 年度 SBOs 科目対応、4.4 月オリエンテーション内容、5.1 年生のリメディアル教育について、6.3 年生の科目別テストについて、7.4 年生スケジュール、8.薬学演習 I、II、III について、9.DP 達成度評価方法の修正、10.来年度の実習スケジュール、11.成績評価訂正、12.福岡薬学部教務委員会スケジュール案、13.役割分担案、14.その他</p>

自己点検・評価	<ul style="list-style-type: none"> ■ 本委員会は、委員会を福岡薬学部会議前週に定期的を開催し、薬学部内教学課題に関する討議、委員間の情報共有を行った。前後期の定期試験後において、臨時委員会を開催して成績確認を行った。委員会決定事項は、次週の福岡薬学部会議に上程して決裁を受けた。また、本委員会は大川キャンパス教務委員会と密接に連携し、大川キャンパス全体の教務活動との整合性を保った。 ■ 薬学教育モデル・コアカリキュラム SBOs と各科目の関係について検討し、複数の科目が対応する SBOs を増やすなどの対応の最適化を進めた。 ■ 最高学年の第3学年への進行に伴う科目数増加や、4年次共用試験および卒業試験準備開始等の業務増加に対応するため、委員会メンバーの増員および役割分担の見直しによる効率化を行った。 ■ 低学年次における脱落を抑制するための取り組みとして、入学時のプレースメントテスト成績下位者に対して、リメディアル教育（薬学教育へつながる生物、物理、化学の補完授業）を実施した。 ■ 共用試験に備えて委員会内にワーキングチームを組織し、スケジュールや学修推進のためのプログラムに関する準備を開始した。 ■ 半期毎の各科目の講義資料・成績評価資料の点検業務を、第三者評価・自己点検委員会と連携して本委員会が担った。 ■ その他、シラバス記載最適化、講義・実習スケジュール調整、定期試験等における試験監督配置、定期試験後の進級判定資料作成、学生の講義出欠状況の定期的集計、学生への教務ガイダンス、来年度4年生のスケジュール案作成など、学生の学修が円滑かつ効果的に進むよう活動した。
今後の対応	<p>4年生まで最高学年が進行する。4年次は共用試験や実務実習が行われるため、1～3年生とは異なるスケジュール等が必要となる。本委員会は、1～3年生に関する業務を効率的に進めると共に、4年生の共用試験（CBT、OSCE）、実務実習（2024.2～）、卒業研究配属等が円滑に進むよう活動する。また、薬学教育モデル・コアカリキュラム導入に伴うカリキュラム改訂について、大田原キャンパスと連携して対応する。</p>

3. 福岡薬学部学生委員会

委員	<p>阿部義人（委員長、教授）、山本緑（副委員長）、緒方勝也（教授）、西村信弘（教授）、岸拓也（教授）、太田昭一郎（教授）、塚本宏樹（准教授）、一木裕子（准教授）、貝塚拓（講師）、中矢正（講師）、朴珍相（講師）、磯田紀之（助教）、柴田健太郎（助教）、福田光良（助教）</p>
所管事項	<p>【年中業務】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自己点検および報告書作成 <p>【学生指導】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学生主導行事の準備、運営の支援（大学祭(月華祭)、運動会、謝恩会）

	<ul style="list-style-type: none"> ・大学主導行事の準備、設営 (入学時オリエンテーション、入学式・卒業式(学位授与式)) ・チューター活動の運営 【生活指導】 ・問題発生時の学生生活の指導(交通安全、地域社会における生活等) ・修学困難な学生の把握および支援並びに対応手順の作成および周知 ・新型コロナウイルス感染予防の徹底(本年度) 【修学指導】 ・成績不振学生等への三者面談(保護者・学生・チューター)実施 【健康管理】 ・健康(ハラスメント、心身症、予防接種、学生体調管理アンケート等)に関する状況把握 【教育後援会】 ・教育後援会幹事の選出 ・保護者懇談会の運営 【課外活動】 ・部活動、サークル活動の支援
<p>活動概要 (委員会開催と内容)</p>	<p>第1回 2022年4月21日 (木) 10:00 – 11:00</p> <p>【議題】 1. 担当の割り振りに関して 2. 学生懇談会運営に関して 3. 問題のある学生への指導体制に関して 4. 学生の配慮について 5. 食育に関して 6. その他</p> <p>【報告】 1. 学生体調管理アンケートに関して 2. 運動会に関して 3. 来年の留年生指導に関して 4. 留年生アンケートに関して (添付資料) 5. 保護者懇談会に関して</p> <p>第2回 2022年9月27日 (火) 11:00 – 12:00</p> <p>【議題】 1. 保護者懇談会に関して 2. DP達成度確認表に関して 3. 問題のある学生への指導体制に関して</p> <p>【報告】 1. 月華祭に関して 2. 留年生アンケートについて</p> <p>第3回 2023年2月8日(水)～ 2月14日(火) メール会議</p> <p>【議題】 1. 福岡薬学部新入生学科別懇談会について 2. チューター活動内容資料の変更について 3. 新型コロナ対応に関して 4. 第2回薬学部学生委員会 議事録(案)について</p> <p>その他活動 1. 大川キャンパス学生委員会との連携業務 福岡薬学部学生委員4名は、大川キャンパスの学生委員を兼務した。毎月第一月曜に開催のキャンパス学生委員会に出席し、学科への依頼事項の窓口として対応した。さらに、キャンパス学生委員会活動内容について、学科教員への情報共有を行った。</p> <p>2. チューター活動運営</p>

	<p>チューターに対して、前期・後期開始時期には個人面談を通してラーニングポートフォリオを確認すること、担当学生の就学・生活指導を適宜行うことを依頼した。また、前期・後期の成績判定後に留年が確定した学生については、心情のケアや就学の意味確認、必要に応じて保護者との情報共有、などを入念に行うように依頼した。</p> <p>留年生に向けて、学習支援室（ゼミ室 8）の活用やチューターとの定期面談について毎月指導した。チューターに対しても、定期的な指導を依頼した。なお、実施した全ての面談について、委員会作成の書式を用いて記録・報告するようにチューターへ依頼し、提出されたファイルを集計・保管した。1年生入学時の学生記録用紙は取りまとめた後に、学年主任に保管を依頼した。さらに学科別保護者懇談会（10/8開催）を運営・遂行した。</p> <p>3. 学生主導行事の準備、運営の支援（大学祭(月華祭)、運動会) 大学祭、運動会（運動会は中止になったが、10/29に球技大会が行われた）等の実行委員を決定し、運営に協力した。</p> <p>4. 新型コロナウイルス感染対策 前年度に引き続き、学生の体調管理（Google Form）の運営を行った。</p>
自己点検・評価	<p>大学主導・学生主導行事（学科別保護者懇談会、月華祭、運動会）が開催され、前年度より学生委員会が運営する活動が拡大した。いずれの運営も特に大きな問題はなく、円滑に遂行された。委員会会議を開催し、所轄事項を円滑に遂行するように議論した。また、大川キャンパス学生委員会との連携業務および学科におけるチューター業務について、滞りなく活動を継続できたため、目的は概ね達成したと考える。</p>
今後の対応	<p>次年度より、コロナ禍で行われていた活動制限が徐々に緩和される予定である。それに伴った大学祭、運動会などの学生イベントやチューター活動、サークル活動を通じた学生間のつながりを持たせるイベントのサポート業務を行っていく。また、健康管理、生活指導など学生生活のサポートや保護者懇談会等の円滑な運営を引き続き支援していく。</p>

4. 福岡薬学部臨床教育・実務実習委員会

委員	西村信弘（委員長、教授）、長谷川雄（副委員長、教授）、太田昭一郎（教授）、緒方勝也（教授）、平木洋一（教授）、一木裕子（准教授）、今村友裕（講師）、宗像千恵（講師）、福田光良（助教）
所管事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ 早期体験実習（1年次必修）の調整・実施 ・ 病院薬局実務実習（5年次必修）の調整・実施 ・ 薬学共用試験（OSCE）各委員会の補助 ・ 薬学部教員の臨床研修に関する対応 ・ 多職種連携教育関連の講義・実習に対する対応 ・ 当委員会活動の自己点検および報告書作成 ・ その他臨床教育・実務実習に関わる事項
活動概要	<p>関連職種連携ワークの模擬症例の見直し</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ リハ学科中心の内容から、薬学部および検査学科の学生が中心に症例検討出来る内容に変更する作業を実施し、大川キャンパス臨床実習委員会に

	<p>提出した。</p> <p>2023 年度 OSCE 実施に向けた取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2023 年 2 月 20 日に福岡薬学部 FD において、OSCE について宗像千恵講師から説明を行った。 ・2023 年 3 月 28 日には、福岡薬学部 OSCE 実施委員会を開催し、役割分担をよび実施、運営について説明を行った。 ・病院薬局実務実習に関して、九州山口実習調整機構および大学委員会、福岡県薬剤師会、福岡県病院薬剤師会と協議を重ねた。 ・OSCE 実施に向けて、福岡県内薬学部（福岡大学、第一薬科大学、九州大学、国際医療福祉大学）合同で模擬医師養成講習会を開催した。
自己点検・評価	<p>早期体験実習では、今年度はコロナ禍の中、初めてに薬局見学を実施した。受入れ薬局と調整を重ね早期体験実習を実施した。今年は初めて関連職種連携ワークに薬学科の学生が加わったが、模擬症例の見直しが必要であることは課題としてあがった。教員の研修については、オンラインで実施された実務実習指導薬剤師養成ワークショップに3名の教員が参加した。</p>
今後の対応	<p>来年度は早期体験実習及び関連職種連携ワークの実施に対応する。また2023 年度に行われる薬学共用試験（OSCE）に向けて必要事項を検討していく。さらに、2024 年度実施の病院薬局実務実習の配属調製が2023 年度4 月から始まるため、委員会として対応を進める。</p>

5. 福岡薬学部 FD 委員会

委員	<p>長谷川雄（委員長、大川キャンパス FD 委員兼任、教授）、斎藤秀俊（副委員長、准教授）、梶岡俊一（教授）、吉武康之（准教授）、中矢正（大川キャンパス FD 委員兼任、講師）、今井竜也（講師）</p>
所管事項	<ul style="list-style-type: none"> ・本学の基本理念と教育の目標を基盤とした独自の薬学教育の啓蒙 ・教員の教育技法向上支援 ・授業アンケート結果の分析と活用 ・教育・研究実施に係る教員間の意思疎通サポートと環境整備 ・FD 委員会活動の自己点検及び報告書の作成 ・薬学部各委員会と連携した薬学部課題の抽出、およびそれを題材とする研修会の開催
活動概要 (委員会開	<p>1. 薬学部 FD 活動：年 3 回実施</p> <p>第 1 回(5/23、31 人出席、出席率 89%)：薬学部必修科目のうち学生アンケ</p>

<p>催と内容)</p>	<p>ート結果のスコアが最も高かった塚本宏樹准教授より「教授法：分子生物学1」と題し、講義の進め方や工夫について発表して頂いた。</p> <p>第2回(11/21、27人出席、出席率79%)：宗像達夫准教授より「共用試験について」と題し、福岡薬学部において来年度初めて行われるCBT(Computer based testing)の目的と概要を周知すべく講演して頂いた。</p> <p>第3回(2/27、28人出席、出席率82%)：宗像千恵講師より「福岡薬学部2023年度OSCE(Objective structured clinical examination)の概要」と題し、福岡薬学部において来年度初めて行われる客観的臨床能力試験の概要と今後の予定について講演して頂いた。</p> <p>なお、欠席教員に向けて後日議事録の配信を行った。</p> <p>2. 大川キャンパスFD活動</p> <p>大川キャンパスFD活動：全キャンパスにおける2回の合同教員研修会(9/7、3/16)に加え、科研費獲得経験談(7/19)、学内教員に学ぶ教授法(10/18)に参加した。</p>
<p>自己点検・評価</p>	<p>本学のFD活動は薬学部内での開催に加え、大川キャンパス内、全キャンパス内でそれぞれ企画されている。本学部には様々な背景を持つ教員が在籍しているため、FD活動では薬学部の枠組みの中で今後目指すべきベクトルを共有できる内容を企画した。活動後のアンケート結果において企画内容に対する評価は総じて高く、我々が企画・実施しているFD活動は、新設学部である本学の薬学教育遂行に一定の役割を果たすことができていると考えている。</p>
<p>今後の対応</p>	<p>来年度は最高学年が4年生となり、教員もOSCEやCBTへの対応だけでなく、臨床に強い薬剤師を育てる環境を整備する必要がある。従って、薬剤師教育の現状を把握しながら、医療のプロフェッショナルリウムから考える薬剤師教育の在り方、対面教育とオンライン教育との総括等を企画し、将来活躍する薬剤師育成のための教育の底上げに努めたい。</p>

6. 福岡薬学部教育・研究委員会

<p>委員</p>	<p>石田卓巳(委員長、教授)、阿部義人(副委員長、教授)、川端猛夫(教授)、岸拓弥(教授)、吉良潤一(教授)、村田祐造(教授)、朴珍相(講師)、中矢正(講師)、磯田紀之(助教)、坂井崇亮(助教)</p>
<p>所管事項</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究費申請の啓発 ・ 教員の研究・教育業績(論文、総説、著書、学会発表、講演、担当科目等)のとりまとめ

	<ul style="list-style-type: none"> ・ セミナーおよび研究会の企画・実施 ・ 研究の支援 ・ 当委員会活動の自己点検および報告書作成
活動概要 (委員会開催と内容)	<p>第1回 2022年5月24日 (火) 14:00 – 14:25 議 題：1. 福岡薬学部 研究発表会 (仮称) 開催案の策定について</p> <p>第2回 2022年7月26日 (火) メール会議 報 告：1. 第12回国際医療福祉大学学会学術年会における協力依頼について</p> <p>その他：1. 福岡薬学 部研究発表会 (仮称) について</p>
自己点検・評価	<p>研究・教育支援委員会は、研究の支援や業績の取りまとめなど薬学部教員の研究・教育に関する内容を審議し、福岡薬学部教員会議に提議・報告している。令和4年度は、福岡薬学部 研究発表会 (仮称) 開催案の策定を行った。また第12回国際医療福祉大学学会学術大会 (8/28開催) における協力体制の構築を行い、薬学教員の学会への参加を促した。また、年度毎にまとめられる第三者評価・自己点検報告書の研究活動報告書について、書式を第三者評価・自己点検委員会会議に提議し決定すると共に、その取りまとめを行なった。</p>
今後の対応	<p>本年度、福岡薬学部 研究発表会 (仮称) の開催案を策定したが、本学学会学術年会との差別化、さらに参加規模や時期についての調整が難しく決定に至ることができなかった。今後、実施するか否かの意向を含めた議論を進める必要があると考えている。また、本学学会学術年会における協力体制の構築も行っており、来年度以降も継続して対応する予定である。次年度以降も他の委員会との連携を図りながら、本委員会が掲げた所管事項に伴い研究支援活動の範囲を広げていく。</p>

7. 福岡薬学部広報・学生募集委員会

委員	<p>宗像達夫 (委員長、准教授)、吉武康之 (副委員長、准教授)、猪部学 (教授)、一木裕子 (准教授)、中矢正 (講師)、今井竜也 (講師)、磯田紀之 (助教)、坂井崇亮 (助教)</p>
所管事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ オープンキャンパスにおける学科宣伝と体験企画の考案・実施 ・ 高校模擬講義、高校訪問、進学相談会担当者調整 ・ 学生募集・広報委員会参加 ・ 薬学部パンフレット/大学パンフレットの作成と校正 ・ 薬学部ホームページの情報追加と変更依頼 ・ 薬学部フォーラムの対応と内容調整 ・ その他の広報媒体への学生の手配、原稿の校正など

	<ul style="list-style-type: none"> ・パンフレットなどで使用する素材集め ・SNS 発信に向けた準備 ・当委員会活動の自己点検および報告書作成 ・高校訪問担当参事との連携
活動概要 (委員会開催と内容)	<p>委員会会議と内容</p> <p>第1回 2022年5月17日(火) 11:00~11:20 議題: <ul style="list-style-type: none"> ・高校訪問先選定 ・その他 </p> <p>第2回 2023年1月18日(水) 13:00~14:20 議題: <ul style="list-style-type: none"> ・2023年度 学生募集計画の確認 ・2022年度入試(現状)までの結果と課題 ・3月19日のオープンキャンパスの内容について </p> <p>第3回 2023年3月27日(月) メール会議 議題: 自己点検評価提出用文章について</p> <p>オープンキャンパスワーキンググループ会議</p> <p>第1回 2022年4月4日(金) 13:00~14:30 4F 会議室 1</p> <p>第2回 2022年8月1日(月) メール会議</p> <p>第3回 2022年10月28日(金) 10:00~11:00 4F 会議室 1</p> <p>第4回 2023年1月31日(火) メール会議</p>
自己点検・評価	<p>本委員会は、第1回福岡薬学部会議にて設置され、福岡薬学部の広報・学生募集を主目標として活動を開始した。福岡薬学部開設3年目にあたる今年度の活動として、本委員会の所管事項制定を行い、これに沿って活動を行った。</p> <p>各所管に対する対応は以下の通り。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オープンキャンパスにおける学科宣伝と体験企画の考案・実施 ・本年度ワーキンググループを作成、主としてワーキンググループで取り纏めを行った。 <p>オープンキャンパスの学科紹介パネルの制作(7月)</p> <p>オープンキャンパス、毎日キャンパス見学会の対応教員の取り纏め(随時)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校模擬講義、高校訪問、進学相談会担当者調整 <p>教員による高校訪問先の取り纏め(5月)</p> <p>高校訪問先への教員の割り振り(119校対象、5/18)</p> <p>大分雄城台高校(6/21)、筑前高校(7/15)、八女高校(7/28)、龍谷高校(2/21)、福岡大学附属若葉高校(3/14)へ出張講義</p>

	<p>山門高校体験授業（3/23、1・2年生15名参加）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生募集・広報委員会参加 <p>大学広報学生募集委員会への出席と学科報告（4月、5月、6月、9月、12月、2月の計6回、3月30日現在）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・薬学部パンフレット/大学パンフレットの作成と校正 <p>3月30日現在、作成進行中</p> <ul style="list-style-type: none"> ・薬学部ホームページの情報追加と変更依頼 <p>福岡薬学部ホームページの変更のお願い(2/28)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・薬学部フォーラムの対応と内容調整 <p>本年度フォーラムはなく、薬学部説明会として実施</p> <p>大川(10/9) 午前講演：武田弘志 午後：学科体験プログラム</p> <p>薬学部説明会参加者29組65名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・その他の広報媒体への学生の手配、原稿の校正など <p>医歯薬進学校正(5/18)</p> <p>薬学ガイド校正(6/20)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・パンフレットなどで使用する素材集め <p>福岡薬学部パンフレット用写真撮影(12/22, 23)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・SNS発信に向けた準備 <p>福岡薬学部Instagramでの情報発信</p> <p>Instagramフォロワー(495人、3/16現在)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校訪問担当参事との連携 <p>各県参事との高校訪問計画の打ち合わせ(6/3)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・当委員会活動の自己点検および報告書作成 <p>本報告書の作成</p> <p>以上、ほぼ全ての所管について活動が行われており、当初の目的は概ね達成できたものとする。</p>
今後の対応	<p>本年度もコロナ禍の影響もあったが、高校訪問や体験型オープンキャンパスの実施ができた。来年度は状況を踏まえながら、本年度以上に活動することで、充実したものになるよう努力が必要であるとする。また、18歳人口減少による、受験生の減少も考慮に入れ、学生確保のために福岡薬学部の知名度をさらに上げることが必要である。特に上位層高校からの受験生が減っていることから、上位層に対する知名度向上を目指してアイデアを出す必要があり、動画やSNSなどを利用した広報・学生募集活動を今年度以上に取り組む必要がある。</p>

8. 福岡薬学部第三者評価・自己点検委員会

委員	<p>山口政俊（顧問、教授）、武田弘志（学部長） 永倉透記（委員長、教授）、猪部学（副委員長、教授） 宗像達夫（准教授）、多田納豊（准教授）、成川佑次（准教授）、宗像千恵（講師）、中矢正（講師）、澤井円香（助教） 花岡公一（専務理事）、田中博也（事務局長）、寺田浩一（事務部長）、東郷栄里（事務部）、高田奈弥（事務部）、北原希（事務部） 吉富博則（外部委員）</p>
所管事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教育研究上の目的及び三つの方針に基づく薬学教育研究活動の自己点検・評価 ・ 自己点検・評価の計画（項目設定を含む）・実施 ・ 教育研究活動の質的・量的解析 ・ 自己点検・評価結果の教育研究活動改善への反映推進 ・ 自己点検・評価結果の公表（ホームページ等） ・ 薬学教育評価機構等の第三者評価受審に関する対応 ・ 福岡薬学部会議への報告・議案上程 ・ 当委員会活動の自己点検および報告書作成 ・ その他、薬学教育研究活動の自己点検・評価に関する事項
活動概要 (委員会開催と内容)	<p>第1回 2022年5月27日（金） 15:00-17:00 議題： 1. 今年度方針（今年度の役割分担、自己点検 23 準備、外部委員）、2.カリキュラム最適化(SBOs と科目対応の最適化、福岡薬の特徴的な教育の明確化)、3. 薬学教育評価機構に関する情報、4.その他</p> <p>第2回 2022年7月8日（金） 15:20-15:50 議題：1. 2021年度自己点検・評価報告書、2. その他</p> <p>第3回 2022年9月16日（金） 13:00-14:30 議題：1. 自己評価 2023 への対応について、2. DP 到達度評価方法案、3. 薬草園の整備について、4. その他</p> <p>第4回 2022年12月23日（金） 15:15-17:00 議題：1. 外部委員候補、2. 2022年度福岡薬学部自己点検・評価報告書作成について、3. 第三者評価・自己点検委員会による講義資料の保管期間について、4. 2022年度前期科目点検結果と後期科目点検分担・スケジュールについて、5. DP 到達度評価方法案について、6. 自己評価 2023 への対応について</p> <p>第5回 2023年2月24日（金） 14:00-15:30 議題： 1. 外部委員：吉富博則先生、2. 福岡薬学部自己点検評価活動、およびカリキュラム、3. ディプロマポリシー到達度評価の進め方について、4. 自己点検 2023、5. 自己点検用資料（講義資料等）の当委員会による保管</p>

	<p>期間 6. 2022 年度活動の振り返り、2023 年度の活動方針案、7. 2023 年度委員会スケジュール案</p>
自己点検・評価	<p>1. 自己点検・評価、PDCA サイクル推進</p> <p>(1) 2022 年度自己点検・評価報告書：主な学事、委員会活動、必修科目、研究活動について自己点検・評価し、年度末に報告書にまとめた。報告書項目として「開設以来 2 年間の教育活動振り返り」の項目を追加した。それぞれの項目を主担当者を中心に点検いただき、報告文書を 3 月末までに提出いただく。2023 年 8 月末を目途に 2022 年度自己点検・評価報告書を最終化する。</p> <p>(2) 半期毎の講義資料、成績評価資料の点検評価：福岡薬学部必修科目の科目責任者に講義資料、成績評価資料を提出いただき、福岡薬学部教務委員会へ点検評価を委託した。各科目において次年度の授業に活かしていただくために、点検結果、指摘事項を各科目責任者および福岡薬学部内にフィードバックした。</p> <p>(3) 第三者評価・自己点検委員会における薬学教育の課題抽出、改善策協議 自己点検 2023 準備、外部評価委員の招聘、薬学共用試験(CBT/OSCE)準備、薬草園整備、薬学評価機構・評価実施委員派遣等の課題を抽出し、担当者を置いて対応を進めた。</p> <p>(4)外部委員の招聘 吉富博則先生を外部委員として招聘し、福岡薬学部の教育活動や自己点検・評価活動についてご助言・ご指導をいただいた。</p> <p>2. 自己点検 2023 への準備 7 月 8 日開催の薬学教育評価機構「自己評価 2023」実施説明会(zoom 接続)において実施概要の説明を受けた。薬学評価機構・評価実施委員の猪部委員を通じて機構より必要情報を入手した。実施体制(ワーキングチーム)を構築し、また、チーム内の役割分担および自己点検実施スケジュールを作成した。自己点検 2023 への今後の協力を福岡薬学部教職員に依頼した。</p> <p>3. カリキュラム最適化 SBOs – 科目対応の最適化：シラバス作成時期において、全科目責任者に薬学教育モデル・コアカリキュラム SBOs と担当科目内容の関係の確認を依頼し、SBOs の追加(あるいは削除)により最適化を進めた。 福岡薬学部教育の独自性・特徴の明確化：①関連職種連携教育(チーム医療・チームケア学修)②医療倫理教育(薬害被害者による講演等)、③海外医療現場研修の必修化、④臨床検査医学教育(フィジカルアセスメント等)、⑤キャリアデザイン教育(病院、薬局等の現場見学、キャリアビジョン発表等)、⑥リメディアル教育(教員による補完講義)等を独自性候補として位置づけた。</p>
今後の対応	<p>1. 「自己点検・評価報告書作成」および「各科目の自己点検評価」活動を継続し、PDCA サイクルを推進する。</p> <p>2. ディプロマポリシー(DP)到達度評価を開始する。DP 到達度評価方</p>

	<p>法を議論の上で策定し、評価を開始する。</p> <p>3. 自己点検 2023 に対応し、点検結果の 2024 年 4 月ホームページ公開へ向けて作業チームを編成し、スケジュール管理して作業を進める。</p> <p>4. 令和 4 年度に引き続き、外部委員より福岡薬学部の教育活動や自己点検・評価活動についてご助言をいただく。</p>
--	--

9. 福岡薬学部福岡薬学部予算管理委員会

委員	<p>教員：武田弘志（学部長、委員長）、阿部義人（教授）、石田卓巳（教授）、猪部学（教授）、永倉透記（教授）、西村信弘（教授）、齊藤秀俊（准教授）、成川佑次（准教授）、宗像達夫（准教授）、吉武康之（准教授）、宗像千恵（講師）</p> <p>事務：東郷栄里、北原希</p>
所管事項	<ul style="list-style-type: none"> 福岡薬学部予算の立案 福岡薬学部予算の執行計画および執行状況の把握
活動概要 （委員会開催と内容）	<p>第 1 回 2023 年 2 月 7 日（火）16:00 - 16:50</p> <p>議題： 1. 2023 年度福岡薬学部予算案について</p>
自己点検・評価	<p>各委員によるそれぞれの担当項目の見積もりを基に、2023 年度福岡薬学部予算案を委員会審議の上で作成した。学年進行に伴い、薬学共用試験 (OSCE/CBT) および 4 年次に初めて実施される実習に要する費用、薬草園整備費用等を計上したため、2022 年度予算案と比較して増額となった。他大学への解剖見学費用の区分確認、および 4 年次の印刷費用の精査をした上で、「2023 年度福岡薬学部予算案」として国際医療福祉大学事務部経理係に提出した。</p>
今後の対応	<p>2023 年度福岡薬学部予算の執行状況を把握し、適切に執行されるようにする。2024 年度福岡薬学部予算案を作成して、国際医療福祉大学事務部に提出する。</p>

10. 福岡薬学部就職委員会

委員	<p>【教員】西村信弘（委員長）、平木洋一（副委員長）、武田弘志（学部長）、中矢正（講師）、宗像千恵（講師）</p>
所管事項	<ul style="list-style-type: none"> 学生の就職支援 関連病院等における薬剤師業務の紹介
活動概要 （委員会開催と内容）	<p>福岡薬学部会議（2023 年 3 月 27 日）において、福岡薬学部就職支援委員会の設立および委員会メンバーについて報告した。</p>

自己点検・ 評価	福岡薬学部内に就職支援委員会を設立した。
今後の対応	病院薬剤師業務の紹介等の機会を設けて、学生の就職を早期から支援する。大川キャンパスのキャリア支援センター／就職委員会と連携して学生の就職活動を支援する。

第三部 福岡薬学部教育活動報告

1. 令和4年度の教育活動振り返り

福岡薬学部は、「リサーチマインドを持った臨床に強い医療人としての薬剤師を育成する」ことを教育目標としている。すなわち、エビデンスに基づく医療提供や基礎・臨床研究推進に必要なリサーチマインドを備え、チーム医療・チームケアや地域包括ケアに貢献出来る人間性・社会性・国際性豊かな臨床に強い医療人としての薬剤師を育成するための教育を実践している。薬学教育モデル・コアカリキュラムを網羅し、基本事項、薬学と社会、薬学基礎、衛生薬学、医療薬学、薬学臨床系科目を各年次に適切に配置して高度かつ専門的な知識・態度・技能を修得させる。福岡薬学部開設 3 年目に当たる令和 4 年度は、以下項目に重点的に取り組んだ。

学年進行への対応および教育の一層の質向上：各教員の専門性を活かした科目担当配置によって学年数・科目数増加に適切に対応し、教育の一層の質向上に取り組んだ。各科目において、昨年度の振り返り（自己点検評価）を基に今年度内容を見直し、PDCAサイクル循環による質向上を進めた（本報告書第三部 福岡薬学部教育活動報告参照）。今年度の新たな取り組み例として、臨床系科目の本格的な開講が挙げられる。「臨床薬学Ⅰ」、「関連職種連携ワーク」、「医療系薬学実習Ⅰ」等の臨床系科目を開講し、十分な実務経験を有する教員が科目を担当し、最適な薬物療法提供に必要な知識・態度・技能を修得するよう教育した。また、「臨床検査医学（講義）/臨床検査医学実習」を開講し、医師免許を有する教員が、大学関連病院施設を活用して薬物治療効果・副作用の客観的評価・フィジカルアセスメント技能、注射技能等について教育した。

キャリアデザイン教育：どのような薬剤師として将来生きていくのかを早期から考えて、薬学の学びに対するモチベーションを高めるため、低学年次から薬学概論（病院、薬局、行政・製薬企業で働く薬剤師について講義）、早期体験実習（病院、薬局の現場見学）、コミュニケーション実習（現時点でのキャリアプランの発表）等のキャリアデザインを考えさせる教育を実施した。

関連職種連携教育：3年生は、2年次の「関連職種連携論」履修に続いて「関連職種連携ワーク（問題解決型学修）」を履修した。他医療職を目指す学生と共に多職種チームをつくり、与えられた医療課題について討議し、解決策を発表するチーム活動に取り組んだ。この取り組みの中で、多職種が連携して患者中心の医療を提供するための知識・技能・態度を学んだ。また、多職種チーム構成メンバーの役割を充分理解して連携し、薬剤師としての専門性を発揮し、チーム医療・チームケアに貢献する能力を身に付けた。

使命感・医療倫理観の醸成：医療の担い手としてふさわしい態度・医療倫理観を醸成するため、入学後の早期から「薬学概論」や「生命倫理」等の科目において使命感・医療倫理に関する教育を実施した。また、薬害被害者による講演「早期体験実習」や人体解剖見学「解剖生理学Ⅲ」を実施し、医療問題や医療倫理を深く考える機会とした。

国際的な広い視野の醸成：福岡薬学部は、国際的視点を含む広い視野で課題に取り組む力を醸成するため、約2週間の海外医療現場での研修を2年次必修としている（海外保健福祉事情Ⅰ・Ⅱ）。令和4年度の海外研修は、新型コロナウイルス感染症の影響で中止したが、現地医療者とのオンラインミーティング等の代替プログラムを実施した。

自己点検評価・PDCAサイクル循環による教育・研究の継続的改善：令和2年度の開設以来、福岡薬学部内に自己点検委員会を組織して年度毎に自己点検評価を実施している。令和4年度の主な学事（オープンキャンパス、保護者懇談会等）、委員会活動、各必修科目の教育内容、および研究活動について各項目担当者が点検評価を実施し、その結果を自己点検評価報告書（本報告書）としてまとめて、福岡薬学部HPに公開している。また、必修科目内で使用した資料（講義資料、実習書等）および成績評価資料等を福岡薬学部教務委員および自己点検委員が点検し、その結果を各科目責任者にフィードバックすることによって次年度の各科目の質向上に繋げている。

4年次への学年進行準備：薬学共用試験(CBT)実施に備えて、コンピューター・システム整備や共用試験センター説明会への参加等による情報入手等の準備を進めた。薬学共用試験(OSCE)実施に備えて、病院・薬局実務実習地区調整機構との連携やスケジュール調整等を進めた。また、卒業研究配属実施に備えて、研究分野設定およびリサーチマインド養成講座実施スケジュール設定等の準備を進めた。

リメディアル教育：福岡薬学部における講義の理解に必要な化学、数学・物理、生物に関する新入生の学力は多様である。主に低学年次に配置されている化学・物理・生物系科目の学習から新入生が取り残されないよう、入学時学力テストを実施し、その点数が低い新入生を対象としてリメディアル教育を実施した（化学、物理、生物系科目担当教員による講義）。

ディプロマポリシー到達度評価導入準備：ディプロマポリシー(DP)到達度評価方法を検討（DP到達度水準表および評価シート案の作成など）し、来年度（令和5年度）からのDP到達度評価実施に向けて準備を進めた。

2. 令和5年度の教育活動目標

「リサーチマインドを持った臨床に強い医療人としての薬剤師を育成する」を目標として教育を推進する。福岡薬学部開設以来、令和4年度まで実施してきた教育を基盤とし、4年次への学年進行に対応すると共に、教育の質の一層の向上を目指して以下項目に重点的に取り組む。

学年進行への円滑な対応および各学年の教育の一層の質向上

令和5年度は、最高学年が4年生へ進行する。4年次の薬学共用試験、研究室配属、および実務実習等を十分な準備をした上で円滑に実施する。また、各学年の教育の質を一層向上させる。

自己点検評価・PDCAサイクル循環による教育・研究の継続的改善

主な学事、委員会活動、各必修科目の教育内容、および研究活動に関する自己点検評価、自己点検報告書の作成・ホームページ公開、および点検結果を基にした次年度活動の改善を継続する。必修科目資料の点検、およびその結果の科目担当者へのフィードバックを継続する。また、令和5年度は薬学教育評価機構の自己評価2023の評価対象年度に該当するため、評価機構の定める項目について自己点検評価を実施し、その結果をホームページに公開する。

ディプロマポリシー到達度評価の開始

ディプロマポリシー(DP)到達度評価方法を策定し、DP到達度評価を開始する。

薬学共用試験(CBT・OSCE)へ向けた学生指導

4年生に対して、これまで学んだ内容の復習講義や調剤実技指導（実習）を実施し、薬学共用試験合格を支援する。

病院・薬局実務実習実施

病院・薬局実務実習地区調整機構や実習先施設（病院・薬局）と連携して、スケジュール調整、学生配属等を行い、2月からの実務実習を円滑に実施する。

リサーチマインドの醸成・研究室配属

卒業研究開始に向けて、リサーチマインド養成講座（各研究分野の教員による研究内容紹介等）を実施し、面接等を経て学生の興味と合致した研究室配属を行う。

リメディアル教育

福岡薬学部教員によるリメディアル教育（化学、数学・物理、生物）を継続する。また、リメディアル教育による効果の評価方法を検討し、より効果的なリメディアル教育に繋げていく。

国際的な広い視野の醸成（海外研修の実施）

新型コロナウイルスの影響が収まることを前提に、2年生全員が「海外保健福祉事情Ⅰ・Ⅱ」において約2週間の海外医療関連施設（大学、病院等）での研修を実施する。

関連職種連携教育の推進

講義（2年次必修）、グループワーク（3年次必修）、および実習（5年次選択）から構成される関連職種連携教育（Interprofessional Education: IPE）において、チーム医療・チームケア、チーム内での薬剤師の役割、および他職種とのコミュニケーション能力を修得させる。

3. 2022年度開講 福岡薬学部必修科目

(1) 総合教育科目 人間系

科目名	心理学	学年	1 学年	期	前期
科目責任者	義田俊之	科目担当者	義田俊之		
自己点検・評価	<p>心理学というと、「カウンセリング」というイメージを持たれやすい。しかし、それは心理学のごく一部に過ぎない。この講義では、いろいろな心理学の中から、受講者が興味を持ちやすいと思われる、発達、知覚・認知、学習、社会、感情を取り上げた。最後に心理学の研究法を紹介した。心理学の領域はいろいろだが、は内側にあって目に見えない「心」を「科学」として研究するために、心理学は、一般の人が思うよりも「外側」を取り上げる。すなわち、「心」を何かの手段で「行動」として外側に出して数量化するとともに、心に影響を与えている「環境」の側の変数(=外側の物事)との関連を調べることを強調した。</p> <p>身近な題材を、心理学の知識をもって見直すことで、知的な驚きを体験できる講義を目指した。</p> <p>講義手法としては、教科書を取り込みパワーポイントとして投影し、重要箇所に下線を引いたり、図表に書き込みを施したりし、教科書を活用した。講義で取り上げた実験の動画をYoutubeから検索して視聴させた。講義後に5問前後の確認テストを出題して、即時の復習を促した。前年度、成績不良者は講義後に実施する確認テストの提出状況が芳しくない者が多かったことから、確認テストの提出を促した。</p>				
今後の対応	<p>基本的に現在の方向性を維持する。基本的に現在の方向性を維持する。なお、授業評価アンケートの、講義の難易度の項目については、「簡単であった」という評価が多かった。また、定期試験の問題を、項目反応理論を用いて分析したところ、「心理学」の定期試験には、易しく、低学力群の能力推定に適した項目が多かった。「心理学」は、講義内容も、定期試験も、平易なものであったと言える。受講者の理解力には一定の幅があることから、理解力が覚束ない層を取りこぼさない点では意味があったと考えるが、今後は、講義内容に関しては、やや高度な内容を増やす。また、定期試験については、高困難度項目を増やし、高学力群の能力推定も行えるようにする。</p>				

科目名	コミュニケーション概論	学年	1	期	後期
科目責任者	中島 薫	科目担当者	中島 薫		

自己点検・評価	<p>本講義では、日常の対人関係や、対人援助場面における信頼関係を築く上で必要となるコミュニケーション技術、およびその土台となる自己・他者理解、人間行動理論、援助技術について体験的に学び、実生活の中で活用できることを目標としている。</p> <p>近年コミュニケーションへの苦手意識が高い学生が多くなり、対人援助職としての基本的な関係づくりに苦勞する実習生や初心援助職が増えている。自身を「コミュ障」とレッテル付けしている者もあるが、実際は慣れやトレーニングにより一定の改善は可能である。このため、講義では①自己意識の改善、②コミュニケーションについての教育と基礎訓練、③対人援助場面やセルフケアとしても活用できる心理療法技法の実習をテキストをベースとしながらワークシートやロールプレイ、グループワークを通じて行ってきた。講義内でロールプレイやグループワークを毎回経験し、また時折席替えを行うことで様々な相手との対話を行う中でコミュニケーションへの苦手意識が克服され、新しい出会いを楽しむ姿勢が培われていることが毎回のリフレクションシートから確認された。また、リラクゼーション技法による不安や緊張の緩和や、認知行動療法による否定的思考の修正なども講義内の実習で行ったが、これについても講義が後期テスト期間前であったこともあり実生活内に取り入れて効果を実感したという声が聞かれ、講義の目標が達成されたと考えられる。</p>
今後の対応	<p>現在の講義スタイルを維持するが、オンライン受講者はロールプレイやグループワークができずチャットでのみのやりとりとなっていたため、オンライン受講者が複数名ある場合などはオンライン上で受講者同士がワークができるような工夫も行っていきたい。また、本年度は学生の反応を見るために毎回リフレクションシートの提出を求めたが、この記載により講義内容が日常の対人関係やセルフケアにどのように活用されるかが講義者にも把握できたため、引き続きの実施を行っていきたい。</p> <p>課題としては、テキストに掲載されている症例が薬学部学生の今後の臨床現場で出会うものと一致しなかったり、実習前に学ぶものだとイメージが湧きにくかったりする可能性もある。このため今後は講義の中で適宜補足説明を行ったり、日常場面に置き換えて具体例を挙げるなどして理解を促していきたい。</p>

(2) 総合教育科目 社会系

科目名	法学	学年	1 学年	期	前期
科目責任者	今井竜也	科目担当者	今井竜也		
自己点検・評価	<p>例年通り、はじめに「法とはなにか」というテーマで3回授業をし、法の基本的特質についてある程度理解してもらった上で、具体的な社会問題について、法的観点からそれをどう見るのかを学び、かつ考えてもらった。</p> <p>法解釈や学説、諸制度を理解させるよりも、法や制度の持つ基本的な理念、人と社会との関係性、現代社会において直面する様々な社会問題に対し、私たちがどう考え行動するべきか、というような、法や社会のあり方の本質に迫るようなテーマ設定をし、毎時間、ランダムに受講生を指名して口頭での質疑応答を行うことに加え、ミニッツペーパーを用いた質疑応答、Google Formを用いた宿題課題への回答など、自分の意見を述べる機会をなるべく多く設けることで、「覚えることよりも考えること」を重視した、主体的な学習ができるよう工夫した。</p> <p>また、ミニッツペーパーのコメントや宿題課題への回答は授業のフィードバックに活用し、さらなる理解に資するよう努めた。</p> <p>授業アンケートを見てもその意図はある程度伝わったようで、多くの受講生が、「授業において学生が質問や意見を述べることを奨励していた」という項目に高評価をつけてくれていた。アンケートの自由記述欄でも、頻繁に受講生に質問して意見を求める授業手法を評価してくれた学生が多く見られた。</p>				
今後の対応	<p>法や法学は扱うテーマによっては「とっつきにくい」部分があるのも事実であり、授業アンケートでも、テーマによってはコメントや説明が分かり辛い部分がある、という意見もあった。</p> <p>全般的傾向として、抽象性や客観性の高いテーマを苦手とする学生が散見される。理解しやすい説明や話し方を工夫するとともに、更に興味を持って学んでもらえるテーマを今後も発掘していきたい。</p> <p>また、社会への興味関心の度合いは学生の間でもかなりの個人差があり、どうしても食いつきの良いテーマと悪いテーマが出てきてしまう。法が扱う問題は極めて多岐にわたり、効果的な学びを促せるようなユニークなトピックもまだまだ存在すると思うので、特に、人文・社会科学と自然科学が交錯するような、現代のかつ学際的なテーマを中心に新規開拓していきたい。</p>				

	<p>また、法に関係する科目として、4年次配当科目「医療関係法規」があり、来年度から講義がスタートする。そのため、「人や社会への理解を深める」という目的に加え、今後は「専門科目への架橋」という役割についても少し意識し、授業で扱うテーマを考えてみたい。その一環として来年度は、公衆衛生と法に関するテーマを扱う予定である。</p>
--	---

科目名	海外保健福祉事情Ⅰ (講義)	学年	2 学年	期	前期 後期(集中講義)
科目責任者	石橋英恵	科目担当者	濱本邦洋、下田武良、徳江武、富安聡、福永陽平、坂井崇亮、有家尚志、岡田理恵子、朴珍相、韓侑熙、劉振、下井俊典、新川寿子、後藤純信		
自己点検・評価	<p>この科目は、海外保健福祉事情Ⅱ(実習)の事前準備と位置づけ、国際協力・国際保健・旅行医学・異文化理解の基本を学ぶ科目である。到達目標は、海外の文化・社会に基づく多様性を理解し、国際協力の意義と海外渡航に関する危機管理についての理解を深めることである。</p> <p>授業では、各トピックに精通した講師によるオムニバス形式で行っている。特に、本学の建学の理念を踏まえ、途上国支援の実績・国際的な医療協力の枠組み・事例を紹介しその意義を強調した。JICA 専門家や協力隊員経験者を講師として招聘し、現地での事例紹介にとどまらず、海外での活動を見据えたキャリアプランにも触れ、学生が将来を具体的にイメージし、関心が持てるよう試みた。</p> <p>各授業後にはリフレクションシート(Google フォーム:授業理解度・ココロに刺さった一言・感想/疑問)を提出してもらっている。翌週の授業開始直後に、有意義な感想や疑問点を共有すると同時に、講師側の回答やコメントをフィードバックすることで学生の能動的な参加と授業双方向性の確保に努めた。</p> <p>リフレクションシートの記載からは授業への積極的な取り組みが伺える。授業理解度は「よく理解できた」が最も多く、ついで「まあよく理解できた」である。出席率も良好で、最終評価の平均点も 88 点前後だった。</p> <p>全学科必修科目であるため履修学生が多く、感染対策上の必要から 2 つの大教室を遠隔システムで接続し授業を実施した。対面授業を隔</p>				

	週で交互に実施し、各教室には補助教員を2名配置することで、学習効果に差が出ないように一定の配慮を行った。なお、教室後方に座る学生達から音響やｽﾗｲﾄﾞが見にくい等指摘があった際には、補助教員より発信教室へ連絡が入る体制とした。多くの学生達が興味を持って授業に参加してもらっていたと考える。一方で、受信側教室では学生の集中力が持続しない場合もあったと考える。
今後の対応	クラスサイズからどうしても教室を2つに分ける必要があり、受信側教室における臨場感の欠如、学生の集中力低下は否めない。よって、事前に受信教室を担当する教員と打合せ等を行い、学生の集中力を維持し、学習効果につながる対策を検討したい。海外保健福祉事情Ⅱ(実習)で海外渡航を見込む本科目は、新型コロナウイルス感染状況の影響を最も強く受ける授業の一つであった。各国の感染防止対策の取り組みやその結果と展望に触れ、日本の現状と比較する等、講義内容により時事性を盛り込み、学生の主体的な興味や関心を引き出す試みも検討したい。次年度から海外渡航が再開する予定である。学生達にとって、次に続く海外保健福祉事情Ⅱ(実習)が成功裏に終わるよう努力したい。

科目名	海外保健福祉事情Ⅱ (実習)	学年	2 学年	期	前期 後期(集中講義)
科目責任者	石橋英恵	科目担当者	濱本邦洋, 下田武良, 徳江武, 富安聡, 福永陽平, 坂井崇亮, 有家尚志, 岡田理恵子, 朴珍相, 韓侁熙, 劉振		
自己点検・評価	<p>2021年度の海外研修も中止となったため、学生達はグループワークを通して研修予定だった地域の歴史・文化・政治経済を背景とした医療福祉と課題について、調査学習と発表を行った。また、代替措置として、提携する協定先の協力を仰ぎ、オンラインプログラムを実施した。到達目標は、研修予定だった地域の文化・歴史・地理、医療福祉事情の概要を説明したうえで、日本の医療福祉と比較し、課題と展望を説明ができることとした。</p> <p>研修予定国ごとに5～6名の小グループを編成し、研修引率予定だった教員がそれぞれ3～5グループを担当指導した。グループワークでは、1) 研修国の基本的な情報、2) 文化・歴史・経済・医療福祉の中から選択したテーマについて調べ発表を行った。発表に向け、収集した情報の羅列とならないよう、段階的に考察を深める方法を具体的に</p>				

	<p>例示した。また、進捗にばらつきがでないよう、各週の到達目標を明示し達成度を報告してもらおうなど。入念にタスク管理を行った。さらに、オンラインプログラムでは、ライブ接続して現地教員による講義を受講し現地学生と交流を行うものと、事前に録画された講義動画を視聴するものの2つを提供した。</p> <p>学生達の最終評価の平均点は82点前後であり、各グループワークの進捗に遅れも無く学生達は積極的にワークに取り組んだと考える。各グループは他学科・他学部の学生との混成であり、授業時間外での活動調整が困難だったと思われる。しかし、授業時間はもとより授業外でもwebで集まる機会を設けるなど時間を上手く使い、積極的に課題に取り組んでもらえたと考える。また、オンラインプログラムへのリフレクションからは、「海外研修が中止となったことは残念だが、シンガポールの学生と同じ講義を受け、英語でディスカッションできたことは有意義だった」、「韓国インジェ大学薬学部の講義動画は大変興味深かった。教育制度や法律における薬剤師の日韓の違いについて理解できた」といった声が聞かれた。これらの内容から、中止となった海外研修の代替措置として一定の意義はあったと考える。</p>
今後の対応	<p>次年度は海外研修が再開される予定である。研修に関する準備学習に加え、スムーズな出入国と感染症対策への入念な準備も行いたい。一方、学生の中には諸事情により海外渡航が困難な学生も出てくると思われる。そういった学生達に対し海外研修の代替措置として、オンラインプログラムは有効であると考えますが、学生が選択したすべての渡航先からオンラインプログラムが実施されない場合もある。今年度提供したオンラインプログラムでは、学生が選択したすべての渡航先で実施することができなかった。選択した渡航先でオンラインプログラムが実施されない場合は他国のプログラムへの参加を促したが、グループワークとオンラインプログラムで国が異なる学生も少数ながら見られた。自分が選択した渡航先についてより深く知ることを期待する学生にとってオンラインプログラムを提供していただける研修先の拡大と、一層の質の向上の検討が必要と思われる。</p>

(3) 総合教育科目 自然・情報系

科目名	統計学	学年	1 学年	期	後期
科目責任者	安本誠一	科目担当者	安本誠一		
自己点検・評価	<p>医療分野で利用する統計学手法の多くはコンピュータ用アプリケーションソフトで求められている。しかし、その解析結果を解釈するのは人であるから、統計学に対する正しい知識が必要となる。そこで、その基本となる統計学の原理と解析結果に対する解釈の考え方を講義する。具体的には、統計処理とはどういうものか、統計処理がなぜ必要なのか、そして記述統計、推測統計（推定・検定）の原理と解釈である。</p> <p>昨年度から対面講義が再開され、昨年同様に講義中に学生への対応もでき、統計学の知識がある程度、伝えられたのではないかと考える。しかしながら、昨年度と同レベルの定期試験内容での出題であったが合格率が低い結果となった。</p>				
今後の対応	<p>昨年同様、対面講義に戻ったのであるが、昨年度より定期試験不合格者の割合が増えて 1 割以上存在する。簡単な小数計算や分数計算ミスで点数を落とす学生が多数存在し、本学薬学系学生の学力低下が懸念される。基本的な計算能力の訓練が必要である。</p> <p>講義に対する学生からの授業アンケートを踏まえて、不合格者を限りなく 0 にできるような方策と次年度の講義の在り方を検討していきたいと考えている。</p>				

科目名	数学	学年	1 学年	期	前期
科目責任者	安本誠一	科目担当者	安本誠一		
自己点検・評価	<p>医療人として実践的な能力を持つためには、教養教育、専門教育を通じた知識の習得が必要で、医療現場では「数学」的な知識や考え方が非常に重要な要素になっている。例えば、物質のエネルギーや反応速度、濃度計算を計算するのに、運動方程式や微分積分、ベクトルなどを、また、物質の溶解、分散や安定性、更には体内動態を解析する際に、指数・対数関数や微分積分の知識が必要不可欠となる。データ解析に用いられる統計学的手法も含め、「数学」は医療現場のさまざまな専門科目の基礎として位置付けられている。本講義では、このような医療現場の現実的問題において、数学が活かされている具体的事例を考えながら数学的思考を身に付けていくことを目的とした。</p> <p>高校数学の復習から、微分方程式、重積分や線形代数入門（行列・</p>				

	行列式、固有値・固有ベクトル、行列の対角化) までの大学教養の数学を充実させた講義を行った。
今後の対応	<p>コロナ過ではあるが、本年度も対面講義を実施することが出来た。学生との対面での質問もあり、全体の様子を感じながら講義を展開できた。来年度も学生との Q&A を重視した講義を心がけたいと考えている。コロナ過での諸条件による zoom 参加の学生が若干いたが、その学生へのフォローが来年度の課題である。</p> <p>教科書は「薬学生のための基礎シリーズ2 微分積分〔改訂版〕(培風館)」を使用しているが、やはり、内容が難しいということである。しかしながら、大学生ならば、この程度の数学ぐらいは学習して、数学的知識の理解を深めてほしいものである。インパクトがあったようなので、来年度も同様の教科書での講義を行う予定である。</p>

科目名	化学	学年	1学年	期	前期
科目責任者	坂井崇亮	科目担当者	坂井崇亮		
自己点検・評価	<p>これまでの年度においては COVID-19の影響を受け Web 会議サービス (Zoom) を用いた遠隔講義形式と対面講義を組み合わせで行っていたが、本年度においては、全ての講義を対面にて実施した。一部の自宅待機を要する学生には遠隔講義も併用して行った。</p> <p>本講義前半では、SI単位や有効数字など化学計算能力の習得、原子や化学結合の性質など、高校化学の復習・延長からなる基本的知識の習得を目標に行った。次に、有機化学への導入として、軌道の概念、正しい構造式の書き方、反応式における矢印の使い方、共鳴等の講義を行った。講義資料はGoogleクラスルーム上で授業開始前に閲覧可能とし、必要な者は各自印刷とした。課題はGoogleフォームと記述物の提出にて行った。一人一人の提出課題に対し採点・返却を行い、理解の補助に努めた。また、疑問点がある際には積極的に質問へ来るように促し、理解の促進を行った。</p> <p>昨年度に一般化学系の平易な教科書を追加し、定期試験の平均点が10ポイント上がったものの、再履修者の総数に変動は見られなかった。そこで本年度では成績の低迷している学生層の底上げを図る目的で、高校の化学内容を復習するリメディアル教育を実施した。その結果、再履修者の割合はわずかながら減少した。</p>				
今後の対応	<p>リメディアル教育は次年度も引き続き実施し、成績下位者の実力底上げを図る。また、次年度では成績評価の方法を定期試験95%から100%へと変更を行う予定である。この影響による学生の習熟度への</p>				

影響を注視し、翌々年度の参考としたい。

科目名	生物学	学年	1 学年	期	前期
科目責任者	多田納豊	科目担当者	多田納豊		
自己点検・評価	<p>講義では、高校において未学習の者や苦手意識を持ってしまった学生に、生物の面白さを感じてもらえるようにし、その一方で、高校で既に学習した学生が無駄な時間を過ごしていると感じない様、要所に原理・発展・応用などの少し踏み込んだ内容を講義し、既学習者にとっても初めて見聞きする内容を織り交ぜることを心掛けた。特に、例年の授業アンケートで散見される「資料が見にくい」という意見がほとんどなく、反対に「見やすい」という意見が増えてきた様に感じる。図の配置や説明文のブラッシュアップを継続して行っており、また、例年通りアニメーションなどを利用し直感的に理解しやすい講義資料の作成を心掛けており、これらの取り組みが功を奏していると考えられる。</p> <p>また、講義内容の重要ポイントの理解、知識の定着や自主学習の方向性を確認してもらうことを目的として、Googleフォームを活用し、前回の講義に関する確認問題を講義開始時に出題し、学生の自主学習に役立ててもらった。この際に、学生の理解の向上を目的として、正答率を基に適宜追加説明・解説を行った。また理解度を自主的に高めってもらうことを目的として、全ての講義を録画し、いつでも視聴し復習できるようにクラスルームにアップした。</p> <p>疑問があれば質問に来るように講義毎に何度も伝えているが、積極的に質問に来る学生は昨年度に比べて増えている印象を持った。動画のアップは復習にとっても役に立ったと好評であった。</p>				
今後の対応	<p>今後もアニメーションなどを利用し直感的に理解しやすい講義資料の作成を心掛けるとともに、内容にストーリー性を持たせる講義を心掛ける。また、既存の動画の教材としての利用は、理解の助けになったという意見があり、引き続き利用する。授業動画のアップは好評な意見があったため、来年度も同様に行う予定である。</p> <p>今年度は、学力が低い学生（入学時のプレイスメントテストの「生物」において点数が低かった者）に向けてリメディアル教育を実施した。新入生 25 名の対象者のうち、22 名は生物学を合格しており、一定の効果があるものと考えられる。今後もリメディアル教育の実施を続け、より効果的なものになる様に研鑽する。</p> <p>昨年度に講義範囲における重要なポイントの理解を深めることを</p>				

	<p>目的として、問題作成のグループワークイベントを実施したが、今年度は日程調整の関係上実施が不可能であった。生物を楽しみながら理解を深めてもらう様、可能な限り、グループワークイベントを実施したい。</p>
--	---

科目名	生物学（再履修）	学年	2 学年	期	前期
科目責任者	多田納豊	科目担当者	多田納豊		
自己点検・評価	<p>本科目の該当学生は、既に1年次に同様の内容の授業を受講した学生である。今年度は、2年次科目と重ならない時間割となった（1年生Bクラスの時間割に参加が可能であった）ため、1年次「生物学」の授業を聴講することとした。そして理解度を自主的に高めてもらうことを目的として、講義の動画をクラスルームにアップロードし、いつでも何度でも復習ができる環境を作った。</p> <p>また、講義内容の重要ポイントの理解、知識の定着や自主学習の方向性を確認してもらうことを目的として、Googleフォームを活用し、前回の講義に関する確認問題を講義開始時に出題し、学生の自主学習に役立ててもらった。この際に、学生の理解の向上を目的として、正答率を基に適宜追加説明・解説を行った。</p> <p>質問に来るように常に伝えた。しかしながら再履修科目履修者で質問に来る学生はいなかった。</p>				
今後の対応	<p>例年と同様に、アニメーションなどを利用し直感的に理解しやすい講義資料の作成を心掛けることについて今後も続ける。また、既存の動画の教材としての利用は、理解の助けになったという意見があり、引き続き利用する。今後も引き続き内容にストーリー性を持たせる講義を引き続き心がける。また、確認問題の出題とその解説を適宜行う。</p> <p>授業動画のアップは好評な意見があったため、来年度も同様に行う予定である。また、可能な限り再履修科目受講者も生物を楽しみながら理解を深めてもらえる様、希望者が参加できる日時でのグループワークイベントの実施を目指す。</p>				

科目名	情報処理	学年	1 学年	期	前期
科目責任者	吉武康之	科目担当者	吉武康之		
自己点検・評価	<p>授業は講義及び演習形式で行った。演習の初めに講義資料を電子ファイルと紙媒体で提供し、資料を前面のスクリーンで掲示した。演習中はできる限り学生自身で問題解決をするよう指導した。演習の進捗</p>				

	<p>状況は学生の PC 画面を教員用 PC で確認し、質問には個別対応した。複数の学生が質問した内容に関しては、その学生の画面をスクリーンへ映し、全員に対して解説を行った。資料や課題のやりとりにはファイル共有システム利用した。その結果、学生一人一人との対話時間が多く確保可能となり、結果的に理解度が高まった。演習の終わりに PC やネットワークを利用して自ら考える課題を用意し、オンラインでの添削・評価を行った。授業時間外の学習に際して、パソコンを持っていない、ネットワークに制限がある等の理由で自宅での復習が十分できない学生が少なからずいた。また、パソコンはあってもマイクロソフトオフィスを導入していないため、演習室以外での復習が十分にできないケースも生じた。</p>
今後の対応	<p>近年の学生は情報伝達ツールとして携帯電話や電子タブレットの利用には長けているが、パソコンを使った操作には不慣れなものもある。学生のパソコン購入は必須であると考え。よって入学時に「大学推奨パソコン」の紹介やマイクロソフトオフィスのアカデミックライセンスの提供を行うべきであると考え。</p>

科目名	生命倫理	学年	1学年	期	後期
科目責任者	今井竜也	科目担当者	今井竜也		
自己点検・評価	<p>例年通り、「生命倫理の枠組みと用いられる基本的な方法論」について論じた後、「人間の生老病死を巡る課題」、「医療テクノロジーの社会適用における課題」を考えるとという三部構成で、1コマ1テーマで授業を展開した。</p> <p>毎時間、ランダムに受講生を指名して口頭で質問に答えてもらい、かつ受講生全員に、必ずミニツッパーパーに同じ質問への回答を記載してもらった。次週の授業では、それらのコメントや、別途Google Form経由で出題した宿題課題の回答などを紹介し、解説しながら復習をするという方法で前回授業のフィードバックを行うとともに、受講生が講義を聞いてどのようなことを考え、かつ疑問に思ったのか、情報を共有することで更なる内容理解に役立てられるよう工夫した。</p> <p>また、今年度からは基本的に薬学科の1年生が対象となるため、薬に関するテーマとして、従来から扱ってきた薬害に加え、創薬をめぐる問題も取り扱った。創薬をめぐる倫理、法制度は4年次の「医療関係法規」の方でも詳しく話がされる予定であるが、その前段階として基本的な枠組みを話しておくことで、専門科目への架橋となることが期待される。</p>				

	<p>授業アンケートでは、質疑応答を軸にした双方向性の確保については、高評価を得ることが出来た。また、質問課題、宿題課題、ミニツツペーパーの記載等、意見や考えを述べる機会を多く取ったことについても、好評であった。</p>
今後の対応	<p>本科目は医療従事者のプロフェッショナル教育、ヒューマニズム教育の中核を為す科目であるため、受講者が授業を通じて十分にその理念を体得できるよう、今後も授業内容や手法を工夫していきたい。</p> <p>授業の双方向性についてはこれまでも意識してきたが、今後も十分に確保できるよう、引き続いて努力していく。</p> <p>授業アンケートでは、授業の難易度について「やや難しい」と回答した学生が今年は20%弱おり、「適切」と答えた学生も開講以来はじめて70%を切るなど、授業が難しいと感じた学生が例年に比べて多かったようである。本授業では生命倫理の問題として扱われる基本テーマについては、だいたい網羅しているが、トピックによっては確かに理解がやや難しいものもある。各トピックの難易度の検証と、理解度を高めるためのブラッシュアップが必要である。</p> <p>また、薬害、創薬、研究倫理というテーマは、薬剤師として将来仕事をする上でも一定の知識と見識を持つべき重要テーマであり、先に挙げた4年次配当科目「医療関係法規」とも密接な関わりがある。そのため、主体的に学ぶことで理解を深め、先々の学習にも資するものとなるよう心がけたい。</p>

(4) 総合教育科目 総合系

科目名	大学入門講座I (基礎)	学年	1学年	期	前期
科目責任者	武田弘志	科目担当者	濱本邦洋、義田俊之、文室知之、 外須美夫、坂井崇亮、澤井円香		
自己点検・評価	<p>大学入門講座I(基礎)は新入生を対象に1)本学建学の精神と教育理念・ポリシー 2)学習地域の特性の理解と社会的貢献3)大学の意義と自主的な学びの必要性とその方略 4)大学生活上の注意点 5)社会人としてのマナーや医療人としてのコミュニケーション能力の向上 6)関連医療職種の理解とチーム医療の必要性などを学ぶことにより、医療系大学生としての基礎的能力を高め、より良い医療人・社会人として成長するために必要な素養を涵養するための科目である。</p> <p>教育目標の到達の為、理事長・学長・市長をはじめとした、それぞれ</p>				

	<p>れ該当する背景を有する経験豊かな複数の講師にオムニバス形式で講義して頂き、教育のポリシーや地域への理解、医療人としての知識を深める機会を設けた。講義形式は全キャンパス共通のVOD講義と対面講義の形式にて行った。新型コロナウイルスへの対応として、自宅待機者にはZoomを用いた遠隔講義にて対応を行った。</p> <p>学習内容の確認としては、講義内容に関するレポート評価を行い、学習の到達度を確認した。</p> <p>講義アンケート結果より、「勉強の仕方」「レポートの書き方」「大学生活や社会でのスキル」「医療人の心構え」「地域の特色」を学習できた旨のコメントが多くみられた。一方、オムニバス講義の関係上、疑問解消が困難であるとの意見も見られた。</p>
今後の対応	<p>本科目は本年度より福岡薬学部を除き全キャンパス共通の「大学入門講座-医療人・社会人として成長するために-」へ変更が行われたばかりである。したがって並行して行われている本科目も新たなシラバスに連動して一部内容が変更となる可能性がある。</p> <p>また、アンケートの結果も踏まえ、学生の疑問解消の向上の為、次年度のシラバスには教員への連絡方法を記載する予定である。</p>

(5) 専門教育科目 専門基礎/学部共通

科目名	臨床心理学概論	学年	1 学年	期	後期
科目責任者	義田俊之	科目担当者	義田俊之		
自己点検・評価	<p>臨床心理学は、心理的な障害を抱えた人を援助するに当たり、①精神障害や精神症状、長所を把握するアセスメント法と、②クライアントなどに働きかけて変化をもたらす介入技法とを持っている。これらの中から、受講者が将来、心理職と連携する上で、また、患者理解および対応に役立つものを、なるべく具体的に学ぶことを目的とした。</p> <p>①については、差し支えない範囲で、質問紙や、知能検査や投影法検査を模した検査課題を示しつつ解説することで、どのようなことが行われ、何が分かるのか、それを援助にどのように活用することができるのかを伝えた。②については、個人を対象としたもの、集団を対象としたもの、言語的なもの、非言語的なものなどに分類しながら、できる限り、事例や症例（You Tubeで見られるセラピーの様子も含む）を交えつつ解説を行った。認知行動療法では、前期の「心理学」における「学習」の要素を織り込んで解説した。また、心理療法の効果研究の手法として、薬効の検証と同じRCTが用いられていることを解説した。集団療法や家族療法、非言語的な支援法の存在を初めて知</p>				

	<p>ったという感想が多くあがった。</p> <p>講義手法としては、教科書を取り込みパワーポイントとして投影し、重要箇所の下線を引いたり、図表に書き込みを施したりし、教科書を活用した。また、講義後に5問前後の確認テストを出題して、即時の復習を促した。前年度、成績不良者は講義後に実施する確認テストの提出状況が芳しくない者が多かったことから、確認テストの提出を促した。</p>
今後の対応	<p>基本的に現在の方向性を維持する。(模擬)セラピーの様子を伝える動画の種類を増やす。なお、授業評価アンケートの、講義の難易度の項目については、「簡単であった」という評価が多かった。また、定期試験の問題を、項目反応理論を用いて分析したところ、「臨床心理学概論」の定期試験には、易しく、低学力群の能力推定に適した項目が多かった。「臨床心理学概論」は、講義内容も、定期試験も、平易なものであったと言える。受講者の理解力には一定の幅があることから、理解力が覚束ない層を取りこぼさない点では意味があったと考えるが、今後は、講義内容に関しては、やや高度な内容を増やす。また、定期試験については、高困難度項目を増やし、高学力群の能力推定も行えるようにする。</p>

科目名	関連職種連携論	学年	2 学年	期	後期
科目責任者	下井俊典	科目担当者	古川香 (高木病院)、西村信弘、森山良太		
自己点検・評価	<p><u>概要</u></p> <p>保健医療福祉に携わる専門職として、チーム医療・チームケアの実践である IPC (Interprofessional Collaborative) に必要となるコンピテンシーを学修する。</p> <p><u>到達目標 (SBOs)</u></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. グループ、チームと集合との違いを説明することができる。 2. リーダーシップ、フォロワーシップを含むメンバーシップについて説明することができる。 3. チーム医療・チームケアの実践例をチーム、メンバーシップの基礎理論で説明することができる。 <p><u>重点的に取り組んだ内容</u></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 大川キャンパスにおける IPE 「関連職種連携教育」については、2019 年度よりカリキュラム・デザインの再設計に取り組み、当該科目「関連職種連携論」については、昨 2021 年度より、学習目標に合 				

	<p>わけてコース・デザインを再設計した（別添シラバス参照）。</p> <p>2. 特に SBOs1・2 項については、経験学習理論に基づいて、学生のこれまでの経験を省察しながら、授業で新しい知識および考え方を教授・補充し、展開するデザインとした。しかし、2021 年度は受講者数 343 名、採点対象者数 338 名に対して、合格者 129 名、再試対象者（レポート再提出）209 名（61.8%）となってしまった（うちレポート再提出にて合格は 196 名）。理由として、学習者側の原因として、途中退席などによる受講の不十分性などが考えられる一方で、教育者側においても、履修対象の 2 年生のレディネスを考慮すれば、授業内容の難易度が高い部分も少なからずあった・レポート課題の提示内容の不十分性などもあったのではないかと考えた。</p> <p><u>取り入れた工夫</u></p> <p>1. 専門職間実践（interprofessional collaborative; IPC）に必要な社会心理学的コンテンツを、より平易な内容に変更した。</p> <p>2. より回答しやすくなるよう、成績評価となるレポート課題の設問を段階的に変更した。</p> <p><u>評価：学生による授業評価の結果</u></p> <p>授業アンケート結果においては、11 項目に関して「そう思う」というポジティブな評価が 67.3%（前年度 67.1%）、「総合的にこの講義は満足だった」に対する「そう思う」の回答が 59.4%（前年度 58.9%）となり、前 2021 年度に比べて大きな変化は認められなかった。特に授業の難易度については、「やや難しい」「難しい」がそれぞれ 23.5%、2.7%となり、いずれも昨年度の 12.0%、1.5%よりも増加した。</p> <p><u>採点結果</u></p> <p>本年度は受講者数 349 名、採点対象者数 343 名に対して、合格者 331 名、再試対象者（レポート再提出）12 名（3.4%）となった（うちレポート再提出にて合格は全 12 名）。</p>
今後の対応	<p>1. ルーブリックの事前提示</p> <p>1) 昨年度に引き続き、本年度はコンテンツを変更したため、採点しながら新しいルーブリックを作成せざるを得なかった。</p> <p>2) 来年度が本年度と同様のコース・デザイン、レポート課題とする計画であれば、ルーブリックを事前に提示できる予定である。</p> <p>2. 授業コンテンツの難易度について、再検討する必要があると考える。</p>

科目名	関連職種連携ワーク	学年	3 学年	期	前期
科目責任者	西村 信弘	科目担当者	永井良治、石橋英恵、長谷麻由、中原雅美、下田武良、松田憲亮、佐藤謙一、森山良太、高野吉朗、原麻理子、石川幸伸、富安聡、鈴木あかり、安田聖子、文室知之、船島由美子、澁田樹、大内田博文、濱地望、大古場良太、矢口貴博、松野豊、中西恵利菜、福永陽平、木下栄子、宗像千恵、坂井崇亮、有家尚志、松下航、岡田理恵子、和野紗央里、中矢正、朴珍相、貝塚拓、磯田紀之、柴田 健太郎、松尾朗、小荒田秀一、一木裕子、劉振、福田光良、下井俊典、新川寿子		
自己点検・評価	<p>関連職種連携ワークは、保健医療福祉に携わる職種が連携して、対象者中心の援助を実践できるようになるために、各職種の専門性と関連性を学び、チーム医療・チームケアの理念と方法を理解し、関連職種の連携を通じた課題解決の技能を習得する講義である。医療系の総合大学である当学において大きな特徴となる講義の一つと位置付けられている。大川キャンパスにおいて関連職種連携ワークに薬学科の学生が参加するのは今年度が初めてであったため、事前準備の際に薬学科教員が主となり模擬症例の見直しを行った。</p> <p>今年度は理学療法学科、作業療法学科、言語聴覚学科、医学検査学科、薬学科の 5 学科で合計 327 名の学生が参加し、学科横断型の 25 班を編成した。薬学科からは 9 名の教員がチューターを担当した。講義の構成は初回オリエンテーション及び3回のグループワークを経て最終発表会という日程であった。各班は準備された 5 つの模擬症例から 1 つを指定され、その模擬症例について各職種が実施できる介入を検討するグループワークを行った。最終発表会は学生達によって審査が行われ、上位の班が表彰された。</p> <p>本講義を通じて学生は各職種の理解を深めることができたと考える。また、他学科の学生に自分の学科を説明する過程を経て、薬剤師に対する理解も深まったようであった。</p>				

	<p>反省点として、薬学科・医学検査学科の2学科の学生が模擬症例に介入できる余地が少なく、グループワークの際に手持ち無沙汰になりがちだった点がある。模擬症例にそれら2学科が介入できる事項を増やすべきだという意見が教員よりあがった。</p>
今後の対応	<p>次年度は医学検査学科・薬学科の教員によって模擬症例の一部修正が行われた。これを用いてグループワークを行い、学生の介入度の変化を確認しつつ模擬症例の調整を継続していく予定である。</p> <p>また大川キャンパスに2023年度より新たに看護学科が新設されたことから、2025年度には本講義に看護学科が新たにメンバーに加わることを想定して変更を加えていく必要があると考えている。</p>

科目名	公衆衛生学	学年	3学年	期	後期
科目責任者	石田卓巳	科目担当者	石田卓巳, 朴珍相		
自己点検・評価	<p>本講義では、人々の健康増進、公衆衛生の向上に貢献できるようになるため、現代社会における疾病とその予防に関する基本的知識の修得を目指し授業を行った。健康と疾病の概念とその変遷、保健統計、疫学、医療・介護保険制度、感染症とその予防、生活習慣病とその予防、母子保健、労働衛生など広範囲に及ぶ内容をカバーしている。本講義では、実際の保健統計を用いた解析能力や疫学的思考の習得に加え、感染症予防や生活習慣病予防の実態、医療・介護保険や労働衛生の現状などを理解し、かつ説明できることを到達目標とした。授業は対面で15回開講され、指定教科書および参考書の解説と理解を主軸に進行した。授業の始まりに前回の授業で重要とされる点について口頭で質問を行うことで、学生の理解度を確認しながら進めた。また、公衆衛生学が現在の社会情勢から得た知識を基とした発展的学問であるとの観点から、現状の社会問題との知見の連携を想起させる授業説明を行い、自らの力で知識を集約し発展させる意識付けを行った。定期試験は、教科書に書かれていることを基に、国家試験にも対応できるような問題形式とした。さらに、再試験については、問題形式は変えず難易度を下げたものを準備した。これらの結果を見る限り、学生における学習内容の理解度は一定のレベルに達しているものの、問題そのものの読解力に個人差が見られるようであった。このような学生には、更なる学習時間の確保が必要であると感じた。</p>				
今後の対応	<p>衛生化学は、薬学における専門科目の中でも様々な分野の知識を必要とする発展型の学問である。中でも公衆衛生学は、現状の社会</p>				

	<p>情勢を背景としたテーマとのつながりが強く、これらの知識の有機的な繋がり理解が必須な科目である。これが不十分であることが、学生の理解度のばらつきを産み出している原因の一つであると考察する。これを改善するため、来年度は、授業で触れる様々なトピックに対して、社会問題と繋がりを想起させるような授業の実施を目指す。また、現状のスケジュールで中間テスト等の補助的な確認を行うことは困難であるため、授業での重点項目の解説を丁寧に行うと共に、授業開始時の口頭試問を充実させることが望ましいと考えている。</p>
--	---

(6) 専門教育科目 専門基礎

科目名	薬学計算	学年	2 学年	前期	前期
科目責任者	宗像達夫	科目担当者	多田納豊、吉武康之、貝塚拓、中矢正、宗像千恵、柴田健太郎、福田光良		
自己点検・評価	<p>薬学計算は、薬学で学ぶ者にとって必須な基本的な計算の復習を目的とする。具体的には、臨床上での計算の重要性に始まり、分数計算、指数対数、単位変換、濃度計算、pH計算、緩衝液について演習を行った。先の内容は大田原の薬学部でも行っていたが、福岡薬学部では、この内容に加えて薬剤師国家試験で近年多く出題されるグラフと統計、ミカエリス-メンテン式を追加した。演習の実施に当たっては、クラス編成試験の成績により、A~Fの6クラスへ分割した。実施自体に問題は無く、学生からの評価も高いことから、本講義は良好に進行したものとする。昨年度の問題点として、15回目の講義資料の有無と実力別クラスに対する実力の不一致があった。15回目講義資料については各クラスで必ず講義資料を作ることとしたため、問題点については対応済みである。また、実力別クラスについては、昨年度の再試験者リストと問題の正答率を考慮した分析を行ったが、特に有用なデータが得られなかった事から、昨年踏襲でクラス分けを行ったが、特に問題は見当たらない。しかしながら、復習に位置づけられる科目でありながら、再試験対象者が受講者の18%いることが問題点としてあげられる。</p>				
今後の対応	<p>上記の問題点に対しては、再試験対象者の平均点 50 点であることから、講義以外での復習を怠ったのが原因だと考えられる。これに対しては課題を課すことも検討が必要だと考えられる。一方、学生の意見からは、"薬学の計算ができるようになった"や"基礎を理解で</p>				

	<p>きました"との意見をもらっていることから、来年度は本年度踏襲で様子を見ることとしたい。さらに、薬学に関する計算は2年次に必要なのではなく、1年次より必要な内容も多く含まれていることから、長期的には、1年生後期での展開を考えたい。</p>
--	---

科目名	病原微生物学	学年	3 学年	期	前期
科目責任者	多田納豊	科目担当者	多田納豊		
自己点検・評価	<p>本科目は、微生物の分類、構造、生活環などに関する基本的事項、および、ヒトと微生物の関わりおよび病原微生物に関する基本的事項を修得する事を目的とする科目である。当科目は、病原体の種類やそれによって引き起こされる感染症について多くの部分は暗記が必要な科目ではあるが、当科目を実施する上での一つの目標として、学生に、暗記のみに偏ることなく、病原体の性質を構造や産生する毒素などから論理的に「理解」できる部分をしっかりと「理解」できるようになってもらう、ということを目指している。そこで、「何故その病原体がその様な感染症の原因となるのか」、「何故その病原体がその様な感染経路を経て感染するのか」など、理屈の説明を丁寧に行った。また、暗記が必要な部分についても、ただ文字の羅列・名称として記憶するのではなく、構造や病態（臨床像）を画像で示し、映像とセットでの記憶の定着を目指し、画像を必ずセットで示すように心がけた。この点については授業評価アンケートにおいて「授業が分かりやすかった」という意見が複数あり、取り組みが功を奏していると考えられる。</p> <p>今年度は、初めての開講であり、授業のペース配分に苦労した。特に、覚えるべき内容を「理解するために丁寧に説明」とすると、計15回の講義回数に収める事が非常に難しく、早口で行わざるを得ず、また一度の情報量が多い授業となってしまった。そのため、補助的に、講義を毎回録画し、動画を復習のために視聴できるようにした（コロナ禍を経験して得られたシステムを活用した）。学生に動画の提供は好評であり、復習に寄与できたと考えられる。しかし、どうしても覚えなれないといけな情報量が多い科目であるため、「理解」をせずに「ただ暗記をするのみ」の学生が多くいる様に思われる。また、復習時間が足りていない学生も多く、学生が取り組む姿勢をどのような方法で改善できるのかが今後の課題である。</p>				
今後の対応	<p>本年度は、講義内容の重要ポイントの理解、知識の定着や自主学習の方向性を確認してもらうことを目的として、他の担当科目と同</p>				

	<p>様に、Google フォームを活用し、前回の講義に関する確認問題を講義開始時に出題し、また、学生の理解の向上を目的として、タイムリーに見ることが出来る正答率を基に適宜追加説明・解説を行った。この取り組みは学生からも好評であり、学生の自主学習の一助となっていると考えられるため、来年度もこの取り組みは継続する。また、講義の動画を復習のツールとして活用する取り組みも、来年度も実施する。</p> <p>暗記量が多い科目であることと、その記憶の定着のためにも「理解」に基づく暗記の仕方を、「理解する点」をより明示しながら講義をする必要があると考えた。論理的に捉える部分は、それが分かる資料の作り方を試みる予定である。</p>
--	--

科目名	薬学演習 I(物理系等)	学年	2 学年	期	後期
科目責任者	中矢正	科目担当者	阿部義人、多田納豊、塚本宏樹、宗像達夫、吉武康之、坂井崇亮、柴田健太郎		
自己点検・評価	<p>本講義では、2 年前期までに学習した内容の復習を目的とし、演習形式による授業を行った。物理系、化学系、生物系でそれぞれ 5 回ずつ担当し、計 15 回の授業を行った。昨年度行った各回での小テストの有効性に疑問があったことから、本年度は小テストを取りやめ、定期試験 100%による評価を行った。演習問題及びその説明の授業回が増えたことにより、内容の充実度は高くなったと思われる。しかしながら、本試験の平均得点率が 6 割をやや超えた程度であること、及び再試験受験者数が多いことから、昨年度同様に既学習内容が十分に復習できたのか疑問が残る。また、復習科目であるものの学習範囲がやや広いことも問題である可能性が考えられた。実際に学生アンケートでは、「復習することが多すぎる」との意見が認められた。</p>				
今後の対応	<p>本科目は復習が重要な学習ポイントである。その点がまだ伝達しきれていないと考えられることから、授業において強調すると共に、学生自身による既学習内容の復習をより強く促す。また、復習すべき範囲を工夫することで、必要な学習過程をより絞って効率的に習得・定着させる必要があると考えられる。</p>				

科目名	薬学演習Ⅱ(化学系等)	学年	3 学年	期	前期
科目責任者	磯田紀之	科目担当者	阿部義人、猪部学、塚本宏樹、宗像達夫、中矢正、坂井崇亮、柴田健太郎		
自己点検・評価	<p>本講義では、2年後期までに学習した内容の復習を目的とし、演習問題を行い、解説を加える形式で、化学系、生物系、物理系でそれぞれ5回ずつ担当し実施した。各分野において行った演習問題は評価には含まず、定期試験の点数のみで評価を行った。授業評価アンケートより、70%以上の学生がシラバス通りの授業が展開されたと答えていることから、シラバス通りに授業が展開できたと考えられる。一方で、1回の講義内容に分量の差があり、時間内に解説が終わらなかったことも指摘されていることから、取り扱う範囲に再考の余地がある。</p> <p>定期試験は、本試験、再追試験、再再試験を行い、106名中95名が単位を取得できた。一方で、本試験の結果だけで見ると、合格者45人(平均点57.6%)と非常に少なく、本試験問題が適切なレベルに調整できていなかった可能性がある。本演習は、初年度の授業であり実績がないことから、上記理由もあり、再再試験を行い合格者の調整を行った。但し、本講義内容は既に履修済みの科目の復習であるにもかかわらず、本試験の平均得点率が低いことは、既学習内容を十分に復習できたのか疑問が残る結果と言える。</p>				
今後の対応	<p>次年度は、本年度の結果や授業評価アンケートを踏まえ、講義の在り方や習熟度の向上を目指して、効果的な講義の実施のための改善を行う。具体的には、試験の結果から、授業レベルの調整を行うとともに、理解度の低い内容に焦点を絞った講義を行なっていく。また、講義資料には、内容の理解に有効な教科書やページ番号を記載し、学生自身が自己学習を進められるよう修正を行う予定である。</p> <p>定期試験は、再再試験は本年度のみの措置とし、次年度以降は行わない方針とする。</p>				

科目名	薬学演習Ⅲ(生物系等)	学年	3 学年	期	後期
科目責任者	柴田健太郎	科目担当者	阿部義人、多田納豊、塚本宏樹、宗像達夫、貝塚拓、中矢正、磯田紀之、		

			澤井円香
自己点検・評価	<p>本科目は、3年前期までに実施された基礎系薬学授業（化学系・物理系・生物系・衛生系）の復習を目的に実施された。学生諸氏はこれまで、薬学演習ⅠおよびⅡにて同様の形式で授業を受けているが、衛生系は新規科目であった。復習項目は、3年前期までに達成した到達目標の中から選抜し、シラバスの各回で掲示している。</p> <p>オムニバス授業であり総合力を試されるため、毎回の授業出席と演習内容の本質的理解が肝要であり、科目責任者より下記の内容を中心にガイダンスを行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・90分で教授される内容はどれくらいなのか考えてみよう。 ・受講前には必ずシラバスで復習項目を確認すること ・解き方や解答の暗記ではなく、本質的な理解に取り組むこと ・授業中に理解できないことは必ず復習すること ・1回の授業を無駄にしないこと。休んだ場合は必ずフォローすること <p>なお、新型コロナウイルス感染症等罹患に伴う出校停止者に対して、Zoom配信（授業内容をオンラインで中継する措置）も取られた。授業の出席皆勤率は65.7%、皆勤ならびに1回までの欠席は80.0%であり、概ね良好と判断する。</p> <p>また、試験結果をもとに担当教員にてミーティングを実施し、意見交換を行い、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・根本的な理解を促すよう教授すること ・教授する内容のポイントを絞ること ・復習すべきテキストのページ数を明示すること <p>等の意見が出た。</p> <p>薬学演習Ⅰ、ⅡおよびⅢ全教員でのミーティングも実施され、改めて授業の目的や難易度の再確認をした。</p> <p>授業アンケートでは、化学を不得意としている学生数名から、復習時間の十分な確保を目的として授業順を早めてほしい旨要望があった。</p> <p>最後に、復習科目であるにもかかわらず再履修者を輩出した点については、今後の検討課題である。</p>		
今後の対応	<p>ミーティング結果を踏まえ、来年度は各教員で授業内容の見直し（復習する範囲、難易度等）を実施することとした。</p> <p>また、授業アンケート結果から、各分野の授業順に関して、化学が前半になるよう変更することとなった（生物→化学→衛生→物</p>		

	<p>理)。</p> <p>科目責任者としては、下記 2 点を中心に 1 回目のガイダンスを行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・復習の重要性 ・解答を覚えるようなことはせず、本質的な理解を促す。 <p>また、分野の授業が終了するごとに Google Classroom を利用して復習を促すコメントを通知することとする。通知により、出席率向上にも寄与できると考える。</p> <p>再履修生については、授業開始前に、昨年度に何が不足していたのか、まずは自己分析するよう促し、どうすれば総合力を高めることができるのか、Google Classroom で送信し、考えさせる。</p>
--	--

科目名	基礎薬学実習 I(物理)	学年	1 学年	期	後期
科目責任者	宗像達夫	科目担当者	阿部義人、中矢正、磯田紀之、坂井崇亮、		
自己点検・評価	<p>本年度は、物理・衛生系実習室にて物理系3名と化学系2名の教員にて実習を行った。なお化学系2名の教員はA、Bクラスに対し各1名とし、担当教員4人にて実施を行った。担当学生数は全体を4等分とし、1教員あたり11から18人の学生を担当することとした。また本年度は、例年自前で調製を行っていたリンゲル液であったが、医薬品である事を意識させるため、輸液バッグを購入し、実際に学生に提示する形で行った。さらに、レポート評価に対するルーブリックに対する修正、レポートの例示、実験操作の動画の導入などを行った。その結果、予習の不十分な学生と、レポート内容の未充実の学生が多少減ったように感じる。しかしながら、レポート内の考察が、実習講義で述べた内容以上の事が記述されない、課題に対する解答が的外れな事があるといったことは昨年度とあまり変わらない。またレポート提出日に間に合わない学生が見られた。一方で動画教材を取り入れた効果はとてもあり、操作に対する丁寧さは昨年と比べて格段に改善した。今後、以上に対する問題点についての改善が必要であるが、全体としては概ね良好な実習であったと考える。</p>				
今後の対応	<p>レポート内課題に対する誤った解答については、設問に誤った例である注意書きを記入するなど、実習書の内容充実が必要である。また、レポート例の提示は、例示によりレポートのハードルをあげることに繋がっている可能性について考慮しなければならないが、答えを出すには時期尚早であるので数年続けてみる必要がある。そ</p>				

	<p>の他の気がついた点については、来年度に対策・改善を行う。なお、レポートの手書きに対する学生のクレームであるが、こちらについては安易なレポート不正を防ぐとともに知識定着を図る観点から、来年度も変更するつもりはない。</p>
--	---

科目名	基礎薬学実習 II(生物)	学年	1 学年	期	後期
科目責任者	猪部学	科目担当者	太田昭一郎、多田納豊、塚本宏樹、貝塚拓		
自己点検・評価	<p>本実習科目は、1年生の生物系実習科目として、薬学教育モデル・コアカリキュラムの中から、代表的な器官の組織や細胞を顕微鏡で観察できる(C7(1)③)、グラム染色を実施できる(C8(3)⑥)、無菌操作を実施できる(C8(3)⑥)、代表的な細菌または真菌の分離培養、純培養を実施できる(C8(3)⑥)、脂質、糖質、アミノ酸、タンパク質、もしくは核酸の定性または定量試験を実施できる(C6(2)⑧)、酵素反応速度を測定し、解析できる(C6(3)③)の技能に関する内容を含む。これらの内容を通して、顕微鏡の取り扱い方、生体を構成する細胞種の形態的な相違、細菌の分類や薬剤感受性の相違、タンパク質、アミノ酸の性質や定量法、酵素反応速度を解析して酵素の特性を学ぶ。さらに、3~4名で構成される少人数班での共同実験を通じて、協働する態度を醸成することを目標とした。酵素反応速度論の理解では、グループで行った測定値を基に、全員が各自で実際に PC を用いて計算し、授業で学んだ数値からの算出を実際に体験することで理解を深めることが出来た。また、なぜこのような結果が出たと考えられるのか、グループで考える様にと問うことで、協働作業の機会を増やした。今年度も引き続き新型コロナウイルス感染症が周期的に流行したが、必要な対策を講じることにより、集団による実習を実施することができた。ただ、新型コロナ第 8 波は、感染者数が多く、本学 1 年生にも相当な自宅待機者が発生し、自宅待機期間中は、実習開始後の説明は Zoom 併用により、実技の部分は後日補講として対応した。以上より、概ね問題なく実施できた。</p>				
今後の対応	<p>本実習で実施する技能は、1 年次に履修する「生物学」、「生化学 I」、「解剖生理学 I」等の科目で修得する知識と関連づけられ、1 年生が行う生物の基礎実習として最適な内容となっている。さらに、少人数による共同作業は、6 年間を通じて継続して学ぶコミュニケーション力、協働する態度の醸成において、低学年次に学ぶ重要な機会となっている。来年度は一部担当教員が変更となるため、本実習の位置づけ</p>				

	を踏まえ、次年度も同様な方針で実施できるように、十分な準備を行いたいと考えている。
--	---

科目名	コミュニケーション実習		学年	2学年	期	前期
科目責任者	永倉透記		科目担当者	石田卓巳、齊藤秀俊、山本緑、今井竜也、貝塚拓、朴珍相、澤井円香		
自己点検・評価	<p>薬剤師として仕事をする上で、医療や薬学の知識・技術だけでなく、高いコミュニケーション能力が要求される。薬剤師の使命は人間の生命・健康を守ることであることから、患者やその家族、他の医療従事者等と場面に応じて適切にコミュニケーションをとり、相手の立場を理解・配慮して信頼関係を築くことが必要である。本実習は、将来薬剤師として社会で活躍するために必要なコミュニケーション能力を実践によって身に付けることを目的とした。昨年度振り返りを基に、ロールプレイ、グループディスカッション、キャリアデザイン作成の課題を、より薬剤師業務を想定した実習となるように修正した上で実施した。自己・他者理解、コミュニケーションスキル（非言語的/言語的コミュニケーション、傾聴など）の実践、薬剤師業務を想定したロールプレイ、グループディスカッション、薬剤師としてのキャリアデザイン作成、プレゼンテーションを主な実習内容とした。さらに、修得したスキルを活かして大学来訪者とのコミュニケーションを実践した。薬学モデル・コアカリキュラムの「コミュニケーション能力」に関するSBOsに加えて、「薬剤師としての使命」、「薬剤師に求められる倫理観」、「自己研鑽と次世代を担う人材の育成」に関する一部のSBOsに対応する内容を実施した。</p>					
今後の対応	<p>ロールプレイ、グループディスカッションにおいてより活発な討論が行われるよう、実習書内のシナリオ等を工夫する。キャリアデザイン作成のプログラムは、低学年次にキャリアデザインを考えるきっかけを提供し、勉強への意識を高めるという意義があることから、来年度も継続する。学生の職業に対する知識が不足していることが原因で討議が活発に行われないグループがあったことから、予習を促す必要がある。</p>					

(7) 専門教育科目 専門

科目名	薬学概論	学年	1 学年	期	前期
科目責任者	武田弘志	科目担当者	石田卓巳、猪部学、永倉透記、西村信弘、山口政俊、多田納豊、吉武康之、今井竜也、宗像千恵		
自己点検・評価	<p>当科目は、これから薬学を学ぶ新入生に対して、医療と薬学の歴史を知ること、「薬剤師」の活動分野（医療機関・薬局のみならず、製薬会社や衛生行政等）を知り、国民の健康管理、医療安全や薬学防止等における「薬剤師」の役割を理解する事、自身が目指す「薬剤師」としての使命感を身につけるための科目とすることを旨とする。そしてこれから学ぶ「薬学」がどのような学問であるのか理解するための科目である。</p> <p>専門分野の異なる多くの教員がオムニバス形式で講義を行うことにより、学生には将来目指すべき「薬剤師像」を多面的・多角的に理解し、どのような考え方が必要か、またどのような学習が必要かを認識してもらえらるプログラムになっていると考えられる。また、学生の授業アンケートの自由記載において、これから取り組む「薬学」を様々な視点からとらえて学んでいくことを知り、興味をもてたという意見が複数あり、この科目の目的が果たされていると考える。また、昨年度から生命倫理教育の充実、特に態度の養成を図り、当科目で取り組み始めた生命倫理に関してグループワークで学生同士が討議する回では、昨年度のグループワークの組み立ての未熟であった部分を見直し、特に今年度は討論の時間設定を変更して行った。さらに、コロナ対応により、初めて自宅待機者もPC (Zoom) を介してリアルタイムで討論に参加できる形をとった。自宅待機者もグループワークに参加できる様に授業を組めたことは、今後の取り組みにも反映できるものと思われる。</p> <p>また、学生の評価方法として、各講義回における内容についてのレポート課題や小テストを課し、それらを評価対象とすることで、毎回の講義内容について学生が自身の考えを整理し纏めることができたと考えられる。</p>				
今後の対応	<p>学生の授業アンケートの結果は概ね高評価となっており、今後も今年度と同様の形式・内容で実施する予定である。昨年度から取り入れている倫理教育を目的とした、アクティブラーニング (SGD) の回では、倫理観について、「知識」のみではなく「態度」を身につける機会となる授業を実施することができた。また、昨年度から改善で</p>				

	きた部分もあり、学生からも好評な意見があったため、引き続き改良を心掛けながら実施する。また、昨年度に一部の回で「匿名のアンケート形式での質問の機会の設定」が好評であったことから、今後、授業内での質問時間の確保を意識した授業設計を心掛ける。
--	---

科目名	薬品物理化学Ⅰ	学年	1 学年	後期	前期
科目責任者	宗像達夫	科目担当者	宗像達夫		
自己点検・評価	<p>薬品物理化学Ⅰでは、学問の性質上、難解なため、内容をできるだけかみ砕く形で講義を行った。具体的には、教科書に書かれている公式の導出や変形などをなるべく省略しない形で掲載した講義資料などを準備した。また、SI基本7単位や誘導単位などのように、薬学を学ぶ上で基礎となる部分については、講義の初めに、書かせるなどの繰り返し学習を行った。また、区切りとなる單元ごとに小テストを行い、單元ごとに整理をさせるよう促した。しかしながら、計3回の小テストの結果では、繰り返しの復習の際、学生自身がどこまで手を抜いていたのかで結果に大分差が生じた。具体的には、本来セットで覚えなければいけない部分のうち、記号や名称だけと言った覚え方をしている傾向にあった。また、小テストなどの復習が追いついておらず、類似の問題では、以前間違えたものと同じ間違いを繰り返す学生も多く見受けられた。量子化学の部分では、数学的基礎が不十分であることから、基本的な内容とし、概要が見える形での講義を行い、演習問題の追加も行った。</p> <p>さらに本年度は、学生からの意見として教科書の演習問題に対する解答が簡素で解りづらい、また問題数が足りないとの指摘から、講義範囲に対する問題集の該当ページの掲載をおこなった。また小テストに対する解答が欲しいとのことから、小テストに対するフィードバックの中に、解答の掲載を行った。結果として、定期テストでは全体として内容を理解できている群が多く見受けられたが、合格点に届かない群が昨年よりも減りはしたがなくなったわけではない。</p>				
今後の対応	<p>来年度の対応として、理解が進んでいない部分の講義資料の充実や、演習問題の修正など、より学生自身が自己学習を進められるよう修正を行う予定である。また、近年の薬剤師国家試験では、式の成り立ちなど内容理解に着目した問題などが多く取り入れられるなど、単なる暗記科目にならないような傾向が示されている。また現在の学問領域と臨床応用を踏まえた、式とグラフの対応などを積極</p>				

	的に取り入れていくことが必要である。
--	--------------------

科目名	薬品物理化学Ⅱ	学年	2 学年	前期	前期
科目責任者	宗像達夫	科目担当者	宗像達夫		
自己点検・評価	<p>薬品物理化学Ⅱでは、1年次の薬品物理化学Ⅰを基礎に、反応速度論、相平衡、溶液の化学、束一的性質の4つについて講義を行った。これらの内容は、高校化学を基礎にしているため、高校化学の理解が内容把握に大きく関わってくる。そこで、講義資料では、高校化学で学ぶ範囲についても、内容を盛り込んだ講義資料としている。また、区切りとなる单元ごとに小テストを行い、单元ごとに整理をさせるよう促した。しかしながら、本年度は1回目の小テスト実施時点で、保護者からの小テスト実施に対するクレームがあったため2回目以降の小テスト実施を取りやめた。結果として昨年度と同難易度での問題で定期テストを行ったが、得点率は昨年比べて格段に低くなった。また、昨年度は再履修者に対する講義内容を纏める課題を課していたが、学部内自己点検において、異議が出たため本年度の課題を課すことを取りやめた。結果として小テストの未実施、課題を課さない事に対する副作用として、再履修者に対する単位未修得者が昨年度よりも多く見られた。一方で、課題、小テストの両方を実施した再履修クラスでの単位未修得者は1名も出なかった。</p>				
今後の対応	<p>来年度の対応として、小テストの実施は学生の学修習慣を促すためにはとても重要で、かつ再履修者に対しての課題も非常に重要なツールであることを再認識した。そこで来年度は、再び実施を行うこととする。また、演習問題の詳細な掲載は、様子を見て検討するが、電子媒体での配布は行わない。また、1 近年の薬剤師国家試験では、式の成り立ちなど内容理解に着目した問題などが多く取り入れられるなど、単なる暗記科目にならないような傾向が示されている。それらを踏まえて、講義資料などの修正を行う予定である。</p>				

科目名	物理薬剤学	学年	2 学年	期	後期
科目責任者	阿部義人	科目担当者	宗像達夫		
自己点検・評価	<p>本講義では薬物の溶解性、安定性（宗像担当）、界面、分散、粘度、レオロジー、粉体の物性（阿部担当）を理解し、その基礎知識を学ぶことを目的とした。1回～6回（宗像担当）に関しては、教科書ならびに過去に出題された薬剤師国家試験の問題内容から関係する周辺</p>				

	<p>知識が網羅できるようにまとめた配付資料を中心に講義を行った。配付資料は物質の溶解、医薬品の安定性の2部構成とし、それぞれの内容に入る授業回で配布を行った。7回～15回（阿部担当）に関してはパワーポイントを用いて、なるべくわかりやすく講義した。講義内容に関しては、講義前に Google クラスルームを用いて、PDF ファイルとして事前配布し、予習ができるように配慮した。前年度の反省を活かし、演習が足りないと思われたので、講義内容を元に練習問題を作成し、講義終了後に復習として配布した。7～9回、10～12回の講義のあと、テスト形式で講義内容の理解度の確認をした。確認テストの結果、理解度が足りていないと思われた学生には、さらにテスト内容に関するレポートの提出をさせ、理解を深めるように指導した。学生による授業評価は各項目が概ね平均より高く、講義内容に問題はないように思われる。</p> <p>定期試験として、本試験、再試験、追試験、追試験の再試験及び追試験の再試験を記述式で行った。本試験は合格点に達しているものが少なく学生が理解できているかの判断が難しかったが、再試験で点数が向上し、単位を取得した学生も多く、自己学習の効果を見ることができた。単位を落とした学生に関しては、解答の記述から明らかに自己学習ができていない様子が見て取れた。</p>
今後の対応	<p>本年度は、学生の理解度がどのくらいかを把握するため、確認を行いながら、講義を進めて行った。さらに演習問題の積み重ねを行っていき、自己学習の習慣づけを行った。その結果、前年度より、定期テストの平均点は上回っており、演習の効果が見てとれた。これを今後も続けていく予定である。単位を落とした学生に関しても、再履修にて、演習問題を積み重ねることで、自己学習を促していく予定である。</p>

科目名	医薬品構造解析	学年	2 学年	期	後期
科目責任者	阿部義人	科目担当者	吉武康之、中矢正		
自己点検・評価	<p>本講義では赤外吸収、ラマン散乱の原理（中矢担当）、核磁気共鳴、質量分析、X線結晶回折、熱分析の原理（阿部担当）を理解し、スペクトル解析演習を通して、医薬品などの構造を推定できるようになること（吉武担当）を目的とした。原理の理解（1回～10回）に関してはパワーポイントを用いて、教科書の内容をなるべくわかりやすく講義した。講義内容に関しては、講義前に Google クラスルームを用いて、PDF ファイルとして事前配布し、予習ができるように配</p>				

	<p>慮した。演習が足りないと思われたので、講義内容を元に練習問題を作成し、講義終了後に復習として、配布した。練習問題に関しては、講義時間中に解説し、学生の理解を深める工夫をした。スペクトル解析演習（11回～14回）に関しては、まずは赤外吸収、核磁気共鳴、質量分析のスペクトルの読み方を理解させ、演習を行った。前年度の反省をもとに、最終日に演習問題の解説を行い、理解を深めた。また、学生による授業評価も各項目が概ね平均より高く、問題はないように思われる。</p> <p>定期試験として、本試験、再試験を行った。各試験はマークシートにより、3～5問の選択肢から選ばせたが、問題によっては正答率が、4割より少ないものもあった。</p>
今後の対応	<p>定期テストの正答率が低い部分は、分光学の基礎的な部分を問う問題が多く、基礎の部分をしっかりと理解させることが必要かと思われた。次年度はこのあたりを考慮して、講義を行いたいと考えている。</p>

科目名	医薬品構造化学	学年	3 学年	期	前期
科目責任者	阿部義人	科目担当者	阿部義人		
自己点検・評価	<p>本講義では生体分子の構造と化学的な機能である反応性を理解するとともに、医薬品のコア構造と薬理作用との関連を学ぶことを目的とした。医薬品と生体分子との相互作用に関する基礎の理解（1回～3回）を行い、その後、具体的な医薬品の作用機序をその構造と相互作用について各論的に解説（4回～12回）した。本講義は前期前半の講義（8回）であるが、教授すべき内容が多く全12回とした。講義はパワーポイントを用いて、教科書の内容をなるべくわかりやすく講義した。講義内容に関しては、講義前に Google クラウドを用いて、PDF ファイルとして事前配布し、予習ができるように配慮した。また講義内容を元に練習問題を作成し、講義終了後に復習として配布した。さらに5～12回に関しては、前回の内容の小テストを行い、学生の理解を深める工夫をした。定期試験として、本試験、再試験、追試験を行った。各試験はマークシートにより、3～5問の選択肢から選ばせたところ、予想していたよりも比較的高い平均点となった。授業評価においても、毎回の小テストが理解につながったと書かれており、各項目で、予習、演習問題による復習、小テストによる確認を行なって、各自の理解を含めたことが効果的であったと考えている。</p>				

今後の対応	本講義は、有機化学、生化学、薬理学の総合的な理解が必要であるが、基礎の部分でしっかりと理解できていない部分があり、この講義だけでなく、その対応が必要かと思われた。また、講義を行った初年度だったので、演習問題等が熟成されていない部分があり、次年度はこのあたりを考慮していきたいと考えている。
-------	--

科目名	放射化学	学年	2 学年	期	前期
科目責任者	中矢正	科目担当者	中矢正		
自己点検・評価	<p>本講義では薬学コアカリキュラムに則り、基本的な放射壊変の種類や壊変法則、放射線の種類や放射線の物質との相互作用と減弱法則、放射性核種の物理的性質などを学ぶとともに放射線の検出原理や放射線測定器の原理などを理解し、放射化学の理解を深めることを目的とした。到達目標として、物質を構成する原子・分子の構造、及び化学結合に関する基本的事項を修得する。化学物質などの生体への有害作用を回避し、適正に使用できるようになるために、化学物質の毒性などに関する基本的事項を修得することを掲げた。教科書を基準として、より具体的であるとともに簡潔に理解ができるよう、多くの図の作成、及び引用を行った。また、各回の一週間程度前には内容スライドの配布を行った。本試験、再試験共に昨年度と同程度の成績であり、1/3 程度の学生が非常に優秀な成績を残した。</p>				
今後の対応	<p>授業内容はコアカリキュラムで定められた範囲を網羅していることから、訂正・修正を加える程度で次年度も活用していく。また、各回で重要項目について教授した点についても、概ね理解度が高かったことから、これらについても継続する。小テストについては、出題された内容にのみ固執するきらいがあるため、行うか否かは慎重を期すべきだが、状況により対応する予定である。</p>				

科目名	物理系薬学実習	学年	2 学年	期	後期
科目責任者	阿部義人	科目担当者	宗像達夫、中矢正、澤井円香		
自己点検・評価	<p>物理系薬学実習では、反応速度、分子吸着、分光機器分析、クロマトグラフィーなどに関する技能、知識の習得を目指した。</p> <p>初日に実習講義を行い、内容の理解を深め、当日はなるべく実習自体に時間が取れるようした。そのため、当日の予習が不十分な学生が実習に時間がかかることもあったが、実習に慣れていくに従って改善して行った。本年度は、実験グループをランダムにシャッフ</p>				

	<p>ルした。すなわち、普段あまり交流のない学生とコミュニケーションを取るように配慮したところ、授業アンケートにおいて比較的好評であった。また、前年度の反省を踏まえ、1) 基本的な器具の使い方などは前年度の実習書および配布プリントなどで実習前に再確認させる。2) グラフの書き方、実習の内容などを実習時にもしっかりと教えるなどの対応を行った。実習は最後まで問題なく終了した。</p> <p>前年度、実習終了後のレポートに関しては、結果・考察の書き込みが不足な部分がある学生がいたので、本年度は再提出等で不足分を補うように指導した。ルーブリックに従い、各科目担当者が採点したところ、全員合格点以上であり、実習の意義は学生に伝わったものと考えている。</p>
今後の対応	<p>本年度の実習に関しては、前年度の反省を踏まえた対応を行った。また、レポートの再提出などで、学生にレポートの書き方を指導することができた。今後もこれらを続けていくことで、しっかりとした実習指導を続けて行きたいと考えている。</p>

科目名	分析化学 I	学年	1 学年	期	後期
科目責任者	山口政俊	科目担当者	山口政俊		
自己点検・評価	<p>薬学領域における分析化学は、創薬科学、医療薬学、生命科学、衛生薬学などのあらゆる分野で不可欠な基礎知識および基盤技術となっている。医薬品の確認試験、純度試験および定量、生体試料中の薬物濃度の測定、ゲノム、プロテオーム解析、環境および職の安全性の評価を行う上で、単に分析化学の知識の集積だけではなく、技能・態度の習熟が必要である。さらに、本講義では、基本的な思考方法や理論を学習するとともに、薬剤師あるいは薬学研究者にとって不可欠なものである。また、改訂コアカリの「C2 化学物質の分析」中の化学的分析法を中心に講義に取り組んだ。講義は、パワーポイントを用いて行った（講義前週までに講義資料を学生に送信、提供した）。コロナ禍の中ではあったが、全て対面講義を行うことができた。</p> <p>今期は、昨年の自己点検・評価・課題（講義内容の過多による、学修の消化不良、それによる学生の不安）に対応し、さらなる講義の改善に努めた</p> <p>学習内容に対して、講義時間が足りないことは否めない。したがって、学生の自己学習が必須になる。これをカバーするために、効果的自習のために基礎演習や応用演習問題を与えるとともに、その解説を行った。</p>				

今後の対応	<p>今期は、昨年の学生からの授業評価アンケートを踏まえ、講義の在り方や習熟度の向上を目指して、効果的講義の実施のための改善を行なった。しかし、今年度の学生からの授業評価アンケート（化学平衡と滴定の講義内容のバランス、国家試験や CBT 対策など）では、未だ改善の余地がある。特に、一部の学生は、化学平衡についての基礎的知識が不足していることを不安視している。これらの対応・改善を来期以降も続ける。また、試験結果から感じたことであるが、本学の学生は、選択肢の正解率は極めて良好である。一方、記述問題の回答が出来ない。この対応も考慮したい。</p>
-------	---

科目名	分析化学Ⅱ	学年	2学年	期	後期
科目責任者	山口政俊	科目担当者	山口政俊		
自己点検・評価	<p>薬学領域における分析化学は、創薬科学、医療薬学、生命科学、衛生薬学などのあらゆる分野で不可欠な基礎知識および基盤技術となっている。コアカリキュラムC2コース「化学物質の分析」の一般目標は、「化学物質（医薬品を含む）をその性質に基づいて分析できるようになるために、物質の定性、定量に必要な基本知識と技能を習得する」とされている。「分析化学Ⅰ」では、化学的手法に基づく分析化学（定性・定量分析及びその基礎的事項）を中心に、また、「分析化学Ⅱ」では、物理的手法に基づく分析化学(分離分析、分光分析、臨床分析法)を中心に講義を行った。分析化学は、単位の知識の集積だけではなく、技能・態度の習熟が必要である。本講義では、基本的な思考方法や理論を学習するとともに、薬剤師あるいは薬学研究者にとって不可欠なものである。これらを考慮し、講義に取り組んだ。講義は、パワーポイントを用いて行った（講義前週までに講義資料を学生に送信、提供した）。</p> <p>コロナ禍の中、本大学の職域ワクチン接種による一回の休校（後日、補講を実施）があったが、全て対面講義を行うことができた。試験は、後期の本試験（100点満点）及び再試験（90点満点）を実施した。</p>				
今後の対応	<p>他大学の一部では、本講義内容を一年以上の期間で講義している。同じ講義内容を半期でおこなうため、学生が学修の消化不良を起こしているのではないかと、不安を抱きながらの講義であった。今後、この懸念を軽減するために、学生からの授業評価アンケートを踏まえ、講義の在り方や習熟度の向上を目指して、効果的講義の実施のための改善を行う。また、一部の講義内容が、他の教科内容と重複するこ</p>				

	とが分かった。講義内容のチェックと講義内容の分担分けを実行する。
--	----------------------------------

科目名	有機化学 I	学年	1学年	期	後期
科目責任者	吉武康之	科目担当者	吉武康之		
自己点検・評価	<p>講義は15回を対面形式で実施した。講義資料は事前にClassroom上に公開した。授業ではその印刷した物を配布し、教科書、分子模型と共に手元に置いて受講するよう指示した。授業の初めには、復習として高校で学んだ化学の内容を解説した。有機化学を基礎的な内容を確実に理解するため、時折画面には分子模型の操作を映しながら学生に分子模型の組み立てを体験させた。有機化合物の例は日常で用いられるものや医薬品など親しみやすいものを多用した。講義の途中で一部の学生に質問をして理解度を確認した。定期試験では授業で掲示した練習問題を改変したものをを用いた。再試験では基礎的な内容を中心に難易度を下げた問題を準備した。練習問題の確認を行った際に、高校レベルの化学知識が欠落している学生が若干名おり、これらの学生には更なる導入教育が必要であると感じた。講義間の休み時間が短いためか、講義開始に遅れて入室する学生が目立った。</p>				
今後の対応	<p>定期試験で正答率5割に満たない学生の多くは、練習課題に取り組んでいない傾向にあり自主的な学習ができていないと判断した。これらの学生に対しては課題提出の義務化などが必要と思われる。また講義を理解するために必要な基礎知識に欠けた学生には、時間の許す限り高校化学の復習的内容を導入する予定である。</p>				

科目名	有機化学II	学年	2学年	期	前期
科目責任者	川端猛夫	科目担当者	川端猛夫		
自己点検・評価	<p>薬学で扱う医薬品や生体成分の多くは有機化合物であるため、有機化学関連科目は、薬の作用や生体内反応を理解する上で重要な基盤となる。しかし、丸暗記で有機反応を憶えてもその基盤とは成り難い。有機反応の機構の理解が肝要である。有機化学 II では、1年で学んだ官能基の特性や分子の立体化学を基礎として、付加反応、置換反応、脱離反応、および環化付加反応による骨格構築を題材として有機反応が起こる仕組みと必然性を一貫したルールに基づいて講述する。有機分子の反応性と安定配座等などの特性を分子目線で</p>				

	<p>理解し、有機化合物の構造式からその反応の様式、反応機構を推定できる基礎を養うことを目標とした。そのためには反応機構を説明しながら板書する授業法が有効である。そこで、クラスを2クラスに分け、全員から板書がよく見えるように工夫した。また授業を毎回、ダウンロードできる動画として配信した。これらの工夫が有機化学の理解と復習に役立ったと、アンケートの回答を得た。</p> <p>有機化学や有機合成の大きな魅力は、既知や未知の有機分子を無限に生み出せる点にある。この点に着目し、教科書の範囲を超えて、薬として開発された有機化合物の実例やノーベル賞の例も挙げて、有機化学の奥行きの高さと創造性を伝えた。</p>
今後の対応	<p>丸暗記で有機反応を憶えるのではなく、有機反応が起こる仕組みと必然性の理解に重点を置いて授業を進めた。有機化学に興味を深め、生き生きと授業に取り組んでいる学生もいる反面、講義内容の理解が難しいと感じている学生も見受けられた。この点をカバーするため、毎回、ダウンロードできる講義の動画を配信しているが、動画がより理解しやすいものなるように今後、努めると共に、学生たちには動画を復習題材として毎回視聴し、かつ自分でペンをとって反応の電子の移動が描けるようになるように薦めることで、有機反応の理解が深まるよう工夫をさらに続けたい。</p>

科目名	有機化学Ⅲ	学年	2学年	期	後期
科目責任者	川端猛夫	科目担当者	川端猛夫		
自己点検・評価	<p>薬学で扱う医薬品や生体成分の多くは有機化合物であるため、有機化学関連科目は、薬の作用や生体内反応を理解する上で重要な基盤となる。しかし、丸暗記で有機反応を憶えても、その基盤とは成り難い。有機反応の機構の理解が肝要である。有機化学Ⅲでは、有機反応が起こる必然性を一貫したルールに則り繰り返し講述することで、有機分子の反応性と安定配座等などの特性を分子目線で理解し、有機化合物の構造式からその反応の様式、反応機構を推定できる基礎を養う。そのためには反応機構を説明しながら板書する授業法が有効である。そこで、クラスを2クラスに分け、全員から板書がよく見えるように工夫した。また毎回分の授業を別途、ダウンロードできる動画として配信した。これらの工夫が有機化学の理解と復習に役立ったと、アンケートの回答を得た。</p> <p>有機化学や有機合成の大きな魅力は、既知や未知の有機分子を無限に生み出せる点にある。この点に着目し、教科書の範囲を超え</p>				

	て、薬として開発された有機化合物の実例やノーベル賞の例も挙げて、有機化学の奥行きの高さと創造性を伝えた。
今後の対応	有機化学IIIでカバーする内容は非常に多く、かつ重要である。15回の講義だけでは消化不良を起こしかねない。昨年は講義の動画の配信と資料配布により、理解を深めることに努めた。本年度も動画の配信を行い、内容をよりわかりやすくすることを意識し、講義内容の量を減らさず、質を高める工夫をしたい。図と配布資料を多用し、高度な内容をわかりやすく伝える工夫をさらに進めたい。

科目名	化学系薬学実習I (有機合成)	学年	2学年	期	前期
科目責任者	川端猛夫	科目担当者	吉武康之、坂井崇亮、磯田紀之		
自己点検・評価	<p>医薬品や生体成分の多くは有機化合物である。比較的簡単な有機化合物の性質を理解し、その構造から塩基性水溶液にイオンとなって溶けるか、酸性水溶液にイオンとなって溶けるかを見分ける知識と実験操作を習得した。具体的には、酸性化合物と塩基性化合物の混合物を酸性、塩基性での抽出操作による分離を行い、操作法と操作の意味を習得した。また、得られた有機化合物の誘導体化、再結晶による精製操作を習得した。医薬品合成に関しては、局所麻酔薬である<i>p</i>-アミノ安息香酸エチルの合成を行い、得られた化合物の融点測定、混融試験、質量分析、核磁気共鳴スペクトルの測定により解析を行い、有機化合物の同定法、純度解析法を修得した。</p> <p>本年度は、実習前講義にスライドを用いた説明を行ったことにより、円滑に実習へと移行することができた。また、昨年度の課題であった融点測定での待ち時間の長さは、融点測定器の増設により改善することができた。実験の安全性に関しては、知識の習得と安全な実験操作の徹底に努めると共に、オイルバスから水浴への変更といった安全性の高い実習計画へと変更を行った。</p> <p>レポートおよび実習試験の評価結果より、反応機構の理解や電子の移動を表す矢印の適切な扱い方に関する理解が十分ではない場合が見受けられた。来年度は、予習および実習前講義の段階で反応機構の詳細な説明を追加する必要があると考えられる。</p>				
今後の対応	<p>実験操作をスムーズかつ安全に行えるよう、また、実験操作の化学的な意味合いの理解を深めるように促す。実習講義で反応機構の詳細な説明を行うことで、化学反応の理解度を高めるよう意識する。また、実験の安全性に関する知識の習得と、安全な実験操作の</p>				

徹底にさらに努める。

科目名	生薬学	学年	2 学年	期	前期
科目責任者	成川佑次	科目担当者	成川佑次		
自己点検・評価	<p>生薬学は薬となる天然に由来する植物、動物、鉱物について、その基原、成分、品質、薬効など幅広く学修する科目である。今年度から担当するにあたり、前年度の講義内容を確認し、違いがでないように配慮しつつ独自の内容も織り込んで講義を行った。身近な薬用植物や実際に医薬品等に用いられている例を紹介して、薬として特異な位置にある生薬についてなるべく学生が興味を持ってもらえるように努力した。また、全15回の講義のうち、3回の小テストを実施し、毎回の講義終了後にGoogle classroomにて復習問題を出し、次の講義で前回の復習とともに解説するようにして学生の自主学修を促すような取り組みを行った。</p> <p>1年目ということで講義資料の配信が遅くなったことや、講義の進行が遅れ気味になった点は改善する必要がある。また、講義資料では出来るだけ生薬の成分を構造式で示すようにしたが、学生にとって区別がつきにくく、定期試験での結果も良くなかった。生薬-成分名-構造式の関連をしっかりと理解させることが必要であると思われる。</p>				
今後の対応	<p>初年度ということで講義資料の配信や講義の進行が遅れがちになってしまった点については来年度には解消できると考えている。生薬学は覚えることが多く、暗記科目と捉えがちだが、学生が興味をもって学修することによって理解を深めるように配慮する。特に化学成分の構造式に関しては後期の天然物化学で学修するとはいえ、有機化学の基礎的事項の復習も含めて講義していきたい。</p>				

科目名	天然物化学	学年	2 学年	期	後期
科目責任者	成川佑次	科目担当者	成川佑次		
自己点検・評価	<p>天然物化学は天然に存在する有機化合物の分類、性質、生合成、用途、医薬品等への応用について学修する科目である。今年度は昨年と同様に教科書を使用せず、講義スライドを使用して講義を行ったが、半期（8回）の講義で重要な天然物の構造や生合成経路等をひと通り学修できるよう配慮した。また、学生が講義の復習が行いやすいように講義終了時、Google classroomにて復習問題を配信し、次の講義で</p>				

	<p>解説するようにした。</p> <p>定期試験は平均67点とやや低かったが、概ね想定の範囲内であった。1年目ということで前職での講義資料を改訂しつつ講義を行ったが、一部修正出来ていない部分や統一感がない部分があったことが改善点である。また、2年生後期のカリキュラムの違いなどでやや難易度が高かった可能性がある。特に構造式については学生の理解度が低い印象を受けた。</p>
今後の対応	<p>今年度、教科書は使用せず講義を行ったが、自主学修などを想定するとやはり教科書は必要であると考え、来年度は教科書を使用しながら講義を行うようにする。また、有機化学等の復習的な内容も講義に加えながら薬剤師に必要な化学的知識の向上を図っていきたい。</p>

科目名	漢方医学Ⅰ(漢方の基礎)	学年	3 学年	期	後期
科目責任者	成川佑次	科目担当者	成川佑次		
自己点検・評価	<p>漢方医学Ⅰ(漢方の基礎)は現代医療において欠かすことの出来ない存在となった漢方医学について、漢方の基礎、歴史、診断法、使用法、副作用や注意点などを学修する科目である。学生は漢方についての学修は生薬学や化学系薬学実習Ⅱ(天然資源)で学んでいるものの体系的な講義は初めてであるので苦手意識を持たないように出来るだけ簡単に説明し、典型的な症例なども紹介して具体的にイメージできるように配慮した。毎講義後には Google classroom で復習問題を配信し、自主学修を促すようにし、さらに全 15 回中 3 回小テストを実施し、緊張感をもって講義に臨めるようにした。その結果、小テストを含めた総合点の平均は 76 点であり、目標はまずまず達成できたと考えられる。反省点としては漢方処方各論において教科書の内容をなるべく講義しようとして分量が多くなってしまい、個別の処方についての理解は十分とはいえない可能性がある点である。</p>				
今後の対応	<p>今年度は初年度ということで、講義資料などを作成しながら講義を進行していったが、来年度は随時修正をしつつ、内容を精査して講義を行っていききたいと考えている。</p>				

科目名	化学系薬学実習Ⅱ(天然資源)	学年	2 学年	期	後期
科目責任者	成川佑次	科目担当者	川端猛夫、吉武康之、磯田紀之、坂井崇亮		

自己点検・評価	<p>化学系薬学実習II（天然資源）は生薬、漢方薬の取り扱いに必要な生薬形態の観察と鑑別、漢方薬の調製、品質評価のための試験法などの技能を修得する実習科目である。昨年度と同様、体験型実習の実施を重視し、希望者には味や香りを確認してもらい生薬が印象に残るように配慮した。成績評価に関しては昨年度の反省を活かし実技試験の配点を減らし、その分レポートの配点を増やして実習内容の理解と考察を評価するようにした。また、実習終了時には実験結果を確認するとともに解説を行うようにし、実験をこなすだけにはならないようにした。その結果、学生は積極的に実習に参加し、有意義なものになったと思われる。反省点としてはやや説明が不十分なところがあり、学生の理解が追いついていなかった可能性がある。今後はその実習の意義なども含めて理解できるよう努めていきたい。</p>
今後の対応	<p>次年度は実習講義の内容を検討するとともにスケッチやレポートの書き方についても丁寧に説明していきたい。ホットプレートなどの備品も追加されたので漢方処方調製の混雑も解消されると思われる。今後、薬用植物園の整備を進め、薬用植物の観察についても実習に取り入れていきたいと考えている。</p>

科目名	生化学 I (生体分子)	学年	1 学年	期	後期
科目責任者	塚本宏樹	科目担当者	塚本宏樹		
自己点検・評価	<p>「生化学 I」では、生体をつくる分子の構造と性質、機能と役割を理解し、薬学教育の基盤となる知識の修得を目標に授業を行った。「アミノ酸・タンパク質」、「糖質」、「脂質・生体膜」を小分子と高分子の視点で捉え、その構造と性質、生体内における機能と役割を説明できることが到達目標である。</p> <p>授業内容は、例年同様、「アミノ酸・タンパク質」、「糖質」、「脂質・生体膜」に大別し、特に「酵素」について重点的に授業を行った。</p> <p>昨年度から同学期の「基礎薬学実習 II (生物)」に「アミノ酸の定性」と「酵素反応速度測定・解析」を加えた。本科目で学修するタンパク質・酵素に関する知識と物理化学的測定法・解析法の技能実習を連携し、知識から応用に至る学修項目を一貫した学修要領で実践することができた。特に、学生が苦手な「酵素・酵素反応速度論」では、酵素の特性や反応速度論の理解に必要な知識、解析法、解析結果の解釈に重きをおいて授業ができた。一方、実習では、酵素反応速度を実測し、測定データに基づく酵素反応速度論解析（Michaelis-Menten plot、K_m、V_{max}の算出等）の技能を修得できた。</p>				

	<p>細胞骨格、シグナル分子・受容体、細胞接着、転写因子等は分子生物学Ⅰ・Ⅱ（2年次）で主に学修する。特に、細胞骨格を除く、他のタンパク質機能の詳細は、「糖質」・「脂質」の授業を重点化するために最小限に省略した。</p> <p>小テストは、授業内容の段階的理解の確認と毎回授業の復習を促す目的で2回（各15分）実施した。例年通り五肢択一問題であるが不確かな知識や理解では正解できない工夫をした。例年より正答率はやや低めであったが、定期試験（100点満点）は高得点側に正規分布が移動し、平均点も例年より10点ほど高かった。また、苦手傾向の「糖質」「脂質・生体膜」も含め、各回の授業内容に正答率の偏りが見られない結果であった。また、定期試験と小テストの成績は例年通り強く相関し、日常的な予習復習の重要性が強く確認された。</p> <p>予習復習を促すため、講義資料は事前にWEB掲載し、教科書の該当範囲は初回授業で周知した。SBOsは各回授業の冒頭にも明示し、授業内容と達成目標を明確にした。授業内容に沿った復習問題を授業前にWEB掲載し、授業内容の予習復習によって要点となる知識を体系化できるよう工夫している。</p>
今後の対応	<p>生化学は、生命現象を化学的に探究するため、最低限の化学の知識と理解が必要となる。アミノ酸、糖、脂質等、多様性に富んだ小分子が存在するが、その基本構造や違いを生み出す官能基、並びに、生体分子の構造と性質の物理化学的関係を整理し理解することが大切である。小分子の理解は高分子の構造や性質を理解する基礎となる。特に再試験受験者は、脂質と生体膜の正答率が低い。複合脂質の理解は生体膜の構造や性質を理解する基礎となり、アミノ酸・タンパク質の理解は膜タンパク質の局在や生体膜の機能発現の理解にもつながる。生体分子の名称、構造式を単に暗記するのではなく、構造から性質、機能、役割につながる「考える力」を養える授業にしたい。</p> <p>今年度は不合格者が減少し、定期試験満点を含む高成績の学生も増加した。定期試験の難易度は例年並みであるため良好な結果といえる。学生の授業評価を見ても例年通り好意的な記載が多く、授業内容・計画に大きな変更や修正は必要ない。一方、今年度に限っては、授業の出席登録や板書の見やすさについて苦情とも思える意見が散見した。授業は定刻通りに始まり、時間通りの出席や広い大講義室の板書が見やすい席に座る等、学生自身の責に負うべき指摘事項である。薬学生としての高い意識を期待したい。成績と否定的意見の関係は不明であるが、前向きに授業に参加する学生が大半である。薬学生には向</p>

	<p>学心や責任感、倫理観が必要なため、そのような学生が成長できる授業にしたい。引き続き来年度も講義資料、伝え方、復習課題をブラッシュアップし、学生が到達目標を達成できるよう取り組んでいく。</p>
--	---

科目名	生化学Ⅱ	学年	2 学年	期	前期
科目責任者	猪部学	科目担当者	猪部学		
自己点検・評価	<p>本科目は、2 年生前期に開講され、薬学教育モデル・コアカリキュラムの C6(5)「生体エネルギーと生命活動を支える代謝系」を中心とする範囲をカバーする科目であり、生命の維持に必須である活動エネルギーや生体構成要素を、摂取した栄養素から生み出すしくみについて学ぶ。三大栄養素である糖質、タンパク質、脂質の「異化」と「同化」により行われる代謝反応は、酵素により触媒され、その反応は相互に関連している。これら、複雑な代謝反応系と栄養素の分解・吸収を含む体内での輸送系、貯蔵等、生命現象の根幹をなす代謝経路を包括的に修得する。授業は、糖質からの ATP 産生経路を中心に、脂質やタンパク質などの性質の異なる代謝経路をブロックとしてとりまとめ、パワーポイント資料を用いて行った。配布したパワーポイント資料には空欄を設け、説明にあわせて記入してもらうことで、重要ポイントを意識してもらう工夫を行った。さらに、各回の終了後に小テストを行うことで、授業に集中する動機を与え、振り返りにより知識の定着を目指した。本年度も引き続き新型コロナウイルス感染の影響を受け、自宅待機者の発生時には Zoom との併用授業を実施した。小テストは、グーグルフォームに解答する形式で実施しているため、学外からの解答も可能で、問題なく実施できた。以上、本年度も概ね問題なく実施できた。</p>				
今後の対応	<p>初めて開講された前年度の経験を踏まえ、定期試験の問題の一部について、文章の正しい読解が必要な問題として出題したところ、平均点は 79→73 点に難化した。しかし標準偏差は 13.1→10.4 に縮小し、多くの学生が狭い点数域にまとまる傾向となった。結果として、より良好な得点分布となったが、これが学年間による差なのかどうか、来年度も引き続き検討したい。</p>				

科目名	分子生物学Ⅰ (遺伝情報・細胞内情報伝達)	学年	2 年生	期	前期
科目責任者	塚本宏樹	科目担当者	塚本宏樹		
自己点検・評価	<p>「分子生物学Ⅰ」では、「遺伝情報の保存と発現」、「遺伝子工学の基本技術」、「細胞の分裂と増殖」について学び、その仕組みについて分子・細胞レベルで理解し説明できることが到達目標である。授業内容は、「第 1-7 回セントラルドグマ」、「第 8-10 回遺伝子工学」、「第 11-14 回細胞分裂・細胞死・がん」の 3 部構成 (第 15 回まとめ・</p>				

	<p>補足)とし、対面形式の講義を行った。昨年度同様、各回の授業が SBO 過多に陥らないよう伝えるべき要点を絞り、毎回授業における学修理解の積み重ねが科目全体の理解につながるよう心掛けた。学修支援と理解の醸成を図る目的で、授業後には確認問題を WEB 配信し、履修者が授業内容を見直し、復習しやすくなるよう配慮した。また、授業動画を録画、掲載し、コロナ感染症が原因で出席できない学生や再履修クラスに配慮した。昨年からの積み重ねもあり、問題や授業内容に関して質問する学生が多く認められ、掲載動画も復習用に視聴している学生も一定数いるようであった。第1部セントラルドグマ、第2部遺伝子工学について基礎的内容を問う小テスト(15分、10点)を各1回実施したところ、昨年度より高得点の分布となった。授業内容の早期復習とそれに伴う授業内容の学修理解の向上に貢献していると考え。定期試験も想定通りの結果であった。3年生の分子生物学実習、薬学演習Ⅱの様子も踏まえ、遺伝子工学の授業は技術原理の理解から実践的な応用まで昨年度より少し踏み込んだ授業を行った。</p>
今後の対応	<p>2年度目の授業であったが、昨年度に引き続き現状の授業内容・計画で問題ないとする。試験結果を見る限り、特に伝わりにくい授業内容はなさそうである。しかし、昨年度同様、「サイクリン・CDK」、「タンパク質翻訳・成熟・細胞内輸送」に関する正答率は低調な傾向であった。丸暗記で覚えきれない内容ではないため、どれだけ知識を体系化し理解できるかがポイントである。復習課題の解答を作り、暗記に頼る学生も少なからずいるものと思われる。その場しのぎの暗記学修ではなく、高学年を見据えた知識の体系化、全体像を把握する学修スタイルを身に着け醸成するよう授業を通じて意識付けしていきたい。</p> <p>授業中に1回実施した任意無記名のアンケートや授業評価アンケートの結果を見る限り、授業と課題を使った復習の重要性は多くの学生に浸透していそうである。授業も「復習すれば授業についていける」と感じている学生が大半である。授業が実際の学修行動につながり、確実な成果と自信につながるよう授業を通じて後押ししていきたい。</p>

科目名	分子生物学Ⅱ	学年	2 学年	期	後期
科目責任者	猪部学	科目担当者	貝塚拓		
自己点検・評価	<p>本科目は、2年生後期の科目であり、薬学教育モデル・コアカリキュラムの C6(6)細胞間コミュニケーションと細胞内情報伝達、C7(1)人体の成り立ち①遺伝と②発生、細胞骨格 (C6(1)③)、組換えDNA(C6(4)⑥)、細胞死 (C6(7)②)、免疫反応の利用 (C8(2)②) など</p>				

	<p>を取り上げた。これらのうち、遺伝や発生は1年前期の「生物学」から、組換えDNAは2年前期の「分子生物学I」から続く科目であり、連続した内容を含む。一方、細胞骨格と細胞運動、細胞内シグナル伝達分子の機能モチーフ、遺伝子多型の解析や遺伝疾患の診断法、リアルタイムPCRや次世代シーケンス技術、タンパク質間相互作用、RNA干渉やゲノム編集等の解析技術、ES細胞等の多能性維持メカニズム、老化やストレス応答など、幅広いアドバンストな内容を含めた。授業の一部では、小テストを行うことで授業に集中する動機を与え、振り返りにより知識の定着を目指した。今年度も引き続き新型コロナウイルス感染症が周期的に流行したが、必要な対策を講じることにより、全回対面での授業として実施することができた。ただ、新型コロナ第8波は、感染者数が多く、本学2年生にも相当な自宅待機者が発生し、自宅待機期間中はZoom併用を行なった。以上より、概ね問題なく実施できた。</p>
今後の対応	<p>本科目は、1年前期に履修する「生物学」、1年後期の「生化学I」、2年前期の「生化学II」、「分子生物学I」から続く生物系基礎科目の最後に位置づけられる科目であり、全体の過不足の調整や最新知見を取り入れたアドバンストな内容で構成される。次年度は、同様な方針で実施する予定であるが、小テストなどでのフィードバックを強化し、引き続き授業に対する学生の取り組みを促したいと考えている。</p>

科目名	分子生物学実習	学年	3 学年	期	前期
科目責任者	猪部学	科目担当者	太田昭一郎、多田納豊、塚本宏樹、柴田健太郎		
自己点検・評価	<p>本実習科目は、3年生の生物系実習科目として、薬学教育モデル・コアカリキュラムの中から、抗原抗体反応を利用した検査方法を実施できる(C8(2)②)に対応したイムノブロット法を行い、モノクローナル抗体が抗原と高い特異性で結合すること、様々な検出法に応用されていることを学ぶ。本科目は、1年次の基礎薬学実習II(生物)とともに、生物系の実習科目と位置付けられ、1年次に行った基礎的な実習内容やその後に授業で学んだ生命科学に関する知識を踏まえ、アドバンストな内容も含むように計画された。アドバンストな内容には、PCRによる遺伝子断片の増幅と電気泳動、PCR-RFLP法によるH-ras遺伝子の点突然変異の解析やコンピューターソフトを用いたDNA配列解析などが含まれている。また、本年度は、1期生に対する初開講で、1期生が1年次に受講した基礎薬学実習II(生物)では取り扱わなかった、酵素反応速度を測定して解析する実習(C6(3)③)を実施した。(本実習内容は、2年目以降、1年次の基礎薬学実習II(生物)で実施している。)本実習は、3~4名で構成される少人数班で行い、共同実験を通じて協働する態度を醸成することも目標とした。今年度は、初めての開講であり、必要な機器、器具、試薬等をすべて用意する必要があった。さらに、引き続き新型コロナウイルス感染症が流行したが、</p>				

	必要な対策を講じることにより、集団での実習を実施できた。期間中、自宅待機者が発生したが、補講で対応した。以上、概ね問題なく実施できた。
今後の対応	本実習で実施する技能は、3年次までに履修する生命科学系の科目で修得する知識と関連づけられ、薬学教育コアカリキュラムに含まれる内容以外にアドバンストな内容を含むものとなっている。さらに、少人数による共同作業は、1年次の基礎薬学実習から引き続きコミュニケーション力、協働する態度の醸成において、重要な機会となっている。本年度は、初めての開講であり、困難な場面もあった。来年度は、酵素反応に関する実習の代わりに、大腸菌の形質転換（アドバンストな内容）を取り入れた実習を計画しており、スムーズに進行できるように追加の準備を行いたいと考えている。

科目名	解剖生理学 I	学年	1 年生	期	後期
科目責任者	村田祐造	科目担当者	村田祐造		
自己点検・評価	<p>医療従事者である薬剤師を目指す者として、人体の構造と機能を取得することは不可欠である。まずは1冊の指定された解剖生理学教科書の熟読と十分な理解を学生に促した。そのため教科書に沿った質問形式の予習課題を事前に紙媒体および Google Classroom で配布した。講義はそれに沿った課題を含め、教科書に沿って進めていった。また、講義後確認のため Google Classroom で課題の解答を配布した。</p> <p>講義の最初にシラバスに記されているように、予習・復習をするように伝えた。小テストを講義開始時、Google Classroom で行った。小テストは単純に教科書の語句を問う問題ではなく、講義内容を補充するような事項を交え、内容の理解を問う問題作成を心がけた。多くの学生が自己学習をしていたためであろうか、概ね良い成績であった。次の講義の始めに解説を行い、Google Classroom に掲載した問題解答のフィードバックも理解するよう告げた。</p> <p>多くの学生が集中して学修したようで、本試験の結果は良好で、合格者は約8割で、最高得点も95点であった。しかしながら、一方で、再試験を行ったが、単位非取得者が生じ残念であった。</p>				
今後の対応	<p>先にも述べたが、2022年度は少なからず単位非取得者を出してしまった。これを反省材料として、全ての学生が授業内において、内容に興味を持ち、理解できるように努めていきたい。全ての学生が十分学修するための対応を考え行っていきたい。</p> <p>まずは、シラバスに提示している準備学修を確実に行うよう喚起する必要がある。シラバスでは、予習復習に4時間かけるように記載しているが、講義アンケートでは、2時間半以上が3%のみであった。復習を</p>				

	促す小テストであったが、さらにその喚起が個人に届くように、最初の講義で自己学習の重要性を伝え、あるいは予習レポートを課すことが良い方策かもしれない。また、現在コロナ禍のため、講義中での質疑応答ができなかったが、コロナ禍が明けたら、口頭で、学生に質問をし、理解度を測りながら講義を進めていきたいと思う。
--	--

科目名	解剖生理学 2	学年	2 学年	期	前期
科目責任者	緒方勝也	科目担当者	緒方勝也		
自己点検・評価	<p>基礎医学としての解剖生理学は医療系学部としては共通する基礎知識である。薬学部は人体を直接扱う機会は少ないものの、総合的な医学・薬学の理解に重要な内容を含んでいる。本科目では解剖生理学分野のうち神経系、内分泌系、血液系について扱った。各講義においてはあらかじめ授業のスライドと特に重要な部分を抜粋した資料を google クラウドで配布し、学生が利用可能な形をとった。また講義の最後に講義に関連したミニテストを google フォーム上で設定し、学生の復習の補助となるよう務めた。解剖生理学は医療系の学部における共通言語を学ぶ場として非常に重要であるが、英単語のようにまずは暗記する必要がある知識も多く、要求される知識量が多かったかもしれない。</p> <p>神経系については中枢神経、末梢神経、自律神経系をそれぞれ詳説し、基本的な解剖学的知識のみならず、臨床医学につながる橋渡しとなる内容を講義した。特に自律神経系は薬剤の標的となる部分が多くあり、これらの知識は今後の薬理学の理解に重要になってくることを念頭に講義を行った。同様に内分泌系は基礎的な解剖学知識および各内分泌器官の機能や異常を来たす場合の影響、そしてこれらの薬剤の標的の観点から理解できるよう講義した。血液学では各血球血漿成分の分類および機能を講義した。血球成分は血栓や白血球成分の疾患との関連について、また血漿成分は凝固系を中心に薬剤の標的となる箇所を重点的に講義した。</p>				
今後の対応	<p>アンケートにおいて大きな問題はなかったようであった。今後より重点がわかりやすく伝わるよう資料は可能な範囲で枚数を減らし、また資料中の強調を通じて重要なポイントが印象に残る工夫をしていく。講義については重要な点を繰り返し触れるようにし、知識の定着を図っていく。特に神経系は医学部でも難関となりやすい分野であり、知識の羅列にならないよう、ゆっくりと内容に触れるよう工夫する。一方自律神経や内分泌領域は疾患を中心に疾患との関連を通じて各内容が疾患理解や薬理学の理解、副作用の理解に必要であることが伝わるよう臨床面と</p>				

	のつながりの説明を増やし学生の興味を引き出すよう改善を試みる。これらの高学年での学習時に役立つよう改善を今後も継続する。
--	--

科目名	解剖生理学 III	学年	2 学年	期	前期
科目責任者	梶岡俊一	科目担当者	梶岡俊一		
自己点検・評価	<p>解剖生理学は、医学の中でも根幹をなす分野であり、将来薬剤師を目指すものにとっても、習得すべき重要な分野であることは間違いない。本科目では、解剖生理学分野のうち、口から肛門までを含む消化器系、呼吸器系、腎泌尿器系を担当した。消化器系では、肝臓、膵臓も含めたいわゆる肝胆膵の分野まで、担当したので、昨年、アンケートでは難しかったとの返答した生徒がいた。講義では、前もって資料を google クラスルームに掲載し予習、復習が可能になるようにした。また、講義で 3 回に 1 度は、講義の復習を行った。今年で 2 回目の講義であったので、講義直前に掲載することが多かったが、資料をプリントとして配ったのは、学生にとっては評判が良かった。また、今年も、九州大学歯学部解剖学講座の山座教授およびそのスタッフの方々に協力いただき、解剖学実習を実現できたことは、教官にとっても非常に有意義な実習であったし、学生のアンケートからも非常に興味を持って臨んで貰えた。解剖見学実習では前もって、どのようなことをするのか知りたかったという、学生からのアンケートが去年あったので、実習内容をさらに詳しく、前もって説明を行った</p>				
今後の対応	<p>今年度は、2 期目の講義隣、かなり余裕を持って準備できたので、google クラスルームにも早めに掲載できたこと、評判の良かったプリント配布も実行を続けたいと考えている。また、コロナが空けていれば、前職や他校での経験のある、聴診器、パルスオキシメーター、血圧計などを講義中に回して、セミ実習のようなことを取り入れたいと計画している。</p>				

科目名	免疫学	学年	2 学年	期	後期
科目責任者	猪部学	科目担当者	太田昭一郎		
自己点検・評価	<p>本科目は、2 年生後期の科目であり、薬学教育モデル・コアカリキュラムの C8(1) 身体をまもる、C8(2) 免疫系の制御とその破綻・免疫系の応用で取り上げられる「免疫」を体系的に修得する唯一の科目となっている。免疫系は、医薬品が治療の対象とする病態と深く関連しており、そのターゲットとしても重要であることから、抗炎症薬 (E2(2)) ①)、免疫・炎症・アレルギー疾患の薬、病態、治療 (E2(2)) ②)、骨・関節・カルシウム代謝疾患の薬、病態、治療 (E2(2)) ③) や、ウイルス</p>				

	<p>感染症およびプリオン病の薬、病態、治療 (E2(7)④)、悪性腫瘍 (E2(7)⑦) など、免疫系の関連する感染症やがんなども取り上げた。さらにアドバンストとして、HIV 感染症の疫学、腫瘍マーカーなどについても触れた。授業の一部では、小テストを行うことで授業に集中する動機を与え、事前課題や振り返りにより知識の定着を目指した。今年度も引き続き新型コロナウイルス感染症が周期的に流行したが、必要な対策を講じることにより、全回対面での授業として実施することができた。ただ、新型コロナ第 8 波は、感染者数が多く、本学 2 年生にも相当な自宅待機者が発生し、自宅待機期間中は Zoom 併用を行なった。以上より、概ね問題なく実施できた。</p>
今後の対応	<p>本科目は、病態と関連する生体の高次の制御機構を学ぶ科目であり、1-2 年で履修する生物系基礎科目「生物学」、「生化学 I・II」、「分子生物学 I」で修得する生体反応の基礎を踏まえた重要科目と位置づけられる。本年は開講 2 年目であり、一部シラバスから変更した部分があった。次年度は、同様な方針で実施するため、シラバスからの大きな変更はない予定であり、引き続き授業に対する学生の取り組みを促したいと考えている。</p>

科目名	衛生化学 I	学年	2 学年	期	後期
科目責任者	貝塚拓	科目担当者	貝塚拓		
自己点検・評価	<p>本講義では、衛生化学分野における栄養と食品に関する講義を実施した。本講義の到達目標として「1、五大栄養素の種類と機能および消化・吸収・代謝の過程を説明することができる。2、食事摂取基準と栄養の過不足により生じる疾患とその予防・治療法について説明できる。3、食品中の炭水化物、タンパク質、油脂が変質/変敗する機構を説明できる。4、食品添加物を含む様々な食品成分についてその種類や機能を概説できる。5、食中毒の原因となる微生物や自然毒を列挙し、その作用機構や症状の特徴を説明できる。6、食品汚染物質の代表例を挙げ、健康に及ぼす影響を説明できる。」を掲げた。</p> <p>本科目の内容は広範囲に及ぶため、各項目を均等に配分し、全範囲を網羅するよう努めた。そのために重要な点を明確にして講義し、補足的な内容や生物系科目で扱う復習的な内容は簡潔に講義した。また、スライドには図を多く取り入れながら視覚的な印象を与え、分かりやすく、かつ覚えやすい講義にするよう努めた。さらに、食品添加物や自然毒等の内容で扱う化合物については学習カードを作成し、各化合物名と特徴について修得しやすくなるよう工夫した。</p> <p>全講義を終えて、講義の出席状況に関しては履修者 111 名中 3 回以上欠席した学生が 29 名であった。学生アンケートでは「説明が分</p>				

	<p>かりやすかった。スライドも見やすかった。学習カードがあったことで覚えやすかった。」という評価があり、講義スタイルと配布資料は一定の水準に達していると考え。一方で、「講義する内容と配布物の枚数が多すぎて、要点を理解するのが難しかった」との評価があった。</p>
今後の対応	<p>今年度を終えて、来年度の課題は全範囲を再度見直し、生物系科目の復習的な内容や説明がさほど必要ない内容をさらに抽出し、重要な点をより明確にした講義内容と配布資料にすることである。そして、学生が最後まで集中できるような講義となるよう工夫し、予習・講義・復習で各回の要点を修得できるような内容にすべきと考える。そこで、一方的な授業だけでなく、確認テストや口頭試問など双方向の授業スタイルの導入を検討する。また学生の出席を促す対策も必要である。3回以上欠席した学生は再試験となる割合も高いため、初回の講義で効果的な呼びかけができるよう検討する。</p> <p>また定期試験について、記述式問題を8%程度出題したが、正答率が低かった。記述式は学生の修得した知識を問える問題であるため、今後は記述式問題に対応できるよう暗記だけではなく本質的な理解を促すよう努める必要がある。</p>

科目名	衛生化学Ⅱ	学年	3 学年	期	前期
科目責任者	石田卓巳	科目担当者	石田卓巳		
自己点検・評価	<p>衛生化学は、人々の疾病の予防や健康の維持・増進に資する予防薬学としての使命を有する科目である。このため、そのカバーする領域は、保健（公衆）衛生のみならず環境衛生、食品衛生、化学物質の毒性、薬毒物中毒の科学的鑑定や中毒処置法など広範囲に及んでいる。本講義では、生体に対する化学物質の毒性学的側面の理解に向け、化学物質の代謝・代謝的活性化、化学物質による発がん、化学物質による毒性とその処置、電離放射線・非電離放射線の生体への影響について授業を行った。本講義では、化学物質や放射線に対する生体の防御的・破壊的応答を理解し、かつ説明できることを到達目標とした。授業は対面で15回開講され、指定教科書の解説と理解を主軸に進行した。授業の始まりに前回の授業で重要とされる点について口頭で質問を行うことで、学生の理解度を確認しながら進めた。また、衛生化学が他の基礎科目（有機化学、物理化学、生物学など）で培った知識を基とした発展的学問であるとの観点から、他の学問分野との知識の連携を想起させる授業説明を行い、自らの力で知識を集約し発展させる意識付けを行った。定期試験は、教</p>				

	<p>科書に書かれていることを基に、国家試験にも対応できるような問題形式とした。さらに、再試験については、問題形式は変えず難易度を下げたものを準備した。これらの結果を見る限り、学生における問題の読解力や学習内容の理解度にばらつきが見られていた。また、基礎学力と考えられる有機化学、物理化学、生化学の知識が不足しているもの、またはそれらの知識が整理されていないものも散見された。これらの学生には更なる学習時間の確保が必要であると感じた。</p>
今後の対応	<p>衛生化学は、薬学における専門科目の中でも様々な分野の知識を必要とする発展型の学問である。このため、これまでに習得した様々な基礎科学的知識の有機的な繋がりや理解が必須である。これが不十分であることが、学生の理解度のばらつきを産み出している原因の一つであると考察する。これを改善するため、来年度は、授業で触れる様々なトピックに対して、他の科目との繋がりを想起させるような授業の実施を目指す。また、現状のスケジュールで中間テスト等の補助的な確認を行うことは困難であるため、授業での重点項目の解説を丁寧に行うと共に、授業開始時の口頭試問を充実させることが望ましいと考えている。</p>

科目名	環境衛生学	学年	3 学年	期	前期
科目責任者	山本緑	科目担当者	山本緑		
自己点検・評価	<p>本講義では、衛生薬学領域における環境科学分野を中心に、環境と人の健康との関わりについて講義を行った。到達目標として、「1. 地球環境と生態系について、人の健康に関与する要因について説明できる。2. 地球環境問題とその対策、法規制について説明できる。3. 水環境による生体への影響と、浄水および下水処理について説明できる。4. 大気汚染物質の性質と発生要因および生体への影響について説明できる。5. 室内環境と健康の関係について説明できる。6. 廃棄物の種類と処理について説明できる。7. 環境中の化学物質の特性と生体への影響について説明できる。」を掲げた。</p> <p>講義は、教科書に沿って進行した。特に重要な事項について、穴埋め形式の配布資料にまとめて、学生の理解度を高めるよう努めた。資料には、毎回の復習のための確認問題を記載し、定期試験の出題範囲となることを初回時に伝えた。また、学生の自発的学習を促すべく、1. 講義中は興味を持てるように身近な内容に置き換えた説明を加えること、2. 講義外では学生と積極的に意見交換することで教員の熱意を伝えること、の2点を特に意識した。また、講義のターゲットを成績中間層より下位方向に据えたため、上位層に向けては毎回アドバ</p>				

	<p>ンストの内容を紹介したり、小レポートに直接フィードバックを返したりすることを心掛けた。理解度の確認および講義への質問・要望には、Google Form を利用した（無記名式）。質問等を Google Form に書き込む学生は少なく、居室を訪れる学生がほとんどであったことから、良好な関係性を築けたのではないかと考えている。</p> <p>定期試験の結果は、想定よりも平均点が低い傾向にあった。学生からは、他科目の試験対策に時間を割かれたとの回答が複数あったものの、内容への真の理解が不足している結果ではないかと危惧しており、今後の課題と考える。</p>
今後の対応	<p>本年度は開講初年度であり、科目も初めて教授する内容であったことから、準備に手間取ってしまい講義にも少なからず影響したのではないかと反省している。特に配布資料について、追加が増えてしまったため、次年度は完成度の高い資料を作成する。講義のスタイルについては、概ね高評価であったことから、次年度も維持していきたい。暗記ではなく、科目への理解力を深めることを課題として、学生自身に問題作成を行わせるなど、効果的な策を検討していきたい。</p>

科目名	衛生系薬学実習	学年	3 学年	期	前期
科目責任者	石田卓巳	科目担当者	石田卓巳、山本緑、貝塚拓、澤井円香		
自己点検・評価	<p>本科目は、衛生化学に関わる基本的な技能を習得するため、3 年生の実習科目として開講された。実習項目は、衛生化学分野から食品成分の試験（脂質の酸価とカルボニル価の測定、および食品中のビタミン C の定量）と特定原材料の試験（PCR による小麦成分の定性検査）、環境衛生分野から水質の試験（飲料水の硬度と残留塩素濃度の測定、および環境水における pH と化学的酸素要求量の測定）、空気の試験（室内環境における気温、気湿、カタ冷却力、気動、感覚温度、補正感覚温度、不快指数の測定、および大気環境における粉塵、二酸化窒素の測定）であり、これらを通じて各種測定技能の習得を目指すと共に、講義で学んだ食品衛生や環境衛生における知識の補完を行なった。実習は 4 名ほどで構成される少人数班を基本単位として実施し、実験での協力態勢や結果を協議する姿勢の醸成を促した。今年度が初めての实習であったため、試薬等の準備や実習の進め方、さらにレポートの提出方法など細部について若干課題が見受けられた。しかしながら、実習自体は概ね問題なく実施できており、良好な実習であったと考えられる。</p>				
今後の対応	来年度も原則的に本年度の体制を維持しながら実習を実施する。ー				

	<p>方で、本年度の実習では、実習期間中に実験機材や試薬等の不足が危惧される事態となったこと、さらに機材や試薬に関して危険と感ずる取り扱いが一部の学生に見られたことなど、問題点も見受けられた。このため、来年度は、機材や試薬等の計画的な充足に加え、安全対策や感染対策を徹底するための指導の強化など改善を行う予定である。また、レポートについて、記載項目が多いことから学生の負担になっているのではないかと指摘がなされた。この点については、担当教員内で内容の精査を行い、記載内容の変更も含めて来年度に反映させる予定である。</p>
--	---

科目名	薬理学Ⅰ	学年	3 学年	期	前期
科目責任者	武田弘志	科目担当者	齊藤秀俊		
自己点検・評価	<p>薬理学総論として、薬理学という学問の概念を理解し、薬物の効果やその発現機序を説明するために必要不可欠な基本的事項について「薬学教育モデル・コアカリキュラム」の内容に対応した講義を行った。また、自律神経系の解剖と生理を復習し、これら神経系に作用する薬物の薬理学的基礎知識について「薬学教育モデル・コアカリキュラム」の内容に対応した講義を行った。</p> <p>将来の薬剤師としての業務を遂行する上で必須となる知識である、1)薬物の生体内における作用に関する基本的事項（用量と作用の関係、アゴニストとアンタゴニスト、薬物が作用する分子と細胞内情報伝達、薬物の体内動態等）、2)自律神経系の働きと生理学的機序、3)交感神経、副交感神経、自律神経節に作用する薬の薬理学的基礎知識（分類、薬物名、薬理作用、作用機序、副作用、相互作用、臨床適用等）の修得を定期試験によって確認した。講義内では必須習得事項を含むレジュメを配布した上で、視覚的情報をスライドを用いて提供し、概念としての理解を促した。</p> <p>定期試験では 106 人の受験者中、22 名の再試験者が発生したが、個別指導により講義時間内での理解不足を補い、97%以上の学生が試験を合格したことから、おおむね目標は達成されたと考える。</p>				
今後の対応	<p>定期試験結果から、目標としていた知識習得は達成されたと考えているが、再試験対象者の個別指導から、生物学・生理学範囲における基礎的知識習得の不安定さが感じられたことから、今後の講義では過去の知識を反芻させるような機会を追加し、講義時間内での理解のばらつきを少なくするための工夫を実行していく。</p>				

科目名	薬理学Ⅱ	学年	3 学年	期	後期
科目責任者	永倉透記	科目担当者	永倉透記		
自己点検・評価	<p>薬理学Ⅱは、解剖生理学、生化学、病態生理学等の学問と繋がり、また薬理学Ⅰで学習した基本事項（アゴニスト/アンタゴニストなど）を基盤とする講義内容のため、逐次、これまで学んだ上記科目を復習しながら受講するようあらかじめ学生に伝えた。講義内容は、アレルギー治療薬、抗炎症薬、局所麻酔薬、筋弛緩薬、鎮痛薬、全身麻酔薬、中枢興奮薬、催眠薬、抗不安薬、うつ病・双極性障害治療薬、統合失調症治療薬、抗てんかん薬、パーキンソン病治療薬、アルツハイマー病治療薬、脳血管疾患治療薬、片頭痛治療薬、依存症、その他の中枢性疾患治療薬であり、それぞれの薬物について、薬理学的基礎知識（分類、薬物名、薬理作用、作用機序、副作用、相互作用、臨床適用等）を習得することを学習目標とした。生理学、病態学に関連する内容も講義内容に加え、それらを薬理作用機序と繋げて理解出来るように努めた。グーグルクラスルームで講義日の1週間前までに講義資料を配信し、講義までに目を通しておくよう指示した。</p> <p>各回の講義資料末に確認問題を提供し、それを講義資料および教科書を参照して解くことで復習に活用させた。理解度確認のための小テストを2回実施（グーグルクラスルームで出題）して、学生の理解度を確認した。扱った疾患の種類が多く、また、薬物の種類、数も多かったため、それらを整理して理解することが大変であると感じた学生が多いようであった。</p>				
今後の対応	<p>覚えるべき薬の数が多く、カタカナ表記であることもあるためか頭に入れることが大変であるとの感想が多かった。代表的な薬物の名称は頭に入れる必要があるため、根気よく、時間をかけて学修する必要があることを学生に理解させる。また、疾患と薬理作用機序を繋げて理解出来るよう、体系的な理解が進むよう講義の流れを一層工夫する。</p>				

科目名	がん薬物療法学	学年	3 学年	期	前期
科目責任者	猪部学	科目担当者	齊藤秀俊、宗像千恵		
自己点検・評価	<p>本科目は、ヒトの死因の第1位であり、主要な疾患である「がん」に着目し、腫瘍に関する薬学教育モデル・コアカリキュラムの内容だけでなく、アドバンストな内容も含めて、「がん」を包括的に学習する大学独自の科目である。本科目は、3年生前期に開講され、生体の基本的な仕組みを修得したうえで実施される。内容は、がん化のメカニズムやリスク要因と予防、抗がん剤の作用機序、臨床での薬物治療</p>				

	<p>の実際、副作用と医療的ケアなどを含み、3つのパートに分けて実施した。薬学モデル・コアカリキュラムには、「がん」に関連する項目が、C6 生命現象の基礎、D2 環境、E2 薬理・病態・薬物治療、F 臨床薬学などに散在している。本科目は、これらを一つにまとめ、「がん」という視点から薬学に必要な知識を捉えることを目的としている。授業では、小テストや課題を課して授業に集中する動機を与え、学生自らの取り組みを促す工夫を行い、振り返りにより知識の定着を目指した。また、今年度も引き続き新型コロナ感染による影響を受け、自宅待機者の発生時には Zoom との併用授業を実施した。このように、必要な対策を講じることにより、概ね問題なく実施できた。</p>
今後の対応	<p>本科目は、1-2年で履修する生物系基礎科目や生理学、免疫学等の生体の基本的な仕組みに関する科目を修得し、薬理学や病態生理学等と同時期に開講される。本年は開講初年度であり、新たな授業の準備等で一部シラバスから変更した部分があった。次年度は、同様な方針で実施するため、シラバスからの大きな変更はない予定であり、引き続き授業に対する学生の取り組みを促したいと考えている。</p>

科目名	ゲノム医療	学年	3学年	期	後期
科目責任者	塚本宏樹	科目担当者	塚本宏樹		
自己点検・評価	<p>本科目では、ゲノムの違いによる遺伝性疾患の発症と薬物応答の個体差、異なる個体間に生じる免疫応答と移植医療の関係、再生医療の移植医療への応用、がんゲノムに基づく個別医療（がんゲノム医療）とがん免疫療法の現状・展望、また、これらの医療に応用される遺伝子治療、抗体医薬や細胞医薬等を始めとしたバイオ医薬品について学修した。</p> <p>到達目標は以下のとおりである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 遺伝子治療の原理、方法・手順、現状、倫理的問題点を概説できる。 2. 遺伝的素因による薬物応答の個体差について例を挙げて説明できる。 3. 移植医療の原理、方法・手順、現状、ゲノム情報の取り扱いに関する倫理的問題を概説できる。 4. 移植医療に関わる免疫反応（拒絶反応・免疫寛容）を説明できる。 5. がんゲノムに基づく個別医療とがん免疫療法の現状を説明できる。 <p>本科目は、3年前期までの必修科目、特に、免疫学、分子生物学の知識と理解を基盤に、生化学、薬理学、薬物代謝学、微生物学等の基礎科目の履修を前提とした分野横断的な発展科目である。したがっ</p>				

	<p>て、既修科目の知識や理解が不十分であると本科目の到達目標の達成は困難である。そのような事態も想定し、初年度の授業は、全8回を遺伝性疾患・遺伝子治療、ゲノム薬理、移植医療、がんゲノム医療に大別し、代表的な具体例を例示するとともに復習も念頭に置き授業を行った。特に、移植医療、がんゲノム医療の内容は近年発展著しいがん免疫療法等、免疫学の知識や理解が必要不可欠であることから、重点的に時間を配分して授業を計画した。また、学生の知識と理解を早期に図り、授業の早期復習を促す目的で、第6回に小テスト（最終評価の25%）を実施した。</p> <p>授業における工夫としては、学生が授業内容を予習復習できるように授業資料を事前にWEB掲載し、不足と思われる発展的な内容は授業後に補足資料と解説動画をWEB掲載した。また、分野横断的内容であることに配慮し、授業内容が漫然と幅広い内容にならないよう、授業を体系化し代表的な具体例も交えながら授業を展開させた。学生の予習復習、各回授業で理解してほしい要点やポイントを明確にするため、質問形式の要点資料を配布（WEB掲載）し、自己学習を促した。</p>
<p>今後の対応</p>	<p>本年度が開講初年度であったが、学生から受ける質問や薬学演習の成績から察するに既修内容の十分な理解や知識の定着が不十分な学生が予想以上に多いことが懸念された。実際、第6回の小テストの成績は想像以上に悪く平均点は60点に及ばなかった。特に、免疫関連の内容やウイルスベクターを用いた遺伝子治療の理解に乏しい傾向が顕著であった。このような状況が判明したため、無記名で補講の希望調査をした上で本科目の理解に必要な既修内容について1回の補講（90分）を時間外に実施した。任意の出席にも関わらず履修者の4-5割が参加し、学生なりの向学心と焦りを実感した。来年度も補講は検討するが、本来このような事態は好ましくない。可能な限り授業時間内で既修内容を復習し、本科目が掲げる到達目標の達成を目指したい。</p> <p>一方で、授業後半回は既修内容の復習を重点的に実施したため当初予定した細胞医薬、がん免疫療法に関する授業内容に十分な時間を配分することができなかった。該当内容は定期試験範囲から除外し動画視聴にとどめたことから必修科目として不十分になったことは反省すべき点である。</p> <p>小テスト・定期試験の成績が低調な結果であるにも関わらず、学生授業評価では既修内容の理解や整理、初めて理解できた、授業が楽しい等、好意的な意見が多い。これらの意見も考慮すると、本科目は発</p>

	展的な内容は最小限にとどめ、コアカリキュラムに必要な既修内容の復習を重点に、知識と理解の定着、応用できる能力の醸成を目的とする授業内容に修正すべきと考える。
--	--

科目名	化学療法学	学年	3学年	期	後期
科目責任者	多田納豊	科目担当者	西村信弘		
自己点検・評価	<p>本科目は、病原微生物および寄生虫に作用する医薬品の薬理学的基礎知識（薬理作用、機序、抗菌スペクトル、主な副作用、相互作用、組織移行性）および疾患の病態・薬物治療に関する基本的知識を修得し、治療に必要な情報収集・解析および医薬品の適正使用に関する基本的事項を修得することを目的とする科目である。</p> <p>当科目の前半（8回）は、種々の化合物の種類・構造・性質・作用機序を「薬理学的観点」から、また、それぞれの薬物に対する耐性化のメカニズムを「生物学的観点」から授業し、後半（7回）は、臨床現場での化学療法の実際に則して、感染症に対する治療薬の選択や副作用などについて、「薬物治療学的観点」から授業した。この様に、当科目は、「どのような薬物があり、それらの薬物を感染症・病原体に対してどの様に選択するのか」について、基礎から臨床への2段構成で授業を実施した。</p> <p>薬物名とその性質・特徴の多くは暗記が必要であるが、化学構造から性質が理解できるものや、薬物名に反映されるものが多くあるため、薬物名は構造式とともに記憶することを求めた（側鎖の特徴を含めて化学構造式をしっかりと覚える内容はアドバンストの内容であると理解している）。特に前半は、副作用や作用機序を、薬物の構造に基づいて「理解」するための説明を丁寧に行うことを心掛けた。また、後半は、臨床における薬物の選択について、薬物の病原体に対する親和性だけではなく、副作用の観点や薬剤耐性菌出現抑制の観点、患者の状態に基づく選択の仕方などを説明し、現場で必要な知識の修得を目指した。</p> <p>当科目は、今年度が初めての開講であり、授業のペース配分に苦労した。特に、覚えるべき内容を「理解するために丁寧に説明」すると、設定されている回数内に講義を取める事が難しく、早口で行わざるを得ず、また一度の情報量が多い授業となってしまった。そのため、補助的に、一部の講義は録画し、復習のために動画を視聴できるようにした。動画の提供は学生に好評であり、復習に寄与できたと考えられる。また、講義内容の重要ポイントの理解、知識の定着や自主学習の</p>				

	方向性を確認してもらうことを目的として、 Google フォームを活用した確認問題を講義開始時に実施した。この際に、学生の理解の向上を目的として、正答率を基に適宜追加説明・解説を行った。この取り組みは学習の一助となっていると考えられる。
今後の対応	<p>動画の活用や確認問題の実施と解説は、学修に一定の効果があると考えられるため、部分的にでも継続して行う。</p> <p>また、3年生前期の「病原微生物学」の知識が必要な科目であるため、その繋がりをより明確に示し、理解を深め、記憶の定着をより強固にすることを旨とする。</p> <p>授業アンケート結果で気になる点として、学生が自身で授業内容をまとめる事を放棄している様子が伺える。復習時間が1時間にも満たない学生が半数以上もいる状況を改善する方法を考える必要があると思われる。</p>

科目名	疾病と病態生理学I	学年	2 学年	期	後期
科目責任者	長谷川雄	科目担当者	吉良潤一、緒方勝也、今村友裕		
自己点検・評価	<p>病態生理学的知識に基づいた疾病の理解は、臨床現場にて薬剤師として適切な服薬管理・指導をする際の基盤となる。本科目は臨床経験が豊富な脳神経外科医・脳神経内科医が担当している。講義内容においては特に脳神経系、感覚器系、内分泌系疾患の中で将来診療の中で遭遇する頻度が多く標準的な知識が必要な疾病や症候を選び、学生にその背景や病態生理について学んでもらい、試験を終えた後にそれらを概説できることを主目的に講義を行った。</p> <p>疾患の理解は、患者との信頼関係を結ぶ上で重要である上多職種の医療従事者が共有しなければならない知識でもある。従って、基本的内容は医療従事者の共通言語として卒業時には必ず取得すべきである。本科目の講義において、暗記に頼ることなく疾患に興味を持ちながら学習できるように、疾病の病態生理学的理解が深まることを念頭に疫学や症状についても講義、疾患を網羅的に理解できるスライド作成にも努めた。</p> <p>その結果、本試験では9割以上の学生が合格しており昨年同様アンケート結果が上々であったことから、教員が求めている一定レベル以上の知識獲得を学生は達成できたと判断した。一方、今後も学生の知識取得の視点に立った教育を行っていくことが肝要と考えている。</p>				
今後の対応	本年度の結果を鑑み、大きく方針を変える必要はないと考えている。一方、疾患は多岐にわたる上同じ疾患であっても患者によって症状は				

	<p>多彩である。従って、基礎となる病態生理学的知識を獲得した上で、将来個々の患者の訴えに柔軟に対応できるような知識取得にも取り組んでいきたいと考えている。具体的には、類縁疾患との相違点や鑑別に必要な項目についても取り入れたい。</p> <p>本科目はオムニバス形式の授業であり、各教員の臨床的見地に基づいた講義に柔軟性も持たせるため、参考書は明示しているものの現在教科書は指定していない。もっと自己学習をしたい学生や勉強の仕方がわからない学生の声を傾聴し、必要ならば教科書を指定することも考慮しながら、さらなる学生の理解度アップを念頭に今後も継続的に学生の視点に立った講義に取り組んでいきたい。</p>
--	--

科目名	疾病と病態生理学II	学年	3学年	期	前期
科目責任者	梶岡俊一	科目担当者	岸拓弥、今村友宏		
自己点検・評価	<p>本コースは、循環器を中心とし、消化器、眼、皮膚、腎、泌尿器と多岐にわたって学ぶコースであった。科目担当者で話し合い、細かいところは別にして、実際に臨床で、一生覚えておいて欲しいことに重点をおいて、講義を重ねた。岸教授の講義内容のおかげもあり、それに見習う形で、講義を継承できた。学生アンケートの評判もよく、薬学部でのグットティーチングを獲得できた</p>				
今後の対応	<p>今年度は、2期目の講義となり、かなり余裕を持って準備できるはずで、google クラスルームにも早めに掲載したいと思っている、評判の良かったプリント配布も続けたいと考えている。また、臨床症例を提示しながらの講義は、評判がよかったので、今後も続けていく予定である。</p>				

科目名	疾病と病態生理学III	学年	3学年	期	後期
科目責任者	太田昭一郎	科目担当者	外須美夫		
自己点検・評価	<p>今日の薬剤師に必要とされるのは、患者の基本情報、症状、検査データ等の情報を十分に活用した薬物治療方針の確認であり、ときには薬学的知見と科学的根拠に基づいて適切な処方を提案することも求められる。</p> <p>本科目では、呼吸器系、消化器系、血液系、免疫系、骨・関節、皮膚、眼の主な疾患について、病態生理を理解し、症状、診断から治療の基本を説明できることを到達目標として、種々の疾患の病態生理と、薬剤がそれに及ぼす影響を学習し、医師と協力して様々な処方シ</p>				

	<p>ーンに対応できる薬剤師としての実践的な能力を養成するための講義を行った。コアカリキュラム外の本学独自の内容としては、麻酔による疼痛制御と病態生理への影響を学び、チーム医療に寄与できる薬剤師の能力を高めた。</p> <p>学習の流れは以下のようにした。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 講義の前週に講義資料を配布し予習課題を与え、講義の前日までに予習を行わせた。 2. 講義を復習と位置付け、予習で理解に至らない点や疑問点を可及的に解消させた。 3. 講義の終盤に小テストを解かせ、解説を行い、知識と理解の再確認を行った。 4. 講義終了後の任意の時間帯で再度の復習を行うことを促した。 <p>以上のように、同一内容を短期間に頻回に繰り返して学習することにより理解と知識の定着をより確実にさせた。定期試験では6名の全般に成績不良な学生を除いて合格しており、概ね予定した指導と期待する学習が実践できたと考えている。</p> <p>初年度であったために、講義資料の作成や学生への提示が遅れがちになった時期があったことは、次年度に改善する必要がある。</p>
今後の対応	<p>講義資料の提供を適時とし、今年度と同様の指導を行うが、成績下位者の理解度を深めるために、基本的事項を平易化した解説も適宜加えていく。</p>

科目名	臨床検査医学	学年	3学年	期	前期
科目責任者	太田昭一郎	科目担当者	太田昭一郎		
自己点検・評価	<p>現代の医療は臨床検査のデータなくしては成り立たない。薬剤師にとっても検査データを読み解き病態を把握する能力は重要であり、それをもって薬剤処方の確認や副作用の発現防止に寄与できる。本科目では、①臨床検査の評価指標を説明できること、②主な検査の測定原理と意義を説明できること、③代表的な疾患における検査値の変化を説明できること、を到達目標として、臨床検査の基礎知識と主な検査項目、および代表的な疾患における検査の意義とデータの読み方について教授した。コアカリキュラム外の本学独自の内容としては、臨床検査の評価指標と、遺伝子検査についての項目を加え、チーム医療や最新検査に寄与できる薬剤師の能力を高めた。さらに、国家試験の症例問題の対応力を向上させるため、講義の数回をRCPC形式とし、検査データから病態を読み解く訓練を行った。</p>				

	<p>学習の流れは以下のようにした。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 講義の前週に講義資料を配布し予習課題を与え、講義の前日までに予習を行わせた。 2. 講義を復習と位置付け、予習で理解に至らない点や疑問点を可及的に解消させた。 3. 講義の終盤に小テストを解かせ、解説を行い、知識と理解の再確認を行った。 4. 講義終了後の任意の時間帯で再度の復習を行うことを促した。 <p>以上のように、同一内容を短期間に頻回に繰り返して学習することにより理解と知識の定着をより確実にさせた。定期試験では3名の全般に成績不良な学生を除いて合格しており、概ね予定した指導と期待する学習が実践できたと考えている。</p> <p>初年度であったために、講義資料の作成や学生への提示が遅れがちになった時期があったことは、次年度に改善する必要がある。</p>
今後の対応	<p>講義資料の提供を適時とし、今年度と同様の指導を行うが、成績下位者の理解度を深めるために、基本的事項を平易化した解説も適宜加えていく。</p>

科目名	臨床検査医学実習	学年	3学年	期	後期
科目責任者	長谷川雄	科目担当者	太田昭一郎、緒方勝也、梶岡俊一、岸拓弥、永倉透記、平木洋一、斎藤秀俊、今村友裕、柴田健太郎、福田光良		
自己点検・評価	<p>本実習の目的は、個々の患者に適切な薬物を選択する際の基盤となる人体の生理機能や疾病の病態生理の基本を理解することである。</p> <p>まずオリエンテーション時、実習の概要を説明した上で「臨床検査医学実習の被検者となることについての同意書」を全員から得た。実習項目は以下の7つに設定、①血液学・代謝検査：血球の観察、血糖値測定②生理機能検査1：血圧測定・脈拍③尿検査：尿試験紙検査④生理機能検査2：肺・心臓の聴診と心電図⑤初期救命救急講習とワクチン接種者の実技と心得⑥血圧・心拍数に対するカフェインの効果⑦呼吸機能検査、実習班を26-7人の4班に分け、4号館3階実習室と高木病院4階シュミレーションセンターを利用して上記項目を順番に行った。実習点はレポートとマークシートを利用した実習確認試験の2つを総合して評価した。</p> <p>各教員がこれまでの経験に基づき実習を展開しながら学生が自ら</p>				

	手を動かすことを目指した。コロナ禍での実習となったが滞りなく遂行可でき、実習確認試験も全員合格点を取った。以上から、本実習の主目的である人体の生理機能を体感してもらい体得することが出来たと考えている。
今後の対応	<p>大田原キャンパス薬学部の実習書を参考にしながらも本年度本学で初めて開講する実習であり、全てが手探りであった。実習に係る同意書の取り方、実習に必要な物品の確保、教員の配置等数多くの決め事を解決する必要があったが、教員全員の協力によって大きな問題なく遂行できた。</p> <p>高学年となった学生の実習態度は極めて良好であり、各自が真摯に臨床的生理学的知識を学んでくれたと思う。来年度も基本的には本年と同様の内容を行いながら、時代のニーズにあった改良を加えていきたい。</p> <p>一方、本実習は本学科の強みの一つである臨床医が主担当となるものであったが、それぞれ臨床業務の合間をぬって担当したため、副担当のプロパーの教員に多大なる協力を得ることになってしまった。病院側にも多大な迷惑をかけてしまったことや各教員の負担を鑑みて、来年度は学生への実用性を担保したまま業務分担を推し進めていきたい。</p>

科目名	医薬品情報学 I	学年	3学年	期	前期
科目責任者	宗像千恵	科目担当者	永倉透記、一木裕子、朴珍相		
自己点検・評価	<p>本講義では医薬品情報の収集、評価、加工などに関する基本的知識を修得し、それらを活用するための基本的事項を身につけることを目的とした。具体的な内容として、代表的な医薬品情報源について、開発過程で得られる情報、情報検索の方法や情報源の評価について、EBM、情報を加工した情報提供について等を講義した。これらの内容を科目担当者でそれぞれ分担し、14回の講義を実施した。最後の第15回は全体の振り返りの講義を行った。講義資料はGoogle Classroomを用いて学生に事前に配布し、予習を促した。またコロナ禍の中、対面とオンライン併用での講義を数回実施した。</p> <p>医薬品情報においてもICT化が進んでいる現状を学生に認識させるべく、学生所有のスマートホンやタブレットを用いた情報検索の時間を講義内に積極的に設けた。また添付文書やRMP等の情報源は実際の文書を学生に配布し、臨場感を持った講義となるよう心掛けた。</p> <p>本講義は3年前期の講義であるが、学生は2年次まで基礎科目を主</p>				

	<p>として学んできており、「情報」という掴みどころのないものを主題とする本講義に戸惑った学生もいたようであった。そこで講義中に国家試験の過去問を出して考えさせるなどし、講義内の重要箇所を学生が把握しやすいように配慮した。</p> <p>定期試験ではEBMの分野において得点率がやや低い傾向にあった。しかし最終的に不可となった学生は数名であり、ほとんどの学生が医薬品情報の基本的な知識を習得できたと考える。またEBMについては6年次の医薬品情報学Ⅱでも扱う予定であるため、3年次の本講義では全体像の理解までを目標としておりその点は達成できている。</p>
今後の対応	<p>今年度から大きな変更は講義順番の一部入れ替えのみで他についてはおおむね今年度と同様に行う予定である。EBMの分野において得点率がやや低かった点に着目し、講義の順番を入れ替えることで理解度の改善を試みることにした。来年度は情報の検索や評価について講義を行った後に、EBMの講義を実施する予定としている。</p> <p>薬剤師にとって医薬品情報の取得と取捨選択は、今後さらに重要となっていくものと予想する。学生がこの講義で学んだことが将来薬剤師になってから活用できるよう、理解を促していきたい。</p>

科目名	日本薬局方	学年	3学年	期	後期
科目責任者	一木裕子	科目担当者	阿部義人、中矢正、磯田紀之		
自己点検・評価	<p>日本薬局方は重要な医薬品の規格・試験法について医薬品医療機器等法に基づき定めたものであり、医薬品の公定規格書である。本講義では、日本薬局方通則及び物理系・化学系薬学の基礎としての日本薬局方一般試験法について講義を行なった。</p> <p>本講義の到達目標として</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 日本薬局方の意義と内容について説明できる。 2. 日本薬局方通則の意義と内容について説明できる。 3. 代表的な一般試験法の原理と応用例について説明できる。 4. 医薬品各条の純度試験，確認試験，定量法の原理について説明できる。 <p>上記を念頭に置いて、各講義についてあらかじめ授業スライドと特に重要な部分を抜粋した練習問題資料をGoogle クラウドにて配布し、学生が利用可能な形をとった。オムニバス方式で全授業を対面で行い、コロナ関連で授業に出席できない学生については、Zoomによる遠隔授業を行い、対象の学生もオンタイムで授業に参加することができた。</p>				

	<p>本試験では高い平均点を示し、アンケート結果も上々であったため、教員が求めている一定レベル以上の知識獲得はできたと考えている。一方、全体の講義回数が少ないため、一部の学生にとっては消化不良を起こしている可能性もあるため、授業の進行状況に配慮が必要となるかもしれない。</p>
今後の対応	<p>本年度のアンケート結果を鑑み、大きく方針を変える必要はないと考えており、今後も、同様にオムニバス方式で、各専門分野について授業を行っていく予定である。すなわち、各講義資料をGoogle クラウドに本年度より早めに掲載し、各回の担当教員がそれぞれ調整して全内容をバランスよく進める対応を続けていく。また、毎時間、自学で復習することが可能な内容の練習問題資料を配布しているため、質問がある場合には、それぞれ専門分野担当の教員が対応する。また、最終週では、学生の理解力向上のため、全分野に渡る理解しにくい問題の解説を行いたい。</p> <p>成績評価について、定期試験 100%で実施したが、特に問題は見当たらなかったため、来年度も同様のスタイルで取り組む予定である。</p> <p>学生アンケートでは練習問題が役に立ったとの声が多かったため、今後は、練習問題のバリエーションを更に増やし、学生の期待に添える様に対応したい。</p>

科目名	OTC 医薬品概論	学年	3 学年	期	後期
科目責任者	宗像千恵	科目担当者	平木洋一、一木裕子		
自己点検・評価	<p>本講義では前半では概論としてOTC医薬品に関する分類や配置・販売方法などに関する法規、相談応需の方法等を3人で分担し講義した。後半では各論を科目責任者が1人で担当し、様々な症状に対するOTC医薬品の製品、成分、使用方法、選択時の注意点等について講義を行った。各論については薬理学や臨床薬学など他の講義と重なっている部分も多いため、学生がそのつながりを認識できる内容となるよう心掛けた。</p> <p>本講義の特徴として、アクティブラーニングとして3回のTBL (Team based learning) を実施した点がある。TBLでは最初に10問の個人テストを実施した後に、答え合わせをせずにチームテストとして同じ問題を7人の班で考えさせた。続けて問題内容の解説をして理解を深めた後に、その内容をふまえた応用演習問題2問を与えて班で検討を行わせた。個人テスト・チームテストは各薬剤の適用や使用上の注意点等を問う基礎的な問題とし、応用演習問題は模擬症例にどのOTC医薬品を推奨するか検討する問題とした。</p>				

	<p>講義内で実施したアンケートにおいて、TBLは学生に好評であった。一人では解けないような問題でも複数名で意見を出し合って問題が解けたことに学生は達成感を覚えたようであった。また3年生となり徐々に臨床分野の薬学を深めていく中で、模擬患者にOTC医薬品を選択して推奨するという体験は、将来薬剤師になるのだという初めての実感を学生に与えることができたのではないかと考えている。</p> <p>本講義の反省点としては、事前の講義資料配布がぎりぎりとなり学生の予習時間を取れなかった回が複数回あった点があげられる。これについては今後改善を予定している。</p> <p>最後に成績について述べる。定期試験ではCBTレベルを想定し、OTC医薬品に関する基礎的な問題を15回の講義内容から満遍なく出題した。その結果、1名を除く全受講生が合格したことから、本講義の受講により学生はOTC医薬品の基礎部分は身につけられているものと考えている。</p>
今後の対応	<p>全体的な内容については、今年度と同様で実施していく予定としている。TBLについては今年度の結果を踏まえて難易度を微調整する予定である。</p> <p>講義内容の変更については、OTC 医薬品の CM を扱うなどを考慮している。最も身近な医薬品である OTC 医薬品に学生が馴染めるよう、さらなる改善を行っていきたい。</p>

科目名	薬物動態学	学年	3 学年	期	後期
科目責任者	西村信弘	科目担当者	平木洋一、福田光良		
自己点検・評価	<p>薬物動態学は、医薬品や製剤を生体に適用したのち、薬物が生体内に取り込まれ（吸収）、さまざまな臓器に移行し（分布）、そして体内で酵素による化学的変化をうけ（代謝）、やがては体外に除去（排泄）されていくという生体内での薬物の一連の運命を取り扱う講義である。講義内容は、「第1-5回 薬物の吸収」、「第6-7回 薬物の分布」、「第8-10回 薬物の代謝」、「第11-13回 薬物の排泄」とした。第1回～第13回までで薬物の生体内運命の基本事項を学生らに修得させたのち、第14回で生体内運命の過程で起こり得る相互作用について講義した。第15回はこれまでの講義内容から、まとめ、および補足事項を取り扱った。</p> <p>講義に関連した問題は、基礎的な内容から薬剤師国家試験を想定した応用的な内容まで幅広く取り扱った。講義中に取り扱いきれなかった問題は、Google Classroomを利用して学生らに提供した。必要に応じて、次の講義で解答を提示、ならびに解説を行った。講義資料は、Googl</p>				

	<p>e Classroom上にアップロードし、学生が受講期間中、常に閲覧できるようにした。学生らが講義時に理解できなかった内容は、講義終了後や放課後を活用して質問に対応した。</p> <p>新型コロナ感染症が周期的に流行したが、必要に応じてWEBシステムを利用して講義内容を配信することにより、講義を直接受けることができなかった学生にも配慮した。</p>
今後の対応	<p>薬物動態学は、応用薬学に位置する学問であるため、これまでの基礎薬学の知識を必要とする。例えば、pH の変化によるそれぞれの医薬品の分子形・イオン形の存在割合、それぞれの臓器・器官の上皮細胞の種類、生体内に存在する薬物代謝酵素、ならびに薬物吸収に影響する薬物そのものの物理学的性質等を理解していることが必要となる。本講義では、上記した基礎的な事項もできる限り取り扱うようにし、薬物動態学の理解を深められるように配慮した。しかし、学生らは問題を通して理解を深めることよりも、断片的な知識を覚えることに終始していることが見受けられる。そのため、今後は関連問題を厳選して重要事項を伝えるようにし、学生が薬物動態学に対して多角的なアプローチを実践できるように講義を展開していきたい。</p>

科目名	臨床薬学 I	学年	3 学年	期	後期
科目責任者	平木洋一	科目担当者	西村信弘、宗像千恵		
自己点検・評価	<p>臨床薬学 I では、医療の担い手として求められる活動を適切な態度で実践するために、薬剤師の活躍する臨床現場に必要な心構えと薬学的管理の基本的な流れを把握することを目的としている。そのため、薬剤師としての臨床での実践的能力を身に付けるために臨床薬学 I の理解は、臨床現場にて薬剤師として適切な服薬管理・指導をする際の基礎となり、本科目は臨床経験が豊富な薬剤師が担当している。講義内容においては、処方箋の法的位置づけと根拠を習得するとともに、法令・規則の理解と遵守を概説できるよう講義を行った。その上で、病院・薬局における薬剤師業務について臨床実習において要求される、①地域における保健、医療、②福祉の連携体制ならびにチーム医療のスタッフと薬剤師の役割の重要性、③生涯教育の必要性、④処方オーダーリングシステムと電子カルテおよび⑤薬物治療に必要な患者基本情報とその情報源の収集のあり方について講義を重ねた。また、薬剤師として最も重要な知識として代表的な医薬品の効能・効果、用法・用量、代表的な医薬品の警告、禁忌、副作用、相互作用と、処方鑑査並びに疑義照会の流れとシミュレート、講義中に演習問題を解説することにより理解が深まること</p>				

	<p>を念頭に、薬理作用を含め暗記に頼ることなく疾患に興味を持ちながら学習できるように、網羅的に理解できるスライド作成にも努めた。コロナ下であっても、対面授業を継続して行うことができた。本科目は本年度新規に開講されたものであり、教員側が設定した内容に対する学生の理解度がどの程度か試験前に推し量るのが困難であった。しかしながら、本試験では学生は教員の予想を超える点数をとることができており、教員が求めている一定レベル以上の知識獲得はできたと考えている。一方で、薬理学と同時並行して講義を行ったため、難解な医薬品名が多く、一部の学生にとっては消化不良を起こしている可能性も否定できず、それら学生に対する配慮が必要となるかもしれない。</p>
今後の対応	<p>本年度の結果に鑑み、大きく方針を変える必要はないと考えており、次年度以降も同様な講義内容を実施していく予定である。2025 年問題とされている 75 歳以上高齢者の全人口に占める割合は増加をたどる一方である。地域包括ケアシステムにおいて薬剤師に期待される役割も幅広くなっており、薬剤師法、薬機法の遵守を十分に理解してもらう必要がある。また、多種職との連携も一層重要となり、適切な薬物療法の提供が行うことが、患者さんの安心・安全な生活の確保に貢献できることを理解していただきたい。さらに、臨床で使用される医薬品は年々増加しており、相互作用や副作用も新たなメカニズムが関与している。従って、代表する医薬品の副作用、相互作用などのメカニズムを十分理解した上で、多様な医薬品においても対応できるよう取り組んでいきたいと考えている。そのためには、暗記に頼らず理解し興味をもって貰えるよう、さらなる学生の理解度アップを念頭に講義に取り組んでいきたい。</p>

科目名	早期体験実習	学年	1 学年	期	後期
科目責任者	西村信弘	科目担当者	石田卓巳、平木洋一、一木裕子、山本緑、今井竜也、貝塚拓、中矢正、朴珍相、宗像千恵、柴田健太郎、福田光良		
自己点検・評価	<p>施設（病院、薬局、製薬会社工場、薬品卸業流通センター）の見学と薬害に関する講義、そして SGD を組み合わせた実習を計画した。しかしコロナ禍のため製薬工場見学は中止の判断となった。感染対策に配慮したうえで今年は初めて薬局見学を実施することができた。九州山口各県の薬剤師会に協力いただき、帰省先からの見学施設への訪問が実現できた。病院については、グループ病院での見学を予定通りに実施した。また薬害講義ならびに SGD については感染症防止対策に留意しつつ、</p>				

	<p>予定通り実施した。</p> <p>薬局見学が実施できたことは、医療従事者である薬剤師になるための学生のモチベーション醸成にプラスの作用があったと考える。病院見学でも薬剤師に熱心に質問を投げかける学生の姿が見受けられ、実臨床を見学することの効果を実感した。</p> <p>SGD については昨年の反省に従い討論テーマを微修正した。今後も随時改善を加えていく予定である。</p>
今後の対応	<p>今後も感染症の状況に応じた対応が必要であり、その点に十分に留意しつつ可能な限り見学を実施できるよう検討する。</p>

科目名	医療系薬学実習 I	学年	3 学年	期	後期
科目責任者	西村信弘	科目担当者	平木洋一、一木裕子、宗像千恵、福田光良		
自己点検・評価	<p>患者・来局者対応、服薬指導、患者教育などに関する基本的知識、技能、態度を修得するための実習を行った。実習内容は、医薬品情報の検索・収集・評価・加工、薬局での患者対応・薬剤交付、病棟での初回面談・薬剤交付、医師への疑義照会、医療従事者への情報提供、在宅での薬学的管理指導、OCT 医薬品の情報提供であった。各項目をシナリオにしたがって 3-4 名一組でロールプレーを繰り返し行い、代表者が全員の前でロールプレーを披露、評価を受ける手順で行った。説明用のテーブルが実習室に設置されていないため、講義室から移動して使用し、終了後に元に戻すこととして対応した。学生は実際に患者対応や服薬説明、疑義照会などの実践的な知識を学び、ロールプレーでは実践的なスキルを習得するために、悪戦苦闘しながらも充実した実習であったと考える。今回の実習は本学では初めて行ったため、時間配分や備品の調達など不備があったが、予定通りの実習をおこなうことが出来た。最後に、実習試験（筆記）を行い、実習で学んだ知識の確認を行った。</p>				
今後の対応	<p>2023 年度は、実習の運営面を見直し、時間配分など調整する予定である。また、ロールプレー用のテーブルの設置を依頼している。</p>				

科目名	リメディアル教育	学年	1 学年	期	前期
科目責任者	多田納豊	科目担当者	宗像達夫、坂井崇亮		
自己点検・評価	<p>例年、入学選抜試験が様々な形態で実施され、入学者の学力には大きなバラつきがみられる。薬学教育に十分についていける学生が一定数いる一方で、物理・化学・生物・数学という理系科目の基礎学力が不足し</p>				

	<p>ている学生も一定数認められる。毎年、化学、生物、物理の基礎科目で不合格となる者が一定数あり、また、1年目から留年してしまう学生も存在する。このような現状の打開を目的として、1) 入学時に物理・数学、化学、生物のプレースメントテストⅠを実施し、統一の実力試験により新入生の入学時の学力を評価し、2) 物理・数学、化学、生物学の科目毎に成績下位者30名程度（複数科目で下位30程度に当てはまる者もあり、何れか一科目でも成績下位30程度となる学生は計60名程度存在する）を選別し、3) 科目毎に、今後の薬学教育に必要となる基礎領域について再教育（リメディアル教育）を実施した。今年度は、プレースメントテストの結果も踏まえて、「物理・数学」は、①指数・対数、②微分・積分、③束一的性質を、「化学」では、①原子の構造と元素の周期表、②反応係数、③酸・塩基を、「生物」では、①遺伝情報の分配、②動物の刺激の受容と反応、③体内環境（の調節）を範囲とした（各科目3回ずつ、計9回実施した）。なお、今年度の2回目の1年生（留年生）は、前期休学者を除き、全員を全科目の対象者とした。</p> <p>リメディアル教育対象学生は、9月に、各自が受講した対象科目のみプレースメントテストⅡを受験し学習効果の評価を行った。しかしながらプレースメントテストⅡの結果から学習効果を見出すことはできなかった。</p> <p>他方、プレースメントテストⅠのいずれかの科目一つでも成績下位となった者（60名程度）の留年率を指標としてリメディアル教育の効果を検討した結果、過去2年（リメディアル教育未実施年度）はいずれも20%強であったのに対し、今年度（リメディアル教育実施）は9.1%であった。この結果は、リメディアル教育の取り組みが基礎学力の向上に有効である可能性を示していると考えられた。</p>
今後の対応	<p>本年度は、入学時プレースメントテストⅠの成績下位者に対してリメディアル教育を初めて実施し、学力向上に一定の効果がある可能性が示された。基礎学力の向上、ひいては留年率の低下を目指して、来年度も同様にリメディアル教育を実施する。ただし、各学年で科目毎の不得意な領域が変動する可能性もあるため、領域の設定はプレースメントテストⅠの結果を踏まえて適宜変更して実施する予定である。また、極少数ではあるが、プレースメントテストⅠの成績下位者に含まれない学生の中にも留年者が存在するため、リメディアル教育受講者の選抜の条件を現在の方法に固定することなく、状況把握および適切な選抜に努める。</p>

第四部 福岡薬学部研究活動報告

1. 2022年度の研究活動

氏名 (役職)

武田 弘志 (薬学部長・教授)

研究概要

ストレス性精神疾患の病態解明とその新規予防・治療薬の開発に関する研究

近年は、ストレスレジリエンスを制御する分子メカニズムの考究を行っている。

従来の一連の研究から、ストレス抵抗性あるいは適応の形成には、海馬神経細胞の 5-HT1A 受容体が深く関与することを明らかにしてきた。さらに神経化学および分子生物学的検討を重ね、この 5-HT1A 受容体が、海馬ヒストン H3 アセチル化を基盤とした脳機能のエピジェネティクス制御や白血病阻止因子 (LIF) による脳神経細胞におけるミエリンの形成と維持などを介して、ストレス抵抗性あるいは適応の形成に寄与していることを明らかにした。今後、これらの研究成果を基盤にしてストレス性精神疾患の予防あるいは治療に関わる新薬の開発に取り組みたい。

著書

1. 武田弘志, 宮川和也, 辻稔.

I 総論 第2章 行動の生物学的理解 D.行動と遺伝 (エピジェネティクス)
行動医学テキスト (第2版)

編集: 日本行動医学会, (株) 中外医学社, 東京, P.30-35 (2023).

原著論文・総説

【原著論文】

1. Tozaki-Saitoh H, Takeda H, Inoue K. The Role of Microglial Purinergic Receptors in Pain Signaling. *Molecules*, 27, 1919 (2022).
2. Arai I, Tsuji M, Takeda H, Akiyama N, Saito S. Capsaicin suppresses interleukin-31-induced itching partially involved in inhibiting the expression of dorsal root ganglion interleukin-31 receptor A in male mice. *Neurobiol. Pain*, 11, 100088 (2022).
3. Takahashi K, Kurokawa K, Hong L, Miyagawa K, Mochida-Saito A, Iwasa M, Iwasa H, Nakagawasai O, Tadano T, Takeda H, Tsuji M. Antidepressant effects of *Enterococcus faecalis* 2001 through the regulation of prefrontal cortical myelination via the enhancement of CREB/BDNF and NF- κ B p65/LIF/STAT3 pathways in olfactory bulbectomized mice. *J. Psychiatr. Res.*, 148, 137-148 (2022).

4. Miyagishi H, Tsuji M, Miyagawa K, Kurokawa K, Mochida-Saito A, Takahashi K, Kosuge Y, Ishige K, Takeda H. Possible role of transcriptional regulation of 5-HT_{1A} receptor in the midbrain on unadaptation to stress in mice. *Brain Res.*, 1783, 147859 (2022).
5. Kimijima H, Miyagawa K, Kurokawa K, Mochida-Saito A, Takahashi K, Takeda H, Tsuji M. Trichostatin A, a histone deacetylase inhibitor, alleviates the emotional abnormality induced by maladaptation to stress in mice. *Neurosci. Lett.*, 766, 136340 (2022).
6. Takahashi K, Kurokawa K, Hong L, Miyagawa K, Mochida-Saito A, Takeda H, Tsuji M. Correlation between the reduction in hippocampal SirT2 expression and depressive-like behaviors and neurological abnormalities in olfactory bulbectomized mice. *Neuroscience Research*, 182, 76-80 (2022).
7. Takahashi K, Hong L, Kurokawa K, Miyagawa K, Mochida-Saito A, Takeda H, Tsuji M. Brexpiprazole prevents colitis-induced depressive-like behavior through myelination in the prefrontal cortex. *Prog. Neuropsychopharmacol. Biol. Psychiatry*, 121, 110666 (2023).
8. Takahashi K, Tsuji M, Nakagawasai O, Katsuyama S, Hong L, Miyagawa K, Kurokawa K, Mochida-Saito A, Takeda H, Tadano T. Donepezil prevents olfactory dysfunction and α -synuclein aggregation in the olfactory bulb by enhancing autophagy in zinc sulfate-treated mice. *Behav. Brain Res.*, 438, 114175 (2023).
9. Umeda A, Miyagawa K, Mochida-Saito A, Takeda H, Ohira Y, Kato T, Okada Y, Kotani K. Effects of smoking cessation using varenicline on the serum concentrations of oxidized high-density lipoprotein : Comparison with high-density lipoprotein cholesterol. *PLOS ONE*, 17(11), e0277766 (2022).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 高橋浩平, 洪麗花, 黒川和宏, 宮川和也, 持田(斎藤) 淳美, 武田弘志, 辻稔. プレクスピプラゾールは前頭前皮質 ERK1/2—CREB—BDNF—TrkB 経路を介したミエリン形成制御により潰瘍性大腸炎誘発性うつ様行動を抑制する. 第 95 回日本薬理学会年会(福岡市) 2022 年 3 月
2. 黒川和宏, 高橋浩平, 宮川和也, 持田(斎藤) 淳美, 武田弘志, 辻稔. クプリゾンの短期暴露はマウスのストレスに対する適応形成を阻害する. 第 95 回日本薬理学会年会(福岡市) 2022 年 3 月
3. 梅田啓, 山根建樹, 宮川和也, 持田淳美, 武田弘志, 稲見茂信, 秋田貴之, 福田聡史, 大平善之. Reflux Aspiration 19 例の臨床的検討. 第 119 回日本内科学会総会(京都府) 2022 年 4 月
4. 黒川和宏, 宮川和也, 持田(斎藤) 淳美, 高橋浩平, 武田弘志, 辻稔. ストレス性精神疾患の性差医療を見据えたストレス誘発ミエリン障害機構の解明. 第 12 回国際医療福祉

大学学会学術大会（大川市）2022年8月

5. 高橋浩平, 黒川和宏, 宮川和也, 持田（斎藤）淳美, 武田弘志, 辻稔. 脳腸関連の概念に基づいたうつ病と脳内ミエリン形成との関連性の解明. 第12回国際医療福祉大学学会学術大会（大川市）2022年8月
6. 持田（斎藤）淳美, 宮川和也, 黒川和宏, 高橋浩平, 武田弘志, 辻稔. Kir6.2 遺伝子がドーパミン神経機能に及ぼす影響. 第12回国際医療福祉大学学会学術大会（大川市）2022年8月
7. 辻稔, 黒川和宏, 高橋浩平, 宮川和也, 持田（斎藤）淳美, 武田弘志. ストレス適応障害機構の解明を指向したクプリゾン処置マウスの病態的特徴の解析. 第12回国際医療福祉大学学会学術大会（大川市）2022年8月
8. 宮川和也, 持田（斎藤）淳美, 黒川和宏, 高橋浩平, 梅田啓, 武田弘志, 辻稔. 睡眠時無呼吸症候群モデルマウスの情動行動特性と脳機能変化. 第12回国際医療福祉大学学会学術大会（大川市）2022年8月
9. 齋藤秀俊, 武田弘志. ストレス負荷による痛覚変容とグリアの解析. 第12回国際医療福祉大学学会学術大会（大川市）2022年8月
10. 宮川和也, 持田（斎藤）淳美, 黒川和宏, 高橋浩平, 梅田啓, 岡田泰昌, 武田弘志, 辻稔. 間欠的低酸素負荷マウスの情動的行動特性と脳機能変化. 第38回日本ストレス学会学術総会（東京）2022年11月
11. 黒川和宏, 高橋浩平, 宮川和也, 持田（斎藤）淳美, 武田弘志, 辻稔. ストレス適応及び非適応モデルマウスにおけるオリゴデンドロサイト転写因子の経時的変化. 第38回日本ストレス学会学術総会（東京）2022年11月
12. 持田（斎藤）淳美, 宮川和也, 黒川和宏, 高橋浩平, 梅田啓, 岡田泰昌, 武田弘志, 辻稔. 脳内ドーパミン神経系の機能調節における Kir6.2 遺伝子の関与. 第38回日本ストレス学会学術総会（東京）2022年11月
13. 高橋浩平, 黒川和宏, 宮川和也, 持田（斎藤）淳美, 武田弘志, 辻稔. 潰瘍性大腸炎に伴発する不安神経症のモデル動物の作成. 第38回日本ストレス学会学術総会（東京）2022年11月
14. 黒川和宏, 高橋浩平, 宮川和也, 持田（斎藤）淳美, 武田弘志, 辻稔. 5-HT_{1A}受容体刺激はストレス非適応マウスにおいて Gab1/GSK3 β シグナリングを介してオリゴデンドロサイト転写因子を誘導する. 第96回日本薬理学会年会（横浜市）2022年11月
15. 高橋浩平, 黒川和宏, 洪麗花, 宮川和也, 持田（斎藤）淳美, 武田弘志, 辻稔. レスベラトロールは脳腸 AMPK 経路の活性化によりデキストラン硫酸ナトリウム誘発性腸炎様所見並びにうつ様行動を抑制する. 第96回日本薬理学会年会（横浜市）2022年11月
16. 野村彩衣, 黒川和宏, 高橋浩平, 宮川和也, 持田（斎藤）淳美, 武田弘志, 辻稔. 塞栓性脳梗塞モデルマウスの学習記憶障害におけるインフラマソームの関与. 第96回日本薬理学会年会（横浜市）2022年11月

依頼講演・招待講演 他

【基調講演】

1. 武田弘志. 「薬学へのいざない—薬剤師の近未来図—」. 国際医療福祉大学福岡薬学部説明会（国際医療福祉大学大川キャンパス, 大川市）2022年7月
2. 武田弘志. 「薬学のすすめ—近未来の薬学教育—」. 国際医療福祉大学福岡薬学部説明会（国際医療福祉大学大川キャンパス, 大川市）2022年10月

受賞

1. 日本ストレス学会准奨励賞受賞
持田（斎藤）淳美,（共同受賞）武田弘志. 2022年11月

所属学会

1. 日本ストレス学会
2. 日本薬理学会
3. 日本神経精神薬理学会
4. 日本緩和医療薬学会
5. 国際医療福祉大学学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 日本ストレス学会理事長（元会長、元理事）
2. 日本薬理学会名誉会員（元理事、元関東部会長）
3. 日本神経精神薬理学会名誉会員（元会長、元理事）
4. 日本緩和医療薬学会名誉会員（元理事長、元会長）
5. 国際医療福祉大学学会理事（元会長）
6. 科学技術振興機構（JST）専門委員
7. 日本学術振興会専門委員

氏名（役職）

阿部 義人（教授）

研究概要

タンパク質を「観る」（構造生物学）および「創る」（タンパク質工学）を目的として以下の研究を行っている。主にタンパク質多量体化の調節機構を薬学的観点から調べている。

抗 ATP 受容体 P2X4 抗体他、抗体の物性および利用に関する研究

神経障害性疼痛に関与すると考えられている ATP 受容体 P2X4 に対する抗体を作成し、本抗体の物性およびその利用法の検討を行っている。本抗体により P2X4 をターゲットにした体内動態調査および阻害剤創製を目指している。今年度は、本抗体の大腸菌発現系の改良を行った。

大腸菌 DNA 複製機構に関する構造生物学研究

大腸菌における複製開始および再開始機構の構造生物学的解析を行い、生命現象を分子およびアミノ酸のレベルで明らかにすることを目指している。今年度は、複製再開始因子 DnaT の多量体化機構に関して調べ、高品質タンパク質結晶生成実験 (JAXA との共同研究) により、宇宙空間におけるタンパク質結晶化をおこなった。

著書

1. 阿部義人. 第 12 章 免疫と妊娠、老化. 薬系免疫学（改訂第 4 版）, 植田正, 前仲勝実編, 南江堂, 東京, p197-204 (2022). 分担著者

原著論文・総説

【原著論文】

1. Muroi Y, Aburaya I, Kiyokawa Y, Watanabe K, Wada K, Abe Y, Sugimoto Y. Stability of hen egg-white lysozyme during embryonic development. *Biosci. Biotechnol. Biochem.*, 86(10), 1353-1361 (2022).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 阿部義人. 抗体 Fab の立体構造を基盤とした大腸菌発現系の改良. 第 12 回国際医療福祉大学学会学術大会（大川、Web 開催）2022/8/28

依頼公演・招待公演 他

1. 阿部義人. タンパク質を「見る」「創る」. 令和4年度 九大薬友会関東支部講演会, 2022/5/22

受賞

1. 日本生化学会 2022年度 JB 審査員賞

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本生化学会
3. 日本分子生物学会
4. 日本生物物理学会
5. 日本蛋白質科学会
6. 日本神経科学学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 日本生化学会 九州支部 支部評議員

研究費獲得状況

1. 基盤研究 C, 抗 P2X4 抗体 Fab の構造を基盤とした大腸菌発現の改良および Fab の高機能化, 2021 年度～2023 年度, 研究代表者
2. 国際医療福祉大学学内研究費, 立体構造を基盤とした antiP2X4 抗体 Fab 生産法の改良, 2022 年度, 研究代表者

氏名（役職）

石田 卓巳（教授）

研究概要

環境汚染化学物質による生体内メタルホメオスタシスのかく乱に関する研究

ダイオキシン類などの環境汚染化学物質が生体内微量必須元素のホメオスタシスに与える影響を明らかにする。環境汚染化学物質は、現在でも様々な経路を介してヒトに暴露されている。このため、その影響を明らかにすると共に対策を講ずることは、疾病を予防し健康を維持するうえで重要な課題である。本研究の成果は、環境因子を起点とした疾病の発症機序の解明に新たな知見を提示するものである。

原著論文・総説

【原著論文】

1. Sawai M, Miyauchi Y, Ishida T, Takechi S. Dihydropyrazine suppresses TLR4-dependent inflammatory responses by blocking MAPK signaling in human hepatoma HepG2 cells. *J. Toxicol. Sci.*, 47(9), 381-387 (2022).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 石田卓巳. がん細胞の新規生存戦略としての AhR 依存的亜鉛ホメオスタシスかく乱の解明. 第 12 回国際医療福祉大学学会学術大会（大川・Zoom）2022/8/28
2. 澤井円香, 多田納豊, 石田卓巳, 武知進士. 生体内 TLR4 シグナル活性化に対する糖化産物ジヒドロピラジン (DHP) の抑制効果. 第 12 回国際医療福祉大学学会学術大会（大川・Zoom）2022/8/28
3. 澤井円香, 伊藤俊治, 吉田雅紀, 周健融, 宮内優, 石田卓巳, 武知進士. ジヒドロピラジンによる TLR4 ネガティブフィードバック機構の制御. フォーラム 2022: 衛生薬学・環境トキシコロジー (Online Meeting) 2022/8/30~8/31
4. 木庭玉絵, 大城彩乃, 亀崎史, 堀添彩香, 宮内優, 澤井円香, 石田卓巳, 武知進士. 糖化産物ジヒドロピラジン類による小胞体ストレス応答. フォーラム 2022: 衛生薬学・環境トキシコロジー (Online Meeting) 2022/8/30~8/31
5. 古賀貴之, 廣村信, 香川正太, 平尾雅代, 竹田修三, 石井祐次, 石田卓巳, 長島史裕, 小武家優子, 戸田晶久, 副田二三夫. 果糖過剰摂取による NAFLD への Selenbp1 欠損が及ぼす影響の解析. フォーラム 2022: 衛生薬学・環境トキシコロジー (Online Meeting) 2022/8/30~8/31

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本生化学会

研究費獲得状況

1. 国際医療福祉大学学内研究費, トリプトファン代謝物キヌレニンによる AhR の活性化とその生理的意義の解明, 2022 年度, 研究代表者
2. 基盤研究 C, がん細胞に特徴的な亜鉛恒常性の破綻における AhR の役割とその細胞機能への影響, 2022 年度～2024 年度, 研究代表者

氏名（役職）

猪部 学（教授）

研究概要

サイトカインの産生制御機構に関する研究（金沢大学 医薬保健研究域・薬学系 松永グループとの共同研究）

ゲノム編集技術を利用して、サイトカイン遺伝子アレルに蛍光タンパク質遺伝子を導入し、サイトカイン産生を簡便に解析できるモデル細胞系の構築を目指している。これまでに、IL-4 遺伝子の 3'UTR 領域に、miRFP640 蛍光タンパク質遺伝子をノックインした肥満細胞株(P815)の作製に成功している。Th2 型サイトカインとして、さらに IL-10 遺伝子に mCherry 蛍光タンパク質遺伝子を組み込んだターゲティングベクターを新たに構築した。今後、複数の Th2 サイトカインについて、産生調節機構を同時に解析することが可能になると期待している。

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 猪部学, 山田基晴. Th2 型サイトカインレポーター細胞モデルの構築と外因性影響物質の探索. 第 12 回国際医療福祉大学学会学術大会（大川）2022/8/28

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本免疫学会
3. 日本分子生物学会

研究費獲得状況

1. 国際医療福祉大学 学内研究費, Th2 型サイトカインレポーター細胞モデルの構築と外因性影響物質の探索, 2022 年度, 研究代表者

氏名（役職）

太田 昭一郎（教授）

研究概要

血清ペリオスチン測定による炎症疾患診断キットの開発

細胞外マトリクス分子の一種であるペリオスチンがアレルギー性炎症や間質性肺炎等の線維化疾患の増悪に関わっていることを示し、血清ペリオスチン測定キットを作製して間質性肺炎における保険適用を申請中である。

血清 SCCA2 測定によるアトピー性皮膚炎診断キットの開発

扁平上皮系腫瘍マーカーである SCCA2 がアレルギー性疾患で上昇することを示し、血清 SCCA2 測定キットを作製して小児アトピー性皮膚炎での保険適用を得た。

B 細胞の運動性を制御する分子の研究

B 細胞の接着のトリガーとなる新規分子を同定し、接着機構の一端を解明することによって、免疫応答における B 細胞の動態を詳細に解析するとともに、当該分子を免疫異常病態の制御標的として検査および治療に応用を目指している。

原著論文・総説

【原著論文】

1. Takai M, Ono J, Okamoto M, Fujimoto K, Kamei A, Nunomura S, Nanri Y, Ohta S, Hoshino T, Azuma A, Izuhara K. Establishment of a novel ELISA system for measuring periostin independently of formation of the IgA complex. *Ann. Clin. Chem.*, 59(5), 347-356 (2022).

【総説】

1. 森山良太, 太田昭一郎. アレルギー-overview. *臨床検査*, 66(9), 1000-1006 (2022). 査読なし

特許

【査定】

1. 太田昭一郎, 他. Method for detection of idiopathic interstitial pneumonia, 米国 US8420310.
2. 太田昭一郎, 他. Method for detection of idiopathic interstitial pneumonia, ヨーロッパ EP2295599.
3. 太田昭一郎, 他. 特発性間質性肺炎の検出方法, 日本国第 5717178 号.
4. 太田昭一郎, 他. アトピー性皮膚炎の検出方法および予防・治療剤のスクリーニング方

法, 日本国第 5522717 号.

5. 太田昭一郎, 他. 非特発性間質性肺炎の治療薬のスクリーニング方法, 日本国第 5632994 号.
6. 太田昭一郎, 他. SCCA2 濃度測定によるアレルギー疾患の検査方法, 日本国第 5750646 号.
7. 太田昭一郎, 他. 慢性副鼻腔炎の検出方法, 日本国第 5871228 号.
8. 太田昭一郎, 他. Antibody capable of binding to specific region of periostin, and method of measuring periostin using the same, 米国 US9347954.
9. 太田昭一郎, 他. Antibody capable of binding to specific region of periostin, and method of measuring periostin using the same, ヨーロッパ EP2754672.
10. 太田昭一郎, 他. ペリオスチンの特定領域に結合する抗体及びこれを用いたペリオスチンの測定方法, 日本国第 6183809 号.
11. 太田昭一郎, 他. Method for screening for a therapeutic agent for idiopathic interstitial pneumonia, 米国 US9482676.
12. 太田昭一郎, 他. Method for detecting chronic sinusitis, ヨーロッパ EP2775303.
13. 太田昭一郎, 他. Method for detecting chronic sinusitis, 米国 US9625451.
14. 太田昭一郎, 他. 慢性副鼻腔炎の検出方法, 日本国第 5871228 号.
15. 太田昭一郎, 他. アトピー性角結膜炎の検出方法, 日本国第 6381013 号.
16. 太田昭一郎, 他. 試料に含まれるペリオスチンの測定試薬、ペリオスチン測定用前処理剤、ペリオスチン測定方法及びペリオスチン測定の感度の改善方法, 日本国第 7006599 号.

【出願】

1. 太田昭一郎, 他. Method for detecting cholangiocellular carcinoma and method of screening for prophylactic or therapeutic agent, WO2011068176.
2. 太田昭一郎, 他. Method for detection of idiopathic interstitial pneumonia, WO2009148184.
3. 太田昭一郎, 他. Antibody capable of binding to specific region of periostin, and method of measuring periostin using the same, WO2013035799.
4. 太田昭一郎, 他. Drugs for diseases caused by periostin expression excluding ophthalmic diseases, and uses thereof, WO2015046451.
5. 太田昭一郎, 他. 眼科疾患を除くペリオスチン発現に起因する疾患用医薬、およびその用途, 特願 2015-539389.
6. 太田昭一郎, 他. Method for detecting chronic sinusitis, WO2013065671.
7. 太田昭一郎, 他. Method for detecting atopic keratoconjunctivitis, WO2015060206.
8. 太田昭一郎, 他. Reagent for measuring periostin included in sample, pretreatment agent for periostin measurement, method for measuring periostin, and method for improving sensitivity of

periostin measurement, WO2018030456.

所属学会

1. 日本臨床検査医学会
2. 日本臨床化学会
3. 日本免疫学会
4. 日本アレルギー学会

研究費獲得状況

1. 基盤研究 C, 包括的線維化疾患診断を目指したペリオスチン測定システムの開発, 2020年度～2023年度, 研究代表者
2. 国際医療福祉大学学内研究費, 新型コロナウイルスの変異に非依存的な中和モノクローナル抗体の作製, 2022年度, 研究代表者

氏名（役職）

緒方 勝也（教授）

研究概要

側頭葉への経頭蓋磁気刺激による自律神経機能変化を評価する研究

側頭葉の自律神経機能に与える影響に関する検討を行った。今年度は、健常被験者を対象に左右側頭部を経頭蓋磁気刺激し、心電図を記録し心拍変動を評価した。経頭蓋刺激前後では変化がなかったが右側頭部刺激中には左側頭部刺激中と比較して心拍数が上昇することが明らかとなった。また脳波変化も評価し、大脳皮質活動と自律神経機能との関連を今後明らかにする。

一次運動野に対する経頭蓋磁気刺激と経頭蓋交流電流刺激の同期刺激の研究

一次運動野の経頭蓋磁気刺激と経頭蓋交流電流刺激の相互作用に関する研究を行った。経頭蓋交流電流刺激は 10 Hz, 20 Hz での刺激を行い、交流波形の山あるいは谷といった位相に合わせて経頭蓋磁気刺激を行うと 20 Hz では変化せず、10 Hz で効果に変化することが明らかとなった。これより、皮質機能のより効果的な賦活法の開発を目指す。

バイノーラルビートによる聴覚誘発脳磁界反応の計測（九州大学大学院 検査技術学分野 重藤寛史教授、九州大学大学院 人文科学研究院 山田絵美助教との共同研究）

健常成人を対象として、聴覚性幻覚の 1 つであるバイノーラルビートに特徴的な脳活動を脳磁図で評価する。脳磁図は高精度な信号源推定が可能であり、バイノーラルビートが生じる際の両側側頭葉を中心とする大脳皮質活動、および両側側頭葉の相互作用を詳細に検討し、その神経基盤を明らかにする。また自律神経変調の可能性が指摘されており、バイノーラルビートによる心拍変動が生じる際に特徴的な脳活動が観察されるか検討する。

原著論文・総説

【原著論文】

1. Mitsudo H, Hironaga N, Ogata K, Tobimatsu S. Large-scale cortico-cerebellar computations for horizontal and vertical vergence in humans. *Sci. Rep.*, 12, 11672 (2022).
2. Nakazono H, Taniguchi T, Mitsutake T, Takeda A, Yamada E, Ogata K, Phase-dependent modulation of the vestibular-cerebellar network via combined alternating current stimulation influences human locomotion and posture. *Front. Neurosci.*, 16, 1057021 (2022).
3. Oka S, Ikeda T, Mitsutake T, Ogata K, Goto Y, Unilateral cathodal transcranial direct current stimulation over the parietal area modulates postural control depending with eyes open and closed. *PLoS One*, 17, e0269145 (2022).
4. Okadome T, Yamaguchi T, Mukaino T, Sakata A, Ogata K, Shigeto H, Isobe N, Uehara T, The

effect of interictal epileptic discharges and following spindles on motor sequence learning in epilepsy patients. *Front. Neurol.*, 13, 979333 (2022).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 緒方勝也. 経頭蓋交流電流刺激 (tACS) による一次運動野刺激: 経頭蓋磁気刺激による評価と相互作用. 第 27 回日本基礎理学療法学会学術大会 (京都) 2022/10/1
2. 緒方勝也, 松野豊, 平田大勝, 池田拓郎, 後藤純信. 正中神経と尺骨神経同時刺激による手内筋 F 波の相互作用. 第 52 回日本臨床神経生理学会学術大会 (京都) 2022/11/25
3. 岡真一郎, 池田拓郎, 濱地望, 緒方勝也, 後藤純信. 頭頂部に対する経頭蓋交流電流刺激がトレッドミル歩行後の身体動揺に与える影響. 第 52 回日本臨床神経生理学会学術大会 (京都) 2022/11/26

所属学会

1. 日本臨床神経生理学会
2. 日本神経学会
3. 日本内科学会
4. 日本生体医工学会
5. 日本リハビリテーション医学会
6. 日本てんかん学会
7. 日本作業療法研究学会
8. 認知神経科学会
9. Society for Neuroscience
10. Institute of Complex Medical Engineering

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 日本臨床神経生理学会代議員、教育委員会委員、認定試験問題作成委員
2. 日本生体医工学会九州支部評議員
3. Institute of Complex Medical Engineering 評議員

研究費獲得状況

1. 基盤研究 C, 脳状態依存刺激を活用した手指分離運動の神経基盤解明とリハビリへの応用, 2021 年度～2025 年度, 研究代表者
2. 基盤研究 B, 運動野に可塑性を誘導する新規非侵襲的脳刺激法の開発: その神経基盤と臨床応用, 2022 年度～2026 年度, 研究分担者

氏名（役職）

梶岡 俊一（教授）

研究概要

平滑筋の収縮弛緩に関する研究、幹細胞治療の研究、尿細菌叢の研究

平滑筋の収縮弛緩に関する研究を、基礎から臨床に関連して幅広く検討を行っている。さらに今年度は、幹細胞治療では、歯肉幹細胞を用いての骨化誘導、3D バイオプリンターへの適応に成功した。また、尿細菌叢の研究では、腎癌の腫瘍マーカーとして、尿細菌叢が用いられることの可能性を展開した。

原著論文・総説

【原著論文】

1. Nagakura Y, Hayashi M, Kajioka S. Lifestyle habits to prevent the development of benign prostatic hyperplasia: Analysis of Japanese nationwide datasets. *Prostate Int.*, 10(4), 200-206 (2022).
2. Lee K, Shiota M, Takamatsu D, Ushijima M, Blas L, Okabe A, Kajioka S, Goto S, Kinoshita F, Matsumoto T, Monji K, Kashiwagi E, Inokuchi J, Oda Y, Eto M. Correlation between extended pelvic lymph node dissection and urinary incontinence at early phase after robot-assisted radical prostatectomy. *Int. J. Urol.*, 30(4), 340-346 (2023).
3. Teraoka Y, Sugimoto J, Konishi H, Miyoshi H, Furusho H, Miyauchi M, Kajioka S, Koh I, Kudo Y. Progesterone Suppresses Uterine Contraction by Reducing Odontogenic Porphyromonas gingivalis Induced Chronic Inflammation in Mice. *Biomolecules*, 12(8), 1029 (2022).
4. Yoshimaru K, Yamaza T, Kajioka S, Sonoda S, Yanagi Y, Matsuura T, Yoshizumi J, Oda Y, Iwata N, Takai C, Nakayama S, Taguchi T. Dental pulp stem cells as a therapy for congenital enteroneuropathy. *Sci Rep.*, 12(1), 6990 (2022).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 梶岡俊一, 岡部彩美, 李賢, 武井実根雄, 横溝晃, 沖本りさ, 高松肇, 野村博之, 高橋良輔, 江藤正俊. カテーテル尿細菌叢から新たなバイオマーカーを探る. 第 29 回日本薬理学会（札幌）2022/9/1 【シンポジウム】
2. 梶岡俊一, 岡部彩美, 李賢, 高橋良輔, 横溝晃, 武井実根雄, 江藤正俊. ウロフロメトリー/尿流動態検査の解析を用いた間質性膀胱炎・膀胱痛症候群診断システムの開発. 第 29 回日本薬理学会（札幌）2022/9/1 【シンポジウム】
3. 李賢, 塩田真己, 高松大, 牛島美保, 岡部彩美, 梶岡俊一, 後藤駿介, 木下史生, 松元崇,

門司恵介, 柏木英志, 猪口淳一, 小田義直, 江藤正俊. ロボット支援前立腺全摘除術時の拡大骨盤内リンパ節郭清による除神経は術後1ヶ月での尿禁制を悪化させる. 第29回日本薬理学会(札幌) 2022/9/1

【国際学会】

1. Lee K, Shiota M, Takamatsu D, Ushijima M, Blas L, Okabe A, Kajioka S, Goto S, Kinoshita F, Matsumoto T, Monji K, Kashiwagi E, Inokuchi J, Oda Y, Eto M. Denervation caused by extended pelvic lymph node dissection worsens early urinary continence after robot-assisted radical prostatectomy. UAA2022 (19th Urological Association of Asia Congress) (Sydney) 2022/10/5
2. Kajioka S, Kareman E, Okabe A, Lee K, Yamaza T, Etoh M. The challenge for the radical therapy against interstitial cystitis transplanting deciduous dental pulp stem cells. ヨーロッパ泌尿器科学会(ミラノ) 2023/3/11

依頼公演・招待公演 他

【招待講演】

1. 梶岡俊一. クスリがわかるシリーズ4 腎・泌尿器. 第96回日本薬理学会総会(横浜) 2022/12/1

特許

1. 申請者名: 梶岡俊一
トロポニン含有医薬品組成物 — 平滑筋へのトロポニン収縮メカニズム導入による、種々の平滑筋疾患の克服 —
特許申請日: 平成21年7月14日
特許取得日: 平成23年2月3日
特許出願番号: 2009-165881

所属学会

1. 日本歯科麻酔学会
2. 日本薬理学会
3. 日本小児集中治療研究会
4. 日本生理学会
5. 日本平滑筋学会
6. 日本泌尿器科学会
7. 日本排尿機能学会
8. 日本癌学会
9. 日本臨床薬理学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 日本薬理学会代議員
2. 日本生理学会評議員
3. 日本平滑筋学会評議員
4. アレキサンダーフンボルト奨学金日本支部協会会員
5. オックスフォード大学同窓会日本支部会員

氏名 (役職)

川端 猛夫 (教授)

研究概要

分子認識型触媒を用いる遠隔位不斉誘導に関する研究 (京都大学 化学研究所 上田善弘グループ、北海道大学 薬学研究科 森崎一宏助教との共同研究)

不斉合成の選択性は主に立体障害に基づいて発現する。即ち、反応点が不斉源から遠隔位となる遠隔位不斉誘導はその方法論自体が欠如している。我々は、反応点から遠隔位にあるキラリティーを高度に識別できる分子認識型触媒を用い、この未解決課題に取り組んでいる。

遠隔位不斉誘導に基づくインターロック分子の不斉構築に関する研究 (京都大学 化学研究所 上田善弘グループ、北海道大学 薬学研究科 森崎一宏助教との共同研究)

インターロック分子の不斉構築法は遠隔位不斉誘導が要求されるため、世界的視野からみても極めて未発達である。我々は、遠隔位不斉アシル化、遠隔位不斉臭素化、および遠隔位不斉 C-H アミノ化の手法を用いて本題に取り組んでいる。

原著論文・総説

【原著論文】

1. Gondo N, Koki K, Hyakutake R, Ueda Y, Kawabata T. Organocatalytic Regio- and Enantioselective Vinylogous aza-Morita-Baylis-Hillman Reaction. *Tetrahedron Lett.*, 115, 154306 (2022) DOI:org/10.1016/j.tetlet.2022.154306.
2. Hashimoto H, Ueda Y, Fujimura K, Takasu K, Kawabata T. Approach toward Reversal of Chemoselectivity in Catalytic Silylation of Pyranosides. *Eur. J. Org. Chem.*, e202200949 (2022) DOI: 10.1002/ejoc.202200949.
3. Hashimoto H, Ueda Y, Takasu K, Kawabata T. Catalytic Substrate-Selective Silylation of Primary Alcohols via Remote Functional-Group Discrimination. *Angew. Chem. Int. Ed.*, 61(18), e202114118 (2022) DOI: 10.1002/anie. 202114118.
4. Gondo N, Hyakutake R, Fujimura K, Ueda Y, Nakano K, Tsutsumi R, Yamanaka M, Kawabata T. Vinylogous Aza-Morita-Baylis-Hillman Reactions with N-Ts Imines Catalyst-Dependent Rate-Determining Steps in Regiodivergent Vinylogous Aza-Morita-Baylis-Hillman Reactions with N-Ts Imines. *Asian. J. Org. Chem.*, "Special Collections of "Organocatalysis", 11(3), e2021100533 (2022) DOI: 10.1002/ajoc.202100533.
5. Murai T, Xing Y, Kurokawa M, Kuribayashi T, Nikaido M, Elboray EE, Hamada S, Kobayashi Y, Sasamori T, Kawabata T, Furuta, T. One-Pot Preparation of (NH)-Phenanthridinones and Amide-Functionalized [7]Helicene-like Molecules from Biaryl Dicarboxylic Acids. *J. Org.*

Chem., 87, 5510-5521 (2022) DOI: 10.1021/acs.joc.1c02769.

6. Reddy VK, Kan K, Sokeirik YSA-K, Yoshida K, Hirata A, Yamanaka M, Ueda Y, Kawabata T. Acylative Kinetic Resolution of 1,1'-Binaphthyl-8,8'-diamines by Organocatalysis. *Tetrahedron*, Special Collections of "System-Oriented Development of Organocatalysis", 103(1), 132539 (2022) DOI: 10.1016/j.tet.2021.132539.

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. Morisaki K, Emi R, Sato Y, Chen G, Ueda Y, Kawabata T. Remote Asymmetric Induction by C(sp²)-H Amination: Desymmetrization of Long-Chain σ -Symmetric Bis(arenes) and Rotaxanes. 第 20 回次世代を担う有機化学シンポジウム (日本薬学会長井記念ホール) 2022/5/27
2. 上田善弘, 橋本悠, 高須清誠, 川端猛夫. 構造の類似した第一級アルコールの触媒的基質選択的シリル化. 第 64 回天然有機化合物討論会 (静岡市清水文化会館マリナート) 2022/9/8
3. 藤村光揮, 上田善弘, 山岡庸介, 高須清誠, 川端猛夫. 軸成分ハロゲン化によるロタキサン合成法の開発. 第 48 回反応と合成の進歩シンポジウム (千葉市民会館) 2022/11/28
4. 藤村光揮, 上田善弘, 山岡庸介, 高須清誠, 川端猛夫. 擬ロタキサンの芳香族ハロゲン化によるロタキサン合成. 第 15 回有機触媒シンポジウム (名古屋市、名古屋大学東山キャンパス) 2022/12/1
5. 藤村光揮, 権藤匠洋, 上田善弘, 森崎一宏, 橋川祥史, 村田靖次郎, 高須清誠, 川端猛夫. 分子不斉開口フラレン誘導体の水酸基アシル化に基づく触媒的速度論的光学分割. 日本薬学会第 143 年会 (札幌市、北海道大学) 2023/3/27
6. 上田善弘, 陳功, 森崎一宏, 川端猛夫. 位置選択的 C-H アミノ化による分子不斉カリックスアレーンの触媒的不斉合成. 日本薬学会第 143 年会 (札幌市、北海道大学) 2023/3/27

【国際学会】

1. Ueda Y, Shibayama H, Kawabata T. Seven-Step Stereodivergent Total Syntheses of Punicafolin and Macaranganin. The 15th International Conference on Cutting-Edge Organic Chemistry in Asia (オンライン開催) 2022/7/26

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本化学会
3. 有機合成化学協会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 公益社団法人 乙卯研 評議員
2. 日本薬学会代議員

研究費獲得状況

1. 基盤研究 B（一般研究），遠隔位不斉誘導に基づくインターロック分子の不斉構築，令和 3 年度～令和 5 年度，研究代表者
2. 奨学寄附金，川端猛夫氏の研究助成，令和 3 年度～令和 7 年度，研究代表者

氏名（役職）

岸 拓弥（教授）

研究概要

循環恒常性制御における脳の役割に関する研究

「心不全は脳によるロバスティックな生命維持システムの不全である」という概念創出ならびに「脳を治療標的とする革新的慢性心不全治療開発」に関する検討を行っている。今年度は、循環動態数理モデルを用いたシミュレーションにより、圧受容器反射による脳の血圧から交感神経への変換アルゴリズム異常が循環恒常性に極めて重要で治療対象であることが明らかとなった。これより、バイオニックブレインなど人工的な圧受容器反射構築による心不全治療のような展開が期待されている。なお、本テーマは 2021 年～2023 年 科研費基盤 C に採択され、2023 年～2025 年の同じく 科研費基盤 C に採択された。

運動による高血圧改善効果のメカニズム解明とその臨床応用（国立障害者リハビリテーションセンターとの共同研究）

運動の高血圧改善効果を身体への力学的刺激で再現するという独創的な手法により、その背景となる分子メカニズムを明らかにし、臨床応用・展開を試みる。今年度は、運動による血行動態変化の自然発祥高血圧ラットで得られたデータを循環動態数理モデルを用いて解析し、運動による圧受容器反射機能の中枢における変化が重要であることが明らかとなった。この成果は、高血圧治療における運動療法の最適化と擬似運動療法開発の科学的基盤の確立に繋がる。

食行動の変容に向けた尿検査および食環境整備に係る実証事業（厚生労働省委託事業（日本高血圧学会））

尿中ナトリウム・カリウム排泄量を指標とした食行動変容や食環境整備の最適化を図る厚生労働省委託事業（日本高血圧学会）の、アプリ開発を担当している。本年度は、LINE による尿中ナトリウム・カリウム排泄量記録アプリの開発を行った。この成果により、尿中ナトリウム・カリウム排泄量を指標とする新たな高血圧診断・治療開発を目指す厚生労働省の施策に寄与しうる。

高血圧治療アプリに関する研究（オムロンヘルスケアとの共同研究）

高血圧患者の行動変容を促し降圧効果を発揮できる高血圧アプリの開発を行っている。今年度は、アプリの開発を行った。来年度より高邦会高木病院高血圧・心不全センター外来にてパイロット研究を開始する。また、IUHW オープンイノベーションセンターでのプロジェクトに採択された。既に CureApp 社の高血圧治療補助アプリがあるが、我々のものは教育コンテンツなしの計測のみでも降圧が得られている。また、本研究をもとに 2023 年～2025

年 AMED 予防・健康づくりの社会実装に向けた研究開発基盤整備事業ヘルスケア社会実装基盤整備事業「デジタル技術を活用した生涯にわたる血圧管理に関する指針の研究開発」が分担研究員として採択された。

高木病院における臨床研究指導

本学大学院医学研究科循環器内科の指導教官として、高木病院における以下の臨床研究を指導している。

- ・透析患者における予後規定因子探索
- ・透析患者における心血管イベント発症のリスク因子探索
- ・COVID-19 患者の臨床的特徴の時間経過（各パンデミック期における違い）
- ・入院患者における薬剤耐性感染症の臨床的特徴
- ・透析患者における骨折の影響
- ・透析患者における整形外科受診が与える影響
- ・心房細動患者の再発や予後を規定する臨床指標探索
- ・人間ドッグ受診者における新規糖尿病発症を予測する因子探索
- ・救急外来受診患者における消化管出血の予後に与える影響
- ・不妊治療における子宮内膜ポリープ切除の影響

原著論文・総説

【原著論文】

1. Shibata R, Shinohara K, Ikeda S, Iyonaga T, Matsuura T, Kashihara S, Ito K, Kishi T, Hirooka Y, Tsutsui H. Transient receptor potential vanilloid 1-expressing cardiac afferent nerves may contribute to cardiac hypertrophy in accompany with an increased expression of brain-derived neurotrophic factor within nucleus tractus solitarius in a pressure overload model. *Clin. Exp. Hypertens.*, 44(3), 2490257 (2022).
2. Shibahashi E, Jujo K, Kuroda S, Matsumoto S, Sano T, Kitai T, Yonetsy T, Kohsaka S, Torii S, Yamaguchi T, Kishi T, Komuro I, Hirata K, Node J, Matsue Y. Assessment of thromboembolism risk in COVID-19 patients with cardiovascular disease risk factors: Analysis of a Japanese Nationwide Registry. *Thromb. Res.*, 216, 90-96 (2022).
3. Kitajima A, Kishi T, Yamanouchi K, Hirooka Y, Toda S, Takamori A, Fujimoto K, Kishi C, Tomiyoshi Y. A retrospective analysis of risk factors for mortality during hemodialysis at a general hospital that treats comprehensive diseases. *Intern. Med.* (Advance Online Publication).
4. Kishi T, Kitajima A, Yamanouchi K, Hirooka Y, Toda S, Takamori A, Fujimoto K, Kishi C, Tomiyoshi Y. Low body mass index without malnutrition is an independent risk factor for major cardiovascular events in patients with hemodialysis. *Int. Heart. J.*, 63(5), 948-952 (2022).
5. Savarese G, Kishi T, Vardeny O, Adamsson ES, Bodegard J, Lund LH, Thuresson M, Bozkurt B.

Heart failure drug treatment -inertia, titration, and discontinuation: a multinational observational study (EVOLUTION HF). *JACC. Heart. Fail.*, 11(1), 1-14 (2023).

6. Kida K, Nishitani-Yokoyama M, Kono Y, Kamiya K, Kishi T, Node K, makita S, Kimura Y, Ishihara S. Japanese Association of Cardiac Rehabilitation (JACR) Public Relations Committee. *Circ. Rep.*, 4(10), 469-473 (2022).
7. Kawaura F, Kishi T, yamamoto T, Nakayama S, Goto T, Tsurusawa R, Katagiri T, Yamanouchi K, Matsuo A, Kobayashi-Watanabe N, Imamura T, Hirooka Y, Takagi K, Umemura T, Fujimoto K, Hayashi S, Takamori A. Age distribution and disease severity of COVID-19 patients continued to change in a time-dependent manner from May 2021 to April 2022 in the regional core hospital in Japan. *Drug Discov. Ther.*, 17(1), 60-65 (2023).
8. Suzuki T, Kishi T, Ishida M, Jeffrey R, Node K, Mizuno A. The time trend of information seeking behavior about salt reduction using Google trends: infodemiological study in Japan. *Hypertens. Res.* (Advance Online Publication).

【総説】

1. Shibata S, Kobayashi K, Tanaka M, Asayama K, Yamamoto E, Nakagami H, Hoshide S, Kishi T, matsumoto C, Mogi M, Morimoto S, Yamamoto K, Mukoyama M, Kario K, Node K, Rakugi H. COVID-19 pandemic and hypertension: an updated report from the Japanese Society of Hypertension project team on COVID-19. *Hypertens. Res.*, 46(3), 589-600 (2023).
2. Matsumoto C, Shibata S, Kishi T, Morimoto S, Mogi M, Yamamoto K, Kobayashi K, Tanaka M, Asayama K, Yamamoto E, Nakagami H, Hoshide S, Mukoyama M, Kario K, Node K, Rakugi H. *Hypertens. Res.*, 46(3), 601-619 (2023).
3. Kishi T. Clarification of hypertension mechanisms provided by the research of central circulatory regulation. *Hypertens. Res.* (Advanced Online Publication).

【Editorial comment】

1. Kishi T. Reply to the letter titled, “A history of upper gastrointestinal bleeding in hemodialysis patients.”. *Intern. Med.* (Advanced Online Publication).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 岸拓弥. この学会でこそできる高血圧の深論～誰の・何を・いつ・どうするのか?. 日本血管不全学会（大阪）2022/4/17【シンポジウム】
2. 岸拓弥. ARNI と SGLT2 阻害薬は心不全治療をどう変えたのか. 日本心血管協会学術集会（福岡）2022/5/1【シンポジウム】
3. 岸拓弥.モチベーションを保つチームコミュニケーション～合言葉は TIME～. 日本不

整脈心電学会（横浜）2022/6/9【シンポジウム】

4. 岸拓弥. Society5.0 時代の高血圧診療を夢物語ではなく冷静に考える（教育講演）. 日本高血圧学会臨床高血圧フォーラム（札幌）2022/6/18
5. 岸拓弥. 循環器内科医が「反 SGLT2 阻害薬」と言えない世の中に一言～なぜ有効なのか説明できますか？～. 日本臨床薬理学会中四国地方会（福岡）2022/7/1【シンポジウム】
6. 岸拓弥. 脳卒中・循環器病対策基本法は日本の循環器病対策をどう変えたのか？～成果と課題～. 日本動脈硬化学会学術集会（久留米）2022/7/15【シンポジウム】
7. 岸拓弥. 心不全ステージ分類を人生の時間軸で考えると見えてくる BNP 検査の意義. 日本人間ドッグ学会学術集会（幕張）2022/9/3【シンポジウム】
8. 岸拓弥. 循環器診療に関わる皆さんにとって twitter はコンピテンシー. 日本心臓病学会学術集会（京都）2022/9/24【シンポジウム】
9. 岸拓弥. 糖尿病非専門の循環器内科医である僕が糖尿病治療で役に立てること～向き合える時代が来た～（教育講演）. 日本糖尿病学会九州地方会（福岡）2022/10/7
10. 岸拓弥. 脳内代謝不全が惹起する循環動態恒常性破綻が心不全である. 日本心不全学会総会（奈良）2022/10/21【パネルディスカッション】
11. 岸拓弥. SGLT2 阻害薬が教えてくれた慢性心不全の目指すべき標準的薬物治療～まだできる・もっとできる～. 日本心血管内分泌代謝学会学術集会（京都）2022/10/22【シンポジウム】
12. 岸拓弥. 人生の時間軸で心不全を考えると見えてくる禁煙の素晴らしさ～一人一人の well-being のために～. 日本禁煙学会学術総会（大阪）2022/10/29【シンポジウム】
13. 岸拓弥. Z 世代来襲に向けてアラフィフおじさんが考える医師キャリア～みなさんがリアル 100 人図鑑～. 日本循環器学会中国地方会（山口）2022/11/26【シンポジウム】
14. 岸拓弥. Society5.0 時代の高血圧診療を夢物語ではなく冷静に考える. Digital Pharmacology Conference（横浜）2022/11/30【シンポジウム】
15. 岸拓弥. 学会やジャーナルの公式ツイッターは論文の価値を上げる～この発表中に実演します～. 日本疫学会学術集会（浜松）2023/2/2【シンポジウム】
16. 岸拓弥. 高血圧は脳が最も重要な原因である～対戦待ちしております（余裕）～. 日本心脈管作動物質学会（小倉）2023/2/10【シンポジウム】
17. 岸拓弥. 新型コロナワクチン接種後の心膜心筋炎で社会が分断しないために必要なこと～日本循環器学会 COVID-19 対策特命チームの立場で～. 日本画像医学会学術集会（東京）2023/2/17【シンポジウム】
18. 岸拓弥. Report from the Creation of the COVID-19 Practice Guideline “Management of Post-Acquisition Symptoms”. 日本循環器学会学術集会（福岡）2023/3/12【トピック】

【国際学会】

1. Kishi T. Future Perspectives in Hypertension. International Society of Hypertension Scientific Sessions 2022 (Kyoto) 2022/10/14 【Plenary Session】

依頼講演・招待講演 他

1. 岸拓弥. 心不全のステージ分類で人生を考えると見えてくる SGLT2 阻害薬の役割～誰の・何を・どうするのか～. 慢性心不全 WEB セミナー (福岡) 2022/4/22
2. 岸拓弥. 慢性心不全治療を時間軸と EF で考える～EMPEROR-Preserved 試験から考察する～. ジャディアンス全国 WEB 講演 (福岡) 2022/4/25
3. 岸拓弥. 心不全のステージ分類で人生を考えると見えてくる SGLT2 阻害薬の役割～誰の・何を・どうするのか～. ASO-harmony (福岡) 2022/5/13
4. 岸拓弥. 心不全と CKD と糖尿病を循環器内科目線で考える～向かい合える時代が来た～. CHF&DM&CKD Symposium (福岡) 2022/5/13
5. 岸拓弥. 日本循環器協会と「脳卒中と循環器病克服 5 ヶ年計画」が全ての人に届けたい未来 ～循環器病とは～. 心不全医療の未来を考える会 in 九州 (佐賀) 2022/5/18
6. 岸拓弥. SGLT2 阻害薬が教えてくれる心不全との向き合い方～まだできる・もっとできる～. DM Online Seminar in KUWANA (福岡) 2022/5/19
7. 岸拓弥. 心不全のステージ分類で人生を考えると見えてくること～誰の・何を・どうするのか～. 心不全診療研究会 (久留米) 2022/5/24
8. 岸拓弥. 「連関」の意味を本気で考えたら見えてくる SGLT2 阻害薬の役割～まだできる・もっとできる～. 心腎連関を考える会 (福岡) 2022/5/25
9. 岸拓弥. 高血圧を人生の時間軸で考えると見えてくる我々のミッション～まだできる・もっとできる～. ARNI Stage Strategy Web Live Symposium (福岡) 2022/5/27
10. 岸拓弥. 基本的な心不全緩和ケアは標準治療です～「ACP 取りました」ではない～. 倉吉病診連携講演会 (福岡) 2022/5/30
11. 岸拓弥. 心臓と腎臓の connection を深掘すると見えてくる SGLT2 阻害薬の役割～まだできる・もっとできる～. Cardiorenal Connection Symposium in 日田・玖珠 (日田) 2022/6/7
12. 岸拓弥. Society5.0 時代の循環器診療を「自分ごと」と考える～医師のコンピテンシーが変わる～. 第 3 回 CardioRenalDiabetes セミナー (横浜) 2022/6/9
13. 岸拓弥. 今宵は sGC 刺激薬と VICTORIA 試験を深論します～NO-sGC-cGMP 系研究の歴史を振り返る～. 高齢者心疾患セミナー (久留米) 2022/6/13
14. 岸拓弥. 心不全ステージ分類が教えてくれる高血圧治療の目的～まだできる・もっとできる～. 地域で診る高血圧・糖尿病の医療連携 (大牟田) 2022/6/14
15. 岸拓弥. 誰の・何を・どうするのか? で考えると見えてくる高血圧治療のあり方～まだできる・もっとできる～. 阪神地区 ARNI 高血圧 Web Seminar (福岡) 2022/6/16
16. 岸拓弥. 慢性心不全の標準治療における「基本薬」を今宵は考えます～目標ではなくミッション～. 県北地区心不全 web 講演会 (福岡) 2022/6/20

17. 岸拓弥. SGLT2 阻害薬が教えてくれる「日常の」慢性心不全標準治療～まだできる・もっとできる～. 広島県福山市 web 講演会 (福岡) 2022/6/28
18. 岸拓弥. サブワーキングサブリーダーだからこそ感じる 5 ヶ年計画予防・国民への啓発の問題点～第 2 次はさらに本気で取り組みます～. Cardiac New Era Symposium (福岡) 2022/7/9
19. 岸拓弥. 慢性心不全と慢性腎臓病にしっかり向き合える時代がきた～まだできる・もっとできる～. フォシーガ CHF シンポジウム (福岡) 2022/7/12
20. 岸拓弥. 心不全ステージ分類の横軸を人生で考えると見えてくる高血圧治療～血圧コントロール良好と判断するのは難しい～. 金沢大学関連施設疾患啓発講演会 (金沢) 2022/7/15
21. 岸拓弥. NO-sGC-cGMP 系が心不全治療で注目されているのは深い理由がある～まだできる・もっとできる～. Bayer Medical Web Seminar 心不全治療を考えよう (福岡) 2022/7/22
22. 岸拓弥. NO-sGC-cGMP 系研究の歴史を振り返ると見えてくるもの～今宵の座長と演者ならではの本音討論～. Meet the Expert in Tokai Hokuriku (福岡) 2022/7/26
23. 岸拓弥. 心不全ステージ分類で考える慢性心不全の薬物治療～誰の・何を・どうしたいのか～. 佐賀南部心不全カンファレンス (福岡) 2022/7/28
24. 岸拓弥. 心不全 不全心じゃなく 身不全 でもでも実は 心不全. 小牧市民病院講演会 (小牧) 2022/7/29
25. 岸拓弥. 脳が奏でる循環動態恒常性維持システムを数理的に考える～Society5.0 時代にこそ生きる～. 第 22 回関東新血管フォーラム (福岡) 2022/7/30
26. 岸拓弥. 慢性心不全における腎性貧血をじっくり考えると見えてくること～自分ごとにしよう～. 朝霞地区医師会循環器勉強会 (福岡) 2022/8/23
27. 岸拓弥. 心不全緩和ケアの 5W1H を今宵は考えます～自分ごとにしよう～. Live Symposium 心不全緩和ケア (福岡) 2022/8/25
28. 岸拓弥. 1997 年卒の 2 人で語り合う糖尿病と慢性心不全の薬物治療～まだできる・もっとできる～. 糖尿病講演会 (福岡) 2022/8/28
29. 岸拓弥. 腎性貧血を自分ごととして向き合える時代が来ました～10 のトリビアをお届けします～. 腎性貧血治療セミナー (久留米) 2022/9/1
30. 岸拓弥. 心不全ステージ分類と人生の時間軸で考える心不全標準治療の心構え～Hope for the BEST, Prepare for the WORST～. 心不全診療カンファレンス (福岡) 2022/9/5
31. 岸拓弥. 今宵は腎性貧血を自分ごととしてフカボリしましょう～10 のトリビアをお届けします～. 腎性貧血フカボリセミナー (久留米) 2022/9/9
32. 岸拓弥. HFpEF としっかり向き合うと見えてくる治療戦略～ステージ分類を時間軸が大事～. ARNI WEB Symposium (福岡) 2022/9/13
33. 岸拓弥. 腎性貧血を循環器内科目線で考えると見えてくること～別世界の話ではない～. CardioRenal Conference (久留米) 2022/9/14

34. 岸拓弥. 腎性貧血のこれまでを振り返り未来を考える～自分ごとです～. これからの腎性貧血を考える (久留米) 2022/9/15
35. 岸拓弥. JSH2019 を改めて熟読すると見えてくる高血圧治療のポイント～コントロール良好と判断するのは難しい～. 第 12 回循環器地域連携勉強会 (福岡) 2022/9/21
36. 岸拓弥. SGLT2 阻害薬が教えてくれる心不全との向き合い方～心不全ステージ分類は人生～. 嶋田病院小郡地域連携講演会 (小郡) 2022/9/26
37. 岸拓弥. 「連関」と「関係」の違いで考える心腎貧血連関～腎性貧血をどうしたらいいのか～. 腎性貧血治療 Next Strategy (久留米) 2022/9/27
38. 岸拓弥. 腎性貧血を循環器内科医が討論する意義～他人事ではない～. 腎性貧血を考える (久留米) 2022/9/28
39. 岸拓弥. 心不全ステージ分類を時間軸と EF で考えると見えてくる ARNI の使い方～この二年間を未来に活かす～. ARNI 発売 2 周年記念講演会 in 岐阜 (福岡) 2022/9/28
40. 岸拓弥. 心不全外来の年齢分布を眺めていたら見えてくる心不全の標準治療～well-being と ACP～. 超高齢化社会における心不全治療を考える会 (福岡) 2022/10/17
41. 岸拓弥. 心不全ステージ分類を時間軸と EF で考えると見えてくること～SGLT2 阻害薬の役割～. 米沢市心不全診療講演会 (奈良) 2022/10/21
42. 岸拓弥. 今宵はこのメンバーで HFpEF を再考しましょう～結局どうすればいいのか～. ARNI web 講演会 in Fukuoka (福岡) 2022/10/26
43. 岸拓弥. 今宵は心不全を本音で部室トークします～心房細動と抗凝固薬も～. サザンハート・医療連携カンファレンス (福岡) 2022/11/9
44. 岸拓弥. 今宵は心不全ステージ分類を全員でじっくり眺めましょう～CKD とも向き合える時代が来た～. これからの心不全治療を考える会 (福岡) 2022/11/10
45. 岸拓弥. 今宵は循環器内科目線で腎性貧血を深論します～自分ごとにするべきかどうか～. CRA Conference in Jonan (久留米) 2022/11/14
46. 岸拓弥. SGLT2 阻害薬が身近にしてくれた慢性心不全治療～いつ始めるのか?～. 慢性心不全セミナー (福岡) 2022/11/15
47. 岸拓弥. 心不全治療における食事と電解質～制限すべきエビデンス～. Scientific Exchange Meeting (福岡) 2022/11/16
48. 岸拓弥. 循環器内科目線で考える腎性貧血のトリビア～自分ごととして考えてみました～. 循環器内科医と考える腎性貧血治療セミナー (久留米) 2022/11/17
49. 岸拓弥. デジタル技術を活用する高血圧治療は未来予想図ではなく「自分ごと」～目的ではなく手段～. Hypertension Seminar (福岡) 2022/11/18
50. 岸拓弥. 循環器内科目線で考える腎性貧血のトリビア～自分ごとで考えてみました～. Diabetes & Cardiovascular Joint Symposium in 豊橋 (久留米) 2022/11/21
51. 岸拓弥. 循環器内科目線で考える慢性心不全治療とカリウム～治療目的を忘れない～. CHF&Hyperkalemia Online Symposium (久留米) 2022/11/28

52. 岸拓弥. 心不全ステージ分類と人生の時間軸で考える心不全標準治療の心構え～Hope for the BEST, Prepare for the WORST～. 心不全診療 Up to Date (福岡) 2022/11/29
53. 岸拓弥. 慢性心不全ステージ分類を人生と EF で考えると見えてくる SGLT2 阻害薬の有用性～向き合える時代が来た～. WEB 全国講演会 (福岡) 2022/12/5
54. 岸拓弥. 循環器内科目線で考える腎性貧血のトリビア～自分ごとで考えてみました～. 循環器疾患と腎性貧血を考える on web (久留米) 2022/12/6
55. 岸拓弥. 心不全ステージ分類と人生の時間軸で考える心不全標準治療の心構え～Hope for the BEST, Prepare for the WORST～. 次世代循環器医師のための心不全診療 Up to date (福岡) 2022/12/7
56. 岸拓弥. 慢性心不全ステージ分類を眺めたら見えてくる未来～誰が何をどうするのか～. 久留米心不全医療連携カンファレンス (久留米) 2022/12/8
57. 岸拓弥. 心不全ステージ分類と EF で考える慢性心不全薬物治療 2022～2023 年への期待も～. ARNI Heart Failure x Arrhythmia Web Live Seminar (佐賀) 2022/12/9
58. 岸拓弥. 心不全ステージ分類と人生の時間軸で考える心不全標準治療の心構え～Hope for the BEST, Prepare for the WORST～. 奄美医療圏心不全連携講演会 (福岡) 2022/12/12
59. 岸拓弥. 心不全ステージ分類と人生の時間軸で考える心不全標準治療の心構え～Hope for the BEST, Prepare for the WORST～. 心不全薬物治療セミナー (福岡) 2022/12/15
60. 岸拓弥. 心不全ステージ分類と EF で考えると見えてくる ARNI の使い方～まだできる・もっとできる～. 心不全地域連携パス学術講演会 (久留米) 2022/12/22
61. 岸拓弥. 循環器内科医をただの意識高い系から萌えキャラにアップデートするキャリア論～Z 世代に負けるな～. N Cardiovascular Summit (福岡) 2023/1/24
62. 岸拓弥. 今宵は心不全緩和ケアを「自分ごと」として考えます～かつては僕はアンチでした～. 茨城県の心不全緩和ケアを考える (久留米) 2023/1/25
63. 岸拓弥. 循環器内科目線で考える腎性貧血～自分ごとです～. 心腎連携フォーラム (久留米) 2023/1/31
64. 岸拓弥. デジタル技術を活用する高血圧治療は未来予想図ではなく「自分ごと」～目的ではなく手段～. Hypertension Seminar (小倉) 2023/2/3
65. 岸拓弥. 人工知能が奏でる 2045 年シンギュラリティ時代の心不全診療でできること・できないこと～Artificial ではなく Augmented～. Heart Failure Thema Park 2023 (東京) 2023/2/18
66. 岸拓弥. 慢性心不全ステージ分類を人生と EF で考えると見えてくる SGLT2 阻害薬の有用性～向き合える時代が来た～. 全国 WEB 講演会 (福岡) 2023/2/27
67. 岸拓弥. HFrEF 治療におけるベリキューボの役割を心不全ステージ分類で考える～GDMT を深論します～. 東海北陸エリアベリキューボ WEB カンファレンス (福岡) 2023/3/14
68. 岸拓弥. 今宵は 2023 年に実践したい高血圧治療を語り合います～誰の・何を・どうす

- るのか～. 田川医師会学術講演会（田川）2023/3/17
69. 岸拓弥. 2023 年に実践したい高血圧診療を考えてみました～血圧コントロール良好は難しい～.大牟田地区高血圧研究会（大牟田）2023/3/30
70. 岸拓弥. 慢性心不全ステージ分類を眺めながら GDMT を冷静に考える～心不全薬物治療の歴史が教えてくれること～. Meet the Expert（大川）2023/3/30

所属学会

1. 日本循環器学会
2. 日本内科学会
3. 日本心臓病学会
4. 日本高血圧学会
5. 日本心不全学会
6. 日本循環制御医学会
7. 日本高血圧関連疾患モデル学会
8. 日本心血管内分泌代謝学会
9. 日本抗加齢医学会
10. 日本薬理学会
11. 日本生理学会
12. 日本糖尿病学会
13. 日本内分泌学会
14. 日本緩和医療学会
15. 日本血管不全学会
16. 日本心臓脈管作動物質学会
17. 日本循環器病予防学会
18. American Heart Association
19. American Physiological Society
20. European Society of Cardiology
21. International Society of Cardiovascular Pharmacotherapy Japan Section
22. International Society for Heart Research Japan Section

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 日本循環器学会（社員、Fellow of JCS、情報広報部会部会長、総務委員会委員、学術集会運営委員会委員、予防委員会委員、事務局あり方部会委員、総務委員会5カ年計画検討部会（予防・国民への啓発サブワーキング委員）、九州支部評議員・監事・あり方委員会委員・ダイバーシティ委員会委員）
2. 日本心臓病学会（上級臨床医、Journal of Cardiology 編集委員会委員・Associate Editor）

3. 日本心不全学会（評議員、教育研修委員会委員、広報委員会幹事）
4. 日本高血圧学会（評議員、Fellow of JSH、Dx 推進ワーキング委員長・学会活性化ワーキング委員、デジタルヘルスリサーチワーキング委員、Hypertension Research 編集委員会委員、広報情報委員会委員、ダイバーシティ推進委員会副院長、AMED ヘルスケアタスクフォース委員、基礎研究推進部会アドバイザー）
5. 日本血管不全学会（理事、広報ワーキング委員長）
6. 日本腎臓学会（広報委員会オブザーバー）
7. 日本心血管インターベンション治療学会（COVID19 対策小委員会オブザーバー）
8. 日本心脈管作動物質学会（評議員）
9. 日本産科麻酔学会（広報委員会アドバイザー）
10. 日本抗加齢医学会（評議員、プログラム委員会小委員長）
11. 日本循環制御医学会（評議員、編集委員会委員）
12. 日本超音波医学会（広報ワーキングオブザーバー）
13. 高血圧関連疾患モデル学会（評議員）
14. 日本心血管内分泌代謝学会（幹事・評議員）
15. 日本循環器病予防学会（評議員）
16. 日本臨床生理学会（評議員）
17. 日本薬理学会（学術評議員）
18. 日本心脈管作動物質学会（評議員）
19. American Heart Association (Fellow)
20. European Society of Cardiology (Fellow)
21. International Society of Cardiovascular Pharmacotherapy Japan Section (Fellow)
22. International Society for Heart Research Japan Section (Fellow)

研究費獲得状況

1. 基盤研究 C, 脳内環境を保持するグリンパティックシステムによる循環恒常性制御メカニズム解明, 2020 年度～2023 年度, 研究代表者
2. 厚生労働省委託事業（日本高血圧学会）, 食行動の変容に向けた尿検査及び食環境整備に係る実証事業, 2021 年度～2023 年度, 研究分担者
3. AMED 予防・健康づくりの社会実装に向けた研究開発基盤整備事業ヘルスケア社会実装基盤整備事業「デジタル技術を活用した生涯にわたる血圧管理に関する指針の研究開発」, 2022 年度～2024 年度, 研究分担者

氏名（役職）

吉良 潤一（教授）

研究概要

進行型多発性硬化症におけるグリオパチー機序の解明と治療開発（九州大学神経内科学分野及び横浜市立大学神経内科学・脳卒中医学教室との共同研究）

多発性硬化症(multiple sclerosis, MS)は中枢神経を侵す脱髄疾患では最も多く、世界に約300万人の患者がいる。国指定難病となっており、根治療法はない。疾患修飾薬により再発は減るものの、慢性進行型には無効である。進行型MSの剖検標本でオリゴデンドログリアの connexin (Cx) 32/47 が脱髄範囲を越えて広汎に脱落していることを発見した。そこでオリゴデンドログリア特異的・時限的に Cx47 を脱落させることができる inducible conditional knockout (icKO)マウスを作成し、MSの動物モデルである実験的自己免疫性脳脊髄炎(experimental autoimmune encephalomyelitis, EAE)を誘導した。すると、急性期および慢性期EAEが顕著に増悪し、脱髄とグリア炎症が進行性に悪化した。これにより進行型MSの動物モデルを作成できた。したがって、オリゴデンドログリアの Cx47 はアストログリアの Cx43 と gap junction (GJ)チャンネルを形成してエネルギー源の供給やカリウムイオンのバッファリングを通じて脳の恒常性を維持しているばかりでなく、脳内の炎症環境を制御していることを初めて示すことができた。一方、アストログリアの Cx43 は、急性期には広範に脱落するが、慢性期にはアストログリオシスを反映して顕著に発現が亢進する。そこで、大脳皮質アストログリア特異的・時限的に Cx43 を脱落させることができる icKO マウスを作成し、EAEを誘導したところ脱髄炎が著明に軽減した。Cx43 は、酸化ストレス時などに低分子量の truncated translational isoform が産生される。これらはチャンネル機能を持たないが、非チャンネル機能として RNA や DNA を結合できる。私たちは、グリア細胞間で情報伝達に重要な役割を果たしている Cx43 や Cx47 などのグリア Cx が、MSの動物モデルである EAE を起こしたマウスの末梢血から精製したエクソソームにも発現しており、グリア Cx を発現したエクソソームの量が EAE の重症度によって変動することを発見した。EAE 発症時には末梢血でエクソソーム中の Cx43 低分子量 isoform である GJA1-29k が著増し、Cx43 icKO マウスでは EAE 時にもその増加が消失していた。実際に MS や類縁疾患の視神経脊髄炎(neuromyelitis optica, NMO)の患者においても、末梢血由来エクソソームにおいて急性増悪時には GJA1-29k が有意に増加し GJA1-11k が著減することを発見した。グリア由来エクソソームは結合したマイクロ RNA (miRNA) などを、血液脳関門を越えて免疫細胞等に伝搬できることから、GJA1-29k 含有グリオゾームは脱髄炎の増幅や広範化に関わっていると考えた。今後、Cx47 icKO マウスや Cx43 icKO マウス、及び脱髄炎患者末梢血由来エクソソームの解析を通じて、炎症性グリアが脱髄炎を増悪させる機序を解明し、グリア Cx を標的とする進行型 MS の全く新しい治療法を開発する。

末梢神経脱髄疾患における新規ノド抗体の探索とその責任抗原の同定（九州大学神経内科学分野との共同研究）

慢性炎症性脱髄性多発神経炎(chronic inflammatory demyelinating polyneuropathy, CIDP)は、末梢神経を侵す最も代表的な脱髄疾患である。国指定の難病で根治療法はない。私たちは、末梢神経や後根神経節を用いた免疫組織染色により多数の CIDP 患者血清をスクリーニングし、ランビエ傍絞輪部に結合する新規ノド抗体を発見し、その責任抗原が LGI4 であることを見出した。抗 LGI4 抗体陽性 CIDP 患者は、比較的急性発症で深部感覚障害が強く髄液蛋白が著明に高値となるなどの特徴があった。今後、抗体陽性患者の免疫治療反応性を明らかにするとともに、抗 LGI4 抗体を用いた受け身移入により新しい CIDP 動物モデルを作成する。

中枢神経脱髄疾患における新規ノド抗体の探索とノド抗体介在性脱髄機序の解明（福岡中央病院脳神経センター及び九州大学生体防御医学研究所との共同研究）

これまでに中枢神経と末梢神経の両者を侵す中枢末梢連合脱髄症(combined central and peripheral demyelination, CCPD)において、ランビエ傍絞輪部に存在する neurofascin (NF) 155 に対する IgG4 クラスの自己抗体が存在することを報告している。抗 NF155 抗体陽性例では CIDP が起こるとともに約 90%で視覚惹誘発電位検査での異常がみられることを見出した。今後、抗 NF155 抗体をマウスに視神経内注入したり、EAE 誘導時に投与したりすることで、視神経の脱髄モデルを作成し、抗 NF155 抗体が中枢神経脱髄を惹起するメカニズムを明らかにする。さらに、中枢神経脱髄疾患である MS や NMO 患者血清を用いて視神経標本の組織免疫染色で新規ノド抗体を見出した。現在、その責任抗原の探索を進めている。

多系統萎縮症モデルにおけるグリオパチー機序の解明と治療開発（九州大学神経内科学分野との共同研究）

多系統萎縮症(multiple system atrophy, MSA)はオリゴデンドログリアに α -synuclein (α -syn) が蓄積し脱髄と神経脱落を起こす。治療法の全くない国指定難病である。多数の MSA-C(小脳型)の病理検討により初期病巣からオリゴデンドログリア Cx32 がランビエノードで脱落、次いでアストログリア Cx43 が失われ、進行期にはオリゴデンドログリア細胞体の Cx47 が喪失する一方、アストログリア Cx43 が発現亢進し、ヘミチャネル化することを見出した。そこで凝集性の強いヒト変異 α -SynA53T を Tet-off 系で任意の期間オリゴデンドログリアに発現できるマウス (TetO- α SynA53T Tg/+ マウスと PLP-tTA Tg/+マウスを交配させた TetO- α SynA53T Tg/+; PLP-tTA Tg/+ マウス) を作成した。本マウスは凝集性の強い A53T 変異 α -syn を Tet-off システムで doxycycline を除くことにより任意の時期に発現させることができる。髄鞘完成期 (8 週齢) から発現させると小脳失調を主徴とし小脳白質・脳幹の脱髄を呈する MSA-C 様病態を示した。このモデルでは病初期からランビエノードでオリゴデンドログリアの Cx32 が脱落し、次いでアストログリアの Cx43 が失われ、進行期にはオリゴデ

ドログリア細胞体の Cx47 が喪失する一方、アストログリアの Cx43 が再発現した。全脳の RNA のマイクロアレイ解析と脳から単離したミクログリアの single cell RNA sequence により脱髄と軸索脱落に先行して特定のミクログリアクラスターが増加・浸潤していることを見出した。ミクログリアの増殖と維持に不可欠な colony stimulating factor 1 receptor (CSF1R) inhibitor を投与しても、このミクログリアクラスターは残存し、MSA-C 症状がかえって増悪した。今後、synucleinopathy の増悪に寄与しているミクログリアクラスターを標的とした治療開発を行う。

エクソソームが神経変性疾患の病態および疾患進行に与える影響の解明（福岡中央病院脳神経センター及び九州大学神経内科分野との共同研究）

エクソソームはほとんどの細胞から分泌される直径 30 nm ~ 100 nm 程度の膜小胞である。エクソソームは表面に様々な細胞由来分子を発現するとともに、その中には miRNA も含まれ、遠隔的な細胞間情報伝達に重要な役割を果たしている。また、エクソソームは血液脳関門を容易に通過することから、中枢神経と末梢組織の双方向性の情報伝達にも大きな役割を担うと考えられる。私たちは、アルツハイマー病 (Alzheimer disease, AD) の動物モデルの末梢血から精製したエクソソームには、アミロイドベータ (A β) やリン酸化タウ (p-tau) が含まれ、野生型と比較してエクソソームに含有されている miRNA に違いがあることを見出した。また、私たちは、上記の MSA-C モデルマウスで脳幹・小脳や脊髄などの脱髄が起こる部位でグリア Cx が広汎に脱落することを見出し、グリア Cx が本症における脱髄の発生に重要な役割をもつことを明らかにしている。しかし、AD や MSA 患者において末梢血でグリア Cx を発現したエクソソームの変化が見られるかは不明である。そこで、AD、MSA 等の難治性神経変性疾患の患者において、末梢血から回収したエクソソームのフローサイメトリーによる表面発現分子の解析、エクソソームの miRNA 解析、超高感度デジタル ELISA (single molecule array, SIMOA) 法による含有物質 (炎症性サイトカイン・ケモカイン、neurofilament L や glial fibrillary acidic protein、myelin basic protein などの神経組織由来分子) の測定を行う。これらの測定結果と、臨床・検査所見との関連を検討することで、エクソソームの神経変性疾患の病態進行における役割、疾患バイオマーカーとしての意義を明らかにする。

著書

1. 吉良潤一. 脱髄疾患. 内科学 第 12 版. 矢崎義雄・小室一成 総編集, 渥美達也・神田隆・神田善伸・木下芳一・須永眞司・竹内靖博・竹原徹郎・南学正臣・長谷川好規・松本哲哉・楽木宏実・綿田裕孝 編, 朝倉書店, pp. 334-340 (2022 年 3 月 1 日刊行).
2. 吉良潤一. 多発性硬化症. 今日の疾患辞典～検査処方例つき. 永井良三, 大典貴夫, 神田善伸, 倉林正彦, 中島淳, 藤尾圭志, 水澤英洋 編, カイ書林, 印刷中.

【原著論文】

1. Niino M, Fukumoto S, Okuno T, Sanjo N, Fukaura H, Mori M, Ohashi T, Takeuchi H, Shimizu Y, Fujimori J, Kawachi I, Kira J, Takahashi E, Miyazaki Y, Mifune N. Correlation of the symbol digit modalities test with the quality of life and depression in Japanese patients with multiple sclerosis. *Mult. Scler. Relat. Disord.*, 57, 103427 (2022) doi: 10.1016/j.msard.2021.103427.
2. Müller J, Sinnecker T, Wendebourg MJ, Schläger R, Kuhle J, Schädelin S, Benkert P, Derfuss T, Cattin P, Jud C, Spiess F, Amann M, Lincke T, Barakovic M, Cagol A, Tsagkas C, Parmar K, Pröbstel A-K, Reimann S, Asseyer S, Duchow A, Brandt A, Ruprecht K, Hadjikhani N, Fukumoto S, Watanabe M, Masaki M, Matsushita T, Isobe N, Kira J, Kappos L, Würfel J, Granziera C, Paul F, Yaldizli Ö. Choroid Plexus Volume in Multiple Sclerosis versus Neuromyelitis Optica Spectrum Disorder: a retrospective, cross-sectional analysis. *Neurol. Neuroimmunol. Neuroinflamm.*, 9(3), (2022) doi: <https://doi.org/10.1212/NXI.0000000000001147>.
3. Yamashita K, Uehara T, Taniwaki Y, Tobimatsu S, Kira J. Long-term Effect of Acetylcholinesterase Inhibitors on the Dorsal Attention Network of Alzheimer's Disease Patients: A Pilot Study Using Resting-state Functional Magnetic Resonance Imaging. *Frontiers Aging Neuroscience*, 14, (2022) doi: <https://doi.org/10.3389/fnagi.2022.810206>.
4. Mukaino T, Uehara T, Yokohama J, Okadome T, Arakawa T, Yokoyama S, Sakata A, Takase K, Togao O, Akamatsu N, Shigeto H, Isobe N, Kira J. Atrophy of the hippocampal CA1 subfield relates to long-term forgetting in focal epilepsy. *Epilepsia*, 63, 2623-2636 (2022) doi: <https://doi.org/10.1111/epi.17378>.
5. Kobayakawa Y, Todaka K, Hashimoto Y, Ko S, Shiraishi W, Kishimoto J, Kira J, Yamasakia R, Isobe N. A novel quantitative indicator for disease progression rate in amyotrophic lateral sclerosis. *J. Neurol. Sci.*, 442, 120389 (2022) doi: <https://doi.org/10.1016/j.jns.2022.120389>.
6. Nishimura Y, Masaki K, Matsuse D, Yamaguchi H, Tanaka T, Matsuo E, Hayashida S, Watanabe M, Matsushita T, Sadashima S, Sasagasako N, Yamasaki R, Isobe N, Iwaki T, Kira J. Early and extensive alterations of glial connexins, distal oligodendrogliopathy type demyelination, and nodal/paranodal pathology are characteristic of multiple system atrophy. *Brain Pathol.*, e13131, (2022) doi: 10.1111/bpa.13131.
7. Matsumoto S, Nakahara I, Yasuda A, Ishii A, Kubo M, Yamada K, Okawa M, Nishi H, Miura T, Koike D, Okita S, Aoki M, Tanaka K, Suyama Y, Morioka J, Hasebe A, Tanabe J, Suyama K, Watanabe S, Kuwahara K, Ishihara T, Koyama H, Kira J. Reduced Workflow Times for Reperfusion Therapy for Acute Ischemic Stroke Using a Visual Task Management Application. *Stroke Vasc. Interv. Neurol.*, 0, e000551 (2023) doi: 10.1161/SVIN.122.000551 1.
8. Niino M, Fukumoto S, Okuno T, Sanjo N, Fukaura H, Mori M, Ohashi T, Takeuchi H, Shimizu Y, Fujimori J, Kawachi I, Kira J, Takahashi E, Miyazaki Y, Mifune N. Health-related quality of

- life in Japanese patients with multiple sclerosis. *J. Neurol.*, 270(2), 1011-1018 (2022) doi: 10.1007/s00415-022-11453-9.
9. Zhang X, Kira J, Ogata H, Imamura T, Mitsuishi M, Fujii T, Kobayashi M, Kitagawa K, Namihira Y, Ohya Y, Maimaitijiang G, Yamasaki R, Fukata Y, Fukata M, Isobe N, Nakamura Y. Anti-LGI4 antibody is a novel juxtapanodal autoantibody for chronic inflammatory demyelinating polyneuropathy. *Neurol. Neuroimmunol. Neuroinflamm.*, 10(2), (2023) doi: <https://doi.org/10.1212/NXI.000000000200081>.
 10. Narita T, Nakane S, Nagaishi A, Minami N, Niino M, Kawaguchi N, Murai H, Kira J, Shimizu J, Iwasa K, Yoshikawa H, Hatanaka Y, Sonoo M, Shimizu Y, Matsuo H. Immunotherapy for ocular myasthenia gravis: an observational study in Japan. *Ther. Adv. Neurol. Disord.*, in press.
 11. Mitsui J, Matsukawa T, Uemura Y, Kawahara T, Chikada A, Porto KJL, Naruse H, Tanaka M, Ishiura H, Toda T, Kuzuyama H, Hirano M, Wada I, Ga T, Moritoyo T, Takahashi Y, Mizusawa H, Ishikawa K, Yokota T, Kuwabara S, Sawamoto N, Takahashi R, Abe K, Ishihara T, Onodera O, Matsuse D, Yamasaki R, Kira J, Katsuno M, Hanajima R, Ogata K, Takashima H, Matsushima M, Yabe I, Sasaki H, Tsuji S. High-dose ubiquinol supplementation in multiple-system atrophy : a multicentre, randomised, double-blinded, placebo-controlled phase 2 trial. *eClinicalMedicine*, in press.
 12. 荒川友美, 向野隆彦, 山田絵美, 上原平, 福井恵子, 山崎亮, 吉良潤一, 内田信也. 側頭葉てんかん患者における表情識別閾値からの表情認知の検討. *神経心理学*, (2022) doi: 10.20584/neuropsychology.17142.

【症例報告】

1. Saitoh B, Tateishi T, Yoshimura M, Suzuki SO, Isobe N, Iwaki T, Kira J. A case of cerebral tuberculoma presenting mild posterior cervical pain as the main symptom despite of extensive brain lesions. *Internal Medicine*, 61(19), 2941-2945 (2022) doi: 10.2169/internalmedicine.9020-21.
2. 白石渉, 立石貴久, 橋本侑, 山崎亮, 吉良潤一, 磯部紀子. 上腕二頭筋生検で診断に至らず, 外眼筋組織で遺伝子診断に至った慢性進行性外眼筋麻痺の 1 例. *臨床神経*, 62, 946-951 (2022).

【総説】

1. 吉良潤一. 二次進行型多発性硬化症の新規治療薬—シポニモド—. *脳神経内科*, 96(4), 423-430 (2022).
2. 吉良潤一. 免疫性神経疾患の研究・診断・治療の動向. *日本臨牀「免疫性神経疾患の病態・診断・治療の最新知見」*, 80 (増刊号 5) : 7-17 (2022).
3. 吉良潤一. アトピー性脊髄炎・Hopkins 症候群. *日本臨牀「免疫性神経疾患の病態・診断・治療の最新知見」*, 80 (増刊号 5) , 347-353 (2022).

4. 吉良潤一. 脊椎・脊髄障害 update. アトピー性脊髄炎. *Clinical Neuroscience*, 40 (11), 1400-1405 (2022).
5. 吉良潤一. 難病に挑む. *国際医療福祉大学学会誌*, 28(1), 1-8 (2023).

【Editorial comment】

1. 吉良潤一. 序文：次世代神経免疫学の幕開け. *日本臨牀臨時増刊号「免疫性神経疾患の病態・診断・治療の最新知見」*, 80 (増刊号 5), 1-3 (2022).

雑誌記事・その他

1. 吉良潤一. 脱髄疾患の謎を紐解く分子を求めて：CIDP へのチャレンジ. *全国 CIDP サポートグループ会誌*, 44, 3-7 (2022).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 中村優理, 迫田礼子, 柳原由記, 岩永育貴, 山下謙一郎, 飛松省三, 吉良潤一. SARS-CoV-2 ワクチン接種後に再発した視神経脊髄炎関連疾患の一例. 第 235 回日本神経学会九州地方会 (福岡) 2022/3/19
2. 柳原由記, 迫田礼子, 岩永育貴, 山下謙一郎, 中村優理, 檜橋徹也, 清水健太郎, 飛松省三, 吉良潤一. 一側の眼痛と動眼神経麻痺を呈し、Tolosa-Hunt 症候群との鑑別に眼窩造影 MRI が有用であった糖尿病性動眼神経麻痺の一例. 第 235 回日本神経学会九州地方会 (福岡) 2022/3/19
3. Kira J, Sakoda A, Yamato Y, Yanagihara Y, Saitoh B, Iwanaga Y, Yamashita K, Maimaitijiang G, Imamura T, Zhang X, Tobimatsu S, Nakamura Y. Foot-dorsiflexion power on the dominant hand side is useful to predict multiple sclerosis disability. 第 63 回日本神経学会学術大会 (東京) 2022/5/19
4. Imamura T, Kira J, Mitsuishi M, Maimaitijiang G, Zhang X. Exosomal microRNA profiles in peripheral blood are useful for early diagnosis of Alzheimer's disease. 第 63 回日本神経学会学術大会 (優秀口演賞候補セッション, 東京) 2022/5/19
5. Zhang X, Kira J, Ogata H, Sakoda A, Kobayashi M, Kitagawa K, Namihira Y, Ohya Y, Imamura T, Maimaitijiang G, Yamasaki R, Isobe N, Nakamura Y. Clinical features and mechanism of LGI4-IgG4-positive inflammatory demyelinating polyneuropathy. 第 63 回日本神経学会学術大会 (優秀口演賞候補セッション, 東京) 2022/5/19
6. Ko S, Yamasaki R, Okui T, Shiraishi W, Watanabe M, Hashimoto Y, Kobayakawa Y, Kusunoki S, Kira J, Isobe N. A nationwide epidemiological survey of Facial Onset Sensory Motor Neuronopathy (FOSMN) in Japan. 第 63 回日本神経学会学術大会 (優秀口演賞候補セッション, 東京) 2022/5/19

7. Maimaitijiang G, Kira J, Nakamura Y, Watanabe M, Sakoda A, Masaki K, Nagata S, Yamaguchi H, Yamasaki R, Isobe N, Zhang X, Imamura T. Exosomal GJA1-29k translational isoform is a novel blood biomarker for neuroinflammation in neuromyelitis optica. 第 63 回日本神経学会学術大会 (東京) 2022/5/19
8. Hayashi S, Yamasaki R, Kobayakawa Y, Isobe N, Kira J. The first evaluation of Calretinin in the spinal axons and cerebrospinal fluids of ALS patients. 第 63 回日本神経学会学術大会 (東京) 2022/5/19
9. Nagata S, Yamasaki R, Ozdemir E, Yamaguchi H, Masaki K, Kira J, Isobe N. Igratimod ameliorates clinical signs of the secondary progressive multiple sclerosis model mice. 第 63 回日本神経学会学術大会 (東京) 2022/5/22
10. Ogata H, Kobayakawa Y, Amina A, Yamasaki R, Takeuchi C, Kira J, Isobe N. Development of standardized ELISA kits for IgG4 anti-neurofascin 155 and anti-contactin-1 antibodies. 第 63 回日本神経学会学術大会 (東京) 2022/5/19-5/22
11. Matsuse D, Yamaguchi H, Masaki K, Nishimura Y, Tanaka T, Saiga T, Tanaka K, Yamasaki R, Isobe N, Kira J. A population of inflammatory microglia exacerbates a novel mouse model of multiple system atrophy. 第 63 回日本神経学会学術大会 (東京) 2022/5/19-5/22
12. Fukumoto S, Watanabe M, Niino M, Masaki K, Matsushita T, Sakoda A, Hayashi F, Kira J, Isobe N. Low gray matter volume can predict cognitive decline in Japanese patients with multiple sclerosis. 第 63 回日本神経学会学術大会 (優秀口演賞候補セッション, 東京) 2022/5/19
13. 渡邊充, 松尾江梨子, 福元尚子, 田中栄蔵, 眞崎勝久, 松下拓也, 吉良潤一, 磯部紀子. フマル酸ジメチル治療下の多発性硬化症患者の疾患活動性に関連する $\gamma\delta$ T 細胞分画の同定. 第 63 回日本神経学会学術大会 (東京) 2022/5/19-5/22
14. 新野正明, 福元尚子, 奥野龍禎, 三條伸夫, 深浦彦彰, 森雅裕, 大橋高志, 竹内英之, 清水優子, 藤盛寿一, 河内泉, 吉良潤一, 高橋恵里, 宮崎雄生, 三船恒裕. 日本人多発性硬化症患者における認知機能と QOL, 疲労, 抑うつとの相関. 第 63 回日本神経学会学術大会 (東京) 2022/5/19
15. 岡美希, 柳原由記, 迫田礼子, 岩永育貴, 山下謙一郎, 中村優理, 飛松省三, 吉良潤一. 視神経障害検出における VEP の有用性: 2つのチェックサイズ使用とフリッカー値との比較. 第 63 回日本神経学会学術大会 (東京) 2022/5/20
16. 柳原由記, 迫田礼子, 岩永育貴, 山下謙一郎, 中村優理, 飛松省三, 吉良潤一. 記憶障害を主徴とし、脳波検査で左側頭部に小鋭棘波(SSS)が頻発し、前側頭部電極(T1/T2)の追加で診断しえた一過性てんかん性健忘(TEA)の一例. 第 236 回日本神経学会九州地方会 (北九州) 2022/6/18
17. 吉良潤一, 張旭, グザリアイ・ママティジャン, 今村友裕, 緒方英紀, 磯部紀子, 中村優理, 森雅裕, 桑原聡, 簗輪智己, 海田賢一. ノド抗体陽性 CIDP/CCPD 全国調査成績と新規ノド抗体の発見. 難治性疾患実用化研究事業 2021 年度成果報告会 (オンライン)

2022/7/11

18. 中村優理, グザリアイ・ママティジャン, 今村友裕, 柳原由記, 岩永育貴, 山下謙一郎, 張旭, 吉良潤一. グリアコネキシン低分子量イソフォーム発現エクソソームによる多発性硬化症の増悪機序. 第 12 回国際医療福祉大学学会学術大会 (大川) 2022/8/28, 優秀演題賞受賞
19. グザリアイ・ママティジャン, 中村優理, 今村友裕, 渡邊充, 迫田礼子, 張旭, 磯部紀子, 吉良潤一. エクソソーム中のコネキシン 43 (Cx43)低分子量イソフォームとグリア線維性酸性蛋白質(GFAP)は視神経脊髄炎(NMOSD)再発の血液バイオマーカーである. 第 12 回国際医療福祉大学学会学術大会 (大川) 2022/8/28
20. 今村友裕, 柳原由記, 山下謙一郎, 張旭, グザリアイ・ママティジャン, 満石三喜男, 吉良潤一. 血清エクソソーム中のマイクロ RNA によるアルツハイマー病の早期診断バイオマーカー. 第 12 回国際医療福祉大学学会学術大会 (大川) 2022/8/28
21. 緒方英紀, Amina Abdelhadi, 山崎亮, 吉良潤一, 磯部紀子. Non-IgG4 抗 neurofascin155 抗体陽性症例における臨床像の検討. 第 33 回日本末梢神経学会学術集会 2022/9/9-9/10
22. 中村優理, 井上賢一, 横手顕, 迫田礼子, 柳原由記, 稲水佐江子, 岩永育貴, 山下謙一郎, 波呂敬子, 三嶋崇靖, 坪井義夫, 西野一三, 吉良潤一. 骨格筋 MRI で広範な造影効果を認めた抗 SRP 抗体陽性壊死性ミオパチーの 1 例. 第 237 回日本神経学会九州地方会(佐賀) 2022/9/17
23. グザリアイ・ママティジャン, 中村優理, 渡邊充, 迫田礼子, 今村友裕, 張旭, 磯部紀子, 吉良潤一. 視神経脊髄炎(NMOSD)再発時の神経障害と関連する新規血液エクソソーム (Ex)マーカー. 第 34 回日本神経免疫学会学術集会 (長崎) 2022/10/20-10/21
24. 渡邊充, 磯部紀子, 新野正明, 中島一郎, 松下拓也, 酒井康成, 中原仁, 河内泉, 越智博文, 中辻裕司, 中村好一, 中村幸志, 坂田清美, 松井真, 桑原聡, 吉良潤一. 第 5 回全国調査からみる多発性硬化症の二次性進行型に移行するリスク因子の検討. 第 34 回日本神経免疫学会学術集会 (長崎) 2022/10/20-10/21
25. 西村由宇慈, 眞崎勝久, 松瀬大, 山口浩雄, 田中辰典, 貞島祥子, 笹ヶ迫直一, 山崎亮, 磯部紀子, 岩城徹, 吉良潤一. 多系統萎縮症における connexin 蛋白群の早期かつ広範な変化と脱髄病態との関連. 第 34 回日本神経免疫学会学術集会 (長崎) 2022/10/20-10/21
26. 福元尚子, 渡邊充, 新野正明, 松下拓也, 眞崎勝久, 迫田礼子, 林史恵, 吉良潤一, 磯部紀子. 日本人多発性硬化症患者における高次脳機能と MRI パラメータ変化との関連. 第 34 回日本神経免疫学会学術集会 (長崎) 2022/10/20-10/21
27. Nagata S, Yamasaki R, Ozdemir E, Kashu K, Matsuo E, Yamaguchi H, Watanabe M, Masaki K, Kira J, Isobe N. Igaratimod ameliorates the severity of SPMS model mice by inhibiting IL-6 production and Th17 cell accumulation through mitigating glial inflammation. 第 34 回日本神経免疫学会学術集会 (長崎) 2022/10/20-10/21
28. 新野正明, 福元尚子, 奥野龍禎, 三條伸夫, 深浦彦彰, 森雅裕, 大橋高志, 竹内英之, 清

- 水優子, 藤盛寿一, 河内泉, 吉良潤一, 高橋恵里, 宮崎雄生, 三船恒裕. 日本人多発性硬化症患者における健康関連 quality of life の検討. 第 34 回日本神経免疫学会学術集会(長崎) 2022/10/20-10/21
29. 山口浩雄, 西村由宇慈, 松瀬大, 眞崎勝久, 田中辰典, 雑賀徹, 原田雅也, 田中謙二, 山崎亮, 吉良潤一, 磯部 紀子. 小脳型多系統萎縮症モデルマウスを用いた新規創薬ターゲットの探索. 第 40 回日本神経治療学会学術集会 (郡山) 2022/11/2-11/4
30. 松本省二, 中原一郎, 安田あゆ子, 沖田慎平, 小山裕司, 吉良潤一. タスク管理に特化したアプリケーションにより、脳卒中センターでのチーム医療を効率化し、より迅速な脳卒中治療を実現する. 第 42 回医療情報学連合大会・第 23 回日本医療情報学会学術大会 (札幌) 2022/11/17-11/20
31. 今村友裕, 吉良潤一, グザリアイ・ママティジャン, 満石三喜男, 張旭. 血清エクソソームのマイクロ RNA によるアルツハイマー病の診断バイオマーカー. 第 41 回日本認知症学会学術集会 (東京) 2022/11/25-11/27
32. 山下謙一郎, 柳原由紀, 迫田礼子, 横手頭, 岩永育貴, 中村優理, 吉良潤一. GIFT ソフトウェアによるアルツハイマー病治療薬での脳機能的結合変化の研究. 第 41 回日本認知症学会学術集会 (東京) 2022/11/25-11/27
33. 今村友裕, 吉良潤一, グザリアイ・ママティジャン, 満石三喜男, 張旭. 血清エクソソームのマイクロ RNA によるアルツハイマー病の診断バイオマーカー. 第 41 回日本認知症学会学術集会/第 37 回日本老年精神医学会 [合同開催] (東京) 2022/11/25
34. 横手頭, 迫田礼子, 柳原由記, 岩永育貴, 中村優理, 山下謙一郎, 波呂敬子, 三嶋崇靖, 坪井義夫, 佐藤亮太, 神田隆, 張旭, 満石三喜男, 吉良潤一. Onion bulb を認めた IgG2 抗 LGI4 抗体陽性自己免疫性ノドパチー(autoimmune nodopathy)の 1 例. 第 238 回日本神経学会九州地方会 (鹿児島) 2022/12/10
35. 横手頭, 迫田礼子, 岩永育貴, 中村優理, 山下謙一郎, 波呂敬子, 金本康弘, 松原尚子, 吉良潤一. 水痘・帯状疱疹ウイルスによる一側性第IX、X、XII脳神経障害を呈した 1 例. 第 239 回日本神経学会九州地方会 (福岡) 2023/3/25

【国際学会】

1. Donofrio PD, Gorson K, Hofman E, Karam C, Kira J, Kostera-Pruszczyk A, Léger J-M, Nobile-Orazio E, Attarian S, Markov M, Tse A, Parys W, Lewis RA. Diagnostic Adjudication of Chronic Inflammatory Demyelinating Polyneuropathy (CIDP) in the ADHERE Trial: Updates on the First 200 Cases. American Association of Neuromuscular & Electrodiagnostic Medicine 2022 (Nashville, USA) 2022/6/1
2. Kira J, Yamaguchi H, Nishimura Y, Matsuse D, Masaki K, Yamasaki R, Isobe N. Synucleinopathy-associated microglia uncovered by a novel multiple system atrophy-cerebellar type (MSA-C) mouse model. The 147th Annual Meeting of the American Neurological

Association, Neurodegeneration & Cell Death SIG session (Chicago, USA) 2022/10/23

3. Yamaguchi H, Nishimura Y, Matsuse D, Masaki K, Tanaka T, Saiga T, Harada M, Tanaka K, Yamasaki R, Isobe N, Kira J. Identification of synucleinopathy associated microglia in a novel mouse model of multiple system atrophy (MSA)-cerebellar type. Neuroscience 2022 (San Diego, USA) 2022/11/11-11/15
4. Ozdemir E, Yamasaki R, Nagata S, Watanabe M, Yamaguchi H, Masaki K, Kira J, Takeuchi H, Isobe N. Astroglial Connexin 43 Is A Novel Therapeutic Target for Chronic Multiple Sclerosis Model. 14th Congress of the Pan-Asian Committee for Treatment and Research in Multiple Sclerosis (PACTRIMS) (Singapore) 2022/11/24-11/26
5. Hayashi S, Yamasaki R, Kobayakawa Y, Kira J, Isobe N. The first evaluation of calretinin in the spinal axons encompassed in anterolateral funiculi outside the corticospinal tract and cerebrospinal fluids of ALS patients. International Symposium on ALS/MND (Virtual) 2022/12/6-12/9

【その他】

1. 吉良潤一. NMOSD 治療の新しい幕開け. ユプリズナの適正使用について考える会 in 九州 (福岡) 2022/2/1
2. 吉良潤一. Closing Remarks. 第二回片頭痛を考える会 in Fukuoka. (福岡) 2022/2/17
3. 吉良潤一. 中枢神経脱髄疾患のトランスレーショナルリサーチ. 中外製薬社内研修会. (福岡) 2022/5/12
4. 吉良潤一. Closing Remarks. Meet The Global MS Experts 2022. (ウェブ) 2022/6/4
5. 吉良潤一. Closing Remarks. 第三回片頭痛を考える会 in Fukuoka. (福岡) 2022/7/13
6. 吉良潤一. Closing Remarks. 生物学的製剤適正使用研究会. (福岡) 2022/9/21
7. 吉良潤一. グリア細胞からみた視神経脊髄炎の病態と展望. 第4回神経難病を考える会. (大分) 2022/12/13

依頼講演・招待講演 他

【招待公演】

1. Kira J. Clinical features and mechanism of autoimmune nodopathies. The 7th Neuromuscular Disorders Time Symposium. (Chinese Research Hospital Association and Huashan Hospital, Fudan University, Shanghai, China) 2022/6/24-6/25
2. 吉良潤一. 難病に挑む. 第12回国際医療福祉大学学会学術大会 教育講演 II (大川) 2022/8/28

受賞

1. 第12回国際医療福祉大学学会学術大会優秀演題賞 (ポスター発表) 受賞

中村優理, グザリアイ・ママティジャン, 今村友裕, 柳原由記, 岩永育貴, 山下謙一郎, 張旭, 吉良潤一. グリアコネキシン低分子量イソフォーム発現エクソソームによる多発性硬化症の増悪機序. 第 12 回国際医療福祉大学学会学術大会 (国際医療福祉大学大川キャンパス、現地・ウェブ開催) 2022/8/28 (共同受賞)

特許

1. 慢性炎症性脱髄性多発神経炎の診断方法、キット及びバイオマーカー

発明者: 吉良潤一, 河村信利, 山崎亮, 松瀬大, 緒方英紀

出願人名: 国立大学法人九州大学

出願国: 米国

出願番号: 15/544756

出願日: 2016/1/20

登録番号: US10509033

登録日: 2019/12/17

2. 神経障害性疼痛マーカー及びその使用.

発明者: 吉良潤一, 藤井敬之, 山崎亮, 飯沼今日子, 土本大介, 中別府雄作.

出願人名: 国立大学法人九州大学

出願国: 日本

出願番号: 特願 2019-512547

出願日: 2018/4/11

所属学会

1. 日本内科学会 (功労会員、元理事、元九州支部代表)
2. 日本神経学会 (名誉会員、元理事、第 55 回大会長)
3. 日本神経免疫学会 (名誉会員、元理事、元理事長、第 17 回大会長)
4. 日本末梢神経学会 (名誉会員、元理事、第 23 回大会長)
5. 日本脳卒中学会 (名誉会員、元幹事、元理事)
6. 日本自律神経学会 (理事)
7. 日本難病医療ネットワーク学会 (名誉会員、前理事長、元理事)
8. 日本神経化学会 (功労会員)
9. American Neurological Association (Corresponding Member)
10. International Society of Neuroimmunology (Former International Advisory Board Member)

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 日本神経学会 : 代議員選挙管理委員会委員長、神経免疫セクションチーフ
2. 日本神経免疫学会 : 国際対応委員会委員、あり方委員会委員、MS/NMSD 委員会委員

3. International Society of Neuroimmunology, Asia-Pacific School of Neuroimmunology, Moderator
4. Multiple Sclerosis and Related Disorders (Editorial Board Member, Section Editor for Clinical Neurology)
5. Journal of The Neurological Sciences (Editorial Board Member)
6. Multiple Sclerosis Journal (Editorial Board Member)
7. BMC Medicine (Editorial Advisor for Neurology)

研究費獲得状況

1. 文部科学研究費補助金・基盤研究 B (日本学術振興会), 新規発見ノド抗体による自己免疫性ノドパチーの中枢及び末梢神経脱髄機序の解明と治療, 2022 年度～2024 年度, 研究代表者
2. 難治性疾患実用化研究事業 (日本医療研究開発機構), 新規発見ノド抗原に基づいたノド抗体陽性慢性炎症性脱髄性多発神経炎/中枢末梢連合脱髄症の診断基準・診療ガイドライン作成のためのエビデンスの創出とバイオバンク・レジストリ構築, 2021 年度～2023 年度, 研究代表者
3. 難治性疾患実用化研究事業 (日本医療研究開発機構), 抗 plexin D1 抗体及び新規発見抗 neuropil 抗体陽性アトピー性脊髄炎・自己免疫性神経障害性疼痛の新診療ガイドライン作成のためのエビデンスとレジストリ構築, 2023 年度～2025 年度, 研究代表者
4. 文部科学研究費補助金・基盤研究 C (日本学術振興会), グリアコネクション低分子量イソフォーム発現エキソソームによる脱髄炎の悪化と治療開発, 2021 年度～2023 年度, 研究分担者
5. 文部科学研究費補助金・基盤研究 C (日本学術振興会), 中枢神経炎症性疾患の治療を遺伝・免疫・血清学的指標を用いて最適化する方法の確立, 2022 年度～2024 年度, 研究分担者
6. 文部科学研究費補助金・基盤研究 C (日本学術振興会), 単一細胞 RNA 解析による多系統萎縮症増悪性ミクログリア亜群の同定と同細胞標的療法, 2022 年度～2024 年度, 研究分担者
7. 文部科学研究費補助金・基盤研究 C (日本学術振興会), 毒性タンパク質 A β 42 含有エキソソームによるアルツハイマー病早期診断と病態伝搬の解明, 2022 年度～2024 年度, 研究分担者
8. 住友ファーマ株式会社共同研究, 認知症を対象とした新血液中バイオマーカーの関連分析及び臨床評価に関する研究, 2021 年度～2023 年度, 国際医療福祉大学研究担当者
9. 住友ファーマ株式会社共同研究, シヌクレイオパチーを中心とした神経変性疾患の発症・進展メカニズムの解明と創薬への応用, 2021 年度～2023 年度, 国際医療福祉大学研究担当者

10. 第一三共株式会社 奨学寄付プログラム 2022 年度（アカデミックサポート）

- (1) 末梢血中の中枢神経ニューロン及びグリア由来エクソソームを用いたアルツハイマー病の早期診断に有用な新規血液バイオマーカーの臨床応用に関する研究
- (2) アストログリア、ミクログリア及びオリゴデンドログリア由来のエクソソーム（グリオゾーム）を用いたアルツハイマー病における神経炎症に関する研究
- (3) エクソソームをドラッグデリバリーシステムとして用いるアルツハイマー病の新規治療法の開発に関する研究

氏名（役職）

永倉 透記（教授）

研究概要

線維筋痛症モデル動物を用いた病態機序解明および新規治療法探索

独自に開発したレセルピン誘発線維筋痛症モデルラットは、脳内モノアミンの慢性的低下やサイトカイン上昇等の病態機序解明、および治療法の効果判定に広く用いられている。本年度、これまでの本モデルを用いた研究で得られた病態機序、有望な治療法、およびモデルラットから患者へのトランスレーションに関する知見を総括して公表し、より有効な治療法探索に繋げる。

医療オープンデータ解析による疾患リスク要因の同定

疾患発症のリスク要因の同定を目的として、オープンデータ（厚生労働省から公開されている NDB Open Data Japan 等）の解析を進めている。前立腺肥大症(BPH)は、加齢に伴う前立腺組織肥大による排尿障害の諸症状を呈する疾患であり、高齢化社会において公衆衛生上の問題であることから、今年度は BPH を解析対象疾患として、その発症と関連する健康・生活習慣因子同定を試みた。

原著論文・総説

【原著論文】

1. Nagakura Y, Hayashi M, Kajioka S. Lifestyle habits to prevent the development of benign prostatic hyperplasia: Analysis of Japanese nationwide datasets. *Prostate Int.*, 10(4), 200-206 (2022).

【総説】

1. Nagakura Y. Therapeutic approaches to nociplastic pain based on findings in the reserpine-induced fibromyalgia-like animal model. *J. Pharmacol. Exp. Ther.*, 381(2), 106-119 (2022).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 永倉透記, 永岡昭吾, 黒瀬孝弘. 神経障害性口腔顔面痛の新しい治療薬の分子標的の調査. 第 12 回国際医療福祉大学学会学術大会（大川）2022/8/28
2. 永倉透記. 薬学教育. 第 12 回国際医療福祉大学学会学術大会（大川）2022/8/28

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本薬理学会（評議員、薬理学エディター）
3. 日本薬学教育学会

氏名（役職）

西村 信弘（教授）

研究概要

薬剤耐性菌対策のための抗菌薬適正使用に関する研究（島根大学医学部感染症グループとの共同研究）

耐性グラム陰性桿菌の遺伝子型と抗菌薬使用量の関連性について検討を行っている。耐性グラム陰性桿菌の遺伝子型および POT 型について経年変化を調査し、薬剤耐性率との関連を明らかにした。今後は、抗菌薬耐性対策のための抗菌薬適正使用シナリオの作成と耐性グラム陰性桿菌の伝播・蔓延を封じ込めるためのシミュレーションモデルの構築を目指している。

薬物の体内動態および相互作用に関する研究（島根大学医学部呼吸器内科グループとの共同研究）

肺がん患者の VTE 発生率に関する観察研究（Rising-VTE / NEJ037 研究）に付随する研究として、肺がん患者において、直接経口抗凝固薬（DOAC）とチロシンキナーゼ阻害薬を併用した場合の VTE 発生リスクおよび薬物体内動態に関する検討を行っている。今年度は、エドキサバンの PK が EGFR-TKI の同時投与によって有意に影響を受けなかいことを明らかにした。

著書

1. 直良浩司, 西村信弘. 感覚器・皮膚の病気とくすり 眼疾患 黄斑症・網膜症(加齢・糖尿病). 病気とくすり 2021 基礎と実践 Expert's Guide, 南山堂, 東京, pp. 1604-1616 (2021). 分担著者
2. 安田満, 西村信弘. 尿路・性器感染症. 日本化学療法学会 抗菌化学療法認定薬剤師テキスト改訂版～薬剤師が知っておきたい感染症と抗菌化学療法～, 杏林社, 東京, pp. 230-247 (2021). 分担著者

原著論文・総説

【原著論文】

1. Onita T, Ishihara N, Yano T, Ikebuchi A, Yano T, Nishimura N, Tamaki H, Ikawa K, Morikawa N, Naora K. Pharmacokinetic and pharmacodynamic simulation for the quantitative risk assessment of linezolid-associated thrombocytopenia. *J. Clin. Pharm. Ther.*, 47(12), 2041-2048 (2022).

雑誌記事・その他

1. 西村信弘. 第 194 回福岡県筑後地区薬剤師研修会報告. 福岡県病院薬剤師会会誌, 216, 44-44 (2022).
2. 西村信弘. 統合失調症の非治療抵抗性患者の維持療法としての抗精神病薬の有効性と忍容性—統合失調症の治療に関する系統的レビューおよびネットワークメタ分析—. ふくおか県薬会報, 35(4), 369-375 (2022).
3. 西村信弘, 村木優一, 辻泰弘. ケースでわかる処方箋のチェックポイント外来・薬局感染症学 副鼻腔炎・中耳炎/肺炎(市中肺炎・細菌性). 薬事, 64(13), 2717-2724 (2022).
4. 西村信弘. 第 100 回福岡県病院薬剤師会筑後支部会研修会報告. 福岡県病院薬剤師会会誌, 218, 55-55 (2022).
5. 西村信弘. 委員会報告 薬学教育研修会—聞いてみたかった実習のコト—. ふくおか県薬会報, 36(1), 51-51 (2023).
6. 西村信弘. 2 型糖尿病患者における SGLT2 および DPP-4 阻害剤療法の治療選択アルゴリズムの開発: レトロスペクティブ コホート研究. ふくおか県薬会報, 36(2), 140-147 (2023).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 西村信弘, 津端由香里, 柴田健太郎, 香月知真, 磯部威. 分子標的治療薬と直接経口抗凝固薬併用時の薬物体内動態および VTE リスクの評価. 国際医療福祉大学学術大会 2021 (大川) 2022/8/28
2. 永井友規, 宗像千恵, 西村信弘. 薬剤師の介入によりブプレノルフィン貼付剤からフェンタニル貼付剤へ移行し疼痛コントロール良好となった 1 例. 第 81 回九州山口薬学大会 (熊本) 2022/9/18
3. 津上可奈, 一木裕子, 村山裕, 大久保夏希, 平野和裕, 西村信弘. 簡易懸濁法のマニュアル改定に向けた取り組み. 第 81 回九州山口薬学大会 (熊本) 2022/9/18
4. 石原慎之, 大仁田哲修, 猪川和朗, 西村信弘, 玉木宏樹, 矢野貴久, 森川則文, 直良浩司. 日本人小児におけるピペラシリン・タゾバクタム配合剤の最適化投与へ向けた検討～母集団薬物動態モデルの構築と投与法の検討～. 第 32 回日本医療薬学会年会 (高崎) 2022/9/23
5. 石原慎之, 大仁田哲修, 猪川和朗, 西村信弘, 玉木宏樹, 矢野貴久, 森川則文, 直良浩司. 日本人小児における β ラクタマーゼ阻害剤タゾバクタムの母集団薬物動態モデルの構築. 第 96 回日本薬理学会年会/第 43 回日本臨床薬理学会学術総会 (横浜) 2022/11/30
6. 永井友規, 宗像千恵, 西村信弘. 貼付剤の体内動態を考慮した薬剤師による疼痛への介入例 第 18 回九州地区研究発表会 (大川) 2021/12/4
7. 細田菜摘, 福田光良, 柳原圭祐, 長友太希, 鈴木直人, 西村信弘, 木澤靖夫, 鈴木豊史.

PEG で溶解性を改善したエダラボンの経鼻投与による脳内神経保護効果. 日本薬学会
第 143 年会 (札幌) 2023/3/26

依頼講演・招待講演 他

【依頼講演】

1. 西村信弘. クリニカル・クエスチョンから学会発表までのロードマップ. 学会発表スキルアップセミナー (福岡) 2022/5/29
2. 西村信弘. ポリファーマシー事例への対応. 県内 4 ブロックにおける薬局薬剤師と病院薬剤師の合同ワークショップー筑後ブロックー (久留米) 2023/2/16
3. 西村信弘. 健康食品と医薬品の飲み合わせには注意が必要! 令和 3 年度健康食品管理士会九州支部第 1 回研修会 (大川) 2021/12/4

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本医療薬学会
3. 日本薬物動態学会
4. 日本臨床薬理学会
5. 日本緩和医療学会
6. 日本 TDM 学会
7. 日本化学療法学会
8. 日本環境感染学会
9. 日本感染症学会
10. 日本老年薬学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 一般社団法人日本病院薬剤師会 代議員
2. 一般社団法人日本病院薬剤師会「感染制御専門薬剤師部門研修委員会」委員長
3. 一般社団法人日本病院薬剤師会「薬剤師のための感染制御マニュアル」編集委員
4. 一般社団法人日本医療薬学会 代議員
5. 一般社団法人日本医療薬学会「医療薬学専門薬剤師研修小委員会」委員
6. 一般社団法人日本医療薬学会「医療薬学」編集委員
7. 一般社団法人日本医療薬学会「Postdoctoral Award 選考小委員会」委員
8. 一般社団法人日本 TDM 学会「TDM 研究」編集委員
9. 公益社団法人日本化学療法学会評議員
10. 一般社団法人日本環境感染学会評議員
11. 九州山口薬学会 理事

12. 一般社団法人福岡県病院薬剤師会 副会長
13. 福岡県病院薬剤師会・筑後支部 会長
14. 公益社団法人福岡県薬剤師会 理事
15. 大川三瀧薬剤師会 理事
16. 福岡県保健医療介護部薬務課 福岡県薬物乱用防止講習会講師団 講師
17. 第7回日本老年薬学会学術大会 実行委員
18. 第13回九州山口薬学会ファーマシューティカルケアシンポジウム 実行委員

研究費獲得状況

1. 基盤研究 B (一般研究) , 多剤耐性菌の発生・伝播を防止するための感染制御・抗菌薬適正使用アルゴリズムの構築, 2021 年度～2023 年度, 研究代表者
2. 基盤研究 C, 薬剤耐性菌および抗菌薬使用の疫学解析による AMR 対策シミュレーションモデルの構築, 2018 年度～2022 年度, 研究代表者
3. 塩野義製薬株式会社 シオノギ奨学寄附サポート, 多剤耐性グラム陰性桿菌の genotype および phenotype の迅速判定による感染伝播防止システムの構築, 2022 年度, 研究代表者
4. 日本イーライリリー株式会社 研究助成プログラム, 非小細胞肺癌の薬剤耐性を克服する細胞内シグナル調節機構の解明, 2022 年度, 研究代表者
5. 国際医療福祉大学学内研究費, 非小細胞肺癌における分子標的治療薬の個別化投与アルゴリズムの構築, 2022 年度, 研究代表者

氏名（役職）

長谷川 雄（教授）

研究概要

くも膜下出血後超急性期脳血管傷害の病態解明に関する研究（久留米大学医学部脳神経外科教室との共同研究）

くも膜下出血動物モデルを用いて、その予後に影響する超急性期脳血管障害の病態解明を行っている。

脳卒中患者の予後に関連する因子の解析（久留米大学医学部脳神経外科教室との共同研究）

くも膜下出血等脳卒中患者の予後と関連する因子について、解析、検討を行っている。

著書

1. Tang Z, Zhang J, Dong Q, Wu G, Hasegawa Y, Kellner C. Research topics: Precision of minimally invasive surgery for intracerebral hemorrhage treatment. *Front Neurol.*, Research topics, Lausanne, no pages were provided (total 13 articles), 2022 (Special issue).

原著論文・総説

【原著論文】

1. Kikuchi J, Orito K, Sakata K, Yamamoto M, Hasegawa Y, Shojima T, Tayama E, Morioka M. Neurosurgical Treatment of Patients with Posterior Fossa Acute Subdural Hematoma Right after Cardiac Surgery. *Neurol. Med. Chir.*,62(5), 238-245 (2022).
2. Kameno K, Hasegawa Y, Hayashi K, Takemoto Y, uchikawa H, Mukasa A, Kim-Mitsuyama S. Loss of body weight in old 5xFAD mice and alteration of gut microbiota composition. *Exp. Gerontol.*,166, 111885 (2022).
3. Fujimori K, Kajiwara S, Hasegawa Y, Uchikawa H, Morioka M. Microscopic observation of morphological changes in cerebral arteries and veins in hyperacute phase after experimental subarachnoid hemorrhage: An in vivo analysis. *Neuroreport*, 34, 184-189 (2023).

【総説】

1. Hasegawa Y, Uchikawa H, Kajiwara S, Morioka M. Central Sympathetic Nerve Activation in Subarachnoid Hemorrhage. *J. Neurochem.*, 260(1), 34-50 (2022).

【Editorial comment】

1. Tang Z, Zhang J, Dong Q, Wu G, Hasegawa Y, Kellner C. Editorial: Precision of minimally invasive surgery for intracerebral hemorrhage treatment. *Front. Neurol.*, 13, 996394 (2022).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 長谷川雄, 鈴木秀謙, Altay Orhan, 森岡基浩. 実験的くも膜下出血後早期脳損傷におけるスフィンゴ脂質代謝産物の治療効果検討. Stroke 2022 (大阪) 2022年3月. 【シンポジウム】
2. 梶原壮翔, 長谷川雄, 森岡基浩他. ラットくも膜下出血後皮質動静脈の経時的変化の特徴. Stroke 2022 (大阪) 2022年3月. 【シンポジウム】
3. 藤森香奈, 長谷川雄, 森岡基浩他. 当院における aneurysmal SAH 後 cerebral vasospasm/symptomatic vasospasm の発生状況の分析. Stroke 2022 (大阪) 2022年3月. 【シンポジウム】
4. 藤森香奈, 長谷川雄, 森岡基浩他. 当院の高齢 aneurysmal SAH の分析・検討から高齢者 SAH 管理を考える. 35 回老年脳神経外科学会 (徳島) 2022年4月.
5. 亀野功揮, 長谷川雄, 林建佑, 岳元裕臣, 内川裕貴, 光山勝慶, 武笠晃丈. アルツハイマー病モデルマウスにおける認知機能障害と腸内細菌との関連. 第 22 回日本分子脳神経外科学会 (金沢) 2022年7月.
6. 長谷川雄, 梶原壮翔, 岳元裕臣, 森岡基浩. くも膜下出血の病態における中枢性交感神経活動. 第 65 回日本脳循環代謝学会 (山梨) 2022年10月. 【シンポジウム】
7. 梶原壮翔, 長谷川雄, 森岡基浩他. 脳内高ナトリウム持続曝露は高血圧ラットの脳卒中発症を誘発し健康寿命を増悪させる. 第 65 回日本脳循環代謝学会 (山梨) 2022年10月.
8. 藤森香奈, 長谷川雄, 森岡基浩他. ラットくも膜下出血後脳表動静脈の動的变化と予後についての検討. 第 65 回日本脳循環代謝学会 (山梨) 2022年10月.

所属学会

1. 日本脳神経外科学会
2. 日本脳神経外科コンgres学会
3. 日本頭痛学会
4. 日本脳循環代謝学会
5. SAH/スパズムシンポジウム
6. 日本高血圧学会
7. 日本脳血管・認知症学会
8. 日本脳卒中学会
9. 日本生理学会
10. 日本薬理学会
11. 日本脳神経外科漢方医学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 久留米大学医学部医学科客員教授
2. SAH/スパズムシンポジウム世話人
3. 日本脳循環代謝学会幹事
4. 日本脳血管・認知症学会評議員、あり方委員
5. 日本生理学会評議員
6. 日本薬理学会評議員
7. 日本高血圧学会評議員
8. 日本脳神経外科学会認定専門医、学術評議員
9. 日本脳卒中学会認定脳卒中専門医
10. 日本頭痛学会認定専門医
11. Translational Stroke Research, Editorial Board
12. Brain Hemorrhages, Editorial Board

研究費獲得状況

1. 基盤研究 C, 視床下部傷害に着目したくも膜下出血の新たな予後決定病態の解明, 2019年度～2022年度, 研究代表者
2. 基盤研究 C, 脳内出血の転帰改善を目指した選択的・積極的・短時間降圧療法の開発, 2021年度～2023年度, 研究分担者
3. 国際医療福祉大学学内研究費, 脳動脈瘤再破裂によるくも膜下出血後脳損傷に対する予防的麻酔薬の脳保護検討, 2022年度, 研究代表者
4. 大樹生命厚生財団, 脳動脈瘤再破裂後くも膜下出血に対するバルビツレート Step-down infusion 療法の効果検討, 2021～2022年度, 研究代表者
5. 奨学寄附金(塩野義製薬), くも膜下出血の最大の予後不良因子「脳動脈瘤再破裂」の長期予後に関わる病態解明の研究, 2022年度, 研究代表者

氏名（役職）

平木 洋一（教授）

研究概要

神経難病患者に対する抗 MRSA 薬の適正投与を目的とした腎機能評価方法に関する研究

一般的に腎機能の評価に用いられる推算糸球体濾過率（eGFR）は、筋肉で産生される血清クレアチニン（SCr）値から計算される。したがって、病的に筋萎縮を示す神経難病の患者では、正確な eGFR を推定することが出来ない。本研究では、神経難病患者の腎機能評価が可能となるマーカーを明らかにし、バンコマイシン（VCM）およびテイコプラニン（TEIC）の適切な投与設計を図ることを目的とする。本研究では、神経難病患者における VCM, TEIC の血中濃度を推定するために必要となる eGFR を、SCr および新しいマーカーであるシスタチン C で算出し、血中濃度を予測する。予測された濃度と実測濃度を比較することで、神経難病患者に適したマーカーを明らかにする。また、本研究の発展として神経難病患者の腎機能評価方法への展開が期待される。

原著論文・総説

【原著論文】

1. Fujimoto A, Koutake Y, Hisamatsu D, Ookubo N, Yabuuchi Y, Kamimura G, Kai T, Kozono A, Ootsu T, Suzuki H, Matsuo K, Kuwahara K, Oiwane Y, Nagata Y, Tanimoto K, Sato E, Suenaga M, Uehara T, Ikari A, Endo S, Hiraki Y, Kawamata Y. Risk factors indicating immune-related adverse events with combination chemotherapy with immune checkpoint inhibitors and platinum agents in patients with non-small cell lung cancer: A multicenter retrospective study. *Cancer Immunol. Immunother.*, (2023). doi: 10.1007/s00262-023-03408-4. Online ahead of print, PMID: 36849845

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 山科卓也, 山崎貴史, 青柳千愛, 下村真代, 古海和博, 平木洋一. 筋萎縮を呈する患者での Scr と CysC に基づく VCM 濃度の予測精度比較. 第 32 回日本医療薬学会年会（群馬）2022/9/23
2. 山崎貴史, 山科卓也, 青柳千愛, 下村真代, 平木洋一, 古海和博. 結核治療におけるリファブチン導入の可否に関与する因子の検討. 第 32 回日本医療薬学会年会（群馬）2022/9/24
3. 青柳千愛, 山科卓也, 山崎貴史, 下村真代, 兵藤沙耶, 平木洋一, 肥山和俊. FLCZ 耐性に関する因子の解析と初期選択薬の検討. 第 32 回日本医療薬学会年会（群馬）2022/9/25

4. 川野智美, 薬師寺並, 川井田知広, 入江健司, 塚田寛子, 小山田純治, 堀南奈子, 平木洋一. 眼科手術における予防的経口抗菌薬の削除による影響. 第 16 回日本腎臓病薬物療法学会学術集会 (長崎、Web 開催) 2022/10/29

所属学会

1. 日本化学療法学会
2. 日本医療薬学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 日本医療薬学会代議員

研究費獲得状況

1. 国際医療福祉大学学内研究費, 神経・筋疾患患者へのテイコプラニン投与量を推定するための腎機能評価方法の検討, 2022 年度, 研究代表者

氏名（役職）

外 須美夫（教授）

研究概要

慢性疼痛に関する研究

慢性疼痛をもたらす身体的変容は痛みの器質的可塑化とも呼ばれるもので、痛みの過敏化が特徴の一つである。心理的変容としては破局化がある。さらに慢性疼痛は生命的変容として枯渇化という状態も引き起こしうる。治療者が慢性疼痛患者に寄り添い、痛みの治療を駆使し、また患者自らが自然治癒力を養うことによって、身体的変容が痛みの治癒的可塑化へ、心理的変容が受容へ、生命的変容がレジリエンスへとつながっていくことが期待される。

原著論文・総説

【総説】

1. 外須美夫. 「身心一如、東西一如、自他一如の痛み治療」. *慢性疼痛*, 41, 8-13 (2022).

雑誌記事・その他

1. 外須美夫. 「ほか先生の医療のススメ：なぜ麻酔科医に その理由は」. 朝日新聞, 2022/4/13
2. 外須美夫. 「ほか先生の医療のススメ：多様な専門職 人間愛が不可欠」. 朝日新聞, 2022/4/20
3. 外須美夫. 「ほか先生の医療のススメ：痛み 「心身一如」の目で診る」. 朝日新聞, 2022/5/18
4. 外須美夫. 「ほか先生の医療のススメ：資質養う勉強 真理追求のため」. 朝日新聞, 2022/5/25
5. 外須美夫. 「ほか先生の医療のススメ：必要な痛み 遠ざけて良いのか」. 朝日新聞, 2022/6/1
6. 外須美夫. 「ほか先生の医療のススメ：人知超えた存在 生命への畏怖」. 朝日新聞, 2022/6/15
7. 外須美夫. 「ほか先生の医療のススメ：生き死ぬ意味 考えませんか」. 朝日新聞, 2022/6/22
8. 外須美夫. 「ほか先生の医療のススメ：情と非情 交錯する医療現場」. 朝日新聞, 2022/7/13
9. 外須美夫. 「ほか先生の医療のススメ：生命の尊厳と平等 向き合いつつ」. 朝日新聞, 2022/7/20
10. 外須美夫. 「ほか先生の医療のススメ：看護師こそ問われる人間力」. 朝日新聞, 2022/8/10

11. 外須美夫. 「ほか先生の医療のススメ：誰からも望まれる看護師 目指そう」. 朝日新聞, 2022/8/31
12. 外須美夫. 「ほか先生の医療のススメ：看護師 寛容さと誇りを持って」. 朝日新聞, 2022/9/14
13. 外須美夫. 「ほか先生の医療のススメ：持久力が肝心 ランニングいいよ」. 朝日新聞, 2022/9/28
14. 外須美夫. 「ほか先生の医療のススメ：理学療法士 リハビリも 介護予防も」. 朝日新聞, 2022/10/12
15. 外須美夫. 「ほか先生の医療のススメ：日常へ戻る訓練 作業療法士と」. 朝日新聞, 2022/10/19
16. 外須美夫. 「ほか先生の医療のススメ：話す 聞く 言語聴覚士がサポート」. 朝日新聞, 2022/11/9
17. 外須美夫. 「ほか先生の医療のススメ：小学生のみんなへ いのち輝かせて」. 朝日新聞, 2022/11/16
18. 外須美夫. 「ほか先生の医療のススメ：中学生は中身の芯を強く」朝日新聞、2022/12/14
19. 外須美夫. 「ほか先生の医療のススメ」. 朝日新聞, 2023/1/17
20. 外須美夫. 「ほか先生の医療のススメ」. 朝日新聞, 2023/1/24
21. 外須美夫. 「ほか先生の医療のススメ」. 朝日新聞, 2023/2/14
22. 外須美夫. 「ほか先生の医療のススメ」. 朝日新聞, 2023/2/21
23. 外須美夫. 「ほか先生の医療のススメ」. 朝日新聞, 2023/3/14
24. 外須美夫. 「ほか先生の医療のススメ」. 朝日新聞, 2023/3/21

依頼講演・招待講演 他

1. 外須美夫. 「麻酔科学の魅力と可能性：来し方行く末」日本麻酔科学会第 68 回日関西支部学術集会 (Web 開催) 2022/9/2

所属学会

1. 日本麻酔科学会
2. 日本臨床麻酔学会
3. 日本心臓血管麻酔学会
4. 日本循環制御医学会
5. 日本医療ガス学会
6. 日本蘇生学会
7. 日本緩和医療学会
8. 日本ペインクリニック学会
9. 日本疼痛漢方学会

10. 痛みの漢方研究会（九州山口）

11. 遠絡統合医学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 厚生労働省医薬品・医療機器安全対策部会 部会長

氏名（役職）

村田 祐造（教授）

研究概要

下垂体後葉ホルモンによる血糖低下作用のメカニズムの解明

下垂体後葉ホルモンのオキシトシン及びバソプレシン投与により、糖負荷後の血糖値上昇抑制および尿糖排出を観察してきた。その効果にバソプレシン受容体が関与していることが阻害剤の使用により明らかとなった。そのメカニズムは後葉ホルモンが腎臓をはじめとする多臓器における細胞の直接的あるいは膵島からのインスリンを介した糖輸送体の細胞膜への発現変化に関与していると考えられ、組織学的手法により解明する。これより、オキシトシンによる血糖調節の可能性が期待される。

糖尿病モデルラット唾液腺に関する研究

糖尿病による唾液腺の変化に関する検討を行っている。糖尿病モデルラットの唾液腺における特徴が免疫組織化学を用いた解析により、正常ラットと統計的に有意の差があることが明らかとなった。これより、糖尿病患者における口渇のような症状の原因解明の一助となることが期待される。

Sotos 症候群の学習障害モデルマウスの樹立とその発症機構に関する研究（佐賀大学医学部 東元健准教授との共同研究）

Sotos 症候群の学習障害モデルマウス樹立のためのノックアウトマウスの脳組織解析による検討を行っている。今年度は、大脳組織の特異部位に異常があることが明らかとなった。これより、Sotos 症候群の学習障害の原因解明が期待されている。

原著論文・著書

【原著論文】

1. Perveen R, Manirujjaman M, Mine K, Murata Y, Tanaka K, Xia J, Takahashi H, Anzai K, Matsuhashi S. Induction of premature senescence and a less-fibrogenic phenotype by programmed cell death 4 knockdown in the human hepatic stellate cell line Lieming Xu-2. *Hum. Cell*, Open Access (2022).
2. Maruo K, Nishiyama M, Honda Y, Cao A-L, Gao W-Q, Shibata K, Murata Y, Kido MA. Increased GLUT1 expression and localization to Golgi apparatus of acinar cells in the parotid gland of Goto-Kakizaki diabetic rats. *Arch. Oral Biol.*, 146 (2023).

国内学会・シンポジウム

【国内学会】

1. 村田祐造, 柴田健太郎, 本田裕子. 下垂体後葉ホルモンの腎臓への影響による血糖低下作用. 第12回国際医療福祉大学学会学術大会(大川) 2022/8/28

所属学会

1. 日本解剖学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 日本解剖学会九州支部代議員

研究費獲得状況

1. 学内研究費(一般研究), 下垂体後葉ホルモンによる血糖低下作用メカニズム: 腎尿管糖運搬体の細胞内分布変化, 2022年度, 研究代表者

氏名（役職）

山口 政俊（特任教授）

研究概要

セロトニンやカテコールアミン関連物質の高感度・高選択的分析法の開発とその薬理・臨床研究への展開に関する研究に関する検討を行っている。本研究は、神経疾患の科学的診断法の確立や治療薬の基礎的研究・開発に貢献できる。

医薬品の化学的構造をピンポイントに光学（蛍光、化学発光、燐光）発光標識し、対応する光学検出器で定性・定量する超高感度検出法を開発し、さらに高速液体クロマトグラフィーやキャピラリー電気泳動などの分離手法と連結することに基づく高選択的分析法の開発を行っている。本研究は、医薬品の新規開発及びその適正使用に関する研究に役立つ。

所属学会

1. 日本解剖学会
2. 日本分析化学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 薬学教育評価機構 総合評価評議員
2. 化学物質評価研究機構 理事
3. 日本分析化学会 九州支部幹事
4. 日本薬学会 九州山口支部幹事

氏名（役職）

一木 裕子（准教授）

研究概要

ファーマシーマネジメントの実践に関する研究

医療用ビッグデータを活用した臨床薬学によるデータサイエンスの探究（九州大学大学院薬学研究院 臨床育薬学分野との共同研究）

医療用ビッグデータを用いたデータサイエンスの探究に関する研究を行った。今年度は、新型コロナウイルスワクチンの副作用に関する検討を行った。今後は更に研究を重ね、医薬品との相互作用による副作用について展開する予定である。

糖尿病外来における病院薬剤師による服薬指導の血糖コントロールに対する効果

糖尿病外来において医師の診察前に病院薬剤師がチェックシートを用いた服薬指導を行い、病院薬剤師の薬学的管理が糖尿病治療に有効であることを明らかにした。

精神科病棟長期入院患者に対する薬剤師による処方支援の有用性

精神科病棟にて薬剤師による長期入院患者に対する処方支援は有用であり、ベンゾジアゼピン系薬剤等の投与量減少に寄与し、医療費削減効果が得られることを明らかにした。

Pharmacokinetics/ pharmacodynamics (PK/PD) に基づいた薬物至適血中濃度の予測精度の検討

重症疾患および難病患者の薬物治療の至適化を目指した薬剤学的検討を行った。今後は、様々な医薬品の薬物動態を検討していくことで、治療の更なる展開する予定である。

著書

1. 21世紀の疾患:神経関連アミロイドーシス. 医学と看護社, (2020). 分担著者

原著論文・総説

【原著論文】

1. Matsushita H, Isoguchi A, Okada M, Masuda T, Misumi Y, Tsutsui C, Yamaguchi N, Ichiki Y, Sawashita J, Ueda M, Mizuguchi M, Ando Y. Glavonoid, a possible supplement for prevention of ATTR amyloidosis. *Heliyon*, 7(10), e08101 (2021).
2. Matsushita H, Isoguchi A, Okada M, Masuda T, Misumi Y, Ichiki Y, Ueda M, Ando Y. Amyloid fibril formation is suppressed in microgravity. *Biochem. Biophys. Rep.*, 25, 100875-100875 (2021).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 津上可奈, 一木裕子, 村山裕一, 大久保夏希, 平野和裕, 西村信弘. 簡易懸濁法のマニュアル改定に向けた取り組み. 第 81 回九州山口薬学大会 2022/9/18-9/19

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本医療薬学会
3. 日本生薬学会
4. 日本くすりと糖尿病学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 福岡県糖尿病療養指導士 北九州 CDE の会監事
2. 福岡県薬剤師会学術倫理審査会委員

研究費獲得状況

1. 国際医療福祉大学学内研究費（一般研究 A）, 神経・筋疾患患者へのテイコブラニン投与量を推定するための腎機能評価方法の検討, 2022 年度, 研究分担者

氏名 (役職)

齊藤 秀俊 (准教授)

研究概要

行動変容を引き起こすグリア機能の解明に関する研究 (九州大学薬学部 薬理学分野グループとの共同研究)

脊髄後角抑制性介在神経の特定集団 (NpyP 陽性・DynP 神経) の感覚伝達における役割の解析を行っている。今年度は、DynP 陽性神経の神経障害性疼痛モデル病態における役割の解析を行った。また、病態時の NpyP 陽性細胞とグリア細胞との相互作用解析を行い、NpyP 陽性細胞への興奮性/抑制性入力の変化について、組織学的なシナプスマーカーの解析を進めている。

グリア細胞活性化メカニズムの解明に関する研究 (九州大学薬学部 薬理学分野グループとの共同研究)

レセルピン誘発線維筋痛症モデルマウスのグリア細胞の活性化と痛覚への影響について検討を行っている。今年度は、レセルピン誘発線維筋痛症モデルマウスの前頭前皮質ミクログリアを単離し、遺伝子発現変化の解析を行った。ミクログリアの遺伝子発現パターンによる分類により亜集団の組成変化を示す証拠を得た。これより、線維筋痛症モデル病態での脳ミクログリアの新たな役割の解明が期待される。

原著論文・総説

【原著論文】

1. Ishibashi T, Yoshikawa Y, Sueto D, Tashima R, Tozaki-Saitoh H, Koga K, Yamaura K, Tsuda M. Selective Involvement of a Subset of Spinal Dorsal Horn Neurons Operated by a Prodynorphin Promoter in A β Fiber-Mediated Neuropathic Allodynia-Like Behavioral Responses in Rats. *Front. Mol. Neurosci.*, 15, 911122 (2022).
2. Fujimori K, Sekine M, Watanabe M, Tashima R, Tozaki-Saitoh H, Tsuda M. Chemogenetic silencing of spinal cord-projecting cortical neurons attenuates A β fiber-derived neuropathic allodynia in mice. *Neurosci. Res.*, 181, 115-119 (2022).

【総説】

1. 齊藤秀俊. 動物モデルを用いた心理社会的ストレスと痛みの科学的理解へのアプローチ. *心身医学*, 62(5), 498 (2022).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 齊藤秀俊. 社会的ストレスによる痛みの変調とグリアの関与. 日本科学振興協会 第 1 回総会・キックオフミーティング (online) 2022/6/22

依頼講演・招待講演 他

1. 痛みを形作る神経-グリア回路の科学. Pain Expert Meeting (online) 2023/2/15

所属学会

1. 日本薬理学会
2. 日本神経化学会
3. 日本神経科学会
4. 日本疼痛学会
5. 日本ストレス学会

研究費獲得状況

1. 基盤研究 C, 脊髄ミクログリアと脳神経の相互作用をシナプスレベルで解析する, 2022 年度～2026 年度, 研究代表者
2. 学術変革領域研究 A, グリア多様性を軸にした介入法による感覚など全身機能の変容, 2020 年度～2024 年度, 分担研究者

氏名（役職）

多田納 豊（准教授）

研究概要

MAC が産生する D-アミノ酸のマクロファージ細胞に対する作用の検討

本テーマでは、長期的に細胞内感染する抗酸菌について、マクロファージの活性化・分極化の制御における抗酸菌由来 D-アミノ酸の働きについての解明を目指している。

非結核性抗酸菌である *M. intracellulare* による産生が認められた 5 種類の D-アミノ酸について、マクロファージ細胞株（RAW264.7 細胞）に及ぼす影響を RNAseq 解析により検討したところ、イオン輸送系および細胞外マトリックス関連遺伝子など、アミノ酸毎に様々な遺伝子の発現変動が認められた。

原著論文・総説

【総説】

1. 多田納豊, 富岡治明. 抗酸菌感染症における IL-17 の関与と治療標的となる可能性について. *複十字*, 407, 16-17 (2022).
2. 多田納豊, 佐野千晶, 清水利朗, 富岡治明. 生薬による抗酸菌症治療—Th17 の免疫機能調節との関連から. *結核*, 97(3), 229-238 (2022).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 多田納豊, 佐野千晶, 富岡治明. 抗酸菌感染により誘導される宿主免疫応答の防御作用と重症化への関与～IL-17 産生細胞の誘導と機能について～. 第 97 回日本結核・非結核性抗酸菌症学会学術講演会（旭川・星野リゾート OMO7）2022/7/2【シンポジウム 9, 抗酸菌症での免疫の関わり】
2. 多田納豊, 北川朱里, 丸橋真美, 奈良美春, 宗像達夫, 佐野千晶, 富岡治明, 八木秀樹. 抗酸菌由来 D アミノ酸によるマクロファージ活性調節機構についての検討. 第 12 回国際医療福祉大学学会学術大会（国際医療福祉大学大川キャンパス+オンライン）2022/8/28【ポスター】
3. 澤井円香, 多田納豊, 宮内優, 石田卓巳, 武知進士. 生体内 TLR4 シグナル活性化に対する糖化産物ジヒドロピラジン(DHP)の抑制効果. 第 12 回国際医療福祉大学学会学術大会（国際医療福祉大学大川キャンパス+オンライン）2022/8/28【ポスター】
4. 澤井円香, 伊藤俊治, 吉田雅紀, 周建融, 多田納豊, 宮内優, 石田卓巳, 武知進士. ジヒドロピラジンによる TLR4 ネガティブフィードバック機構の制御. 衛生薬学・環境トキシコロジー フォーラム 2022（熊本・熊本城ホール）2022/8/30
5. Sawai M, Itoh S, Yoshida M, Zhou JR, Tatano Y, Miyauchi Y, Ishida T, Takechi S.

Dihydropyrazine suppresses TLR4-dependent inflammatory responses in vivo. 衛生薬学・環境トキシコロジー フォーラム 2022 日韓次世代ポスターセッション (熊本・熊本城ホール) 2022/8/30

6. 澤井円香, 多田納豊, 宮内優, 石田卓巳, 武知進士. 生体内TLR4シグナル活性化に対する糖化産物ジヒドロピラジン(DHP)の抑制効果. 第39回日本薬学会九州山口支部大会 (長崎・長崎国際大学) 2022/11/19
7. 多田納豊, 宗像達夫, 江崎円香, 八木秀樹, 佐野千晶, 富岡治明. *Mycobacterium avium* complex 由来 D アミノ酸によるマクロファージの性状変化誘導についての検討. 日本薬学会第143年会 (札幌・北海道大学) 2023/3/26
8. 藤平ほのか, 星都, 高橋健人, 小太刀菜月, 多田納豊, 小川拓哉, 八木秀樹. ヒト lysophosphatidyl serine 受容体-2 (LysoPS2) に対する新規モノクローナル抗体の作製. 日本薬学会第143年会 (札幌・北海道大学) 2023/3/26
9. 澤井円香, 周建融, 多田納豊, 宮内優, 武知進士. 糖化産物 dihydropyrazine による接触性皮膚炎モデルマウス症状緩和のメカニズム解析. 日本薬学会第143年会 (札幌・北海道大学) 2023/3/28

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本細菌学会
3. 日本感染症学会
4. 日本化学療法学会
5. 日本結核・非結核性抗酸菌症学会
6. 日本生化学会

研究費獲得状況

1. 基盤研究 C, 抗酸菌産生 D アミノ酸とマクロファージの感染防御メカニズムとの関連性についての検討, 2021年度~2023年度, 研究代表者
2. 基盤研究 B, 多剤耐性菌の発生・伝播を防止するための感染制御・抗菌薬適正使用アルゴリズムの構築, 2021年度~2023年度, 研究分担者 (代表者: 西村信弘)

氏名（役職）

塚本 宏樹（准教授）

研究概要

免疫応答を調節する抗体・化合物の探索・創出による治療・創薬開発の基盤研究

免疫応答に関わる分子の機能を調節する抗体や化合物を作製・探索し、がん、アレルギー、敗血症、自己免疫疾患を始めとした免疫疾患の新規治療・創薬開発の基盤研究を進めている。今年度は、TLR4 刺激抗体がトリ卵白アルブミン誘発性食物アレルギーモデルマウスにおける感作を抑制すること（予防効果）、また、感作マウスにおける腸管アレルギーの発症を抑制すること（治療効果）を明らかにした。一方、TLR4 の細菌性リガンドであるグラム陰性菌細胞壁のリポ多糖にアレルギー予防・治療効果が認められないことを明らかにした。TLR4 刺激抗体によってアレルギーが抑制されたマウスの腸管では肥満細胞数は有意に減少し、肥満細胞活性化マーカーの血中濃度も有意に低下した。抗アレルギー特異的 IgE 血中濃度も有意に低下した。今後、TLR4 刺激抗体によるアレルギー抑制効果の作用機序を明らかにし、従来にはない新しいアレルギー治療・予防戦略の立案や衛生仮説に代表される環境要因とアレルギー増加の因果関係について公衆衛生学的貢献が期待される。

原著論文・総説

【原著論文】

1. 塚本宏樹. Toll 様受容体 4 刺激抗体による食物アレルギー治療効果. アレルギーの臨床, 7月号, p766-769 (2022).
2. 塚本宏樹. Toll 様受容体 4 刺激抗体による食物アレルギー治療効果（依頼）. アレルギーの臨床, 7月臨時増刊号, p76-78 (2022).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 塚本宏樹, 小林洋平, 渡邊悠理香, 富岡佳久. Toll 様受容体 4 刺激抗体の食物アレルギー予防・治療効果. 第 39 回日本薬学会九州山口支部大会（佐世保）2022/11/19-11/20

依頼公演・招待公演 他

【国内学会】

1. 塚本宏樹. 根治を目指す Toll 様受容体 4 刺激抗体による食物アレルギー予防・治療戦略. 第 12 回国際医療福祉大学学会学術大会（大川）2022/8/28, 優秀演題口述発表・大会長賞

受賞

1. 第12回国際医療福祉大学学会学術大会 大会長賞・優秀発表賞

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本生化学会
3. 日本免疫学会

研究費獲得状況

1. 基盤研究 C（一般）, TLR4 刺激抗体 of 食物アレルギー抑制機序解明による新規アレルギー予防・治療戦略, 2021 年度～2023 年度, 研究代表者
2. 学内研究費（一般研究 A 一般）, 食物アレルギーを抑制する Toll 様受容体 4 刺激抗体 of 肥満細胞抑制作用, 2022 年度, 研究代表者

氏名（役職）

成川 佑次（准教授）

研究概要

天然由来生物活性成分に関する研究

医薬資源としての天然物に焦点を当て、各種生物活性試験を指標とした成分探索研究を行っている。これまでに中南米で問題となっている原虫感染症、シャーガス病の原因となっている *Trypanosoma cruzi* に対する高い抗原虫活性を示す物質の探索を行い、活性を有する成分の構造を明らかにしている。今年度は未解明物質の構造推定を行うとともに薬用植物園整備に向けて薬用植物栽培の検討を行った。また、生薬の品質評価ならびに漢方処方の有効性に関する研究についても今後行っていく予定である。

原著論文・総説

【原著論文】

1. Kiuchi F, Uekusa Y, Narukawa Y. Oxidation of methylophiopogonanone A on the surface of TLC plate. *J. Nat. Med.*, 76, 504-508 (2022).

受賞

1. Journal of Natural Medicines 論文賞（日本生薬学会）（分担, 令和4年2月28日決定）

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本生薬学会

氏名（役職）

宗像 達夫（准教授）

研究概要

色素が与えるとオクタノール分配係数変化に関する研究

メチルオレンジとオクタノールの相互作用による分配係数の変化に関する研究を行っている。今年度に関しては、オクタノール中の添加物に着目して検討を行い、添加物も一定の影響を及ぼしていることが明らかとなった。メチルオレンジとオクタノールの相互作用解明により、構造修飾により DDS への発展が見込める。

機能性天然物に着目したサクラの成分研究

身近に存在するサクラの成分には、抗酸化、ヒアルロニダーゼ活性阻害、チロシナーゼ活性阻害などの生理活性を有する化合物が含まれている。本年度はエラスターゼ阻害活性の高い分画の精製について研究を行った。今後、これらの構造決定を行うことで、機能性を有する化粧品への応用などを視野に入れている。

ナトリウムチャンネルと作用薬との相互作用に関する研究（国際医療福祉大学薬学部 角南教授との共同研究）

ナトリウムチャンネルとフレカイニドに代表される抗不整脈薬との相互作用について、構造に着目して解明を行っている。本年度は近年報告されているナトリウムチャンネルの結晶構造を元に、その相互作用解明を試みている。

著書

1. Sunami A, Munakata T. (2023) Structural Pharmacology of Antiarrhythmic Drug Interactions with Voltage-Gated Sodium Channels, ed. by Lowell T. Duncan. Phelps, Nova Science Publishers, New York, pp. p167-181.

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 宗像達夫. チオフラビンT類縁体とアミロイド繊維の *in silico* 結合モデル系の検討. 第12回国際医療福祉大学学会学術大会（大川）2022/8/28 【ポスター】

【国際学会】

1. Sunami A, Munakata T. Biophysical characterization of SCN5A mutation, L1501V associated with both Brugada and long QT3 syndromes. 67th Biophysical Society Annual Meeting (San Diego, USA, Virtual) 2023/2/19

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本コンピュータ化学会

研究費獲得状況

1. 基盤研究 C, 抗酸菌産生 D アミノ酸とマクロファージの感染防御メカニズムとの関連性についての検討, 2021 年度～2024 年度, 研究分担者

氏名（役職）

山本 緑（准教授）

研究概要

薬物乱用問題に関する調査研究

薬物乱用問題において増加傾向にある薬物は大麻と市販薬であり、どちらも 10 代における乱用が深刻である。また、脳機能を向上させる目的で薬物を治療外に使用する ”pharmacological cognitive enhancement (PCE)” も問題視されている。本研究では、大学生の薬物乱用に関する実態を調査し、得られた成果を青少年への啓発・教育活動に活用する。昨年度に引き続き、本学の福岡薬学部 1 年生を対象にした調査および結果解析を行った。

骨粗しょう症の一次予防に向けた次世代の踵骨骨梁面積率と生活習慣に関する検討

現在の若者は、20 年前と較べて骨密度低下が示唆されていることに加え、コロナ禍による著しい環境変化から、今後の骨の健康状態が大いに懸念される。次世代の骨粗しょう症予防に取り組むべく、昨年度に引き続き、本学の福岡薬学部 1 年生を対象に超音波 (QUS) 法を用いて骨梁面積率等を測定した。併せて、生活習慣に関するアンケート調査を実施し、測定値との関連性を分析した。成果を積み重ねて、青少年の健康醸成に向けた地域活動へとつなげたい。

合理的配慮を念頭にした薬の適正使用に関する取り組み

合理的配慮を要する患者が薬局を訪れる機会は増えていることから、薬剤師は、多様性のある患者と安心・満足のいくコミュニケーションに努めなければならない。本研究では、難聴児を対象に、薬の適正使用のための知識や啓発の普及を目指した介入研究を行う。本年度は、OTC 医薬品の添付文書を用いた研究・教育実施のための体制を構築するに留まった。

原著論文・総説

【総説】

1. 山本緑. Pharmacological Cognitive Enhancement (PCE) に関する現状について. *薬学雑誌*, 142(5), 521-526 (2022).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 山本緑. 福岡県南地域住民の健康づくりを目指す社会薬学的活動. 第 12 回国際医療福祉大学学会学術大会（大川）2022/8/28

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本社会薬学会
3. 日本医薬品情報学会
4. 環境アセスメント学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 長崎県環境影響評価審査会委員

氏名（役職）

吉武 康之（准教授）

研究概要

スチレン系ポリマーとホウ酸の複合体に関する研究（バイオダイナミクス研究所との共同研究）

グルコサミン共役スチレンマレイン酸共重合体とホウ酸との複合体形成に関する研究を行った。今年度は、スチレン-無水マレイン酸共重合体とホウ酸との複合体と糖類及びアミノ酸との反応シミュレーションを行った。

所属学会

1. 有機合成化学協会
2. アメリカ化学会

研究費獲得状況

1. 基盤研究 B（一般研究），遠隔位不斉誘導に基づくインターロック分子の不斉構築, 2021 年度～2023 年度，研究分担者

氏名（役職）

今井 竜也（講師）

研究概要

医療ツーリズムの規制に関する研究

医療を受けるために国境を超えて移動する、いわゆる医療ツーリズムと呼ばれる現象について、様々な地域の現状やそこで発生している問題なども踏まえて、望ましい形で医療ツーリズムを進展させていくためには、どのような形で規制をしたら良いのかを考察している。

医療技術の社会適用と規範形成をめぐる ELSI

医療技術を確立し、社会に普及させていく過程で、どのような倫理的・法的・社会的問題 (Ethical, Legal and Social Issues : ELSI) が起こり、それら問題への対処を踏まえ、我々の社会はどのような価値観を受容・許容し、医療技術利用のためのルール作りをしていけばよいのかについて、特に人の生と死に関わる医療を対象として考察している。

医療技術の利用をめぐるリスクコミュニケーション／リスクマネジメントに関する研究

医療技術の利用には、必ず一定のリスクが付随する。そのリスクを利用者にどこまで／どのように伝え、利用の可否を判断する要素として適切に活用しうるだろうか。その医療の持つ社会的意味や性質なども考慮しながら、望ましいリスクコミュニケーション／リスクマネジメントのあり方を考察している。

原著論文・総説

【総説】

1. Imai T. Social Aspects of Organ Donation in Japan: Considering the 2010 Revision of the Organ Transplant Law as a Turning Point. *Journal of Philosophy and Ethics in Health Care and Medicine*, 16, pp.3-13 (2022).

所属学会

1. 日本法哲学会
2. 日本医事法学会
3. 日本生命倫理学会
4. 日本医学哲学・倫理学会
5. 日本保健医療社会学会
6. 科学技術社会論学会

7. 国際医療福祉大学学会
8. 日本国際保健医療学会
9. 日本医療福祉政策学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 一般社団法人薬学教育協議会 教科担当教員会議 ヒューマニティ関連教科担当教員会議 委員
2. 一般社団法人日本私立薬科大学協会 薬剤師国家試験問題検討委員会 法規・制度・倫理部会 委員

氏名（役職）

今村 友裕（講師）

研究概要

アルツハイマー病における新規バイオマーカーに関する研究

激増するアルツハイマー病(AD)において早期診断のための血液マーカー未確立されていない。私たちは、AD マウス末梢血エクソソームで候補となるマイクロ RNA を同定した。少数のサンプルではあるが、AD 患者末梢血より精製したエクソソームでも、同様の傾向があった。診断や治療変化のモニタリングのためのバイオマーカーとして確立することを目指して、研究を進めている。

人間ドック経年受診患者における 2 型糖尿病患者発症の危険因子および保健指導の介入効果に関する研究

高木病院予防医学センターの健診受診者のデータを用いて、2 型糖尿病を発症する群と発症しない群の健診データを解析することで、そのリスク因子の解析を行っている。さらに経年的なデータを解析し、保健指導の介入効果を検証している。

ジャパン・マンモグラフィー・サンデー (J.M.S) による乳がん検査の効果についての検証

「J.M.S」は、平日に病院に行けない女性たちが休日である日曜日に「乳がん検診」を受けられるよう、全国の医療機関と認定 NPO 法人 J.POSH が協力して設けた日であり、毎年 10 月の第 3 日曜日に行われている。高木病院予防医学センターにおける J.M.S の受診者のデータを用いて、一般の健診と比較することで、その効果の検証している。

著書

1. 頻用漢方薬の使いこなし 典型レシピ・奥の手レシピ (人参養栄湯) . 月刊『薬局』 2022 年 8 月号, 南山堂, 東京, p65-69, p103-105 (2022). 分担著者

原著論文・総説

【原著論文】

1. Zhang X, Kira JI, Ogata H, Imamura T, Mitsuishi M, Fujii T, Kobayashi M, Kitagawa K, Namihira Y, Ohya Y, Maimaitijiang G, Yamasaki R, Fukata Y, Fukata M, Isobe N, Nakamura Y. Anti-LGI4 Antibody Is a Novel Juxtaparanodal Autoantibody for Chronic Inflammatory Demyelinating Polyneuropathy. *Neurol. Neuroimmunol. Neuroinflamm.*, 10(2), e200081 (2023 Jan 11).
2. Kawaura F, Kishi T, Yamamoto T, Nakayama S, Goto T, Tsurusawa R, Katagiri T, Yamanouchi K, Matsuo A, Kobayashi-Watanabe N, Imamura T, Hirooka Y, Takagi K, Umemura T, Fujimoto

K, Hayashi S, Takamori A. Age distribution and disease severity of COVID-19 patients continued to change in a time-dependent manner from May 2021 to April 2022 in the regional core hospital in Japan. *Drug Discov. Ther.*, doi: 10.5582/ddt.2022.01111 (2023 Feb 26).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. Imamura T, Kira JI, Mitsuishi M, Maimaitijiang G, Zhang X. Exosomal microRNA profiles in peripheral blood are useful for early diagnosis of Alzheimer's disease. 第 63 回日本神経学会学術大会（東京）2022/5/18（優秀演題候補に選出）
2. Zhang X, Kira JI, Ogata H, Sakoda A, Kobayashi M, Kitagawa K, Namihira Y, Ohya Y, Imamura T, Maimaitijiang G, Yamasaki R, Isobe N, Nakamura Y. Clinical features and mechanism of LGI4-IgG4-positive inflammatory demyelinating polyneuropathy. 第 63 回日本神経学会学術大会（東京）2022/5/18（優秀演題候補に選出）
3. Kira JI, Sakoda A, Yamato Y, Yanagihara Y, Saitoh BY, Iwanaga Y, Yamashita K, Maimaitijiang G, Imamura T, Zhang X, Tobimatsu S, Nakamura Y. Foot-dorsiflexion power on the dominant hand side is useful to predict multiple sclerosis disability. 第 63 回日本神経学会学術大会（東京）2022/5/19
4. Maimaitijiang G, Kira JI, Nakamura Y, Watanabe M, Sakoda A, Masaki K, Nagata S, Yamaguchi H, Yamasaki R, Isobe N, Zhang X, Imamura T. Exosomal GJA1-29k translational isoform is a novel blood biomarker for neuroinflammation in neuromyelitis optica. 第 63 回日本神経学会学術大会（東京）2022/5/19
5. 今村友裕, 柳原由記, 山下謙一郎, 張旭, グザリアイママティジャン, 満石三喜男, 吉良潤一. 血清エクソソーム中のマイクロ RNA によるアルツハイマー病の早期診断バイオマーカー. 第 12 回国際医療福祉大学学会学術大会（国際医療福祉大学大川キャンパス）2022/8/28
6. 中村優理, グザリアイ・ママティジャン, 今村友裕, 柳原由記, 岩永育貴, 山下謙一郎, 張旭, 吉良潤一. グリアコネキシン低分子量イソフォーム発現エクソソームによる多発性硬化症の増悪機序. 第 12 回国際医療福祉大学学会学術大会（国際医療福祉大学大川キャンパス）2022/8/28
7. グザリアイ・ママティジャン, 中村優理, 今村友裕, 渡邊充, 迫田礼子, 張旭, 磯部紀子, 吉良潤一. エクソソーム中のコネキシン 43(Cx43)低分子量イソフォームとグリア線維性酸性蛋白質(GFAP)は視神経脊髄炎(NMOSD)再発の血液バイオマーカーである. 第 12 回国際医療福祉大学学会学術大会（国際医療福祉大学大川キャンパス）2022/8/28
8. 松尾莉奈, 今村友裕, 宮川純子, 藤崎さとみ, 南美和子, 梅村創, 大山隆, 藤本一眞. 耐糖能異常のある受診者に対する保健指導の効果について. 第 63 回日本人間ドック学会学術大会（幕張メッセ国際会議場）2022/9/3

9. 今村友裕, 吉良潤一, グザリアイママティジャン, 満石三喜男, 張旭. 血清エキソソームのマイクロ RNA によるアルツハイマー病の診断バイオマーカー. 第 41 回日本認知症学会学術集会/第 37 回日本老年精神医学会 [合同開催] (東京国際フォーラム) 2022/11/25
10. グザリアイ・ママティジャン, 中村優理, 渡邊充, 迫田礼子, 今村友裕, 張旭, 磯部紀子, 吉良潤一. 視神経脊髄炎(NMOSD)再発時の神経障害と関連する新規血液エクソソーム (Ex)マーカー. 第 34 回日本神経免疫学会学術集会 (長崎) 2022/10/20-10/21

依頼講演・招待講演 他

1. 今村友裕. 『高齢者医療における漢方薬の位置付け』～人生 100 年時代の漢方薬～. 福岡市東区内科医会学術講演会 (福岡県福岡市) 2022/5/10
2. 今村友裕. 人生 100 年時代の漢方薬～超高齢社会を漢方薬と共に生きる～. 八女筑後医師会学術講演会 (福岡県八女市) 2022/7/14
3. 今村友裕. 高齢者医療における人参養栄湯の役割. Orange Lecture in 北東葛 (千葉県柏市、福岡市より WEB 配信) 2022/7/27
4. 今村友裕. 人生 100 年時代における漢方薬の役割～認知症関連疾患を中心に～. 超高齢社会のための Kampo WEB Seminar (兵庫県神戸市、福岡市より WEB 配信) 2022/8/18
5. 今村友裕. 人生 100 年時代の漢方薬～超高齢社会を漢方薬と共に生きる～. 大牟田医師会学術講演会 (福岡県大牟田市) 2022/10/13
6. 今村友裕. 人生 100 年時代の漢方薬の役割～認知症疾患を中心に～. 鹿児島東洋医学セミナー2022 (鹿児島県鹿児島市、福岡市より WEB 配信) 2022/11/30
7. 今村友裕. 『高齢者医療における漢方薬の位置付け』～人生 100 年時代の漢方薬～. 長崎県北オレンジ漢方 WEB セミナー (長崎県佐世保市、福岡市より WEB 配信) 2022/12/9
8. 今村友裕. 人生 100 年時代の漢方薬～超高齢社会を漢方薬と共に生きる～. 認知症 KAMPO WEB セミナー (鳥取県米子市、福岡市より WEB 配信) 2022/12/14
9. 今村友裕. 人生 100 年時代の漢方薬～認知症疾患を中心に～. 超高齢社会のための KampoWEB Seminar (神奈川県横浜市、福岡市より WEB 配信) 2023/1/19
10. 今村友裕. 人生 100 年時代の漢方薬～超高齢社会を漢方薬と共に生きる～. 朝倉医師会学術講演会 (福岡県朝倉市) 2023/2/9
11. 今村友裕. 高齢者における人参養栄湯の役割. 第 3 回 Orange Lecuture in 千葉 (千葉県千葉市、福岡市より WEB 配信) 2023/3/4
12. 今村友裕. 人生 100 年時代の漢方薬～超高齢社会を漢方薬と共に生きる～. 柳川山門医師会学術講演会 (福岡県柳川市) 2023/3/9

受賞

1. 第 12 回国際医療福祉大学学会学術大会優秀演題賞 (ポスター発表) 受賞

中村優理, グザリアイ・ママティジャン, 今村友裕, 柳原由記, 岩永育貴, 山下謙一郎, 張旭, 吉良潤一. グリアコネキシン低分子量イソフォーム発現エクソソームによる多発性硬化症の増悪機序. 第 12 回国際医療福祉大学学会学術大会 (国際医療福祉大学大川キャンパス、現地・ウェブ開催) 2022/8/28 (共同受賞)

所属学会

1. 日本内科学会 (専門医)
2. 日本神経学会 (専門医)
3. 日本認知症学会 (専門医、指導医)
4. 日本糖尿病学会
5. 日本内分泌学会
6. 日本甲状腺学会

研究費獲得状況

1. 文部科学研究費補助金・基盤研究 C (日本学術振興会), 毒性ターン A β 42 含有エクソソームによるアルツハイマー病早期診断と病態伝搬の解明, 2022 年度~2024 年度, 研究代表者
2. 文部科学研究費補助金・基盤研究 B (日本学術振興会), 新規発見ノド抗体による自己免疫性ノドパチーの中核及び末梢神経脱髄機序の解明と治療, 2022 年度~2024 年度, 研究分担者
3. 第一三共株式会社 奨学寄付プログラム 2022 年度 (アカデミックサポート), 研究分担者
 - (1) 末梢血中の中枢神経ニューロン及びグリア由来エクソソームを用いたアルツハイマー病の早期診断に有用な新規血液バイオマーカーの臨床応用に関する研究
 - (2) アストログリア、ミクログリア及びオリゴデンドログリア由来のエクソソーム (グリオゾーム) を用いたアルツハイマー病における神経炎症に関する研究
 - (3) エクソソームをドラッグデリバリーシステムとして用いるアルツハイマー病の新規治療法の開発に関する研究
4. 住友ファーマ株式会社共同研究, 認知症を対象とした新血液中バイオマーカーの関連分析及び臨床評価に関する研究, 2021 年度~2023 年度, 研究担当者
5. 住友ファーマ株式会社共同研究, シヌクレイオパチーを中心とした神経変性疾患の発症・進展メカニズムの解明と創薬への応用, 2021 年度~2023 年度, 研究担当者

氏名（役職）

貝塚 拓（講師）

研究概要

翻訳因子 *EEF1D* の変異に起因する神経発達障害の分子病態解明と治療法の開発（琉球大学医学研究科分子・細胞生理学講座との共同研究）

本研究では *EEF1D* の遺伝子産物である eEF1B δ L の細胞内機能と神経疾患との関係について解析を行っている。本来 *EEF1D* は翻訳因子を産生するが、そのバリエーションである eEF1B δ L は遺伝子転写を刺激するユニークなタンパク質である。近年その *EEF1D* 遺伝子の変異と神経発達障害との関連性が報告されている。今年度は既知の *EEF1D* 遺伝子の変異が eEF1B δ L タンパク質発現に及ぼす影響を明らかにした。今後はヒト細胞において欠損細胞を作製し、神経発達障害の分子病態解明と治療薬のスクリーニングなどの研究展開が期待される。

原著論文・総説

【原著論文】

1. Monde K, Satou Y, Goto M, Uchiyama Y, Ito J, Kaitsuka T, Terasawa H, Monde N, Yamaga S, Matsusako T, Wei FY, Inoue I, Tomizawa K, Ono A, Era T, Sawa T, Maeda Y. Movements of Ancient Human Endogenous Retroviruses Detected in SOX2-Expressing Cells. *J. Virol.*, 96, e0035622 (2022).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 貝塚拓. *EEF1D* 遺伝子変異による知的障害の発症メカニズム解明. 第 12 回国際医療福祉大学学会学術大会（福岡）2022/8/28
2. 金子瞳, 貝塚拓, 富澤一仁. ヒト iPS 細胞の概日リズム誘導とその多能性への影響. 第 29 回日本時間生物学会学術大会（栃木）2022/12/3
3. 貝塚拓. 多能性幹細胞における時計遺伝子のエピゲノム状態に関する *in silico* 解析. 第 29 回日本時間生物学会学術大会（栃木）2022/12/3

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本時間生物学会
3. 日本生理学会
4. 日本神経科学学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 日本時間生物学会評議員

研究費獲得状況

1. 国際医療福祉大学学内研究費, 翻訳因子 eEF1B δ の脳特異的バリエーションの発現を制御するスプライシング因子の同定, 2022 年度, 研究代表者

氏名（役職）

中矢 正（講師）

研究概要

FUS による筋萎縮性側索硬化症（ALS）発症分子機構解明に関する研究

RNA 結合タンパク質 FUS は ALS の原因因子であり、様々な変異が家族性 ALS を引き起こすことが知られている。また、孤発性 ALS 患者においてもその凝集体が変性神経細胞内に観察されることから、その機能異常が疾患発症に深く関わることを考えられている。しかしながらその分子機構は明らかではない。本研究では、FUS の機能とその破綻による疾患発症分子機構を明らかにすることを目的として、FUS 野生型及び変異型を発現させた神経細胞を用いた解析を行っている。

原著論文・総説

【原著論文】

1. Nakaya T. A specific gene-splicing alteration in the SNRNP70 gene as a hallmark of an ALS subtype. *Gene*, 818, 146203 (2022). doi: 10.1016/j.gene.2022.146203.
2. Honda K, Saito Y, Saito H, Toyoda M, Abe R, Saito T, Saido TC, Michikawa M, Taru H, Sobu Y, Hata S, Nakaya T, Suzuki T. Accumulation of amyloid- β in the brain of mouse models of Alzheimer's disease is modified by altered gene expression in the presence of human apoE isoforms during aging. *Neurobiol. Aging*, 123, 63-74 (2022). doi: 10.1016/j.neurobiolaging.2022.12.003.

学会発表・シンポジウム

1. 中矢正. 筋萎縮性側索硬化症患者神経組織における疾患特徴的スプライシングパターンの解明. 第 12 回国際医療福祉大学学会学術大会（大川・Zoom）2021/8/28

所属学会

1. 日本 RNA 学会
2. 日本神経化学会

研究費獲得状況

1. 基盤研究 C, ALS 原因因子 FUS の細胞外分泌分子機構の解明, 2022 年度～2026 年度, 研究代表者

氏名（役職）

朴 珍相（Jinsang Park）（講師）

研究概要

医療情報のデータベース等を用いた医薬品の安全性評価（国際共同研究）

国内外の実臨床データを用いて、医薬品の適正使用の実態を観察疫学的に可視化し、医療政策・経済学的効果を定量的に評価する分析手法の検討および、医薬品の安全性評価における臨床疫学・薬剤疫学的の国際比較研究を行っている。現在、疾患レジストリ等の Real World Data を医薬品の有効性評価にどのように活用していくか、根拠資料として使用することを見据えた国内外で臨床疫学・薬剤疫学に応用可能なデータベースの validation study を推進している。

著書

1. Park J. Data Quality Governance Experience at the MID-NET Project. Epidemiologic Research on Real-World Medical Data in Japan, *SpringerBriefs for Data Scientists and Innovators*, pp 45-49 (2022).

原著論文・総説

【原著論文】

1. Park J. Evaluation of the prescription amount of narcotic analgesics based on cancer pain relief management. *Eur. J. Public Health.*, 32(3), 525 (2022).
2. Park J, Okui T, Nakashima N. Prescribing trends psychotropic drugs against children and adolescents and association with polypharmacy reduction policy for psychotropic drugs: based on Japanese National Database Survey. *Stud. Health Technol. Inform.*, 290 (2022).
3. Okui T, Park J. Analysis of regional differences in the amount of hypnotic and anxiolytic prescriptions in Japan using nationwide claims data. *BMC Psychiatry*, 22(1), 44 (2022).
4. Okui T, Park J. Difference in the prevalence of hypertension and its risk factors depending on area-level deprivation in Japan. *BMC Res. Notes*, 15(1) 37 (2022).
5. 奥井佑, 朴珍相. 不慮の窒息死の都道府県間差と関連する要因. *厚生指標*, 69(13), 1-6 (2022).

学会発表・シンポジウム

【国際学会】

1. Park J. Evaluation of the prescription amount of narcotic analgesics based on cancer pain relief management. The 15th European Public Health Conference (Berlin, Germany) 2022/11/9-11/12.

所属学会

1. 日本医療情報学会
2. The Royal Society of Medicine, United Kingdom

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 医療材料マネジメント研究会幹事
2. Editorial Board Member for Scientific Reports
3. Editorial Board Member for European Child & Adolescent Psychiatry
4. Editorial Board Member for European Journal for Biomedical Informatics

研究費獲得状況

1. 若手研究, 実臨床データを用いたポリファーマシー実態に関する国内外の比較研究, 2021年度～2024年度, 研究代表者

氏名（役職）

宗像 千恵（講師）

研究概要

バンコマイシン注の配合変化に関する研究（長崎大学医薬品情報学分野・東和薬品との共同研究）

バンコマイシン注と多剤との組み合わせでの配合変化の要因検索・先発品と後発品の比較に関する検討を行っている。今年度は、バンコマイシン注とセフェピム注の配合変化について、検討した。先発品と後発品によって配合変化の結果は異なるが、これは主に製品の pH の違いによるものだという結論を得ている。現在論文化を進めている。

緩和ケア領域での配合変化に関する研究（日本緩和医療薬学会研究推進委員会との共同研究）

学会員共同で緩和ケア領域での配合変化に関する検討を行っている。アンケート結果より臨床現場で検証が求められている薬剤が判明し、これを論文化した(日本緩和医療薬学雑誌. now printing)。今後は実際の検証に入る予定としている。

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 永井友規, 宗像千恵, 西村信弘. 薬剤師の介入によりブプレノルフィン貼付剤からフェンタニル貼付剤へ移行し疼痛コントロール良好となった 1 例. 第 81 回九州山口薬学大会（熊本）2022/9/19
2. 永井友規, 宗像千恵, 西村信弘. 貼付剤の体内動態を考慮した薬剤師による疼痛への介入例. 第 18 回九州地区研究発表会（大川）2022/12/4
3. 宗像千恵. 片頭痛の新しいタイプの予防薬について-シンポジウム片頭痛治療の新時代. 第 18 回九州地区研究発表会（大川）2022/12/4

依頼公演・招待公演 他

1. 宗像千恵. 知ってください、緩和ケアと医療用麻薬. 第 67 回くすりのセミナー福岡（福岡）2023/3/5

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本医療薬学会
3. 日本緩和医療学会

4. 日本緩和医療薬学会
5. 日本医薬品安全性学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 日本緩和医療薬学会 社員
2. 日本医薬品安全性学会 副作用情報部会 部員

研究費獲得状況

1. 基盤研究 B, 多剤耐性菌の発生・伝播を防止するための感染制御・抗菌薬適正使用アルゴリズムの構築, 2021 年度～2023 年度, 研究分担者

氏名（役職）

磯田 紀之（助教）

研究概要

医薬品候補化合物に対する新規フッ素官能基導入法に関する研究

医薬品候補化合物に対する新規フッ素官能基導入法に関する検討を行っている。今年度は、モノフルオロアルケン骨格の収束的合成を可能とする、新規ジフルオロアルケンビルディングブロックの開発と利用法に関する研究を論文にまとめた。これより、アミド結合等価体であるモノフルオロアルケンの効率的な合成が可能となると期待できる。

ルイス酸が関与する鈴木・宮浦クロスカップリング反応に関する研究

鈴木・宮浦クロスカップリング反応は、信頼性の高い炭素-炭素結合形成手法であるが、鍵となる金属交換の進行に塩基の添加が必要であり、副反応として脱ホウ素プロトン化が課題であった。これに対し、ルイス酸としての性質を持つ亜鉛錯体の添加により、塩基なしでもクロスカップリング反応が高効率に進行することを発見した。現在、本手法をクロスカップリング反応に不向きなフッ素化アルキル基の導入に展開し検討を行なっている。

原著論文・総説

【原著論文】

1. Isoda M, Sato K, Kameda K, Wakabayashi K, Sato R, Minami H, Karuo Y, Tarui A, Kawai K, Omote M. Rhodium-catalyzed intramolecular reductive aldol-type cyclization: Application for the synthesis of a chiral necic acid lactone. *Beilstein J. Org. Chem.*, 18, 1642–1648 (2022).

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本化学会
3. 日本フッ素化学会

研究費獲得状況

1. 基盤研究 B（一般研究），遠隔位不斉誘導に基づくインターロック分子の不斉構築（21H02604-3），2021 年度～2023 年度，研究分担者

氏名（役職）

坂井 崇亮（助教）

研究概要

不斉直接的ビニロガス共役付加反応を利用した γ -ラクタム誘導体合成に関する研究（東京薬科大学薬学部薬化学教室との共同研究）

有機分子触媒を用いた不斉直接的ビニロガス共役付加反応による γ -ラクトン・ γ -ラクタム誘導体合成に関する研究を行っている。本年度は、二官能性有機分子触媒を用いた β -シアノエノンと γ -ブチロラクタムとの反応により、高収率・高立体選択的に目的とする γ -ブチロラクタム誘導体合成を達成した。今後、生物活性物質合成への応用が期待される。

原著論文・総説

【原著論文】

1. Ishii D, Hirashima S, Nakashima K, Matsushima Y, Sakai T, Akutsu H, Miura T. Asymmetric Direct Vinylogous Conjugate Addition of α,β -Unsaturated γ -Butyrolactam to Acyl Acrylonitriles using Organocatalysts. *Asian J. Org. Chem.*, e202300082 (2023).

所属学会

1. 日本薬学会
2. 有機合成化学協会

研究費獲得状況

1. 基盤研究 B, 遠隔位不斉誘導に基づくインターロック分子の不斉構築, 2021 年度～2024 年度, 研究分担者

氏名（役職）

澤井 円香（助教）

研究概要

糖化産物による生体影響に関する研究

現在、糖化産物ジヒドロピラジン（DHP）による生体影響に関する検討を行っている。今年度は、DHP が有する抗炎症効果に、TLR4 シグナルを抑制する転写抑制因子および炎症制御因子が関与する可能性が明らかとなった。これより、DHP の生体影響の解明のみならず、根本的な治療薬がない炎症性疾患の予防や治療効果改善に役立つ萌芽的知見となることが期待されている。

原著論文・総説

【原著論文】

1. Sawai M, Miyauchi Y, Ishida T, Takechi S. Dihydropyrazine suppresses TLR4-dependent inflammatory responses by blocking MAPK signaling in human hepatoma HepG2 cells. *J. Toxicol. Sci.*, 47, 381-387 (2022).
2. Miyauchi Y, Koba H, Sawai M, Kansui H, Takechi S. Oxidative stress and cellular toxicity induced by dihydropyrazine: a comparative study with other Maillard reaction products. *J. Toxicol Sci.*, in press.

雑誌記事・その他

1. 澤井円香. D-アミノ酸で構成されることによるペプチドの新機能獲得. フェルマシア, 2022/10.

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 澤井円香, 多田納豊, 石田卓巳, 武知進士. 生体内 TLR4 シグナル活性化に対する糖化産物ジヒドロピラジン(DHP)の抑制効果. 第 12 回国際医療福祉大学学会学術大会（大川）2022/8/28
2. Sawai M, Itoh S, Yoshida M, Zhou JR, Tatano Y, Miyauchi Y, Ishida T, Takechi S. Dihydropyrazine suppresses TLR4-dependent inflammatory responses *in vivo*. フォーラム 2022 衛生薬学・環境トキシコロジー：日韓次世代ポスターセッション（熊本）2022/8/30
3. 宮内優, 澤井円香, 寒水壽朗, 武知進士. 糖化産物ジヒドロピラジンによる細胞障害の機構解明：抗酸化物質を用いた毒性軽減作用の検討. フォーラム 2022 衛生薬学・環境トキシコロジー（熊本）2022/8/30

4. 木庭玉絵, 大城彩乃, 亀崎史, 堀添彩香, 宮内優, 澤井円香, 石田卓巳, 武知進士. 糖化産物ジヒドロピラジン類による小胞体ストレス応答. フォーラム 2022 衛生薬学・環境トキシコロジー (熊本) 2022/8/30
5. 澤井円香, 伊藤俊治, 吉田雅紀, 周建融, 多田納豊, 宮内優, 石田卓巳, 武知進士. ジヒドロピラジンによる TLR4 ネガティブフィードバック機構の制御. フォーラム 2022 衛生薬学・環境トキシコロジー (熊本) 2022/8/31
6. 宮内優, 澤井円香, 寒水壽朗, 武知進士. 糖化産物ジヒドロピラジンによる酸化ストレスの惹起と抗酸化物質を用いたその毒性軽減の検討. 第 37 回日本薬物動態学会 (横浜) 2022/11/08
7. 澤井円香, 周建融, 多田納豊, 宮内優, 武知進士. 糖化産物ジヒドロピラジンによる TLR4 シグナル抑制を介した抗炎症効果解析. 第 39 回日本薬学会九州山口支部大会 (長崎) 2022/11/19
8. 吉田早絵, 宮内優, 澤井円香, 武知進士. 糖化産物ジヒドロピラジン類によるオートファジー阻害. 第 39 回日本薬学会九州山口支部大会 (長崎) 2022/11/19
9. Takechi S, Miyauchi Y, Sawai M. Dihydropyrazines induce endoplasmic reticulum stress and inhibit autophagy in human hepatoma HepG2 cells. 第 45 回日本分子生物学会年会 (千葉) 2022/12/2
10. 多田納豊, 宗像達夫, 澤井円香, 八木秀樹, 佐野千晶, 富岡治明. Mycobacterium avium complex 由来 D アミノ酸によるマクロファージの性状変化誘導についての検討. 日本薬学会第 143 年会 (札幌) 2023/3/26
11. 武知進士, 澤井円香, 宮内優. 糖化産物ジヒドロピラジン類によるオートファジー抑制効果. 日本薬学会第 143 年会 (札幌) 2023/3/26
12. 澤井円香, 周建融, 多田納豊, 宮内優, 武知進士. 糖化産物 dihydropyrazine による接触性皮膚炎モデルマウス症状緩和のメカニズム解析. 日本薬学会第 143 年会 (札幌) 2023/3/28
13. 宮内優, 澤井円香, 寒水壽朗, 武知進士. ジヒドロピラジンによる細胞障害機構の解明: 糖化産物間における酸化ストレス誘導性の比較. 日本薬学会第 143 年会 (札幌) 2023/3/28

所属学会

1. 日本薬学会
2. 分子生物学会

研究費獲得状況

1. 国際医療福祉大学学内研究費, 糖化産物ジヒドロピラジン (DHP) による生体内 TLR4 シグナル抑制機構の解明, 2022 年度, 研究代表者

氏名（役職）

柴田 健太郎（助教）

研究概要

冠状動脈開口部領域の形態学的研究（佐賀大学医学部解剖学教室 倉岡晃夫教授の指導、監督）

解剖実習体より摘出した大動脈標本を対象として、日本人における冠状動脈開口部領域の形態学的特徴につき検討中である。本研究成果は、同部位の詳細な解剖学的理解を通して、冠状動脈へのカテーテル挿入手技や経カテーテル大動脈弁植え込み術（TAVI）等の合併症防止に貢献することが期待される。

下垂体後葉ホルモンによる血糖低下作用のメカニズムの解明（国際医療福祉大学福岡薬学部 村田祐造教授との共同研究）

下垂体後葉ホルモンのオキシトシンおよびバソプレシン投与により、糖負荷後の血糖値上昇抑制ならびに尿糖排出を認めている。下垂体後葉ホルモンが、糖輸送体の細胞膜への発現に関与していると考えられ、さらなる解明を続けている。

糖尿病モデルラット唾液腺に関する研究（国際医療福祉大学福岡薬学部 村田祐造教授との共同研究）

糖尿病による唾液腺の変化に関する検討を行っている。免疫組織化学を用いた解析により、糖尿病モデルラットの唾液腺にある特徴を見出した。これにより、糖尿病患者における口渴等の原因解明に寄与することが期待される。

原著論文・総説

【原著論文】

1. Maruo K, Nishiyama M, Honda Y, Cao AL, Gao WQ, Shibata K, Murata Y, Kido MA. Increased GLUT1 expression and localization to Golgi apparatus of acinar cells in the parotid gland of Goto-Kakizaki diabetic rats. *Arch. Oral Biol.*, 146, 1-8 (2023).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 村田祐造, 柴田健太郎, 本田裕子. 下垂体後葉ホルモンの腎臓への影響による血糖低下作用. 第12回国際医療福祉大学学会学術大会（福岡）2022/8/28
2. 西村信弘, 津端由香里, 柴田健太郎, 香月知真, 磯部威. 分子標的治療薬と直接経口凝固薬併用時の薬物体内動態およびVTEリスクの評価. 第12回国際医療福祉大学学会

学術大会（福岡）2022/8/28

所属学会

1. 日本解剖学会
2. 国際医療福祉大学学会

研究費獲得状況

1. 国際医療福祉大学学内研究費（一般研究），下垂体後葉ホルモンによる血糖低下：腎臓尿細管における糖運搬体の細胞内分布変化, 2022 年度, 研究分担者
2. 国際医療福祉大学学内研究費（一般研究），線維筋痛症モデル病態における疼痛・うつ様病態へのミクログリアの関与, 2022 年度, 研究分担者

氏名（役職）

福田 光良（助教）

研究概要

鼻から脳への薬物送達に関する研究（日本大学薬学部薬剤学研究室 鈴木豊史教授との共同研究）

鼻から脳への薬物送達に関して、薬物動態学的側面から検討を進めている。今年度は、脳虚血モデルマウスに溶解補助剤としてポリエチレングリコール 300 を添加したエダラボンを経鼻投与したところ、未治療群に比べて梗塞巣体積の増大を有意に抑制することを明らかにした。これより、エダラボンの経鼻投与は、急性脳梗塞治療において静脈内投与に代わる優れた投与経路となることが期待される。

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 細田菜摘, 福田光良, 柳原圭佑, 長友太希, 鈴木直人, 西村信弘, 木澤靖夫, 鈴木豊史. PEG で溶解性を改善したエダラボンの経鼻投与による脳内神経保護効果. 日本薬学会第 143 年会（札幌）2023/3/25-3/28

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本薬剤学会
3. 日本 DDS 学会
4. 日本病院薬剤師会

研究費獲得状況

1. 国際医療福祉大学学内研究費（一般研究 B 奨励）, 脂溶性低分子における鼻から脳への分布動態機構の解明, 2022 年度, 研究代表者